

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第376集

まいさわ
米沢遺跡発掘調査報告書

東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業関連遺跡発掘調査

日本鉄道建設公団盛岡支社

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

米沢遺跡発掘調査報告書

東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るために地域開発も県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業に関連して、平成10年度から発掘調査を行った二戸市米沢遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査によって、馬瀬川西岸の河岸段丘上に縄文時代、奈良時代、平安時代の住居跡や土坑のほか、土器や石器などが発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する关心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました日本鉄道建設公団盛岡支社、二戸市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申しあげます。

平成13年12月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 村上 勝治

例　言

1. 本報告書は、岩手県二戸市米沢字下平85-3ほかに所在する米沢遺跡発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業に伴い、県教育委員会文化課と日本鉄道建設公団盛岡支社の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 発掘調査は、平成10年度から12年度にかけて実施したものである。委託者は日本鉄道建設公団盛岡支社である。
4. 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、以下のとおりである。
　　跡登録台帳番号……IE 99-0390
　　遺跡略号…………MZ-98（平成10年度）、MZ-99（平成11年度）、MZ-00（平成12年度）
5. 発掘調査期間と調査面積、野外調査担当者は、以下のとおりである。
　　調査期間　　平成10年7月1日～10月22日、平成11年4月15日～11月12日、平成12年4月11日～5月31日
　　調査面積　　平成10年度 3,300m²、平成11年度 12,280m²、平成12年度 1,069m²
　　調査担当　　平成10年度 工藤 徹、相津吉彦、平成11年度 工藤 徹、鈴木 晃、北田 黜、藤原 賢徳、平成12年度 工藤 徹、斎藤麻紀子
6. 調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。
　　整理期間　　平成10年11月1日～平成11年3月31日、平成11年11月1日～平成12年3月31日、平成12年11月1日～平成13年3月31日
　　整理担当　　平成10年度 工藤 徹、相津吉彦、平成11年度 工藤 徹、鈴木 晃、北田 黜、藤原 賢徳、平成12年度 工藤 徹、斎藤麻紀子
7. 本報告書の執筆は、第Ⅰ章の「調査に至る経過」を中川重紀、その他を工藤 徹が担当している。
8. 自然科学関連の分析鑑定は次の機関に依頼した。（敬称略）
　　石質鑑定……………花崗岩研究会
　　樹種同定……………木工舎「ゆい」（高橋利彦）
　　火山灰分析……………（株）古環境研究所
　　植物珪酸体分析……………（株）古環境研究所
　　鉄製品保存処理……………新日鉄釜石文化財処理センター
　　非破壊ガラス成分分析……岩手県立博物館
　　玉類遺物産地分析……京都大学原子炉研究所
9. 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に依頼した。
　　座標原点の測量……………（株）ハイマーテック、 空中写真……………（株）東邦航空
10. 本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関から御指導と御協力をいただいた。（敬称略）
　　鈴木克彦（青森県立郷土館）、長尾正義（三沢市教育委員会）、八戸市立博物館、八戸市教育委員会、岩手県立博物館、二戸市教育委員会、日本鉄道建設公団盛岡支社
11. 野外調査にあたっては二戸市と地元の方々に多大なるご協力をいただいた。
12. 土層の観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1989）によった。
13. 本遺跡から出土した遺物および調査にかかる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

本文目次

序

例言

I. 調査に至る経過	1	9. 遺物包含層	108
II. 遺跡の立地と環境		V. 遺構外出土遺物	
1. 遺跡の位置	4	1. 土器	111
2. 遺跡周辺の地形と地質	4	2. 石器・石製品	112
3. 基本層序	6	3. 土製品	113
4. 周辺の遺跡	7	4. 金属製品	114
III. 調査の方法と室内整理		VI. まとめ	
1. 野外調査の方法	10	1. 遺構	166
2. 室内整理の方法	12	2. 遺物	166
IV. 検出された遺構と遺物		3. おわりに	167
1. 垂穴住居跡・住居状遺構	17	付録 分析・鑑定	
2. 土坑	61	1. 炭化材の樹種同定	178
3. 陥し穴状遺構	83	2. 火山灰の分析鑑定	192
4. 柱穴状ピット	87	3. 自然科学分析	194
5. 石囲炉・焼土遺構	90	4. 耳飾り玉非破壊分析	207
6. 溝状遺構	99	5. ガラス玉非破壊分析	211
7. 島状遺構	105	報告書抄録	
8. 井戸跡	105	職員一覧	

図版目次

第1図 岩手県全図及び二戸市位置図	2	第12図 第6号住居跡	23
第2図 周辺の地形図	3	第13図 第7号住居跡	24
第3図 地形分類図	5	第14図 第8号住居跡(1)	26
第4図 基本土層	6	第15図 第8号住居跡(2)	27
第5図 遺跡位置及び周辺の遺跡	8	第16図 第8号住居跡(3)	28
第6図 小グリッド配置図	13	第17図 第9号住居跡	30
第7図 実測図凡例	14	第18図 第10号住居跡(1)	32
第8図 遺構配置図	15-16	第19図 第10号住居跡(2)	33
第9図 第1号住居跡	18	第20図 第10号住居跡(3)	34
第10図 第2・3号住居跡	19	第21図 第11号住居跡(1)	35
第11図 第4・5号住居跡	21	第22図 第11号住居跡(2)	36

第23図	第11号住居跡（3）	37	第60図	第15～17号溝状遺構	104
第24図	第12・13号住居跡（1）	39	第61図	扁状遺構（1）	106
第25図	第13号住居跡（2）	40	第62図	扁状遺構（2）	107
第26図	第14号住居跡	41	第63図	井戸跡	108
第27図	第15号住居跡（1）	43	第64図	遺物包含層（早期）	109
第28図	第15号（2）・16号住居跡	44	第65図	遺物包含層（前期）	110
第29図	第17～19号住居跡（1）	47	第66図	遺構内出土遺物（1）	115
第30図	第19号住居跡（2）	49	第67図	遺構内出土遺物（2）	116
第31図	第20号住居跡	50	第68図	遺構内出土遺物（3）	117
第32図	第21号住居跡	52	第69図	遺構内出土遺物（4）	118
第33図	第22号住居跡（1）	53	第70図	遺構内出土遺物（5）	119
第34図	第22号住居跡（2）	54	第71図	遺構内出土遺物（6）	120
第35図	第23号住居跡（1）	56	第72図	遺構内出土遺物（7）	121
第36図	第23号住居跡（2）	57	第73図	遺構内出土遺物（8）	122
第37図	第24号住居跡（1）	58	第74図	遺構内出土遺物（9）	123
第38図	第24号住居跡（2）	59	第75図	遺構内出土遺物（10）	124
第39図	第1号住居状遺構	60	第76図	遺構内出土遺物（11）	125
第40図	第1～8号土坑	63	第77図	遺構内出土遺物（12）	126
第41図	第9～16号土坑	66	第78図	遺構内出土遺物（13）	127
第42図	第17～19号土坑	68	第79図	遺構内出土遺物（14）	128
第43図	第20～29号土坑	72	第80図	遺構内出土遺物（15）	129
第44図	第30～37号土坑	75	第81図	遺構外出土土器（1）～VI層～	130
第45図	第38～44号土坑	77	第82図	遺構外出土土器（2）～VI層～	131
第46図	第45・46号土坑	79	第83図	遺構外出土土器（3）～VI層～	132
第47図	第47～51号土坑	81	第84図	遺構外出土土器（4）～VI層～	133
第48図	第1～4号陥し穴状遺構	84	第85図	遺構外出土土器（5）～VI層～	134
第49図	第5～7号陥し穴状遺構	86	第86図	遺構外出土土器（6）～VI層～	135
第50図	柱穴状ピット（1）	88	第87図	遺構外出土土器（7）～IVa層～	136
第51図	柱穴状ピット（2）	89	第88図	遺構外出土土器（8）～IVa層～	137
第52図	第1・2号石圓炉、第1・2号焼土	91	第89図	遺構外出土土器（9）～IVa層～	138
第53図	第3～8号焼土	92	第90図	遺構外出土土器（10）	139
第54図	第9～11号焼土	94	第91図	遺構外出土土器（11）	140
第55図	第12～15号焼土	96	第92図	遺構外出土土器（12）	141
第56図	第16～23号焼土	98	第93図	遺構外出土土器（13）	142
第57図	第1～6号溝状遺構	100	第94図	遺構外出土石器（1）～VI層～	143
第58図	第7～10号溝状遺構	101	第95図	遺構外出土石器（2）～VI層～	144
第59図	第11～14号溝状遺構	103	第96図	遺構外出土石器（3）～VI層～	145

第 97図 遺構外出土石器（4）～VI層～	146	第107図 長瀬B・米沢遺跡関連	
第 98図 遺構外出土石器（5）～IV a層～	147	遺構配置図（1）	169
第 99図 遺構外出土石器（6）～IV a層～	148	第108図 長瀬B・米沢遺跡関連	
第100図 遺構外出土石器（7）	149	遺構配置図（2）	170
第101図 遺構外出土石器（8）	150	第109図 尖底部角度	171
第102図 遺構外出土石器（9）	151	第110図 土器模式図1（早期）	172
第103図 遺構外出土石器（10）・石製品	152	第111図 土器模式図2（早期）	173
第104図 遺構外出土土製品	153	第112図 土器模式図3（前期）	174
第105図 遺構外出土貨幣	154	第113図 土師器模式図4	175
第106図 住居跡規模及び軸方向分布図	167	第114図 土師器模式図5	176

写 真 図 版 目 次

写真図版1 全景写真	217	写真図版23 第14号住居跡	239
写真図版2 調査前風景・基本土層	218	写真図版24 第15号住居跡（1）	240
写真図版3 第1号住居跡（1）	219	写真図版25 第15号住居跡（2）	241
写真図版4 第1号住居跡（2）	220	写真図版26 第15号住居跡（3）	242
写真図版5 第2号住居跡	221	写真図版27 第16号住居跡	243
写真図版6 第3号住居跡	222	写真図版28 第17号住居跡	244
写真図版7 第4号住居跡	223	写真図版29 第18号住居跡	245
写真図版8 第5号住居跡	224	写真図版30 第19号住居跡（1）	246
写真図版9 第6号住居跡	225	写真図版31 第19号住居跡（2）	247
写真図版10 第7号住居跡（1）	226	写真図版32 第20号住居跡	248
写真図版11 第7号住居跡（2）	227	写真図版33 第21号住居跡（1）	249
写真図版12 第8号住居跡（1）	228	写真図版34 第21号住居跡（2）	250
写真図版13 第8号住居跡（2）	229	写真図版35 第22号住居跡（1）	251
写真図版14 第9号住居跡	230	写真図版36 第22号住居跡（2）	252
写真図版15 第10号住居跡（1）	231	写真図版37 第22号住居跡（3）	253
写真図版16 第10号住居跡（2）	232	写真図版38 第23号住居跡（1）	254
写真図版17 第11号住居跡（1）	233	写真図版39 第23号住居跡（2）	255
写真図版18 第11号住居跡（2）	234	写真図版40 第24号住居跡（1）	256
写真図版19 第11号住居跡（3）	235	写真図版41 第24号住居跡（2）	257
写真図版20 第12号住居跡	236	写真図版42 第1号住居状遺構	258
写真図版21 第13号住居跡（1）	237	写真図版43 第1～4号土坑	259
写真図版22 第13号住居跡（2）	238	写真図版44 第5～8号土坑	260

写真図版45	第9~12号土坑	261	写真図版 74	遺構内出土遺物(1)	290
写真図版46	第13~16号土坑	262	写真図版 75	遺構内出土遺物(2)	291
写真図版47	第17~20号土坑	263	写真図版 76	遺構内出土遺物(3)	292
写真図版48	第21~24号土坑	264	写真図版 77	遺構内出土遺物(4)	293
写真図版49	第25~28号土坑	265	写真図版 78	遺構内出土遺物(5)	294
写真図版50	第29~32号土坑	266	写真図版 79	遺構内出土遺物(6)	295
写真図版51	第33~36号土坑	267	写真図版 80	遺構内出土遺物(7)	296
写真図版52	第37~40号土坑(1)	268	写真図版 81	遺構内出土遺物(8)	297
写真図版53	第40(2)~43号土坑	269	写真図版 82	遺構内出土遺物(9)	298
写真図版54	第44~46号土坑	270	写真図版 83	遺構内出土遺物(10)	299
写真図版55	第47~51号土坑	271	写真図版 84	遺構内出土遺物(11)	300
写真図版56	第1~4号陥し穴状遺構	272	写真図版 85	遺構内出土遺物(12)	301
写真図版57	第5~7号陥し穴状遺構	273	写真図版 86	遺構外出土土器(1)~VI層~	302
写真図版58	第1~2号石窯、第1~2号焼土	274	写真図版 87	遺構外出土土器(2)~VI層~	303
写真図版59	第3~6号焼土	275	写真図版 88	遺構外出土土器(3)~VI層~	304
写真図版60	第7~9号焼土	276	写真図版 89	遺構外出土土器(4)~VI層~	305
写真図版61	第10~13号焼土	277	写真図版 90	遺構外出土土器(5)~IVa層~	306
写真図版62	第14~17号焼土	278	写真図版 91	遺構外出土土器(6)~IVa層~	307
写真図版63	第18~21号焼土	279	写真図版 92	遺構外出土土器(7)	308
写真図版64	第22~23号焼土 第1~2号溝状遺構	280	写真図版 93	遺構外出土土器(8)	309
写真図版65	第3~6号溝状遺構	281	写真図版 94	遺構外出土土器(9)	310
写真図版66	第7号溝状遺構(1)	282	写真図版 95	遺構外出土石器(1)~VI層~	311
写真図版67	第7(2)~9号溝状遺構	283	写真図版 96	遺構外出土石器(2)~VI層~	312
写真図版68	第10~11号溝状遺構	284	写真図版 97	遺構外出土石器(3)~IVa層~	313
写真図版69	第12~14号溝状遺構	285	写真図版 98	遺構外出土石器(4)	314
写真図版70	第15~17号溝状遺構(1)	286	写真図版 99	遺構外出土石器(5)	315
写真図版71	第17号溝状遺構(2)、島状遺構(1)	287	写真図版100	遺構外出土石器(6)・石製品	316
写真図版72	島状遺構(2)、井戸跡	288	写真図版101	遺構外出土土製品	317
写真図版73	早期遺物包含層	289	写真図版102	遺構外出土貨幣	318

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	9	第5表	金属製品観察表	165
第2表	土器観察表	155	第6表	ガラス製品観察表	165
第3表	石器・石製品観察表	162	第7表	古代の住居跡一覧表	168
第4表	土製品観察表	165			

I. 調査に至る経過

米沢遺跡は「東北新幹線盛岡・八戸間の建設工事」の施行に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

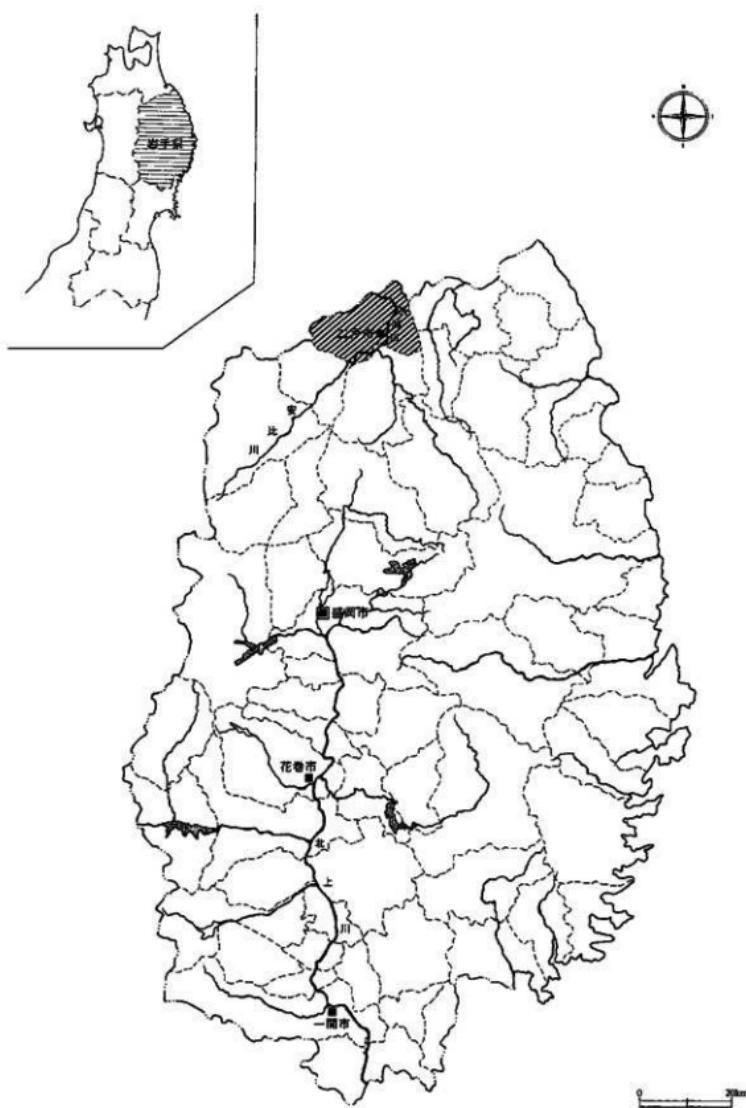
東北新幹線は昭和48年盛岡・青森間の整備計画が策定され、平成3年に盛岡・沼宮内間及び八戸・青森間は新幹線鉄道直通線（ミニ新幹線）とし、沼宮内・八戸間は標準軌新線（フル規格新幹線）として実施計画が認可され、同年9月に盛岡・青森間の建設工事に着手した。その後、平成7年に盛岡・沼宮内間がフル規格新幹線に変更になり、現在、盛岡・八戸間96.6kmの新幹線工事が本格的に進められている。

また、八戸・新青森間については、平成10年3月に標準軌新幹線（フル規格新幹線）として実施計画の認可を受けて同年7月に八甲田トンネル出口の工事に着手している。盛岡・八戸間の埋蔵文化財については、岩手県教育委員会が平成8年度に分布調査を実施し、米沢遺跡も確認されている。その結果に基づいて岩手県教育委員会は日本鉄道建設公団盛岡支社に対し、事業について照会した。回答を受けた教育委員会は日本鉄道建設公団と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センターの受託事業とすることとした。

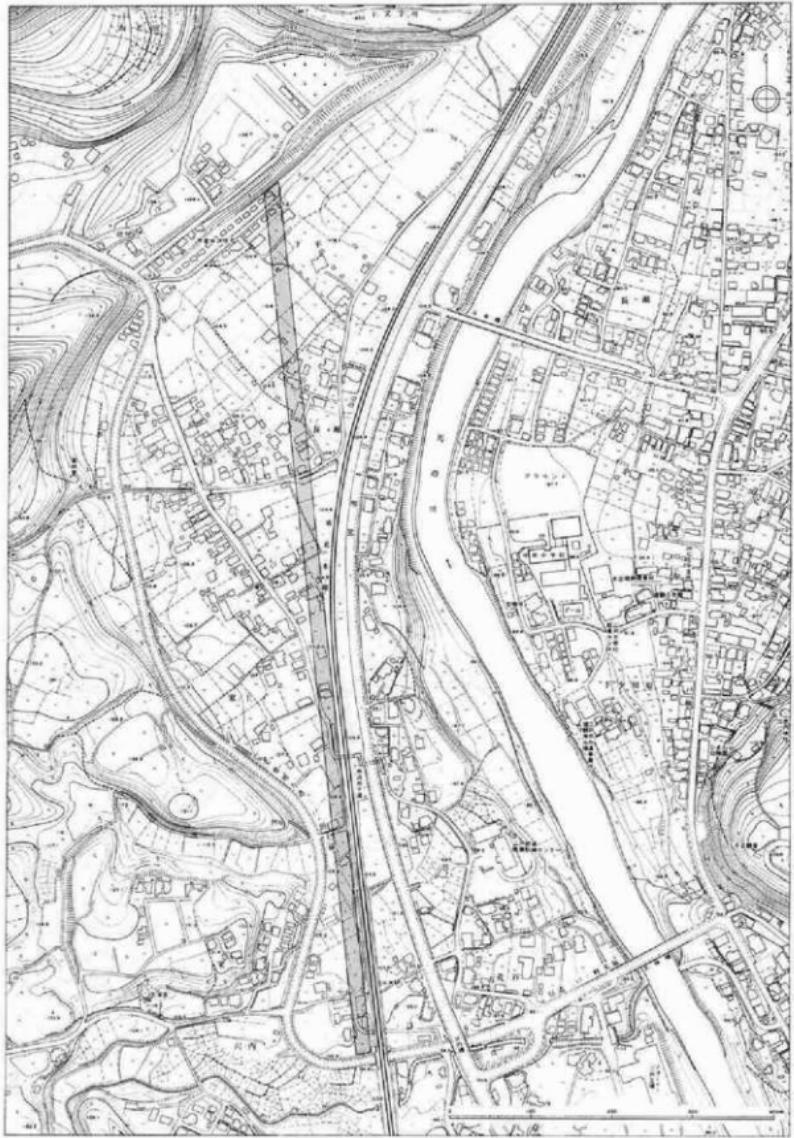
これにより、岩手県教育委員会は平成11年度事業について、平成11年25日付け「教文第1110号」により財団法人岩手県文化振興事業団に通知した。

これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は米沢遺跡について同年4月1日付けで委託契約を締結し、4月15日から発掘調査に着手する予定であるが、同遺跡は規模が大きい関係で平成10年6月25日付けで10年度分の委託契約を締結し、一部発掘調査を行っており11年度、12年度も継続して実施するものである。

なお、発掘調査は12年度で完了し、平成13年度に報告書を刊行する予定である。



第1図 岩手県全図及び二戸市位置図



第2図 周辺の地形図

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

二戸市は岩手県最北部、馬淵川の河岸段丘上に発達した内陸の都市である。隣接する町村は、青森県三戸郡名川町・三戸町・田子町、岩手県淨法寺町・輕米町・九戸村・一戸町である。面積は238.17km²、人口約28,000人の市政都市である（1972年施行）。

米沢遺跡は、北緯40度17分04秒・東經141度17分38秒付近、二戸市米沢字長瀬24-2ほかに南北に細長く伸びて位置し、東日本旅客鉄道東北本線斗米駅から北に約100m、馬淵川から西に約300m、二戸市役所の北西約2.1kmの地点にある。遺跡の標高は104m～106m、馬淵川との比高は約25mを測る。

この米沢遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「一戸」NK-54-18-11及び2万5千分の1地形図「陸奥福岡」NK-54-18-11の図幅中に含まれる。

2. 遺跡周辺の地形と地質

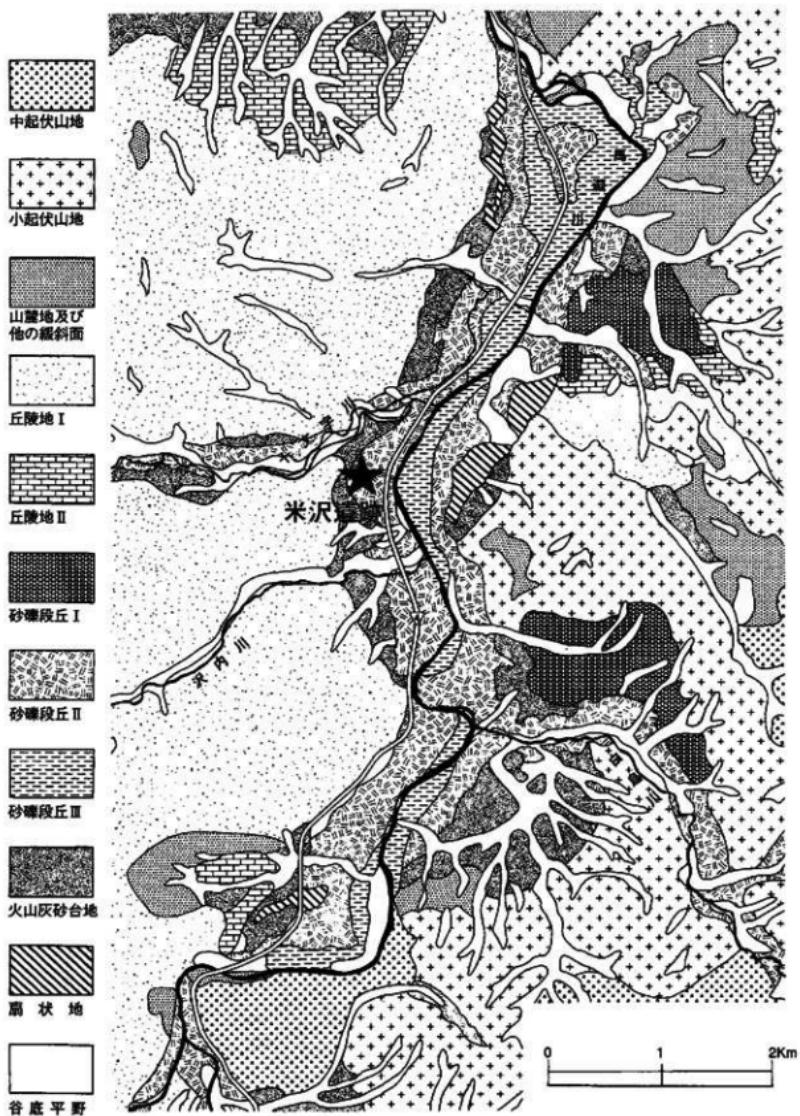
本遺跡の所在する二戸市は、青森県との県境に東を北上山地に、西を奥羽山脈に挟まれる形で位置し、中心を馬淵川が北流している。馬淵川は北上山地北部（葛巻町多々良山付近）を源流とし、沢内川・安比川・十文字川等の支流を統合しながら青森県八戸湾に流れ込んでいる。緩やかに曲流するこの馬淵川によって、市内の石切所地区から金田一地区にかけて、数段の段丘と狭い沖積平野が形成されている。段丘群は大池・中川他（1966）、松山（1981）らの研究によって、高位から仁左平・福岡・長嶺・米沢・堀野・中曾根といった段丘に区分されている。このような地形の形成には馬淵川だけではなく、沢内川も影響を与えたものと考えられる。

段丘上には十和田火山群を起源とする噴出物が堆積しており、間欠的に堆積した火山灰は地形面や地層を対比するための鍵層となっている。標高140m～200mの仁左平段丘上は、チャート・頁岩からなる鍵層の上に高館火山灰以上の火山灰をのせている。続く標高140m～100mの福岡段丘は、火山灰流凝灰岩台地の性格を持ち、八戸火山灰（12,700±260BP）以上の火山灰が堆積する。

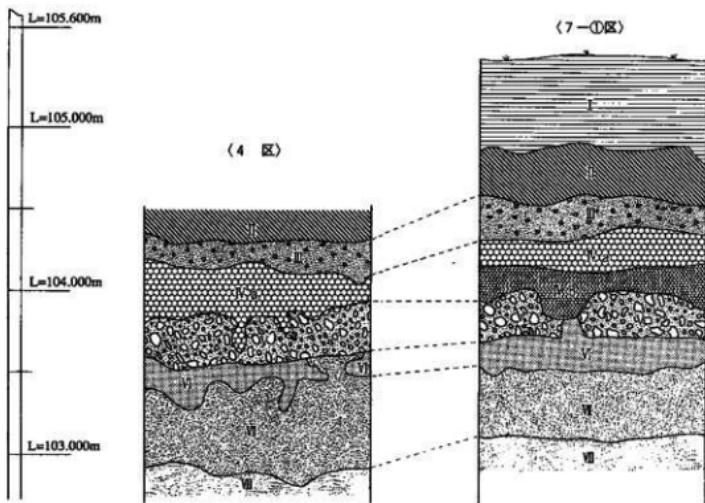
米沢段丘は松山によって馬淵川東岸の中町段丘と西岸の堀野段丘に区分される。標高は100m～110m、沖積段丘の古期面に相当し南部浮石（8,600±250BP）以上の火山灰が堆積する。さらに低位の中曾根段丘は、中標浮石（4,400±140BP）の堆積が見られるが、南部浮石は乗せない段丘であるとされている（松山）。

米沢遺跡は、このうち米沢段丘上、馬淵川西岸に立地しており、西側には奥羽山脈に続く標高300m前後の山々が、東側には馬淵川を挟んで北上山地に連なる折爪岳がせまる。遺跡の南方約350m地点には沢内川が流れ、約400m東流して遺跡の東方を流れる馬淵川に合流する。

遺跡の現況は、宅地・畠地である。周辺は国道4号線のバイパスが通り、郊外型店舗の進出等開発が進みつつある地域である。



第3図 地形分類図



第4図 基本土層

3. 基本層序

調査区内では、基本的には第4図に示すような層序が観察される。本遺跡の基本層序は以下のように大別される。

- 第I層 7.5YR3/2 黒褐色土 粘性・中 しまり・中 現表土及び耕作土。草木根を含む。
- 第II層 7.5YR2/1 黒色土 粘性・中 しまり・中 10YR6/3 にぶい黄橙色の十和田a降下火山灰がブロック状に混入している。古代の遺構確認面である。
- 第III層 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性・中 しまり・中 中振浮石が7%混入している。
- 第IV a層 10YR2/1 黒色土 粘性・中 しまり・やや密 南部浮石（径3mm～5mm）が5%混入している。縄文時代前期の遺構確認面である。
- 第IV b層 10YR2/1 黒色土 粘性・中 しまり・やや密 南部浮石（径5mm～10mm）が10%混入している。
- 第V層 7.5YR5/6 明褐色の南部浮石層（ゴロタ）
- 第VI層 10YR4/4 棕色土 粘性・やや強 しまり・やや密 南部浮石 1%を含む。八戸火山灰漸移層である。縄文時代早期の遺構確認面である。
- 第VII層 10YR5/6 黄褐色土 粘性・やや強 しまり・密 八戸火山灰層である。
- 第VIII層 10YR5/3 にぶい黄橙色の砂質土 粘性・弱 しまり・やや密

4・周辺の遺跡

二戸地区の遺跡が初めて調査されたのは、大正期のことである（大正13年 小田島緑郎）。以後、縄文時代から中近世まで、多数の遺跡が確認されている。多くの遺跡からは縄文土器が出土しており、日本中世の締め括りとも言える、九戸政実の乱の舞台となった土地でもあることから、中世のものと思われる城館跡も多い。これらの遺跡は、馬瀬川とその支流の流域、特に馬瀬川西岸に多く分布しており、段丘面では米沢段丘と堀野・福岡段丘に多く立地している。遺跡の時代や時期は、複合している場合が多く、そのほとんどは縄文時代と古代の複合遺跡である。

上位の福岡段丘上には、縄文・弥生・中世の複合遺跡の火行塚遺跡、縄文・古代・中世の複合遺跡である上里遺跡、中世の城館跡である佐々木館址等の遺跡が分布している。国の史跡指定を受けた中世の城館跡、九戸城跡はこの段丘上の馬瀬川東岸に位置している。九戸城は前述した九戸政実の本拠地であり、現在も二戸市による調査が続いている。

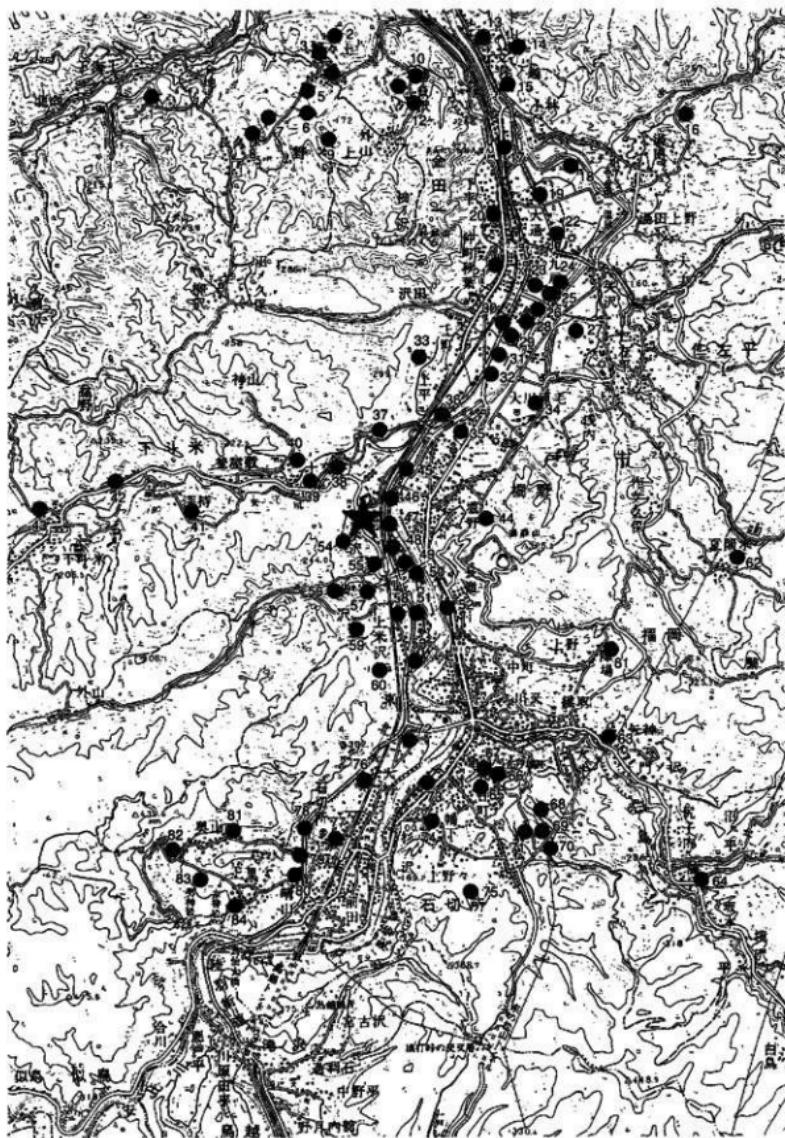
本遺跡の位置する米沢段丘上には、長瀬遺跡群・家の上遺跡・荒谷遺跡・荒谷B遺跡・上村遺跡・下村遺跡・沢内遺跡・上田面遺跡など縄文時代と古代・中世の複合遺跡が多く分布している。長瀬A～Dの長瀬遺跡群からは、縄文から中世にかけての住居跡が出土している。長瀬B遺跡では古代の集落跡の下から、縄文時代早期の住居跡が発見された。この長瀬遺跡群は本遺跡とJR東日本東北本線の線路を挟む形で隣接しており、本遺跡との関連も考えられる。

馬瀬川対岸の堀野段丘上に位置する堀野遺跡は、縄文・古代の複合遺跡である。縄文時代の配石造構・古代の集落跡・古墳などが見つかっており、住居跡は復元され展示されている。また出土遺物の大半を占める土師器は、県南部や北上川流域のものとは異なった形式を持ち、県北部でも古い時代の土師器であるとされている。

この地域は、昭和50年代から国道4号線のバイパス建設や県道の改修工事、東北新幹線盛岡八戸間建設工事等、大規模な土木工事が続いている。それに伴って緊急の発掘調査も多く、二戸市も遺跡の調査・保護に力を注いでいる。

《参考・引用文献》

- 二戸市教育委員会（1978）：『中曾根遺跡発掘調査報告書』
二戸市教育委員会（1981）：『中曾根II遺跡発掘調査報告書』「第Ⅱ章 自然的環境」（松山 力）
村井貞光（1975）：『九戸の地学』
中川久夫（1981）：「第四系」北上川流域地質説明書
(財) 岩手県文化振興事業団（1978）：『二戸市沢内B遺跡』岩埋文報告書第7集
(財) 岩手県文化振興事業団（1982）：『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第35集
(財) 岩手県文化振興事業団（1983）：『長瀬C遺跡第2次発掘調査報告書』岩埋文報告書第51集
(財) 岩手県文化振興事業団（1983）：『荒谷A遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第57集
(財) 岩手県文化振興事業団（1985）：『岩手の遺跡』
(財) 岩手県文化振興事業団（1988）：『米沢遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第132集
(財) 岩手県文化振興事業団（2000）：『上台遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第334集



第5図 遺跡位置及び周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺跡・遺物	時代
1	海上城	城跡	堤防	中世
2	野々上日	散布地	縄文土器	縄文
3	田須	集落跡	土器器	奈良・平安
4	野々上湖	城跡	堀切	奈良・平安
5	野々上日	散布地	縄文土器	縄文
6	大字	散布地	縄文土器	縄文
7	神向	散布地	縄文土器	縄文
8	上の戸工	散布地	縄文土器	縄文
9	との戸工	散布地	縄文土器	縄文
10	腰舟窪工	居住跡	土加厚	奈良・平安
11	腰舟窪工	散布地	縄文土器	縄文
12	腰舟窪里	散布地	縄文土器	縄文
13	下山井	散布地	縄文土器	縄文
14	下山井跡	城跡		中世
15	段ノ塚	散布地	縄文土器	縄文
16	天狗	散布地	縄文土器	縄文
17	跡場跡	集落跡	壇場無落、馬糞	平安
18	大澤	散布地	縄文土器 (中房)	縄文
19	野原	集落跡	土器器	奈良
20	秋吉	散布地	縄文土器	縄文
21	四戸城 (金田一城)	城跡	空堀、平場、土器	中世末～近世
22	沖	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
23	八ツ巣工	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
24	八ツ巣工	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
25	八ツ巣工	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
26	八ツ巣工	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
27	戸花	散布地	縄文土器	縄文
28	東村	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
29	見切工	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
30	見切工	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
31	下山井	散布地	土器器	奈良・平安
32	上田廻工	散布地	縄文土器、土器器	奈良・平安
33	上原	散布地	縄文土器、土器器	奈良・平安
34	大川廻毛	散布地	縄文土器	縄文
35	原野	集落跡・祭祀跡	古墳、素手刀、斎六穴刀、配石	縄文・古代
36	七田池	集落跡	方形周溝墓、石切跡、土器器、瓦質器	弥生・古代
37	海老田	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
38	網越	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
39	裏屋敷	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
40	十文字	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
41	下野井	居住跡	土器器	奈良・平安
42	木ノ木	散布地	縄文土器	縄文
43	木ノ木原 (下原)	居住跡	空堀、平場	中世
44	野野井 (小四郎井)	城跡	空堀、平場、土器器	中世
45	風桶工			
46	尾根C	集落跡	縄文土器、土器器	縄文・古代
47	足根B	集落跡	縄文土器、土器器	縄文・古代
48	足根A	集落跡	縄文土器	縄文・古代
49	東ノ上	集落跡	縄文土器	縄文
50	飛谷B	集落跡	縄文土器	縄文
51	飛谷A	集落跡	縄文土器	縄文
52	延宿	散布地	縄文土器	縄文
53	上井			
54	佐々木館 (細井村)	貯米場・城跡	縄文土器、土器器、陶	中世
55	佐々木村	集落跡		縄文
56	上平	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
57	沢内A	散布地		
58	下村	集落跡	配石、住居跡	縄文・古代
59	上平三	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
60	上平五	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
61	横山	散布地	縄文土器	縄文
62	夏木岡	散布地	沈口土器	縄文
63	矣神			
64	坂本塚 (白鳥)	城跡	土器器、削、平場	古代・中世
65	坂筋小路	散布地	縄文土器、漆器、陶器	縄文・中世
66	三ノ丸	城跡		中世
67	九十九 (白鳥城、福岡城)	城跡	石垣、堀跡、木柵、形	中世
68	上平六	散布地	縄文土器	縄文・奈良・平安
69	天神下工	散布地	縄文土器	縄文・奈良・平安
70	天神下工	散布地	縄文土器	縄文・奈良・平安
71	相木平	散布地	縄文土器	縄文・奈良・平安
72	中曾根	集落跡	瓦各跡	住居跡、円形廻塗、土壙跡
73	廣場	城跡		縄文・古期・中世
74	八幡下	散布地	縄文土器	縄文・中世
75	村松	城跡		中世
76	大村	散布地	縄文土器	縄文
77	森合	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
78	矢竹塚	城跡	住居跡、廻塗含合跡、漆器土器、玉類、土器器	縄文・古期・中世
79	石切所跡	平場、住居跡		中世
80	川井	集落跡	漆器	中世
81	横長根	散布地	漆器生地、フジスコ土壙跡、廻防、人骨、骸骨、土器品	縄文・中世
82	土川工	散布地	縄文土器	縄文
83	土川工	散布地	縄文土器、土器器	縄文・古代
84	森若	城跡	平場、廻防	中世
★	米沢	集落跡	縄文土器、土器器	縄文・古代

III. 調査の方法と室内整理

1. 野外調査の方法

(1) 調査区の設定

調査区の設定は、調査区が北から南方向に長く狭いため便宜的に調査区を縦断するように基準点1と2を設けて基準線とし、基準点1からこれと平行及び直行する線を5m間隔で引き、5×5mの方眼とした。実際には直線の交点に杭を打設して区割りを行った。

グリッドは起点を南西に置き、100×100mの大区画と、大区画をさらに5×5mの間隔で20等分した小区画に細分している。大区画は起点から南にアルファベットの大文字F～Q、東にローマ数字のⅠ～Ⅳを、小区画は北から南にアルファベットの小文字a～t、西から東へ算用数字1～20を付している。調査区の名称は、大区画と小区画の組み合わせでLⅢa1、MⅢb2というように呼称している。基準点1・2及び補点1～8の成果値は以下のとおりである。

基準点1	X = 31,670.000	Y = 39,170.000	H = 106.987
基準点2	X = 31,690.000	Y = 39,170.000	H = 106.499
補点1	X = 31,480.000	Y = 39,190.000	H = 102.609
補点2	X = 31,500.000	Y = 39,190.000	H = 102.340
補点3	X = 31,560.000	Y = 39,180.000	H = 104.589
補点4	X = 31,580.000	Y = 39,180.000	H = 105.086
補点5	X = 31,840.000	Y = 39,150.000	H = 105.582
補点6	X = 31,860.000	Y = 39,150.000	H = 105.620
補点7	X = 32,040.000	Y = 39,130.000	H = 104.857
補点8	X = 32,060.000	Y = 39,130.000	H = 104.840

(2) 納入・遺構検出

調査はまず雑物の除去後に、表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で調査区全体に2m幅のトレンチを適宜設定した。その結果、I層からの遺物・遺構は確認されなかったため重機でI層を除去した。その後、人力によってII層以下を掘り下げた。

遺構の検出は、II層以下で行った。

(3) 遺構の命名

検出された遺構には、S I 01・SK 02・SN 03などと検出順に遺構名を付しているが、室内整理の中で再吟味し、一部については名称を変更した。なお、調査は3ヵ年にわたって行われたが、遺構番号は通し番号とした。

遺構の種類	検出時の略号	室内整理によって変更した名称	掲載した遺跡略号
堅穴住居跡・住居状遺構	S I	第〇〇号住居跡・第〇〇号住居状遺構	S I
土坑	SK	第〇〇号土坑	SK
陥れ穴状遺構	S K T	第〇〇号陥れ穴状遺構	S K T
柱穴状ピット	P	第〇〇号柱穴状ピット	P
石囲炉・焼土	SN	第〇〇号石囲炉・第〇〇号焼土	SN

溝状遺構	S D	第〇〇号溝状遺構	S D
島状遺構	島状遺構	島状遺構	
井戸跡	井戸跡	井戸跡	

新旧名称の対照表は以下のとおりである。

新遺構名	旧遺構名	現場登録	新遺構名	旧遺構名	現場登録	新遺構名	旧遺構名	現場登録
第1号住居跡	第20号住居跡	S I 20	第6号土坑	第53号土坑	S K 53	第36号土坑	第15号土坑	S K 15
第2号住居跡	第3号住居跡	S I 03	第7号土坑	第9号土坑	S K 09	第37号土坑	第16号土坑	S K 16
第3号住居跡	第5号住居跡	S I 05	第8号土坑	第10号土坑	S K 10	第38号土坑	第17号土坑	S K 17
第4号住居跡	第1号住居跡	S I 01	第9号土坑	第11号土坑	S K 11	第39号土坑	第21号土坑	S K 21
第5号住居跡	第2号住居跡	S I 02	第10号土坑	第19号土坑	S K 19	第40号土坑	第27号土坑	S K 27
第6号住居跡	第4号住居跡	S I 04	第11号土坑	第20号土坑	S K 20	第41号土坑	第35号土坑	S K 35
第7号住居跡	第6号住居跡	S I 06	第12号土坑	第25号土坑	S K 25	第42号土坑	第36号土坑	S K 36
第8号住居跡	第10号住居跡	S I 10	第13号土坑	第28号土坑	S K 28	第43号土坑	第45号土坑	S K 45
第9号住居跡	第11号住居跡	S I 11	第14号土坑	第29号土坑	S K 29	第44号土坑	第34号土坑	S K 34
第10号住居跡	第12号住居跡	S I 12	第15号土坑	第30号土坑	S K 30	第45号土坑	第48号土坑	S K 48
第11号住居跡	第14号住居跡	S I 14	第16号土坑	第31号土坑	S K 31	第46号土坑	第49号土坑	S K 49
第12号住居跡	第16号住居跡	S I 16	第17号土坑	第41号土坑	S K 41	第47号土坑	第22号土坑	S K 22
第13号住居跡	第18号住居跡	S I 18	第18号土坑	第42号土坑	S K 42	第48号土坑	第23号土坑	S K 23
第14号住居跡	第19号住居跡	S I 19	第19号土坑	第39号土坑	S K 39	第49号土坑	第24号土坑	S K 24
第15号住居跡	第21号住居跡	S I 21	第20号土坑	第32号土坑	S K 32	第50号土坑	第37号土坑	S K 37
第16号住居跡	第22号住居跡	S I 22	第21号土坑	第33号土坑	S K 33	第51号土坑	第38号土坑	S K 38
第17号住居跡	第23号住居跡	S I 23	第22号土坑	第40号土坑	S K 40	(抹消)	第18号土坑	S K 18
第18号住居跡	第24号住居跡	S I 24	第23号土坑	第43号土坑	S K 43	(抹消)	第26号土坑	S K 26
第19号住居跡	第25号住居跡	S I 25	第24号土坑	第50号土坑	S K 50	第1号階下穴状遺構	第1号階下穴状遺構	S K T 01
第20号住居跡	第7号住居跡	S I 07	第25号土坑	第1号土坑	S K 01	第2号階下穴状遺構	第2号階下穴状遺構	S K T 02
第21号住居跡	第8号住居跡	S I 08	第26号土坑	第2号土坑	S K 02	第3号階下穴状遺構	第3号階下穴状遺構	S K T 03
第22号住居跡	第9号住居跡	S I 09	第27号土坑	第3号土坑	S K 03	第4号階下穴状遺構	第4号階下穴状遺構	S K T 04
第23号住居跡	第15号住居跡	S I 15	第28号土坑	第4号土坑	S K 04	第5号階下穴状遺構	第5号階下穴状遺構	S K T 05
第24号住居跡	第17号住居跡	S I 17	第29号土坑	第5号土坑	S K 05	第6号階下穴状遺構	第6号階下穴状遺構	S K T 06
第1号住居状遺構	第13号住居跡	S I 13	第30号土坑	第6号土坑	S K 06	第7号階下穴状遺構	第7号階下穴状遺構	S K T 07
第1号土坑	第44号土坑	S K 44	第31号土坑	第7号土坑	S K 07	第1号石窯炉	第6号焼土	S N 06
第2号土坑	第46号土坑	S K 46	第32号土坑	第8号土坑	S K 08	第2号石窯炉	第20号焼土	S N 20
第3号土坑	第47号土坑	S K 47	第33号土坑	第12号土坑	S K 12	第1号焼土	第9号焼土	S N 09
第4号土坑	第51号土坑	S K 51	第34号土坑	第13号土坑	S K 13	第2号焼土	第10号焼土	S N 10
第5号土坑	第52号土坑	S K 52	第35号土坑	第14号土坑	S K 14	第3号焼土	第11号焼土	S N 11

第4号焼土	第12号焼土	S N12	第18号焼土	第2号焼土	S N02	第8号溝状遺構	第8号溝状遺構	S D08
第5号焼土	第13号焼土	S N13	第19号土坑	第3号土坑	S N03	第9号溝状遺構	第9号溝状遺構	S D09
第6号焼土	第14号焼土	S N14	第20号土坑	第4号土坑	S N04	第10号溝状遺構	第10号溝状遺構	S D10
第7号焼土	第15号焼土	S N15	第21号土坑	第5号土坑	S N05	第11号溝状遺構	第11号溝状遺構	S D11
第8号焼土	第16号焼土	S N16	第22号土坑	第21号土坑	S N21	第12号溝状遺構	第12号溝状遺構	S D12
第9号焼土	第17号焼土	S N17	第23号土坑	第7号土坑	S N07	第13号溝状遺構	第13号溝状遺構	S D13
第10号焼土	第18号焼土	S N18	(抹消)	第8号土坑	S N08	第14号溝状遺構	第14号溝状遺構	S D14
第11号焼土	第19号焼土	S N19	第1号溝状遺構	第1号溝状遺構	S D01	第15号溝状遺構	第15号溝状遺構	S D15
第12号焼土	第22号焼土	S N22	第2号溝状遺構	第2号溝状遺構	S D02	第16号溝状遺構	第16号溝状遺構	S D16
第13号焼土	第23号焼土	S N23	第3号溝状遺構	第3号溝状遺構	S D03	第17号溝状遺構	第17号溝状遺構	S D17
第14号焼土	第24号焼土	S N24	第4号溝状遺構	第4号溝状遺構	S D04	島状遺構	島状遺構	
第15号焼土	第25号焼土	S N25	第5号溝状遺構	第5号溝状遺構	S D05	井戸跡	井戸跡	
第16号焼土	第26号焼土	S N26	第6号溝状遺構	第6号溝状遺構	S D06			
第17号焼土	第1号焼土	S N01	第7号溝状遺構	第7号溝状遺構	S D07			

(4) 遺構の精査と実測

遺構の精査は住居跡は4分法で、土坑は2分法で行い、必要に応じて使い分けた。記録として必要な図面は精査の各段階において行っている。

遺構の実測は簡易通り方測量で行った。平面図は、グリッド区画線を基準とした1m間隔の水糸を遺構全体に張り、それを測量基準線として実測した。断面図は水平水糸を張ってそれを実測基線とした。実測図の縮尺は平面図、断面図とも20分の1を原則とした。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(5) 遺物の取り上げ

遺物の取り上げにあたってはXYZ座標を測定して分布状況を図面に取り扱に努めたが、調査の進行上遺構内遺物については埋土あるいは埋土上位下位、床面の別で取り上げ、遺外遺物については小グリッド、基本層序で取り上げたものがほとんどである。なお、縄文早期及び前期の遺物については点取りを行ったが、出土層位は早期がVI層、前期がIVa層である。

(6) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、35mm判2台（モノクローム・カラーリバーサル1台ずつ）と6×7cm版モノクローム1台を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を中心に撮影した。6×7cm版モノクロームについては撮影を省略した遺構もある。他にボラロイドカメラ1台をメモ的に使用している。調査終了直前にはセスナ機による空中写真撮影を行った。

2. 室内整理の方法

(1) 遺物の処理

室内整理は現場で残った遺物の水洗・注記から開始し、接合・復元の順に進めた。土器類は報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。石器類は器種毎に登録し、土器類と同様に進めた。

(2) 遺構図面

野外調査で得られた図面類は、平面図、断面図の点検・標高値の確認等を行い必要に応じて合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

(3) 図版について

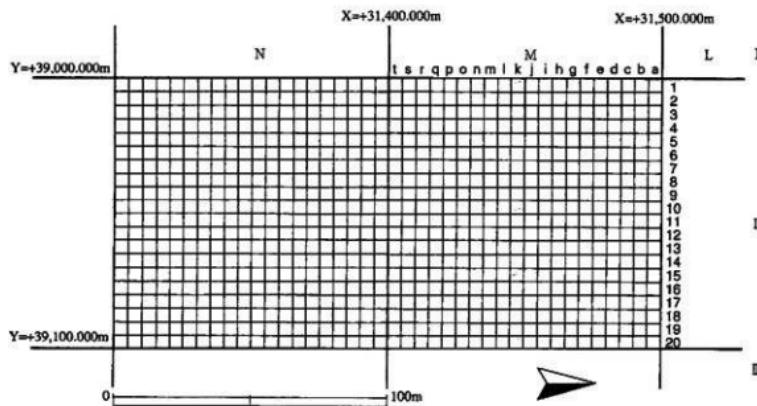
遺構図版は遺構の種類毎に掲載した。縮尺はそれぞれにスケールを付している。方位は座標北を示している。

遺物図版は、本報告書の分類基準によってまとめて掲載した。縮尺は土器実測図が3分の1を基本としているが、遺物により2分の1から5分の1にしてある。拓影図も3分の1を基本としている。剥片石器は2分の1、螺石器・石製品は3分の1である。土製品は2分の1、3分の1、鉄製品は2分の1から3分の1、錢貨は1分の1である。各図版内にはそれぞれスケールを付している。

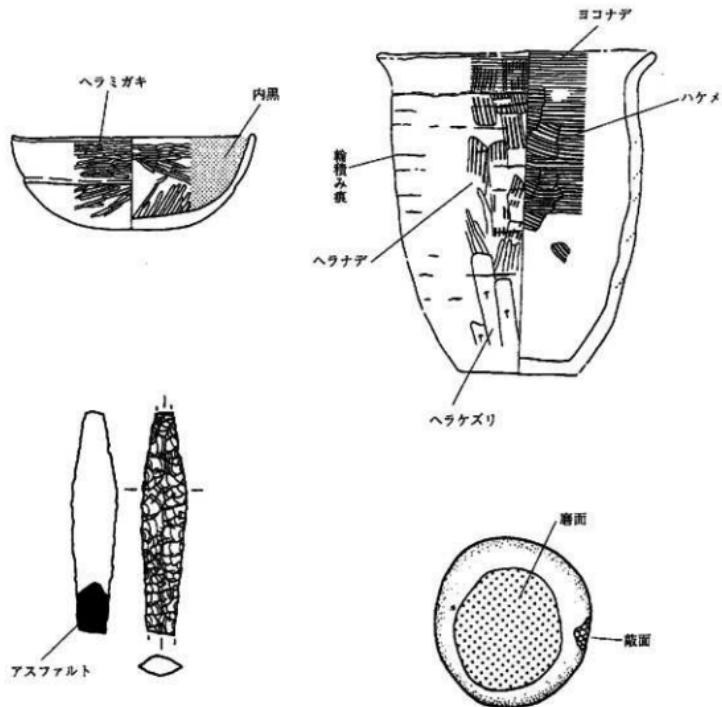
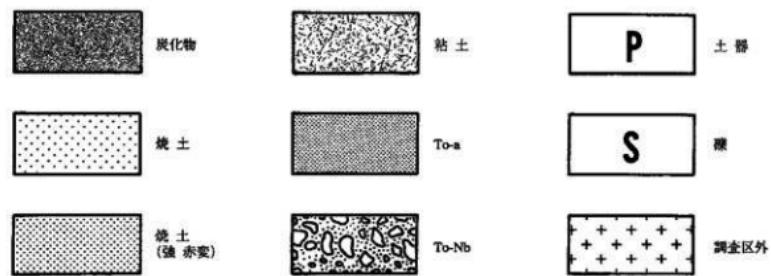
遺構・遺物図版に使用したスクリーントーンについては凡例として示してある。

(4) 遺物写真図版について

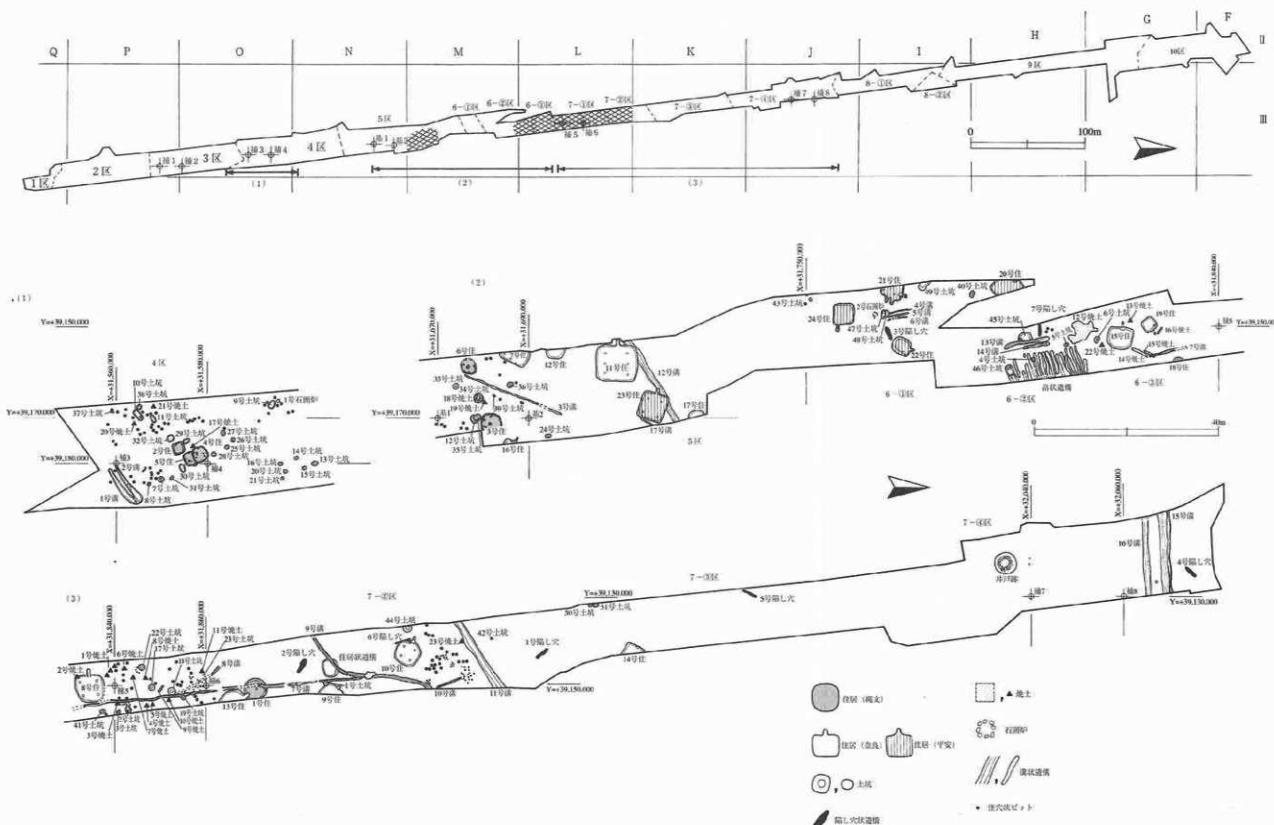
遺物写真図版の縮尺は、基本的に遺物図版に準じた。遺物番号は、遺物図版番号と一致している。



第6図 小グリッド配置図



第7図 実測図凡例



第8図 造構配図

IV. 検出された遺構と遺物

1. 壺穴住居跡・住居状遺構

縄文時代の壺穴住居が6棟、古代の住居跡は18棟、住居状遺構1棟が検出された。重複する遺構も一部見られるが、多くは単独で検出された。

第1号住居跡

遺構（第9図・写真図版3・4）

<位置>調査区中央部7①区の平坦面、グリッドL III f 11に位置する。

<検出状況> VI a層上面で、南部浮石を多量に含む略円形の広がりが確認された。東側の一部は調査区外に延びる。

<重複状況>重複する遺構はなく、単独で検出された。

<規模・平面形>径5.0×5.5m、不整円形を呈すると推定される。

<床面積>19.6m²（推定）

<埋土>1層は南部浮石がレンズ状に堆積する。2層は炭化物を含む暗褐色土である。

<壁>VI a、VI b層を壁とし、緩やかに立ち上がる。

北側45cm、西側48cm、南側44cm、東側41cm

<床面>VI b層相当で、ほぼ平坦である。

<柱穴>中央に1基、北側壁上面に2基の計3基検出された。

P P 1 径28×26cm 深さ39.6cm P P 2 径34×26cm 深さ47.2cm

P P 3 径22×25cm 深さ23.9cm

<炉>中央から北西によりごく弱く赤変した焼土と思われる広がりが検出されたが、地床炉であるとの確認は得られない。

遺物（第66図・写真図版74）

床面上から土器片9点が出土している。1は深鉢の口縁部で、貝殻腹縁圧痕が施される。2は深鉢の口縁部で、貝殻腹縁圧痕と刺突文が施される。3は深鉢の体部破片で、貝殻腹縁押し引き文が施される。4～9は深鉢の体部破片で、貝殻腹縁圧痕が施される。7には炭化物が付着する。

時期 検出状況や出土した遺物の特徴から、縄文時代早期中葉と推定される。

第2号住居跡

遺構（第10図・写真図版5）

<位置>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、グリッドO III f 6に位置する。

<検出状況> II層中で、南部浮石を含む黒色土の広がりが確認された。

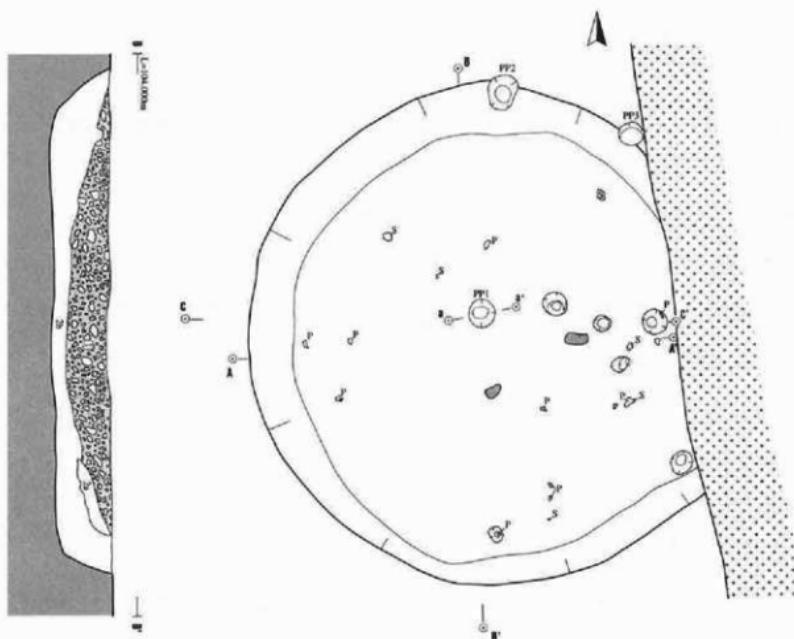
<重複状況>重複する遺構はなく、単独で検出された。

<規模・平面形>一辺2.3m、隅丸方形を呈する。

<床面積>5.2m²

<埋土>南部浮石を含む黒色土主体である。炭化物混入

<壁>III層下位・IV a・IV b・V層を壁とし、各壁ともやや外傾する。



No.	径 (cm)	深さ (cm)
PP1	28×26	39.6
PP2	34×26	47.3
PP3	22×25	23.9

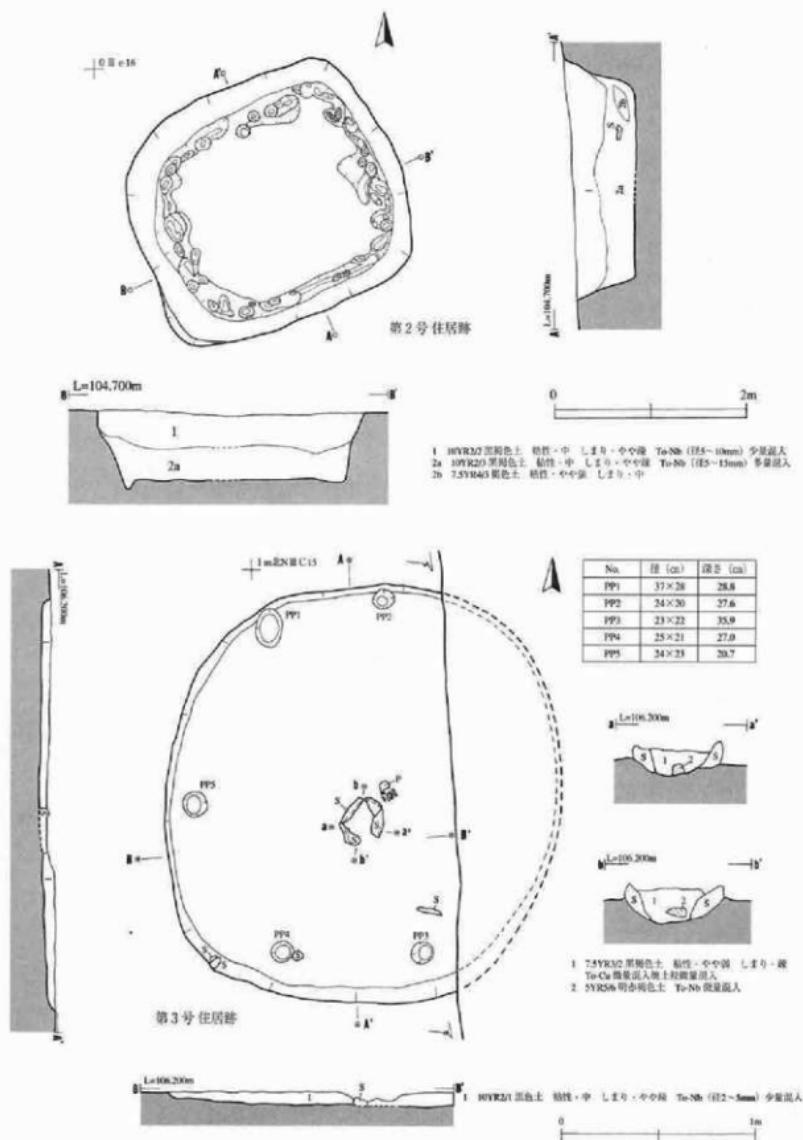


I 7.SYR4/3 黄褐色 土粘質 勾性・なし、しまり、含L
 (上部砂質1~3mm 下部粘土質3~5mm)
 2a 7.SYR4/4 黄褐色 土粘性 中、しまり、塑 7.SYR4/4 黄褐色 (粘性・中、しまり、塑)
 2b 7.SYR4/2 黑褐色 土粘性 中、しまり、塑 7.SYR4/4 黄褐色 (粘性・中、しまり、塑)
 砂質混入 7.SYR5/6 明褐色 To-Nb 粒 (径1~3mm) 5% 含 硅化物粒微混入

I 7.SYR4/3 黄褐色 土粘性・中しまり、中空隙 7.SYR5/6 明褐色
 To-Nb粒 (径1~2mm) 2% 含む 硅化物粒微混入



第9図 第1号住居跡



第10図 第2号・3号住居跡

北壁68cm、西壁73cm、南壁62cm、東壁70cm

<床面> V層相当で、硬くしまる。

<柱穴> 深さ14cm前後の壁溝をめぐらし、さらに小柱穴を掘り込む。

<炉> 検出されない。

遺物 出土していない。

時期 検出状況、埋土状況、住居の形状の特徴から、縄文時代前期と推定される。

第3号住居跡

遺構（第10図・写真図版6）

<位置> 調査区中央部5区の平坦面、グリッドN III d 15に位置する。

<検出状況> IV a層上面で、中揮浮石を含む不整形の黒褐色土の土層変化が確認された。平成10年度は東側は調査区外であったため全容は明らかにならなかった。平成12年度に再調査を行ったが、市道直下にあり工事の際破壊されたものと思われ、住居の東側部分については検出できなかつた。

<重複状況> 重複する遺構はなく、単独で検出された。

<規模・平面形> 一辺4.1m、略円形を呈すると思われる。

<床面積> 推定13.1m²

<埋土> 中揮浮石を含む黒褐色土主体である。

<壁> IV a層を壁とし、緩やかに立ち上がる。北壁8.8cm、西壁9cm、南壁10.1cm

<床面> IV a層相当で、硬くしまる。

<柱穴> 壁際に5基検出された。

P P 1 径37×28cm 深さ28.8cm P P 2 径24×20cm 深さ27.6cm

P P 3 径23×22cm 深さ35.9cm P P 4 径25×21cm 深さ27.0cm

P P 5 径24×23cm 深さ20.7cm

<炉> 住居の中央部分に石圓炉が検出された。20~30cmの砂岩で構築され、規模は43×50cm、焼土は弱

く赤変している。焼土の厚さは最大18cmである。

遺物（第66図・写真図版74）

石圓炉付近から完形の小型深鉢1点が出土している。L R継位縄文が施される。胎土には砂粒が含まれる。

時期 出土遺物の特徴から判断し、縄文時代中期に属すると思われる。

第4号住居跡

遺構（第11図・写真図版7）

<位置> 調査区南部4区の緩やかな傾斜地、グリッドO III e 16に位置する。

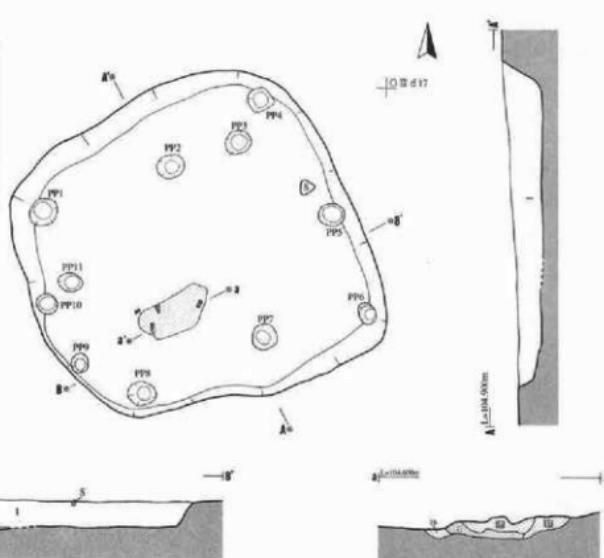
<検出状況> III層中で、中揮浮石を含む黒色土の広がりが確認された。

<重複状況> 南側で第5号住居跡と重複する。当住居跡の方が新しいと思われる。

<規模・平面形> 一辺3.2m、不整隅丸方形を呈する。

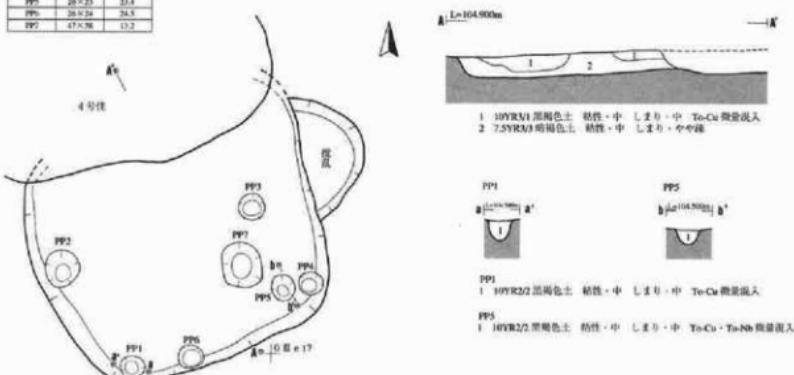
No.	H (cm)	B (m)
PP1	20×26	26.1
PP2	25×25	22.8
PP3	25×25	19.8
PP4	25×25	20.7
PP5	26×25	7.0
PP6	22×20	20.1
PP7	26×25	25.8
PP8	17×25	18.0
PP9	20×25	15.3
PP10	25×25	20.6

第4号 住居跡



No.	H (cm)	B (m)
PP1	25×26	24.0
PP2	38×32	25.5
PP3	25×24	27.7
PP4	24×22	22.6
PP5	26×25	23.4
PP6	26×25	24.5
PP7	47×36	27.0

4号



第5号 住居跡

第11図 第4号・5号住居跡

<床面積>8.7m²

<埋土>中撰浮石及び南部浮石を含む黒色土主体である。

<壁>IV a・IV b層を壁とし、各壁とも緩やかに外傾する。

北西壁28~32cm、南西壁21cm、北東壁28~31cm、南東壁10~15.5cm（第5号住居と切り合う）

<床面>IV b層相当で、やや凹凸がみられ硬くしまる。

<柱穴>配置は不明瞭であるが、11基の柱穴状ピットが検出された。

P P 1	径28×26cm	深さ36.1cm	P P 2	径25×24cm	深さ22.4cm
P P 3	径25×23cm	深さ19.0cm	P P 4	径25×23cm	深さ31.7cm
P P 5	径26×23cm	深さ7.3cm	P P 6	径22×16cm	深さ28.1cm
P P 7	径25×23cm	深さ16.3cm	P P 8	径29×25cm	深さ23.3cm
P P 9	径17×16cm	深さ18.0cm	P P 10	径20×18cm	深さ19.3cm
P P 11	径25×19cm	深さ26.6cm			

<炉>住居内南西寄りに地床炉と思われる赤褐色焼土が確認された。規模は75cm×35cm、厚さは最大11cmを測る。焼土内には炭化物が少量混入する。

遺物（第66図・写真図版74）

埋土中から土器片3点が出土している。いずれも地文のみの深鉢体部破片と思われる。

時期 検出状況から判断し、縄文時代中期から後期と推定される。

第5号住居跡

遺構（第11図・写真図版8）

<位置>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、グリッドO III e 16~17に位置する。

<検出状況>Ⅲ層中で、中撰浮石及び南部浮石を含む黒色土の広がりが確認された。

<重複状況>北側で第4号住居と重複する。当住居跡の方が古いと思われる。

<規模・平面形>一辺2.3m、不整隅丸方形と推定される。

<床面積>推定4.8m²

<埋土>中撰浮石を含む黒色土主体である。

<壁>IV a・IV b層を壁とし、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がる。

南西壁 15cm、南東壁 15~17cm、北東 16.2cm

<床面>IV b層相当で、やや凹凸がみられ硬くしまる。

<柱穴>配置は不規則であるが、7基の柱穴状ピットが検出された。

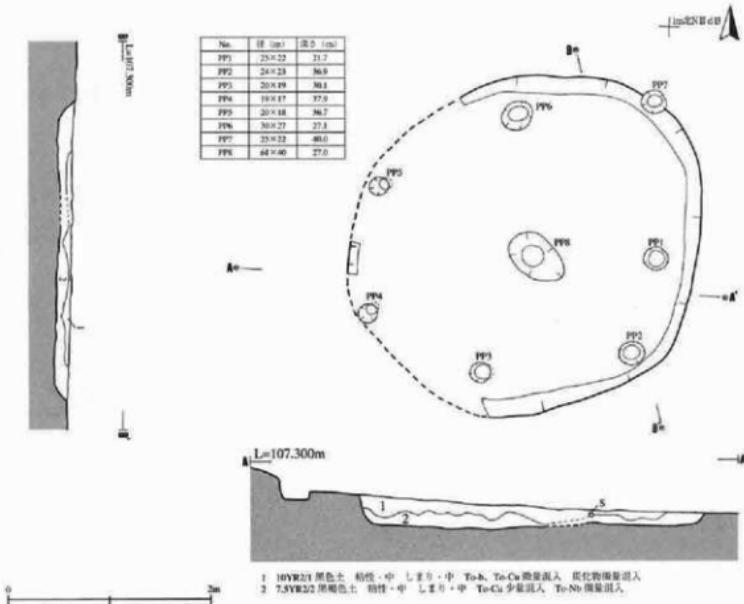
P P 1	径25×24cm	深さ20.4cm	P P 2	径38×30cm	深さ25.5cm
P P 3	径25×24cm	深さ27.7cm	P P 4	径24×22cm	深さ22.6cm
P P 5	径26×23cm	深さ23.4cm	P P 6	径26×24cm	深さ24.5cm
P P 7	径47×38cm	深さ13.2cm			

<炉>検出されない。

遺物（第66図・写真図版74）

埋土中から土器片1点が出土している。深鉢の底部片である。

時期 検出状況から判断し、縄文時代中期から後期と推定される。



第12図 第6号住居跡

第6号住居跡

遺構（第12図・写真図版9）

<位置>調査区中央部5区の平坦面、グリッドN III e 14に位置する。

<検出状況>Ⅱ層中で不整な黒褐色土の広がりが確認された。検出以前に一部トレンチをいたため西壁を削剥した。

<重複状況>重複はなく、単独で検出された。

<規模・平面形>3.3×3.5m、略円形を呈する。

<床面積>10.99 m²

<埋土>黒褐色土主体である。

<壁>Ⅲ層を壁とし、緩やかに立ち上がる。

北壁14.8cm、南壁23cm、東壁14cm

<床面>Ⅲ層面相当で、平坦である。

<柱穴>住居中央に1基、壁際に7基の柱穴が検出された。

P P 1 径25×22cm 深さ21.7cm P P 2 径24×23cm 深さ36.9cm

P P 3 径20×19cm 深さ30.1cm P P 4 径19×17cm 深さ37.9cm

P P 5 径20×18cm 深さ36.7cm P P 6 径30×27cm 深さ27.1cm

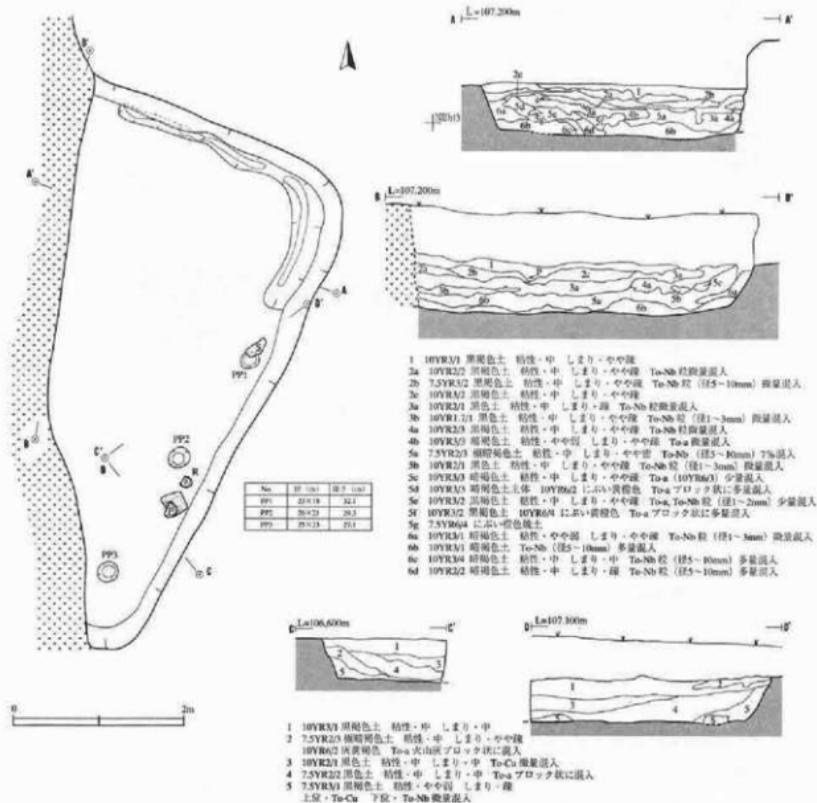
P P 7 径25×22cm 深さ40.0cm P P 8 径61×40cm 深さ27.0cm

<炉>検出されない。

遺物 (第66図・写真図版74)

埋土中から3点出土している。15・16は鉢の体部片で、外面にミガキが入り、沈線が施される。17は深鉢の体部片で、不整縞文を施す。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、縄文時代後期から晩期と推定される。



第13図 第7号住居跡

第7号住居跡

遺構（第13図・写真図版10・11）

<位置>調査区中央部5区の平坦面、グリッドN III b 12に位置する。

<検出状況>II層中で、十和田a降下火山灰を含む不整形の黒色土の土層変化が確認された。北西半は西側調査区外に延びているものと推定される。

<重複状況>重複する遺構はなく、単独で検出された。

<主軸>不明

<規模・平面形>一辺6.2m、隅丸方形を呈すると推定される。

<床面積>推定31.3m²

<埋土>6層に細分される。十和田a降下火山灰をブロック状に含む。

<壁>II～IV b層を壁とし、ほぼ直立して立ち上がる。壁高は南東壁45～50cm、北東壁55～63cmを測る。

<床面>V層上面で、硬くしまり、北東側に壁溝がめぐる。土器片、粘土塊、炭化したイネ科草（ススキ？）が確認された。壁溝は幅10～28cm、深さ4.5～13cmを測る。

<柱穴>壁際には3基検出された。P P 1 径23×18cm、深さ32.1cm P P 2 径26×21cm、深さ29.3cm

P P 3 径25×23cm、深さ27.1cmを測る。

<カマド>検出されていないが、周囲の住居跡の例から推定し調査区外の北西壁に構築されるものと思われる。

<付属施設>なし

遺物（第66図・写真図版74）

非クロ成形の鉢1点と蔽石1点が出土している。18は指ナデ調整される。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、奈良時代（8世紀前半）の住居跡と推定される。

第8号住居跡

遺構（第14～16図・写真図版12・13）

<位置>調査区中央部7①区の平坦面、グリッドL III n 11に位置する。

<検出状況>II層中で、十和田a降下火山灰を含む椭円形状の黒褐色土の土層変化が確認された。北東側に擾乱があり削剥される。

<主軸> N-90°-W

<重複状況>重複する遺構はなく、単独で検出された。

<規模・平面形>一辺6m、隅丸方形を呈する。

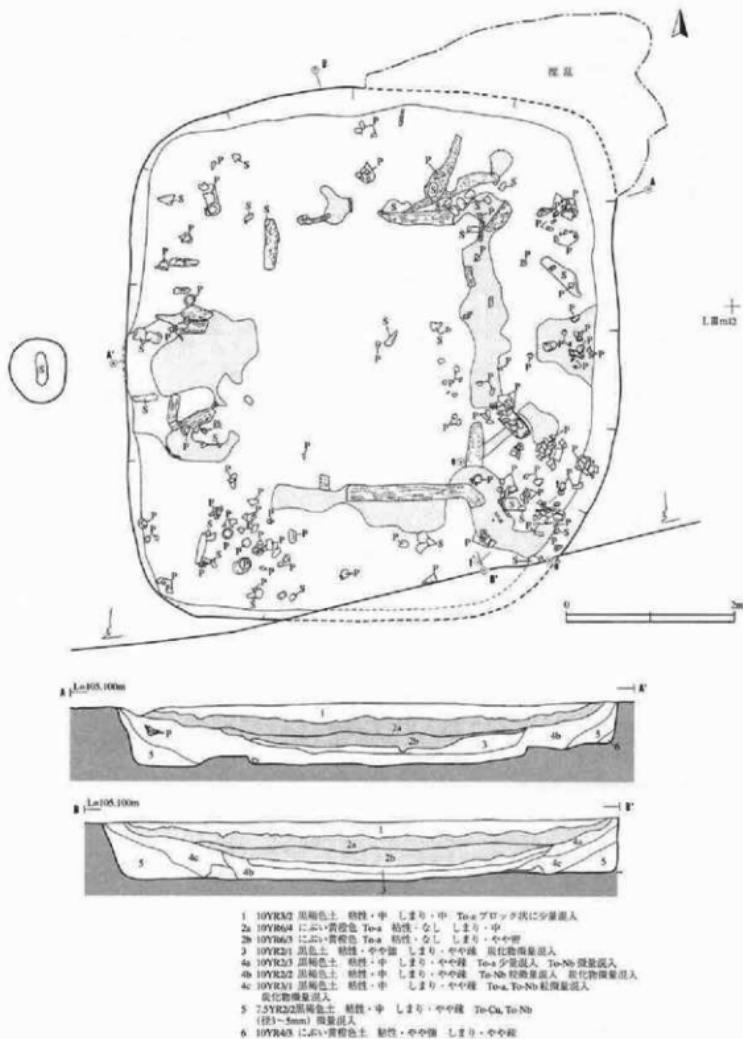
<床面積>36m²(推定)

<埋土>上位は黒褐色土主体、中位には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積し、下位は黒褐色土を主体とする。

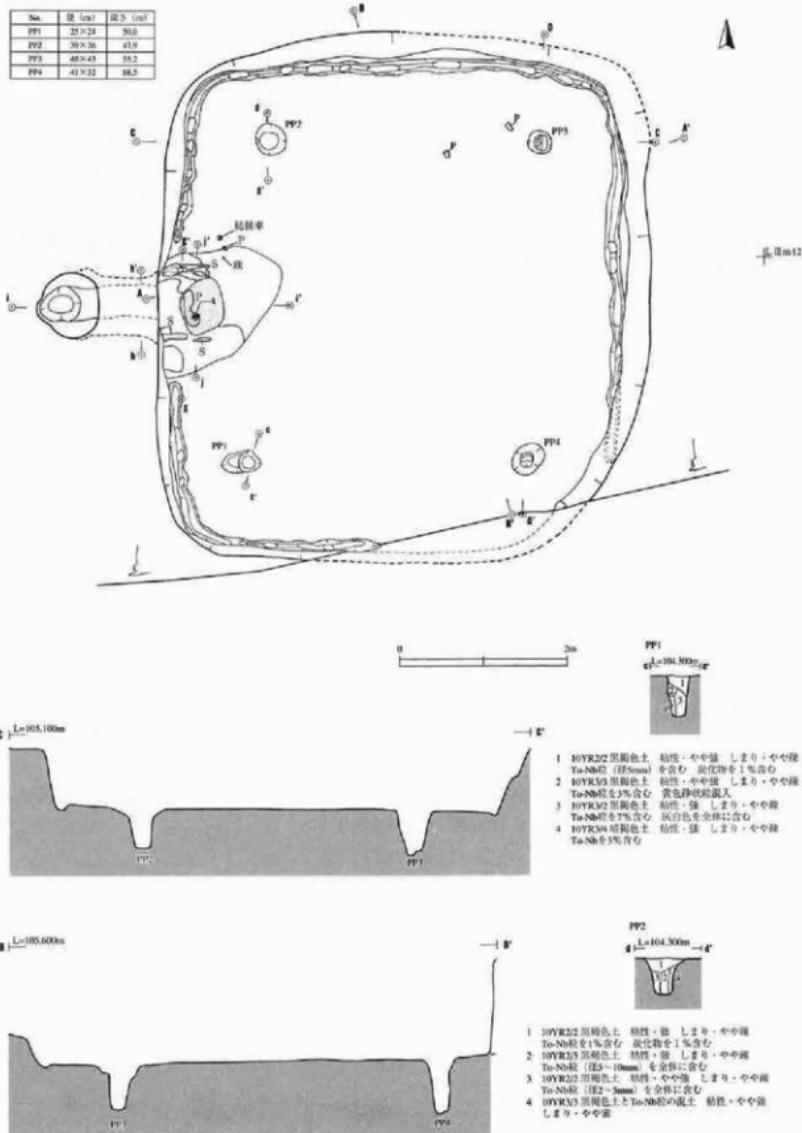
<壁>II層下位～IV b層を壁とし、直立ぎみに立ち上がる。壁高は、北壁68～71cm、西壁63～67cm、南壁70cm、東壁60cmを測る。

<床面>IV b層下位で、硬くしまる。炭化材、焼土、土器、礫が多量に散在することから焼失住居と思われる。各壁に壁溝がめぐる。壁溝幅10～18cm、深さ10～12cm。

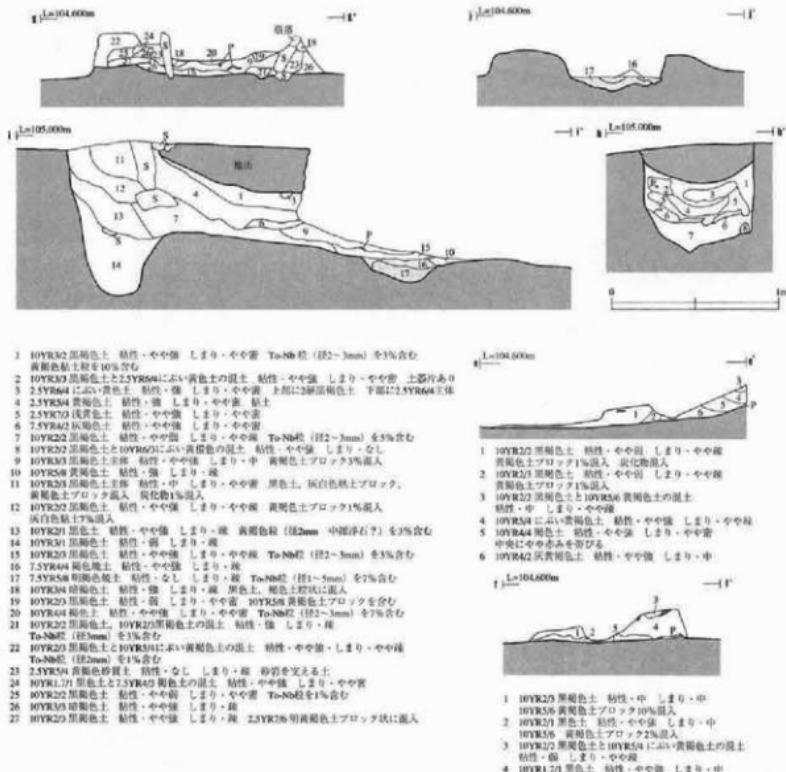
<柱穴>柱穴4基が確認された。P P 1 径25×24cm、深さ50.0cm、P P 2 径39×36cm、深さ47.9cm、



第14図 第8号住居跡（1）



第15図 第8号住居跡 (2)



第16図 第8号住居跡（3）

P P 3 径48×43cm、深さ55.2cm、P P 4 径41×32cm、深さ68.5cm。柱穴間距離は3.0~3.5mである。

カマド→西壁中央部に設置される。本体の規模は180×130cmを測る。カマドの残存状況は良好である。袖部の芯材と天井部は砂岩で構築される。燃焼部は強く赤変し、範囲は65×53cm、厚さ最大9cmの現地性の焼土が形成されている。煙道部はくり抜き式で、燃焼部から緩やかに上がり煙出し部に至る構造をもつ。規模は全長140cm、幅70~80cmを測る。煙出し部は径75×70cm、煙道部底面から深さ32cmの円形のピットを伴うものである。各部の埋土には焼土粒や炭化物、南部浮石粒が含まれる。

<付属施設>検出されない。

遺物（第66~69図・写真図版74~77）

非クロコ成形の坏・壺類と金属製品3点、土製品1点、磨歎石1点が出土している。20、21は外面にを有する坏で、内面が黒色処理される。出土した坏の底部は丸底や丸底風平底を特徴とする。壺は頸部有段のものが多い。外面調整はヘラケズリとハケメ、内面はハケメを主体とする。40は球胴壺でやや古手のものと思われる。頸部に段を有し、外面はヘラケズリ・ハケメ、内面はヘラミガキ調整である。41は土製紡錘車で、ミガキが丁寧に施される。43の金属製品は不明である。44は刀子片、45については詳細は不明であるが、鍔金具と推定される。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、奈良時代（8世紀前半）と推定される。

第9号住居跡

遺構（第17図・写真図版14）

<位置>調査区中央部7②区の平坦面、グリッドLⅢ c 11に位置する。第10号住居跡の南東約11m地点にある。

<検出状況>Ⅱ層中で、十和田a降下火山灰をブロック状に含む不整な黒褐色土の土層変化が確認された。東半は調査区外に延びる。

<主軸>N-40°-W

<重複状況>重複する遺構はなく、単独で検出された。

<規模・平面形>一辺約4m、隅丸方形を呈すると推定される。

<床面積>16m²(推定)

<埋土>上位は黒褐色土主体、中位には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積し、下位は黒色土主体とする。

<壁>Ⅱ層下位～Ⅳb層を壁とし、ほぼ直立して立ち上がる。壁高は北西壁57～71cm、南西壁64～74cm。

<床面>Ⅳb層下部で、硬くしまる。炭化材が散在することから焼失住居と思われる。各壁に壁溝が巡る。壁溝の幅14～26cm、深さ8～25cm。

<柱穴>補助柱と思われるピット1基が検出された。P P 1径21×20cm、深さ17.6cm。

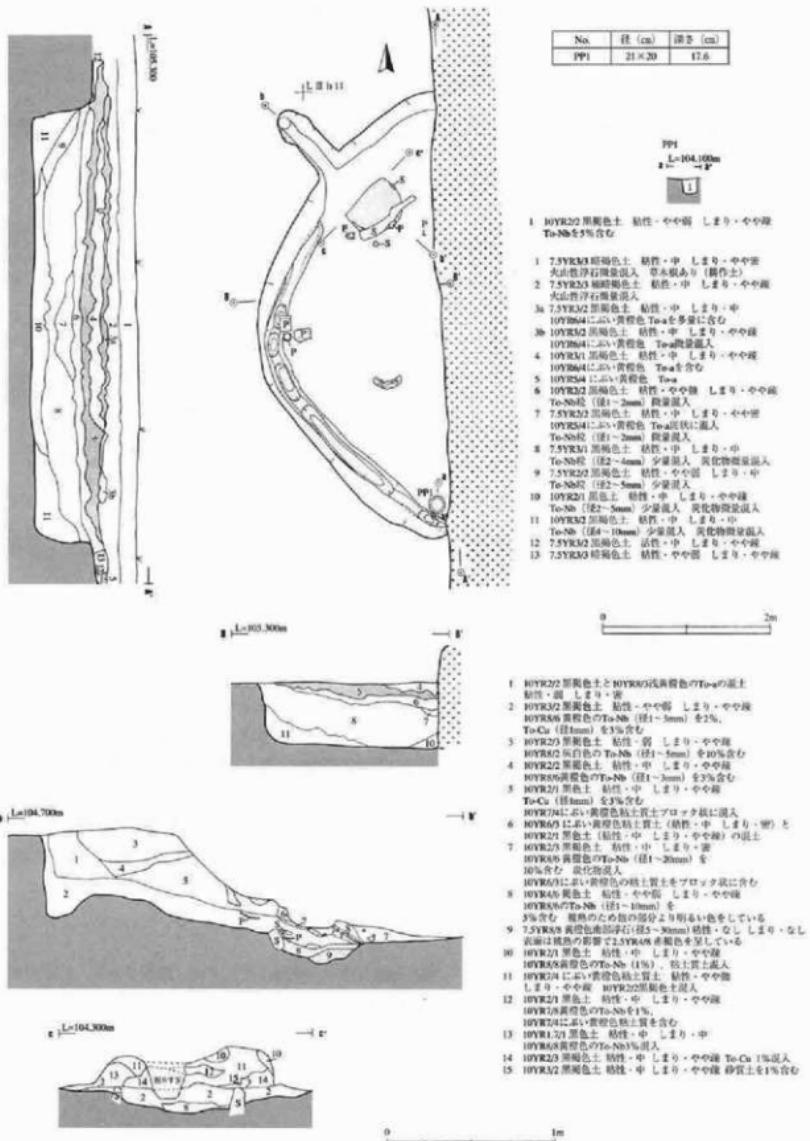
<カマド>北西壁中央部に設置される。本体の規模は70×55cmを測る。カマドの残存状況はあまりよくない。袖部の芯材は砂岩で構築される。燃焼部は強く赤変し、焼土範囲は65×50cm、厚さ最大6cmの現地性の焼土が形成されている。煙道部は掘り込み式で、燃焼部から緩やかに上がり煙出し部に至る構造をもつ。規模は全長85cm、幅34～39cmを測る。煙出し部は径40×35cm、煙道部底面から深さ12cmの円形のピットを伴うものである。各部の埋土には焼土粒や炭化物、十和田a降下火山灰、南部浮石が含まれる。

<付属施設>検出されない。

遺物（第69図・写真図版77）

カマドから坏、壺が1点づつ出土した。46は外面有段で、底部はヘラケズリ調整である。47は頸部有段で、外面はヘラミガキ、内面はハケメ調整である。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、奈良時代（8世紀前半）と推定される。



第17図 第9号住居跡

第10号住居跡

遺構（第18～20図・写真図版15・16）

＜位置＞調査区中央部7②区の平坦面、グリッドK III t 9に位置する。第9号住居跡の北西約11m地点にある。

＜検出状況＞II層中で、十和田a降下火山灰を含む不整形の黒褐色土の土層変化が確認された。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞N-60°-W

＜規模・平面形＞一辺5.2m、隅丸方形を呈する。

＜床面積＞27m²

＜埋土＞上位は黒褐色土主体、中位には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積し、下位は黒褐色土主体とする。

＜壁＞II層下位～IV b層を壁とし、ほぼ直立して立ち上がる。壁高は北西壁66～68cm、南西壁64～67cm、南東壁63～69cm、北東壁73～81cmを測る。

＜床面＞IV層下位で、硬くしまる。炭化材、焼土、土器、砾が多量に散在することから焼失住居と思われる。壁際に壁溝がめぐる。壁溝幅10～23cm、深さ7～15cm。

＜柱穴＞主柱穴が4基検出された。PP 1 径33×25cm、深さ55.5cm、PP 2 径28×30cm、深さ72.1cm、PP 3 径48×47cm、深さ69.1cm、PP 4 径27×30cm、深さ83.0cm。柱穴間距離は2.2～2.5mである。

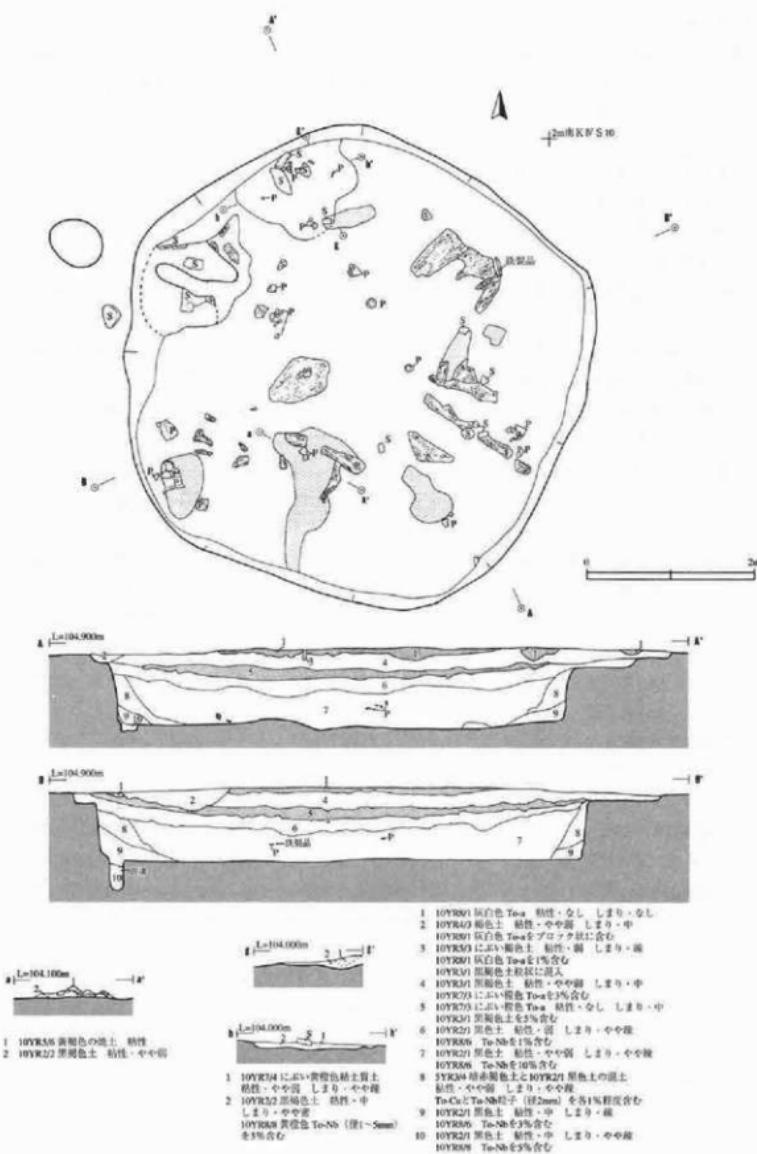
＜カマド＞北西壁中央部に設置される。カマドの残存状況は比較的良好で、本体の規模は108×75cmである。袖部の芯材と天井部は砂岩礫で構築される。燃焼部は強く赤変し、焼土範囲は60×50cm、厚さ14cmの現地性の焼土が形成されている。煙道部は掘り込み式で、燃焼部から緩やかに上がり煙出し部に至る。全長85cm、幅34～39cm、煙出し部は径65×50cm、煙道部底面から深さ18cmの円形ピットが掘り込まれている。各部の埋土には焼土粒や炭化物含まれ、部分的に南部浮石が混入する。

＜付属施設＞検出されない。

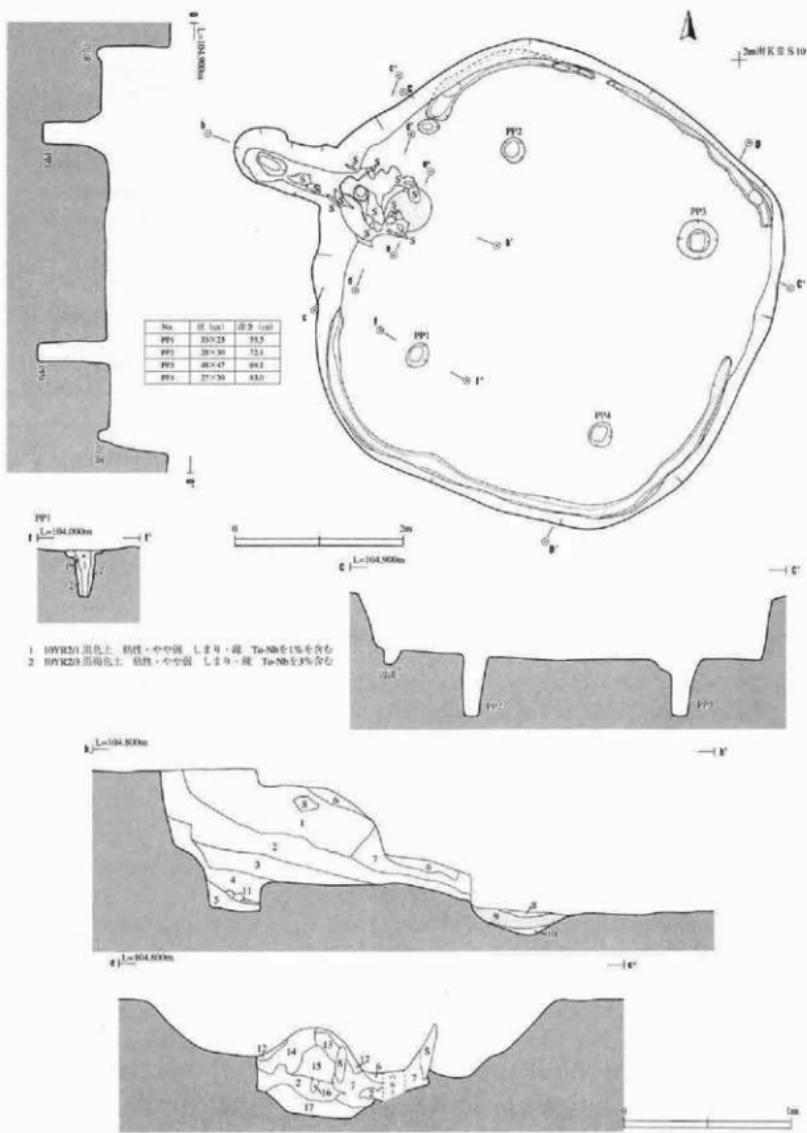
遺物（第70・71図・写真図版77・78）

非クロコ成形の壺・甕類と金属製品3点が出土している。48は外面有段で、底部は丸底風である。内面底部もやや丸みをもつ。49から51は外面有段の壺で、内面は黒色処理される。外面調整はヘラナデ、ヘラケズリ主体、内面はヘラミガキ調整を主体とする。底部は平底風である。52は高台が付く可能性がある。外面はヘラケズリ後にハケメ調整した痕跡が認められる。53から55は頭部に段を有し、内面底部は卵形または丸みをもつ。外面調整はヘラミガキが多用される。53、55とともに底部に木葉痕がみられる。56は外面ヘラミガキ調整、底部はやや外面に張り出す。57は内外面ともハケメ調整が主体である。59は刀子、60・61は釘と思われる。

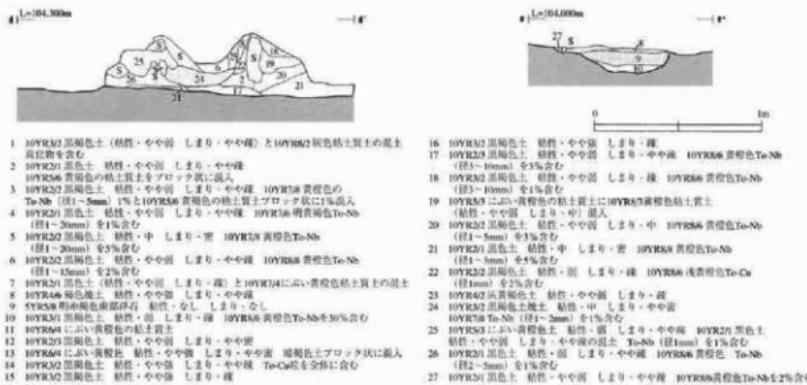
時期 検出状況や出土遺物の特徴から、奈良時代（8世紀前半）と推定される。



第18図 第10号住居跡（1）



第19図 第10号住居跡（2）



第20図 第10号住居跡（3）

第11号住居跡

遺構（第21～23図・写真図版17～19）

＜位置＞調査区中央部5区の平坦面、グリッドMIII r11に位置する。第12号住居跡の北11m地点にある。

＜検出状況＞II層中で、十和田a降下火山灰を含む方形の黒褐色土の土層変化が確認された。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞N=90°-W

＜規模・平面形＞一辺8.5m、隅丸方形を呈する。当遺跡の古代の住居群の中で最大の遺構である。

＜床面積＞72.25m² 当遺跡の中で最大級の住居跡である。

＜埋土＞上位は黒褐色土主体、中位には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積し、下位は黒褐色土主体とする。

＜壁＞II層下位～IVb層を壁とし、ほぼ直立して立ち上がる。壁高は50cmを測る。

北壁48～56cm 西壁50～60cm 南壁53～59cm 東壁48～53cm

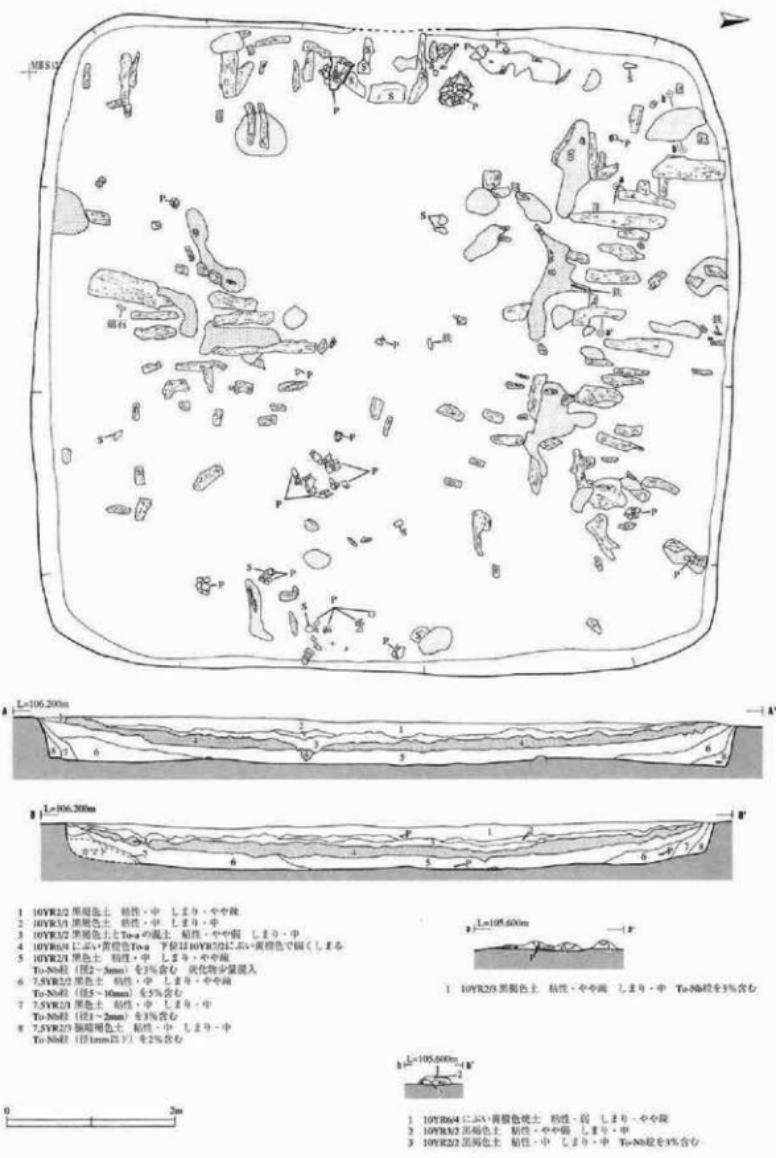
＜床面＞IVb層下位で、硬くしまる。炭化材、焼土、土器、鉄製品、環が多量に散在することから焼失住居と思われる。各壁に煙溝がめぐる。煙溝 幅8～25cm 深さ5～15cm

＜柱穴＞主柱穴6基が検出された。P P 1 径34×31cm、深さ95.1cm、P P 2 径46×45cm、深さ70.3cm、

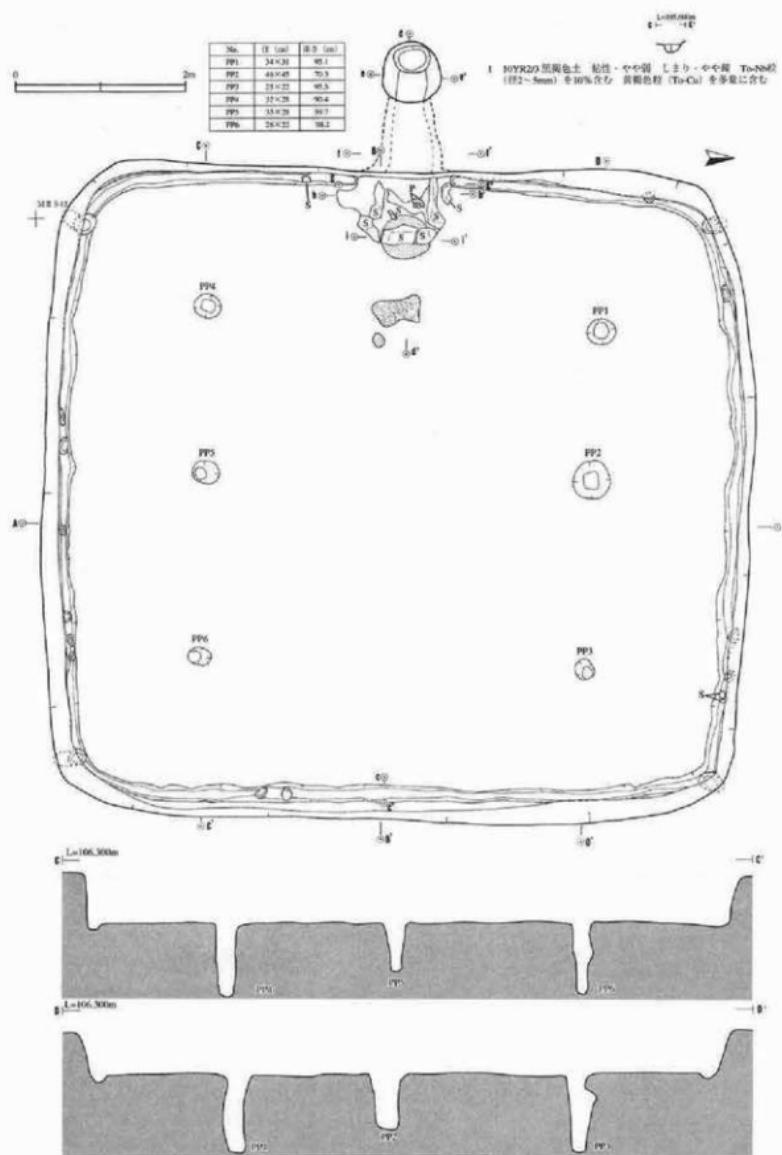
P P 3 径25×22cm、深さ95.5cm、P P 4 径32×28cm、深さ90.4cm、P P 5 径33×28cm、深さ59.7cm

P P 6 径28×22cm、深さ98.2cm。柱穴間距離は東西方向2.0m、南北4.4mである。

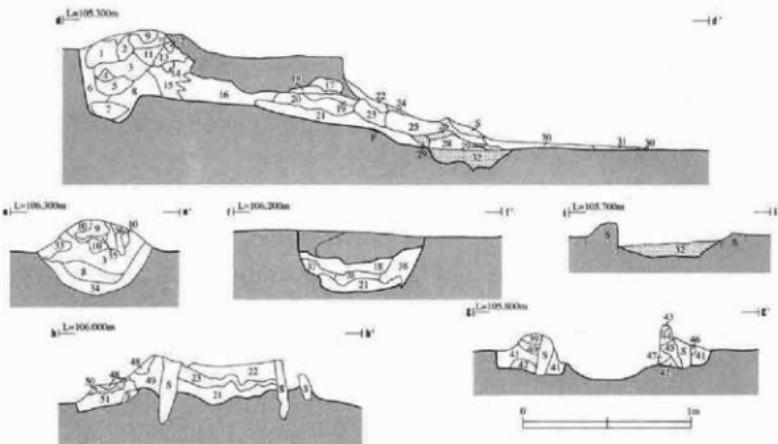
＜カマド＞西壁中央部に設置される。残存状況は良好である。本体の規模は120×95cmである。袖部の芯材と天井部は砂岩で構築される。燃焼部は強く赤変する。焼土の範囲は55×50cm、厚さは最大11cmを測る。煙道部はくり抜き式で、燃焼部から緩やかに上昇し煙出し部に至る構造をもつ。全長155cm、幅50～85cm、煙出し部は径75×68cm、煙道底面から深さ15cmの梢円状のピットが彫り込まれる。各部の埋土には焼土ブロック、炭化物、南部浮石粒が含まれる。



第21図 第11号住居跡 (1)



第222図 第11号住居跡 (2)



1. 10YR55/4に於く黄褐色土柱体 粘性・強 しまり・中
10YR3/2 黑褐色土ブロック灰に含む
2. 10YR2/0 黑褐色土・粘性・強 しまり・強 粘土ブロック3%混入
10YR3/3 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中
3. 10YR2/0 黑褐色土柱体 粘性・中 しまり・中や強 10YR55/4黄褐色土を10%含む
4. 10YR2/0 黑褐色土柱体 粘性・中 しまり・強 黄褐色土を20%含む
5. 10YR2/0 黑褐色土柱体 粘性・中 しまり・中や強 10YR55/4黄褐色土を20%含む
6. 10YR2/0 黑褐色土・粘性・中 しまり・中や強 $Ti-Ca$ を全量に含む
7. 10YR3/4に於く黄褐色土・粘性・強 しまり・強 25YR4/0 黄褐色次生粘土をブロック灰に含む
8. 10YR2/0 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中や強 粘土ブロックをわずかに含む
粘土ブロック7.5%含む
9. 10YR2/0 黑褐色土柱体 粘性・中 しまり・中 粘土ブロック混入
10. 10YR2/0 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中 黄褐色土柱体
10YR3/4 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中 黄褐色土柱体
11. 10YR3/0 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中 黄褐色土ブロック3%混入
中央吹き出し10YR4/0 黄褐色土柱体
12. 10YR2/0 黑褐色土・粘性・中 しまり・強
13. 10YR3/0 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中 黏土ブロック3%混入
10YR2/0 黑褐色土を含む
14. 10YR2/0 黑褐色土・粘性・強 しまり・中
15. 10YR2/0 黑褐色土・粘性・強 しまり・中 黏土ブロック2%混入 10YR4/0 黄褐色土柱体
16. 10YR2/0 黑褐色土・粘性・強 しまり・中や強 $Ti-Ca$ (E5~10mm) 10%含む
17. 7.5YR6/4に於く黄褐色土・粘性・強 しまり・中
18. 10YR2/0 黑褐色土・粘性・中 しまり・強
19. 10YR3/0 黑褐色土柱体 粘性・中 しまり・強
20. 7.5YR6/2 黑褐色土柱体 粘性・中 しまり・中や強
21. 10YR2/0 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中 上部に10YR6/4に於く黄褐色土
22. 7.5YR6/4 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中 下部に10YR6/4に於く黄褐色土
23. 10YR5/2 黄褐色土・粘性・中 しまり・中 黏土ブロック混入 (やや強硬色)
24. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・強
25. 7.5YR6/0 黄褐色土柱体 粘性・やや強 しまり・中 粘土ブロック2%含む
26. 10YR5/4 黄褐色土柱体 粘性・強 しまり・強
27. 10YR5/6 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・強
28. 10YR2/0 黄褐色土柱体 粘性・やや強 しまり・中 $Ti-Ca$?
29. 10YR2/0 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・強
30. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中
31. 10YR3/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中 $Ti-Nb$ (E5~10mm) を含む
32. 7.5YR6/6 黄褐色土・粘性・なし しまり・中 $Ti-Nb$ (E5~10mm) 10%含む
33. 10YR2/1 黑褐色土・粘性・中 しまり・中や強 黄褐色土柱体をわずかに含む
34. 10YR2/2 黄褐色土・粘性・中 しまり・中 $Ti-Nb$ (E5mm) 1%含む 挿りすぎ部分
35. 10YR5/6 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中や強 黏土ブロックをわずかに含む
36. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中 $Ti-Nb$ (E5~10mm) 10%含む
37. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中 中間浮石含む
38. 10YR2/0 黑褐色土・粘性・中 しまり・強
39. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・やや強 しまり・中
40. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中 $Ti-Nb$ (E5~10mm) 5%含む
41. 7.5YR6/2 黄褐色土・粘性・中 しまり・中 $Ti-Nb$ (E5~10mm) 10%含む
42. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中 $Ti-Nb$ (E5~10mm) 10%含む
43. 7.5YR6/4 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中
44. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中
45. 2.5YR3/0 オーバー層褐色土質土 粘性・やや強 しまり・中や強
46. 10YR5/4に於く黄褐色土・粘性・強 しまり・中
47. 10YR2/2 黄褐色土柱体 粘性・中 しまり・中 $Ti-Nb$ 粒をわずかに含む
48. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中や強
49. 10YR2/0 黄褐色土・粘性・中 しまり・中
50. 7.5YR4/4 黄褐色土・粘性・なし しまり・中 下部に化粧材を含む
51. 10YR2/3 黄褐色土・粘性・中 しまり・中や強 $Ti-Nb$ (E5mm) を下部中心に2%含む

第23図 第11号住居跡 (3)

<付属施設>検出されない。

遺物 (第71・72図・写真図版79・80)

非ロクロ成形の窓3点と土製品2点、金属製品3点、石器3点が出土している。62は外側頭部有段で、底部内面はやや丸みをもつ。63は外側頭部有段で、底部内面は卵形である。外側調整はヘラミガキを主体とする。64は球削窓で、外側頭部有段、外側調整はハケメを主体とする。65はミニチュア土器でヘラナデ調整される。66は手づくねのミニチュア土器である。67は四面使用的砥石、68は石錠、69は石竪と思われる。70はヤリガンナまたは刀子と思われる。71は木質部が残存する刀子の破損品、72は鎌の一部と思われる。

時期 植出状況や出土遺物の特徴から、奈良時代（8世紀前半）と推定される。

第12号住居跡

遺構（第24図・写真図版20）

＜位置＞調査区中央部5区の平坦面、グリッドM III t 12に位置する。第7号住居跡の北約2.5m地点にある。

＜検出状況＞II層中で、十和田a降下火山灰を含む不整形の黒褐色土の土層変化が確認された。北西半は調査区外に延びているものと思われる。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜規模・平面形＞一辺3.5m、隅丸方形を呈すると推定される。

＜床面積＞27m²（推定）

＜埋土＞上位は黒褐色土主体、中位には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積し、下位は黒褐色土主体とする。

＜壁＞II層下位～IV b層を壁とし、やや外傾して立ち上がる。壁高は北壁52～54cm、東壁42～48cm、南壁33～36cmである。北壁の立ち上がりが不明であったことから一部掘り過ぎがある。

＜床面＞IV層下位で、硬くしまる。炭化材、土器片が出土した。

＜柱穴＞確認できない。

＜カマド＞検出されていないが、周囲の住居跡の例から判断し調査区外の北西壁に設置されているものと思われる。

＜付属施設＞検出されない。

遺物（第72図・写真図版80）

非クロロ成形の鉢1点が出土している。外面に指ナデの調整の痕跡が認められる。壇状遺構で同一土器片が発見された。当住居と壇状遺構は同時期に存在した可能性が大きい。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、奈良時代（8世紀前半代）と推定される。

第13号住居跡

遺構（第24・25図・写真図版21・22）

＜位置＞調査区中央部7①区の平坦面、グリッドJ III g 11に位置する。第8号住居跡の北25m地点にある。

＜検出状況＞II層上位で、十和田a降下火山灰を含む半梢円状の黒褐色土の土層変化が確認された。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞N-40°-W

＜規模・平面形＞一辺5.0m、隅丸方形を呈すると推定される。

＜床面積＞25m²（推定）

＜埋土＞上位は黒褐色土主体、中位には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積し、下位は黒褐色土を主体とする。

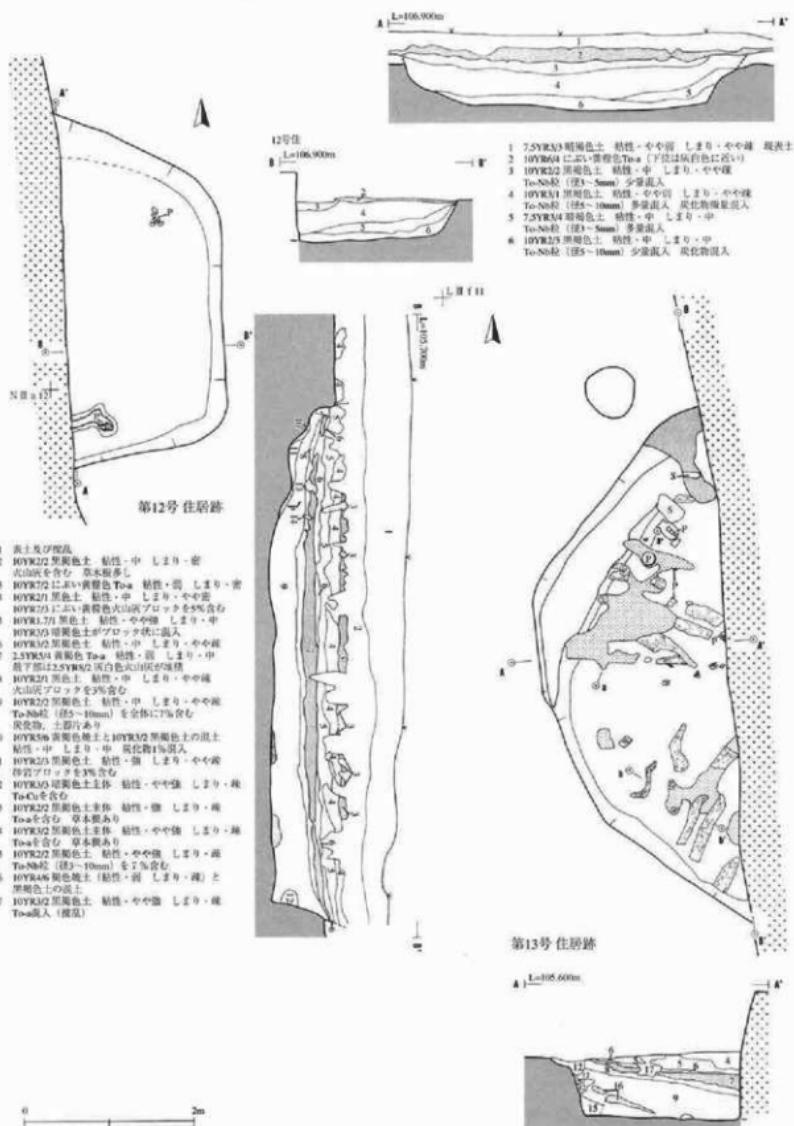
＜壁＞II層～IV b層を壁とし、ほぼ直立して立ち上がる。壁高は北西壁30cm、南西壁67～70cmである。

＜床面＞IV b層下位で、硬くしまる。炭化物、焼土、土器が検出されたことから、焼失住居と思われる。

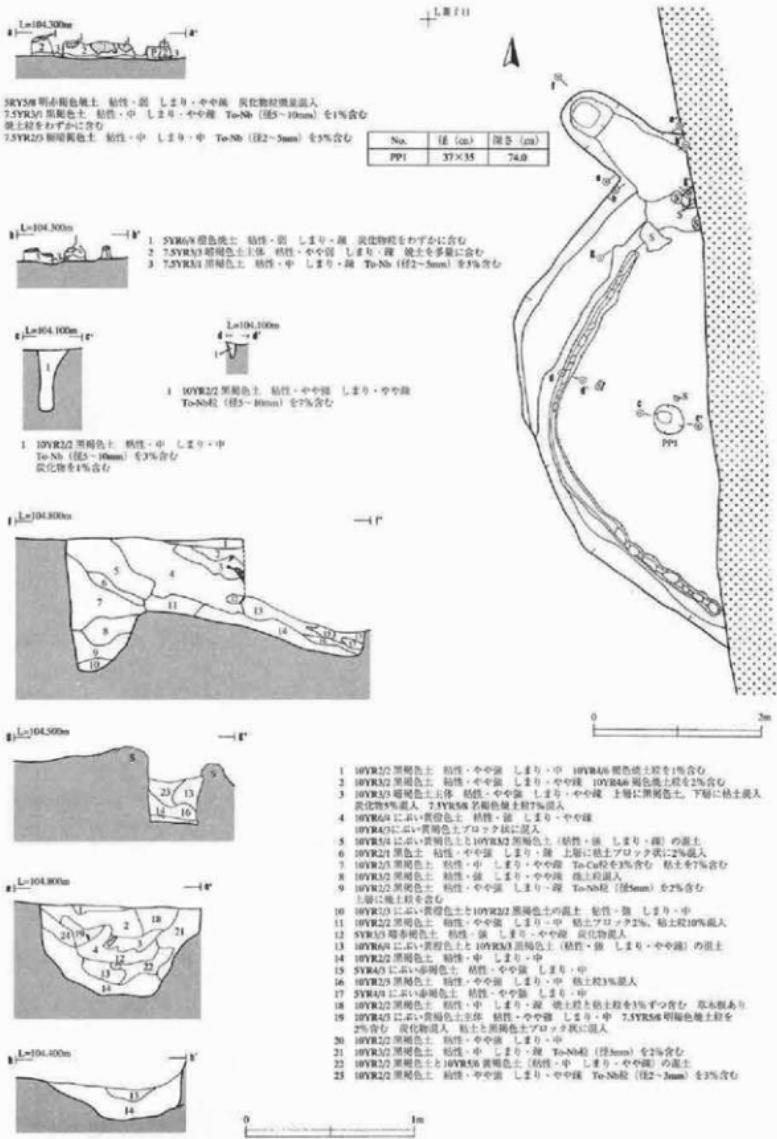
北西及び南西壁に盤溝がめぐる。盤溝幅10～18cm、深さ6～15cm。

＜柱穴＞主柱穴が1基検出された。P P 1径37×35cm、深さ74.0cm。

＜カマド＞北西壁中央に設置される。袖部の芯材と天井部は砂岩で構築される。燃焼部は赤変する。焼土の厚さは最大7cmである。煙道部は堀込み式で、燃焼部から上昇し煙りだし部に至り、規



第24図 第12号・13号住居跡 (1)



第25図 第13号住居跡（2）

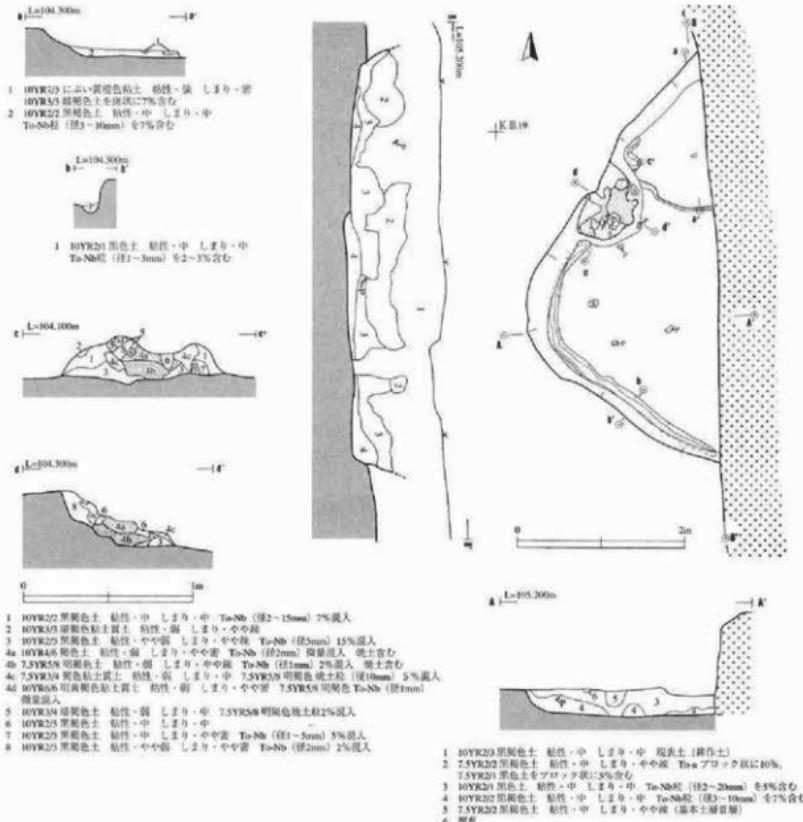
模は全長110cm、幅58~61cmである。煙出し部は径57×65cm、煙道部底面から深さ40cmのピットが掘り込まれる。煙出し部の土壌には多量の十和田a降下火山灰が含まれる。

<付属施設>検出されない。

遺物（第72・73図・写真図版80）

非クロコ成形の坏・壺類とガラス玉3点が出土した。74は平底の坏で、外面底部はハラケズリ調整である。75・76は外面頸部有段の壺で、外面はハラミガキ主体の調整である。77~79は瑠璃色のガラス製品で、装飾品の一部と思われる。

時期 検出状況や周囲の出土遺物、住居跡の特徴から、奈良時代（8世紀前半代）と思われる。



第26図 第14号住居跡

第14号住居跡

遺構（第26図・写真図版23）

＜位置＞調査区中央部7③区の平坦面、グリッドK III j 9に位置する。第10号住居跡の北44m地点にある。

＜検出状況＞Ⅱ層下位で、十和田a降下火山灰を含む不整な黒褐色土の土層変化が確認された。検出が遅れたため、全体的に下げ過ぎている。東半は調査区外に延びているものと思われる。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞N-50°-W

＜規模・平面形＞一辺4.0m、隅丸方形を呈すると推定される。

＜床面積＞12.3m²（推定）

＜埋土＞十和田a降下火山灰をブロック状に含む黒褐色土を主体とする。

＜壁＞Ⅱ層下位～IV b層を壁とし、ほぼ直立して立ち上がる。壁高は北西壁30cm、南西壁30cm。

＜床面＞IV b層下位で、硬くしまり土器が出土している。北西、南西壁に壁溝がめぐる。壁溝幅10～18cm、深さ4～13cmを測る。

＜柱穴＞検出されない。

＜カマド＞北西壁中央部に設置される。袖部の芯材は砂岩で構築される。本体の規模は100×70cm、燃焼部の焼土範囲は40×30cm、厚さは15cmで赤変する。埋土には十和田a降下火山灰、南部浮石粒、炭化物が含まれる。煙道部、煙出し部は検出できない。

＜付属施設＞検出されない。

遺物（第73図・写真図版80）

非クロ成形の壺1点が出土した。外面有段の平底で、内面は黒色処理される。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、奈良時代（8世紀前半代）と推定される。

第15号住居跡

遺構（第27・28図・写真図版24～26）

＜位置＞調査区中央部南寄り6③区、グリッドL III p 14に位置する。

＜検出状況＞Ⅱ層下位で、十和田a降下火山灰を含む方形の黒褐色土の土層変化が確認された。一部現代の住居の施設により破壊されている。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞N-75°-W

＜規模・平面形＞4.0×4.5mの不整隅丸方形を呈する。

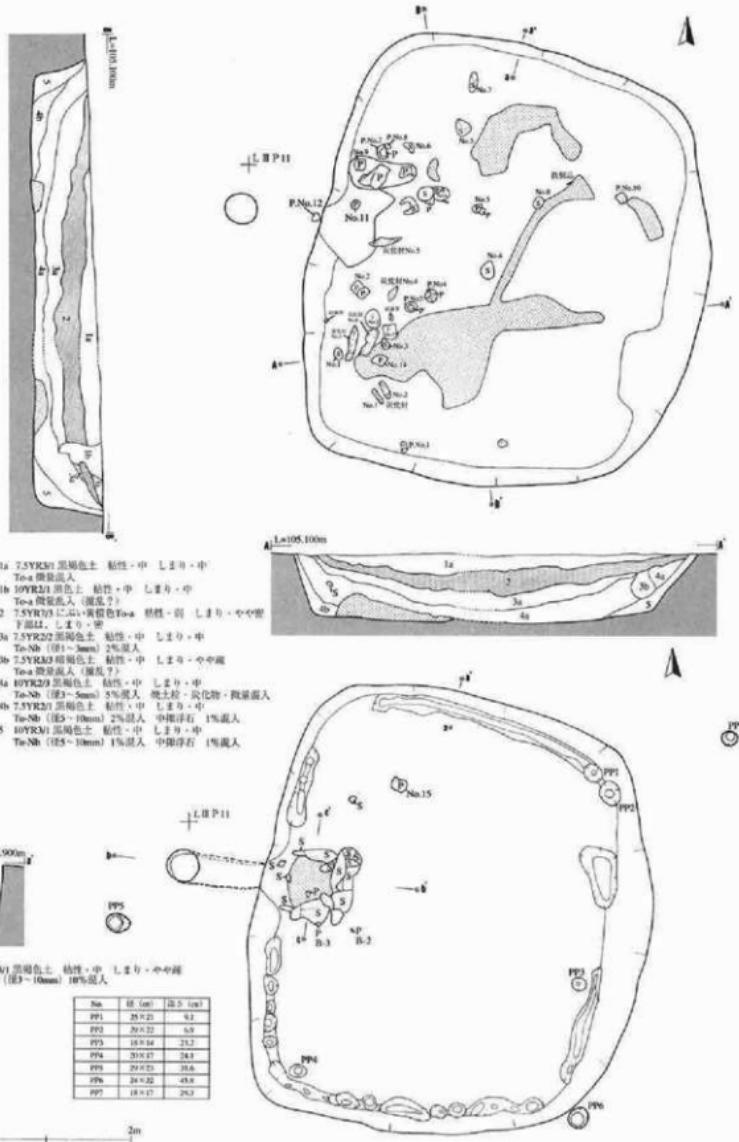
＜床面積＞18m²

＜埋土＞上位は黒褐色土主体、中位には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積し、下位は中揮浮石を含む黒褐色土を主体とする。

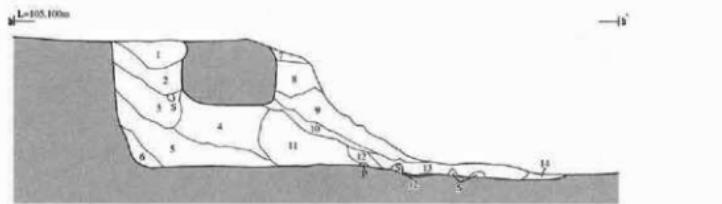
＜壁＞Ⅱ層下位～IV b層を壁とし、ほぼ直立して立ち上がる。壁高は北東壁60.4cm、北西壁65.4cm、南西壁81.8cm、南東壁66.3cmである。

＜床面＞IV b層下位で、硬くしまる。北壁と東壁の一部に幅15～20cm、深さ6～11cmの壁溝が見られる。焼土や炭化物が広がっていることから焼失住居の可能性が高い。

＜柱穴＞住居内外に柱穴状のビットが7基されたが主柱穴は定かではない。PP1径28×26cm、深さ9.1cm



第27図 第15号居住跡 (1)



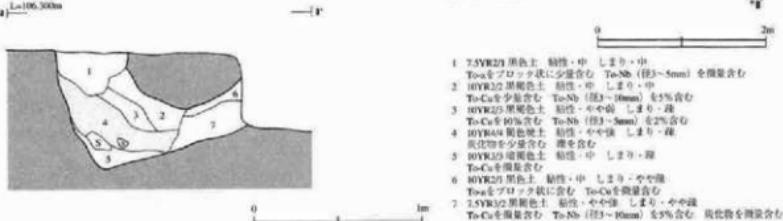
1. 7.SYR03 黄褐色土 粘性・やや弱 しまり・中 To-Nb (径10mm) 新規量注入
汎化物少量混入
2. 7.SYR02 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・やや硬 To-a 少量含む 汎化物少量混入
3. 7.SYR02 黑褐色土とTo-aの混土 粘性・やや弱 しまり・やや硬 To-aをブロック状に含む
汎化物少量混入
4. 7.SYR02 黑褐色土 粘性・中・上弱 やや弱 しまり・やや硬 To-Nb (径1~5mm) 少量含む
5. 7.SYR01 黑褐色土 粘性・中・上弱 やや弱 しまり・やや硬 To-Nb (径1~10mm) 1%混入
6. 7.SYR01 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・疏 To-aを多量に含む
7. 7.SYR01 黑褐色土 粘性・中・上弱 しまり・やや硬 To-aをブロック状に含む
8. 10VR07 黑褐色土 中・上弱 しまり・中 To-Nb (径1~10mm) 1%混入
9. 7.SYR02 黑褐色土 粘性・中・上弱 しまり・やや硬 To-a 少量混入
10. 7.SYR02 黑褐色土 粘性・中・上弱 しまり・やや硬 汎化物少量含む
11. 7.SYR03 黑褐色土 粘性・やや強 しまり・やや硬 To-Cu-To-Nb (径3~10mm) 1%混入
12. 7.SYR03 黑褐色土 粘性・やや強 しまり・疏 To-Nb (径1~10mm) 数量混入
13. 7.SYR03 黑褐色土 粘性・やや強 しまり・中や弱 To-a 多量混入 汎化物粉 繊維混入
14. 7.SYR01 黑褐色土 粘性・中・上弱 しまり・疏 To-Nb (径3~10mm) 2%含む
15. SYR04 黑褐色土 粘化物少量混入 To-Nb (径1~3mm) 5%混入
16. SYR05 灰褐色土 灰褐色石 塗付赤変
17. SYR05 灰褐色土 灰土多量混入 To-Nb (径1~3mm) 5%混入
18. SYR05 灰褐色土 灰土多量混入 To-Nb (径1~3mm) 5%混入
19. 7.SYR02 黑褐色土 粘性・中・上弱 しまり・やや硬 To-Nb (径1~10mm) 7%混入

第15号 住居跡



1. 7.SYR02 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 To-Nb (径3~8mm) 7%混入
2. 7.SYR01 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 To-Nb (径3~8mm) 1%混入
3. 10VR04 黑褐色土 粘性・やや強 しまり・中 To-Nb (径3~5mm) 3%混入 To-a含む
4. 10VR02 黑褐色土 粘性・やや強 しまり・疏 To-Nb (径3~5mm) 5%混入
- To-a ブロック状に多量に含む
5. 10VR02 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 To-Nb (径3~8mm) 7%混入
6. 10VR02 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 To-aをブロック状に含む
7. 10VR02 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 上部にTo-Cuを含む 下部にTo-Nb (径10mm) 程度を含む

第16号 住居跡



第28図 第15号 (2)・16号住居跡

P P 2 径29×22cm、深さ6.9cm、P P 3 径18×14cm、深さ23.2cm、P P 4 径20×17cm、深さ24.1cm
P P 5 径29×23cm、深さ35.6cm、P P 6 径24×22cm、深さ45.8cm、P P 7 径18×17cm、深さ29cm。
<カマド>北西壁中央部に設置される。本体の規模は110×90cm、袖部の芯材と天井部は砂岩で構築される。燃焼部は強く赤変し、焼土の範囲は65×55cm、厚さは最大12cmを測る。煙道部はくり抜き式で、燃焼部からわずかに上昇して煙りだし部に至る構造をもつ。規模は全長120cm、幅32～42cm、煙出し部は、径40×38cm、上部から底面までの深さは72cmである。煙出し部の埋土には十和田a降下火山灰、南部浮石、炭化物が含まれる。

<付属施設>

遺物（第73・74図・写真図版80・81）

非クロ成形の坏・壊類と土製品2点が出土した。81は外面有段の坏で、底部は丸底風平底である。外面の調整はヘラミガキである。82～85も底部は丸底風平底である。87～89は外面頭部に沈線状の段がみられる壺である。いずれも輪積み痕が明顯である。90は球胴壺で、外面頭部に沈線状の段がみられる。外面はヘラケズリ調整である。91・92は土製紡錘車である。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、奈良時代（8世紀前半代）と推定される。

第16号住居跡

遺構（第28図・写真図版27）

<位置>調査区南部5②区 グリッドN III b16、N III c 16に位置する

<検出状況> II層中で、十和田a降下火山灰を含む不整形の黒褐色土の土層変化が確認された。東半が調査区外に延びている。

<重複状況>重複する遺構はなく、単独で検出された。

<主軸> N-45°-W

<規模・平面形>一辺約2.5mの隅丸方形を呈すると推定される。

<床面積>6.25m²(推定)

<埋土>上位は南部浮石を含む黒褐色土主体、下位は十和田a降下火山灰をブロック状に含む黒褐色土を主体とする。

<壁> II層下位～IV b層を壁とし、直立気味に立ち上がる。壁高は北西壁45cm、南西壁43.1cmである。

<床面> IV b層下位で、硬くしまる。南西壁に壁溝がめぐる。幅9～12cm、深さ3～6cm。

<柱穴>検出されない。

<カマド>本体と燃焼部は確認されない。煙道部はくり抜き式で、燃焼部から下降し煙りだし部に至る構造をもつ。規模は長さ110cm、幅28～32cm、煙出し部は、径38×35cm、上部から底面までの深さは70cmで、底部はやや掘り込まれている。煙出し部の埋土には十和田a降下火山灰、南部浮石、炭化物が含まれる。

<付属施設>検出されない。

遺物 出土していない。

時期 検出状況等から、奈良時代（8世紀代）と推定される。

第17号住居跡

遺構（第29図・写真図版28）

＜位置＞調査区南部5②区、グリッドM III n 14に位置する。

＜検出状況＞II層面で、不整形の黒褐色土の土層変化が確認された。東半は調査区外にあるものと思われる。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞不明

＜規模・平面形＞一辺約3.2mの隅丸方形を呈すると推定される。

＜床面積＞10.24m²（推定）

＜埋土＞上位は十和田a降下火山灰を含む黒褐色土を下位は南部浮石、中探浮石を含む黒褐色土を主体とする。

＜壁＞II層下位～IV b層を壁とし、直立気味に立ち上がる。壁高は西壁44.7cm、南壁54.9cmである。

＜床面＞IV b層下位で、硬くしまる。西側壁、南側壁に幅7～15cm、深さ3～10cmの溝がめぐる。

＜柱穴＞検出されない。

＜カマド＞検出されない。

＜付属施設＞検出されない。

遺物 出土していない。

時期 検出状況等から、奈良時代（8世紀前半代）と推定される。

第18号住居跡

遺構（第29図・写真図版29）

＜位置＞調査区中央部南寄り6③区、グリッドL III m 12に位置する。

＜検出状況＞II層面で、十和田a降下火山灰を含む不整形の黒褐色土の土層変化が確認された。東半は調査区外にあるものと思われる。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞不明

＜規模・平面形＞一辺約2mの隅丸方形を呈すると推定される。

＜床面積＞4 m²（推定）

＜埋土＞上位は十和田a降下火山灰をブロック状に含む暗褐色土主体、下位は十和田a降下火山灰、南部浮石、を含む黒褐色土を主体とする。

＜壁＞II層下位～IV b層を壁とし、緩やかに立ち上がる。壁高は西壁53.5cm、南壁57.7cmを測る。

＜床面＞IV b層下位で、硬くしまる。

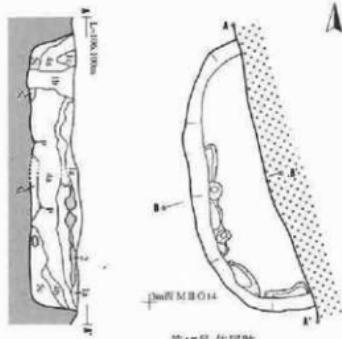
＜柱穴＞床面にPP 1とPP 2が検出されたが、主柱穴とは断定できない。PP 1 径29×21cm（推定）、深さ10cm、PP 2 径28×26cm（推定）、深さ11.3cm。

＜カマド＞検出されない。

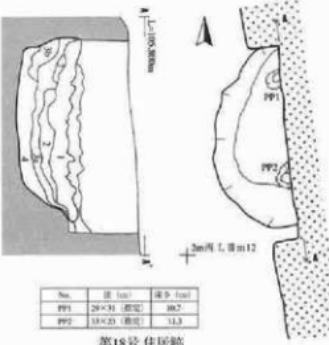
＜付属施設＞検出されない。

遺物 出土していない。

時期 検出状況等から、奈良時代（8世紀前半代）と推定される。



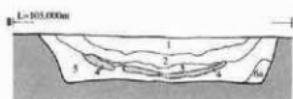
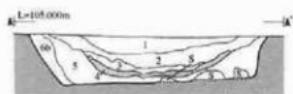
第17号 住居跡



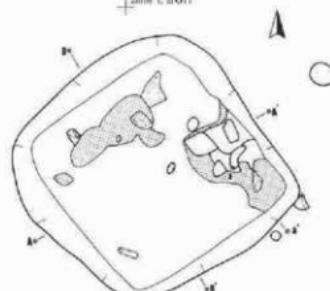
第18号 住居跡

- 1層の上の部分 7.5YR4/3 黑褐色土 現在の表土
粘性・中 しまり・中 やや強 2%混入 To-Nbを1%含む
他の物から1%混入している。
- 10YR2/1 黒褐色土 粘性・中 しまり・中 Ta-Cuを微量含む
以上と2層は連續的の層としては当らないものである。
- 1 10YR3/4 暗褐色土 粘性・中 しまり・中 Ta-all分は僅 To-aブロック中に微量に含む
To-Nb 10%含む
- 2 7.5YR2/1 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 Ta-aブロック中に少量含む
To-Nb (径5~10mm) 10%混入 To-Cu微量含む
- 3a 7.5YR2/3 暗褐色土 粘性・中 しまり・やや強 To-Cuを含む
To-Nb (径5~10mm) 5%含む
- 3b 10YR2/3 黑褐色土 粘性・中 しまり・強 To-aを少量含む
To-Nb (径5~5mm) 5%含む
- 4 7.5YR2/2 黑褐色土 粘性・やや強 しまり・中 上部にTo-aを微量含む
To-Nb (径5~10mm) 10%含む To-Cuを微量含む

- la 10YR3/2 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 下に下がるに従って強 後次の複合層
lb 10YR2/3 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 下に下がる
lc 10YR2/2 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 深部の複合層
2 10YR3/4 暗褐色土 粘性・中 しまり・中
3 10YR2/1 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 Ta-Nb (径1~5mm) 2%混入
4a 7.5YR3/2 暗褐色土 粘性・中 しまり・中 To-Nb (径1~5mm) 5%混入
4b 7.5YR2/2 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 Ta-Nb (径1~5mm) 7%混入
5a 10YR2/2 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 やや強 2%混入
5b 10YR2/1 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 やや強 しまり・中 Ta-Nb (径1~5mm) 1%混入
To-Cu 微量混入
Sc 10YR2/2 黑褐色土 粘性・やや強 しまり・中 To-Nb (径5~10mm) 5%混入
To-Cu 2%混入 表土をブロック中に含む



- 1 10YR2/1 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 To-Nb (径5~10mm) 1%混入
2 10YR2/2 黑褐色土 粘性・中 しまり・やや強 10YR3/2 12%含む
To-a ブロック状に混入 To-Nb (径1~10mm) 1%混入
3 10YR2/3 黑褐色土 粘性・中 しまり・やや強 To-Nb (径4~10mm) 1%混入
4 10YR2/4 黑褐色土 粘性・中 10YR3/4 暗褐色土を含む To-Nb (径4~10mm) 1%混入
5 10YR2/2 黑褐色土 粘性・中 しまり・やや強 2% To-a ブロック中に微量混入
To-Nb (径3~5mm) 1%混入
6a 10YR2/3 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 To-a 層状に少量混入
6b 10YR2/3 黑褐色土 粘性・中 しまり・中 To-Nb (径1~3mm) 1%混入



第19号 住居跡



第29図 第17~19号住居跡 (1)

第19号住居跡

遺構（第29・30図・写真図版30・31）

＜位置＞調査区中央部南寄り6③区 グリッドLⅢ n 10,11、LⅢo10,11、第15号住居跡の北側に位置する。

＜検出状況＞II層面で不整な黒褐色土の土層変化が確認された。

＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞ N-65°-E

＜規模・平面形＞一辺約2.5mの隅丸方形を呈する。

＜床面積＞6.25m²

＜埋土＞上位は南部浮石を含む黒褐色土主体、中位に十和田a降下火山灰をブロック状に含む暗褐色土、下位は南部浮石をわずかに含む黒褐色土を主体とする。

＜壁＞II層下位～IV b層を壁とし、緩やかに立ち上がる。壁高は北西壁58.3cm、南西壁54.9cm、南東壁51.6cm、北西壁52.4cmである。

＜床面＞IV b層下位で、硬くしまる。南西壁に幅12～15cm、深さ7～13cmの壁溝がめぐる。焼土、炭化材が散在することから焼失住居の可能性がある。

＜柱穴＞柱穴状ピット9基が検出された。P P 1 径19×17cm、深さ10.2cm、P P 2 径18×17cm、深さ5.9cm、P P 3 径24×16cm、深さ6.0cm、P P 4 径20×14cm、深さ10.0cm、P P 5 径19×15cm、深さ10.1cm、P P 6 径16×12cm、深さ9.3cm、P P 7 径18×15cm、深さ10.1cm、P P 8 径20×18cm、深さ27.0cm、P P 9 径30×28cm、深さ38.6cm。

＜カマド＞北東壁中央に設置される。残存状況は良好である。本体の規模は70×50cmで、袖部の芯材と天井部は砂岩で構築される。燃焼部は強く赤変し、焼土の範囲は、50×30cm 厚さは15cmである。煙道部はくり抜き式で、燃焼部から下降して煙出し部に至る構造をもつ。規模は全長128cm、煙出し部径は30×27cm、上部から底面までの深さは80cmである。各部の埋土には十和田a降下火山灰、焼土が含まれる。

＜付属施設＞北東隅に貯蔵穴1基が確認された。開口部径90×66cm、底部径35×15cm、深さ31cmである。

遺物 出土していない。

時期 検出状況等から、奈良時代（8世紀前半代）と推定される。

第20号住居跡

遺構（第31図・写真図版32）

＜位置＞調査区中央部6①区の平坦面、グリッドMⅢ a 9に位置する。南方19m地点に第21号住居跡が検出された。

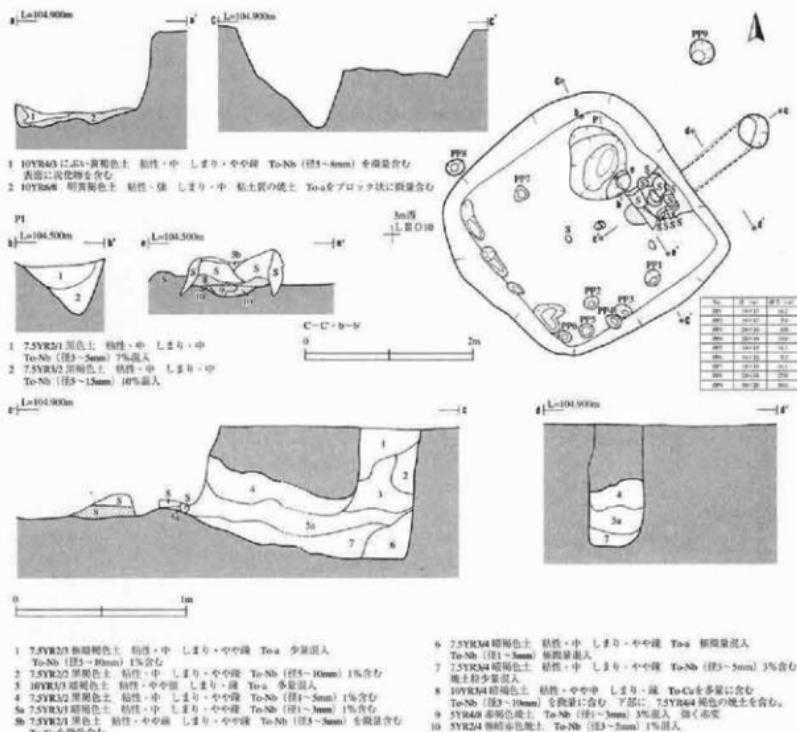
＜検出状況＞II層中で、十和田a降下火山灰を含む不整な黒褐色土の土層変化が確認された。遺構は東西調査区外に延びるものと思われる。

＜重複状況＞単独で検出された。

＜主軸＞ N-55°-W

＜規模・平面形＞調査区外に延びているため全容は明らかではないが、検出部分や周囲の住居跡の例から推定し一辺約5.6m、隅丸方形を呈すると思われる。

＜床面積＞推定28m²



第30図 第19号住居跡（2）

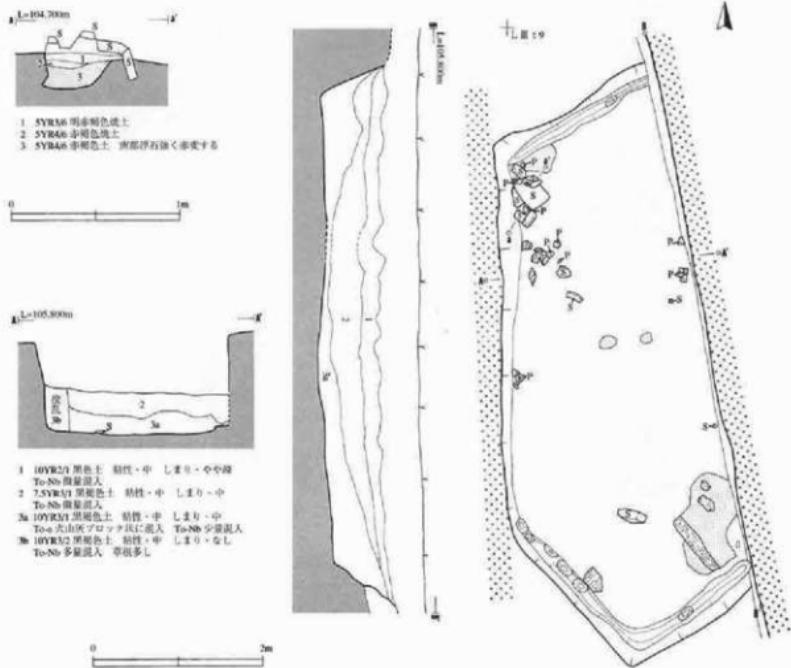
<堆土>上層は十和田a降下火山灰をブロック状に含む黒褐色土主体、下層は南部浮石を含む黒褐色土を主体とする。

<壁>II層下位～IVb層を壁とし、やや外傾して立ち上がる。壁高は、北西壁55cm、南西壁37～45cm、南東壁40～43cmを測る。

<床面>IVb層相当で、硬くしまる。焼土、炭化材、土器片が散在することから焼失住居と思われる。炭化材はナカカマドであるとの分析鑑定結果が得られ、住居の構築部材と推定される。北西、南西、南東側に壁溝がめぐる。壁溝は幅10～20cm、深さ6～15cmを測る。

<柱穴>確認できない。

<カマド>カマドの本体部は検出されないが、カマドを構築したと思われる窓と焼土が北西壁の北寄りに検出されたことから、本体部はここに設置されたものと思われる。焼土の範囲50×30cm、焼土の厚さは21cmである。煙道は確認されない。



第31図 第20号住居跡

<付属施設>検出されない。

遺物（第75図・写真図版82）

非クロロ成形の壺2点と石器2点が出土している。93の外側調整はヘラケズリ、内側がヘラナデで、底部に木葉痕が認められる。94は内外面ともヘラナデ調整である。95は不定形石器、96は凹石である。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、平安時代（10世紀前半代）と推定される。

第21号住居跡

遺構（第32図・写真図版33・34）

＜位置＞調査区中央部6①区の平坦面、グリッドMⅢ f 9に位置する。南東方向6.5m地点に第22号住居跡が検出された。

＜検出状況＞Ⅱ層中で、十和田a降下火山灰をブロック状に含む半梢円形状の黒褐色土の広がりが確認された。北西半は調査区外に延びているものと思われる。

＜主軸＞N-20°-E

＜重複状況＞北東壁側でピット2基と重複する。当遺構の方が旧いとおもわれる。

＜規模・平面形＞一辺約4m、隅丸方形を呈するものと推定される。

＜床面積＞推定17.6m²

＜埋土＞上層は黒褐色土主体、下層は十和田a降下火山灰をブロック状に含む黒褐色土を主体とする。

＜壁＞Ⅱ層下位～Ⅳb層を壁とし、やや外傾して立ち上がる。壁高は、北東壁68～70cm、南東壁62cm、南西壁61～62cmを測る。

＜床面＞V層上面で、硬くしまる。炭化材、炭化したイネ科草木、焼土、土器、礫が散在することから焼失住居と思われる。炭化材はコナラ属との分析結果を得た。

＜柱穴＞2基検出された。P P 1 径31～29cm、深さ14.6cm P P 2 径33～27cm（推定）、深さ30.6cm

＜カマド＞北東壁やや東寄りに設置される。本体の規模は95×85cmを測る。カマドの残存状況は良好である。袖部の芯材と天井部は砂岩で構築され、袖部には粘土質シルトが貼り付けられている部分もある。燃焼部は強く赤変し、厚さ25cm（最大）、範囲75×38cmの現地性の焼土が形成されている。煙道部はくり抜き式で、燃焼部から緩やかに上がり煙出し部に至る構造をもつ。規模は全長140cm、幅30～38cmを測る。煙出し部は径53×49cm、煙道部底面までの深さは66cmである。梢円形状の小ピットが堀り込まれ、大小の礫が埋まっている。これは上部施設の一部と推定される。各部の埋土には焼土粒や炭化物が含まれる。

＜付属施設＞南東壁側に出入り口の一部と推定される円形のピットが検出された。

P 7.2 開口部径69×60cm、底部径45×42cm、深さ65.2cm P 7.3 開口部径59×57cm、底部径28×27cm、深さ54.6cm。出入り口部分の全長は住居の壁から115cmを測る。

遺物（第75・76図・写真図版82・83）

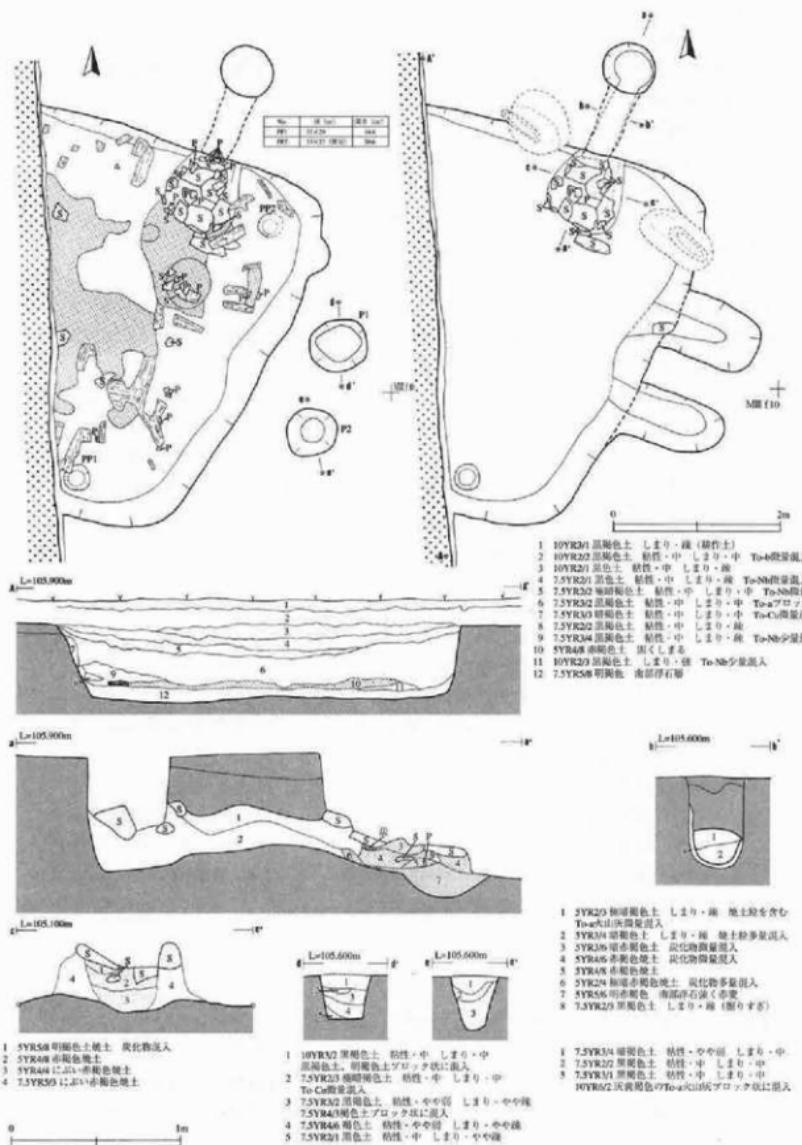
非ロクロ成形の壺3点とロクロ成形の壺4点、石器1点が出土した。98の底部には木葉痕が認められる。100～103はロクロ使用の壺で、100の外面にはヘラナデ調整が、101の外面にはヘラケズリ調整がみられる。103の底部には回転糸切り痕がある。104は磨製石斧の刃部である。時期 検出状況や出土遺物の特徴から、平安時代（10世紀前半代）と推定される。

第22号住居跡

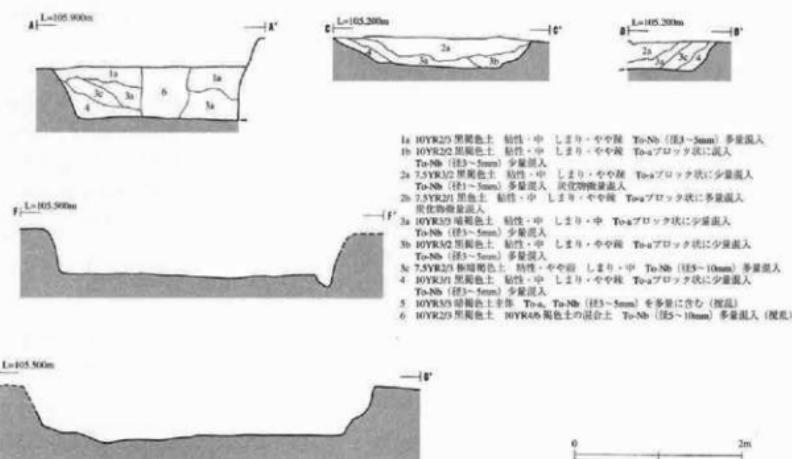
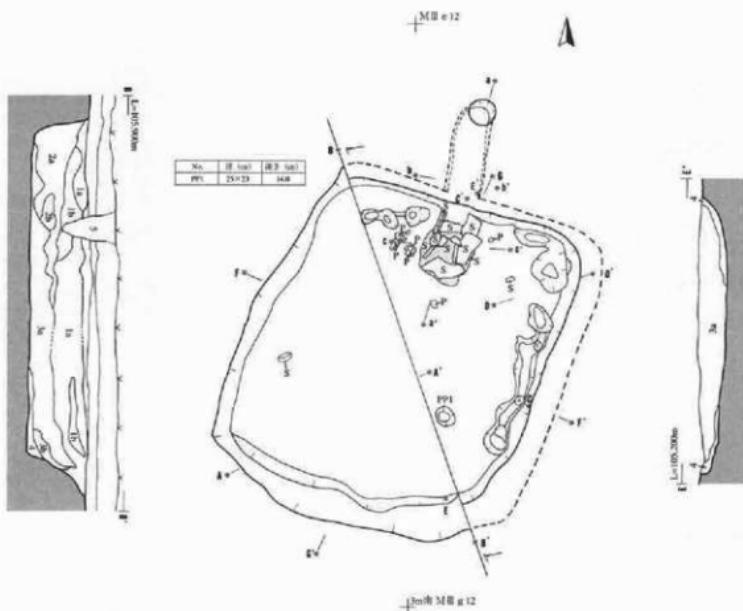
遺構（第33・34図・写真図版35～37）

＜位置＞調査区中央部6①区の平坦面、グリッドMⅢ f 11に位置する。

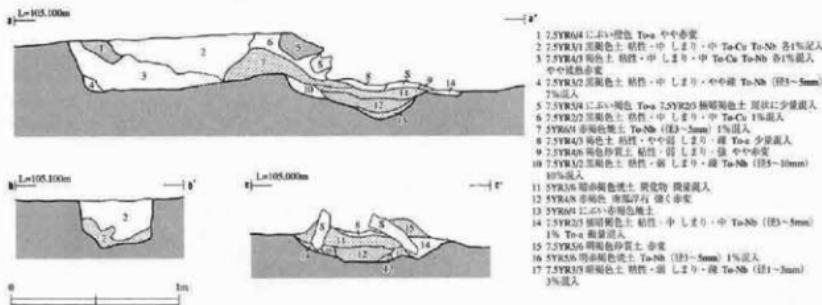
＜検出状況＞平成11年度、Ⅱ層面で、十和田a降下火山灰を含む不整な黒褐色土の土層変化が確認された。一部擾乱（水道管）が見られる。（東側は調査区外のため平成11年度は未調査）平成12年度の調査の際、東半部分が下水道の下より検出された。掲載した遺構図面は平成11年度と12年



第322図 第21号住居跡



第33図 第22号住居跡 (1)



第34図 第22号住居跡（2）

度の実測図を合成したものである。

<重複状況>重複する遺構はなく、単独で検出された。

<主軸>N-15°-E

<規模・平面形>4.0×3.5m、隅丸方形を呈している。

<床面積>約14m²

<埋土>十和田a降下火山灰をブロック状に含む黒褐色土を主体とする。

<壁>II-N b層を壁とし、床面から直立して立ち上がる。壁高は北西壁50~55cm、南西壁55~62cm(11年度)、北東壁28~38cm 南東壁20~36cm(12年度)

<床面>V層上面で、硬くしまり、北東壁の一部と南東壁に壁溝がめぐる。壁溝は幅15~40cm、深さ5~10cmを測る。

<柱穴>1基検出された。P1径25×23cm、深さ14.0cm

<カマド>北東壁ほぼ中央に設置される。本体の規模は80×60cmを測る。カマドの残存状況は良好である。

袖部の芯材と天井部は砂岩で構築される。燃焼部の焼土の範囲は60×55cm、焼土の厚さは16cmで、強く赤変している。煙道部はくり抜き式と思われるが、下水道設置により上部は破壊されたものと推定される。燃焼部から緩やかに上がり、煙出し部に至る。規模は全長115cm幅42~45cmを測る。煙出し部は径約30×28cm、煙道部底面までの深さは66cmである。各部の壌土には焼土粒や炭化物が含まれ、上部には十和田a降下火山灰が認められる。

<付属施設>検出されない。

遺物（第76・77図・写真図版83）

ロクロ成形の壺1点と甕2点が出土している。105の外面には「口」の字の墨書きがみられる。内面は黒色処理され、ミガキ調整される。106は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整される。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、平安時代（10世紀前半代）と推定される。

第23号住居跡

遺構（第35・36図・写真図版38・39）

＜位置＞調査区中央部5区の平坦面、グリッドM III p 14に位置する。第11号住居跡の北東3m地点にある。

＜検出状況＞Ⅱ層中で、十和田a降下火山灰をブロック状に含む不整な黒褐色土の土層変化が確認された。

東半は調査区外に延びるものと推定される。東半は12年度の調査の際に検出された。

＜重複状況＞第12号溝状遺構と重複する。当遺構が旧い。

＜主軸＞N-75°-W

＜規模・平面形＞一辺5.5m、方形を呈する。

＜床面積＞約30.25m²

＜埋土＞十和田a降下火山灰をブロック状に含む黒色土を主体とする。

＜壁＞Ⅱ層～Ⅳb層を壁とし、やや外傾して立ち上がる。壁高は北西壁43～45cm、南西壁42～48cm（平成11年）、南東壁37～42cm、北東壁35～40cm（平成12年度）である。

＜床面＞Ⅳb層下部で、硬くしまる。南西壁に溝が部分的に設けられる。溝幅13～25cm、深さ4～10cm。

＜柱穴＞主柱穴4基が検出された。PP 1径43×42cm、深さ62.4cm、PP 2径38×36cm、深さ68.5cm、PP 3径38×33cm、深さ52.0cm、PP 4径40×33cm、深さ78.0cmを測る。

＜カマド＞北西壁中央部に設置される。残存状況は良くなく、袖部の芯材と燃焼部の焼土である。燃焼部は強く赤変する。焼土の範囲は22×18cm、焼土の厚さは最大10cmである。煙道部はくり抜き式で、燃焼部から緩やかに下降し煙り出し部に至る構造をもつ。煙道部の全長143cm、幅38～50cm、煙り出し部は径35×30cm、上部から底面までの深さは73cmである。各部の埋土には焼土ブロック、炭化物がわずかに含まれ、火山灰、南部浮石粒が混入する。

＜付属施設＞検出されない。

遺物（第77図・写真図版83）

壺が2点出土している。108の外面はヘラナデとヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。109はロクロ使用の壺で、底部に回転糸切り痕が認められる。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、平安時代（10世紀前半）と推定される。

第24号住居跡

遺構（第37・38図・写真図版40・41）

＜位置＞調査区中央部6①区の平坦面、グリッドM III i 10に位置する。第22号住居跡の南西約9m地点にある。

＜検出状況＞Ⅱ層中で、十和田a降下火山灰を含む不整形の黒褐色土の土層変化が確認された。調査区に未移転の箇所があったため、遺構は分割して調査した。

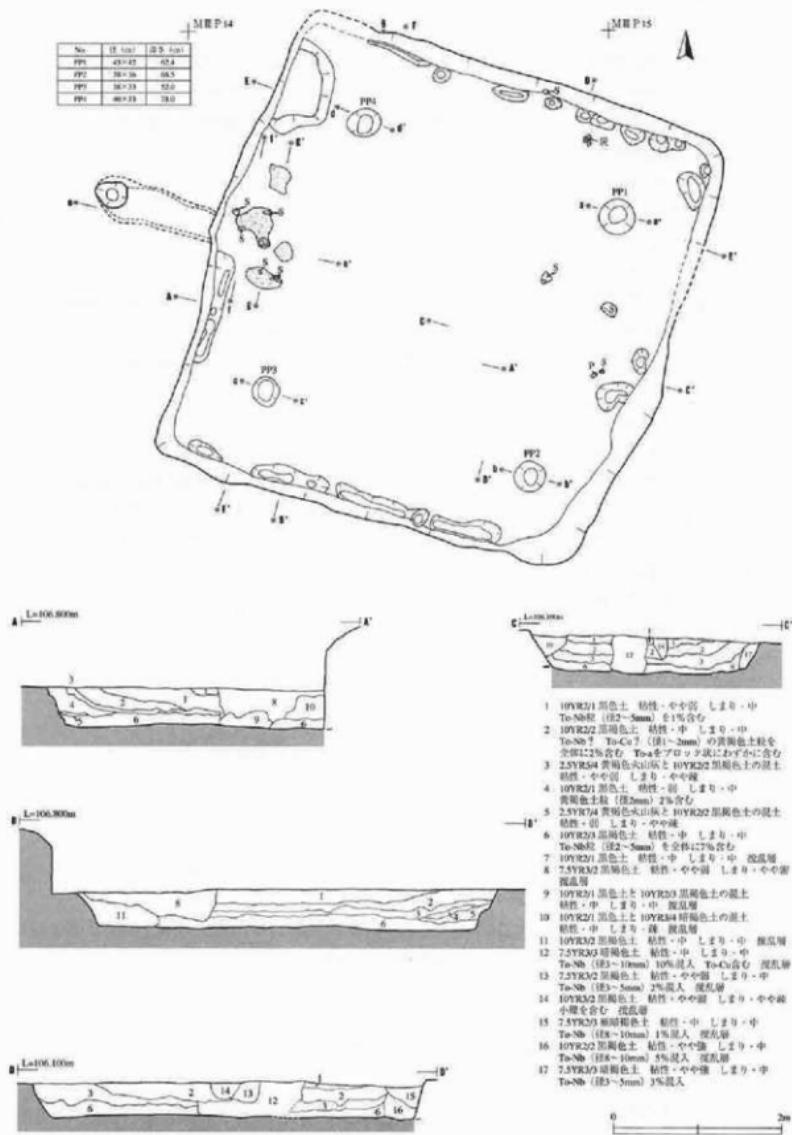
＜重複状況＞重複する遺構はなく、単独で検出された。

＜主軸＞N-90°-E

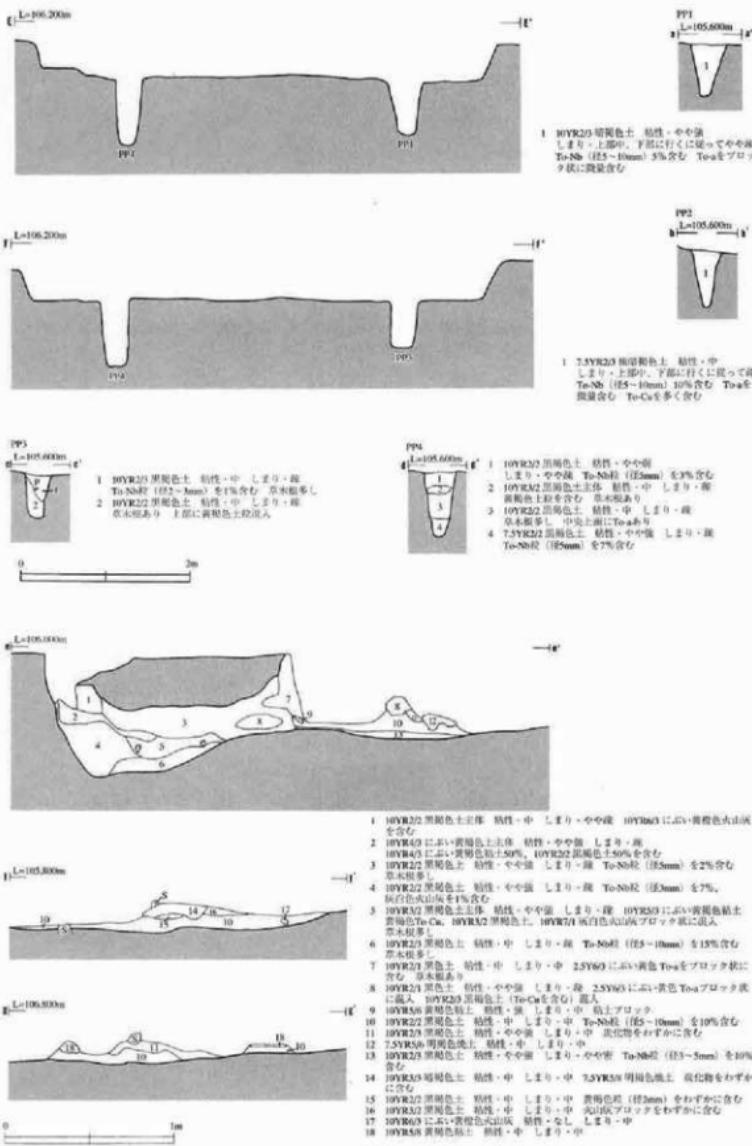
＜規模・平面形＞一辺4.7m、隅丸方形を呈する。

＜床面積＞22.1m²

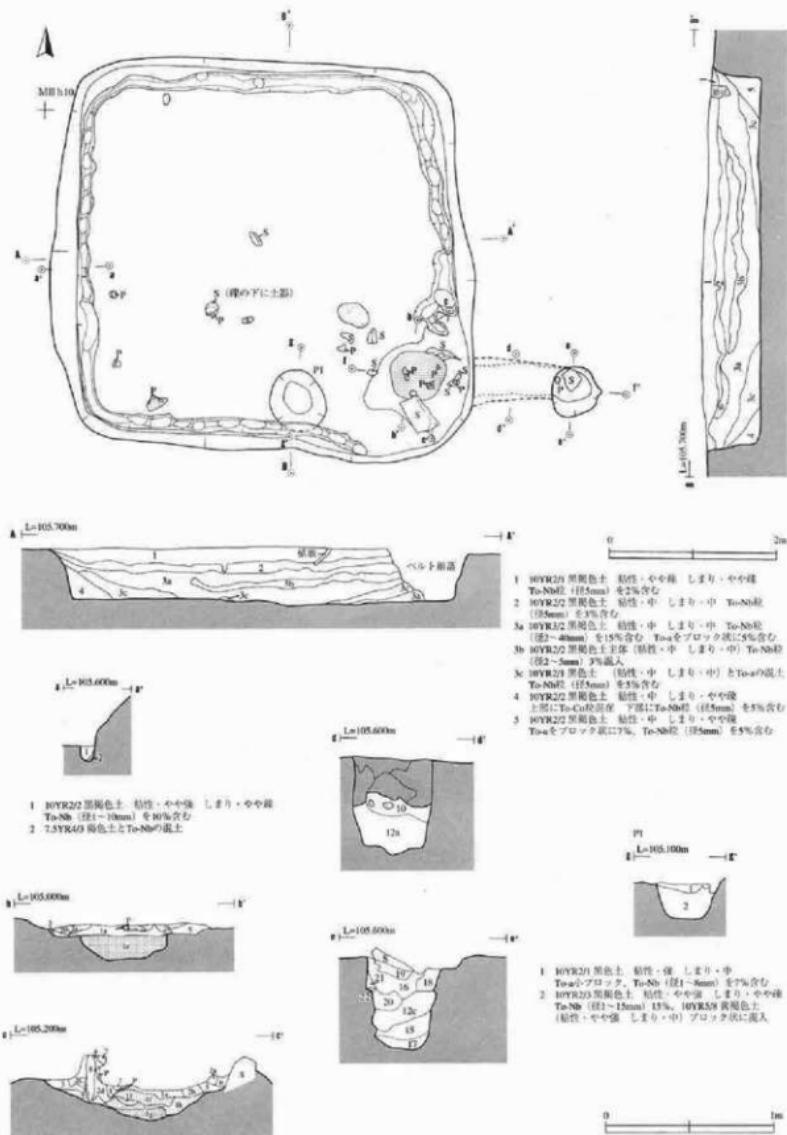
＜埋土＞上層は黒褐色土主体、下層は十和田a降下火山灰をブロック状に含む黒褐色土を主体とする。



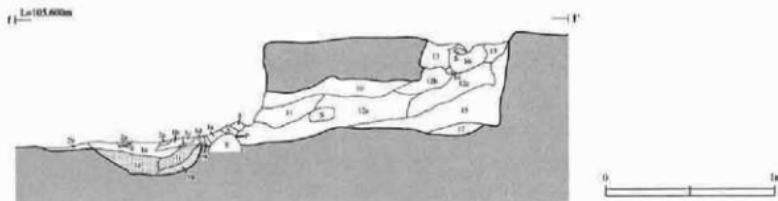
第35図 第23号住居跡 (1)



第36図 第23号住居跡（2）



第37図 第24号住居跡 (1)



- la 7.5YR6/6 黄褐色土質土 脱性・強 しまり・中
To-Nb (厚2~5mm) 2% 水入 (厚3mm) 脱入.
- lb 7.5YR6/6 黑褐色土質土 脱性・強 しまり・やや弱 To-Nb (厚3~5mm) . . .
- lc 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・中や強 しまり・密 土地改良人
- ld 7.5YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや強 しまり・やや強
- le 2.5YR4/6 黄褐色土質土 脱性・なし・中 しまり・中
- lf 7.5YR4/6 黄褐色土質土 脱性・なし・中 しまり・やや密
To-Nb (厚2~3mm) 脱性・強 しまり・中 To-Cu (厚2~3mm) 5%混入
- lg 2.5YR4/6 黄褐色土質土 脱性・なし・中 しまり・中
To-Nb (厚2~3mm) 脱性・強 しまり・中 To-Cu (厚2~3mm) 10%混入
- lh 7.5YR5/8 黄褐色土質土 - 2.5YR4/6 黄褐色土質土 (厚10mm) 10YR2/3 黑褐色土質土
(脱性・弱 しまり・密) 混入.
- li 7.5YR4/6 黄褐色土質土 脱性・強 しまり・中 To-Cu (厚2~3mm) 混入
- lj 7.5YR6/6 黑褐色土質土 脱性・弱 しまり・中 To-Nb (厚3~5mm) 5%混入
- lk 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・中 10%混入.
- ll 7.5YR5/8 黄褐色土質土 脱性・強 しまり・中 To-Nb (厚3~5mm) 混入
- lm 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・強 しまり・中 To-Nb (厚3~5mm) 2%混入
- ln 7.5YR5/8 黄褐色土質土 脱性・強 しまり・中 To-Nb (厚3~5mm) 2%混入
- lo 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・強 しまり・中 To-Nb (厚3~5mm) 2%混入
- lp 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- lq 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- lr 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ls 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- lt 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- lu 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- lv 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- lw 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- lx 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ly 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- lz 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ma 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mb 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mc 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- md 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- me 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mf 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mg 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mh 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mi 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mj 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mk 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ml 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mm 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mn 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mo 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mp 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mq 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mr 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ms 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mt 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mu 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mv 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mw 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- mx 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- my 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- nz 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- o 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- pa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- qa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ra 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- sa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ta 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ua 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- va 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- wa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- xa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ya 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- za 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- aa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ba 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ca 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- da 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ea 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- fa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ga 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ha 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ia 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ja 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ka 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- la 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ma 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- na 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- oa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- pa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- qa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ra 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- sa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ta 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ua 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- va 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- wa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- xa 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- ya 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人
- za 10YR2/3 黑褐色土質土 脱性・やや弱 しまり・密 土地改良人

第38図 第24号住居跡（2）

<壁>II層～IVb層を壁とし、ほぼ直立て立ち上がる。壁高は北壁59~64cm、西壁60~67cm、南壁59~66cm、東壁55~61cmを測る。

<床面>IV層下位で、硬くしまる。各壁際に壁溝がめぐる。壁溝幅10~28cm、深さ5~20cm。

<柱穴>住居内に小ピットが1基検出されたが、主柱穴とは考えられない。

<カマド>東壁の南隅に設置される。本体は砂岩で構築された袖部と燃焼部が残る。燃焼部は強く赤変する。焼土の範囲は65×55cm、厚さは最大16cmを測る。煙道部はくり抜き式で、燃焼部から縦やかに上昇し煙り出し部に至る構造をもち、規模は全長150cm、幅40×55cmである。煙出し部は径58×55cm、上部から底面までの深さは51cmである。

<付属施設>南壁間に貯蔵穴と思われるほぼ円形のピット1基を検出した。開口部径75cm、底部径40cm、深さ40cmである。

遺物（第77図・写真図版83）

壺1点と壺の破片2点、石器2点が出土している。110はクロ成形の壺で、内面は黒色処理され、ヘラミガキ調整される。底部には回転式切り痕がみられる。111・112は外側がヘラケズリ、内面がヘラナダ調整される。同一個体の可能性がある。113・114はいずれも石皿である。

時期 検出状況や出土遺物の特徴から、平安時代（10世紀前半代）と推定される。

第1号住居状遺構

遺構（第39図・写真図版42）

＜位置＞調査区中央部7②区、グリッドLII c10に位置する。第9号住居跡の西1.6mの地点にある。

＜検出状況＞II層上面で、十和田a陣下火山灰を含む橢円形状の黒褐色土の土層変化が確認された。カマド及び柱穴とともに検出されないことから堅穴状遺構とした。

＜重複状況＞第9号溝状遺構と重複する。当遺構が旧いと思われる。

＜規模・平面形＞2.6×3.5m、隅丸方形を呈する。＜床面積>9.1m²

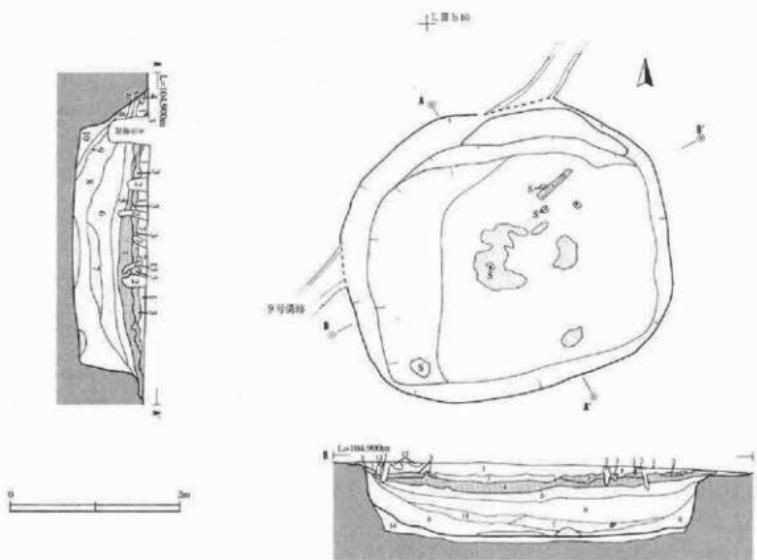
＜埋土＞黒褐色土を主体とし、中位には十和田a陣下火山灰がレンズ状に堆積する。

＜壁＞II層下位～IV b層を壁とし、西側はゆるやかに、東側は直立して立ち上がる。壁高は北西壁65～67cm、南西壁46～58cm、南東壁72～78cm、北東壁63～68cmを測る。

＜床面>IV b層下位で、硬くしまる。炭化物、焼土が中央付近から検出された。北東隅に床面から30cmほどのがまわりがみられる。＜柱穴>検出されない。＜カマド>検出されない。＜付属施設>なし

遺物 出土していない。

時期 検出状況や周囲の出土遺物・住居跡の特徴から、奈良時代と思われる。



- 1 ROYR2/2 黒褐色土、粘性・弱、しまり・弱 10YR4/4 黄褐色土 To-Nb
（珪1～10mm）3%混入
- 2 ROYR2/3 黒褐色土、粘性・弱、しまり・弱 10YR4/5 黑褐色土 To-Nb 2%含む（無孔）
- 3 ROYR4/1 白灰色 10YR6/2 黄褐色のTo-Nb
- 4 ROYR2/3 に白い青褐色のTo-Nb 下位に10YR4/1 黄褐色が混入
粘性・弱、しまり・やや弱
- 5 ROYR2/2 黒褐色土、粘性・弱、しまり・やや強 10YR7/6 明黄褐色 To-Nb
（珪1～10mm）1%混入
- 6 ROYR2/2 黑褐色土、粘性・弱、しまり・弱 10YR7/6 明黄褐色 To-Nb
（珪1～8mm）5%混入
- 7 ROYR2/1 黑褐色土、粘性・中、しまり・様 10YR7/6 明黄褐色 To-Nb
（珪1～15mm）3%混入
- 8 ROYR2/2 黑褐色土、粘性・中、しまり・やや強 10YR4/4 黄褐色 To-Nb
（珪1～12mm）3%混入
- 9 ROYR4/1 黑褐色土、粘性・中、しまり・様 10YR5/5 黄褐色 To-Nb (珪1～5mm) 1%混入
- 10 ROYR3/2 黑褐色土、粘性・中、しまり・弱 10YR4/6 明黄褐色 To-Nb
（珪1～10mm）2%混入
- 11 ROYR1/1 黑褐色土、粘性・中、しまり・やや強 10YR5/5 黄褐色 To-Nb
（珪1～12mm）3%混入
- 12 ROYR4/5 に白い青褐色土、粘性・中、弱、しまり・やや弱（無孔）
- 13 ROYR2/2 黑褐色土、粘性・弱、しまり・中 10YR6/2 白白色 To-Nb 土質、粘性・中、しまり・やや強（無孔）
- 14 ROYR2/2 黑褐色土、粘性・中、しまり・弱 10YR5/6 黄褐色の To-Nb 15%混入
はり波と考えらる

第39図 第1号住居状遺構

2. 土坑

調査区全体で51基の土坑を検出した。平面形は円形もしくは梢円形を基調とする。遺物が出土した土坑は11基である。用途・性格については不明である。各々の規模・形状等については以下にまとめた。

第1号土坑（第40図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞7②区、LⅢc10に位置する。検出面はIVa層上面で、円形の黒色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形はほぼ円形で、断面形はU字形を呈する。

＜規模＞開口部径103cm、底部径68×50cm、深さ110cmである。

＜埋土＞南部浮石を含む黒褐色土を主体とする。

＜底面＞VI層相当で、やや丸みを帯びる。

＜壁＞わずかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞貝殻腹縁圧痕を施す口縁部片1点が出土している。（第78図・写真図版83）

＜時期＞検出面や周囲の出土遺物から判断し、縄文時代早期中葉に属すると思われる。

第2号土坑（第40図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞7①区、LⅢ!12に位置する。検出面はIVa層で、南部浮石を多量に含む褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は不整形、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径140×97cm、底部径130×58cm、深さ17cmである。

＜埋土＞南部浮石を主体とする。

＜底面＞VIb層相当で、やや丸みを帯びる。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞検出面や周囲の出土遺物から判断し、縄文時代早期中葉に属すると思われる。

第3号土坑（第40図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞7①区、LⅢ!12に位置する。検出面はIVa層で、梢円状の黒褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は梢円形で、断面形は鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径97×61cm、底部径37×35cm、深さ21cmである。

＜埋土＞黒褐色土と褐色土を主体とする。（焼土粒を含む）下部に黄褐色土が堆積する。

＜底面＞ほぼ平坦である。

＜壁＞外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞検出面や周囲の出土遺物から判断し、縄文時代早期中葉に属すると思われる。

第4号土坑（第40図・写真図版43）

＜位置・検出状況＞調査区南部6②区、LⅢ!11,12に位置する。VIa層で、黒褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は梢円形、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径86×60cm、底部径64×45cm、深さ20cmである。

＜埋土＞黒褐色土と褐色土を主体とする。南部浮石を含む。

＜底面＞ほぼ平坦である。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代早期中葉に属すると思われる。

第5号土坑（第40図・写真図版44）

＜位置・検出状況＞6②区、L III r 11に位置する。VI a層で、黒褐色土の広がりが確認された。第12号焼土の南側に位置する。

＜形状＞平面形は不整円形、断面形はV字型を呈する。

＜規模＞開口部径94×66cm、底部径50×20cmの不整形、深さ38cmである。

＜埋土＞上位は南部浮石を主体とする。下位は暗褐色土と黄褐色土である。

＜底面＞丸味を帯びる。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代早期中葉に属すると思われる。

第6号土坑（第40図・写真図版44）

＜位置・検出状況＞6②区、L III q 11に位置する。第12号焼土の北側に位置する。

＜形状＞平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径129×70cm、底部径111×61cmの不整形、深さ15cm前後である。

＜埋土＞上位は南部浮石を主体とする。下位は暗褐色土と褐色土である。

＜底面＞ほぼ平坦である。

＜壁＞直立気味に立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代早期に属すると思われる。

第7号土坑（第40図・写真図版44）

＜位置・検出状況＞調査区南部4区の緩やかな傾斜地、O III f 17に位置する。検出面はⅢ層上面で、黒褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は不整な楕円形で、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径100×85cm、底部径60×45cm、深さ43cmである。

＜埋土＞南部浮石を含む黒褐色土と極暗褐色土。上位に炭化物粒が混入する。

＜底面＞V層相当で、やや丸みを帯びる。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

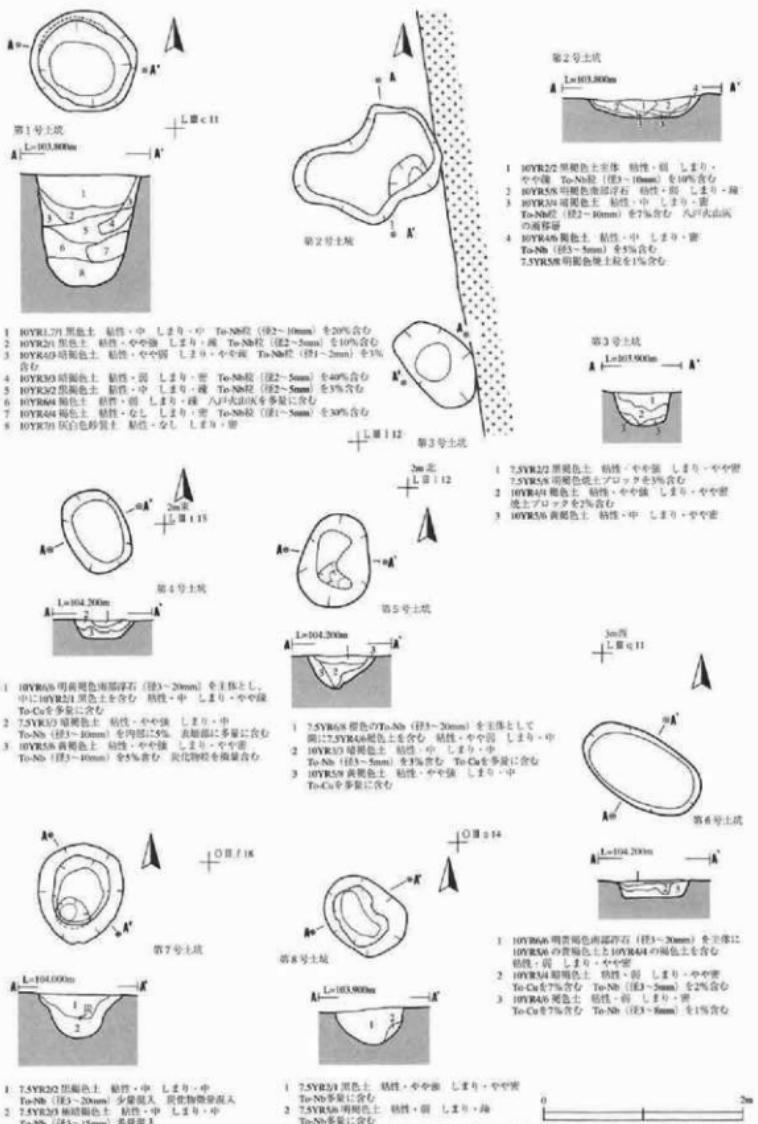
＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面等から縄文時代前期に属すると思われる。

第8号土坑（第40図・写真図版44）

＜位置・検出状況＞調査区南部4区の緩やかな傾斜地、O III g 17に位置する。検出面はⅢ層で、南部浮石を含む黒褐色土の土層変化が確認された。

＜形状＞平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。



第40図 第1~8号土坑

＜規模＞開口部径88×66cm、底部径48×20cm、深さ45cmである。

＜埋土＞黒褐色土、明褐色土、黒褐色土の3層からなる。いずれも南部浮石を含む。

＜底面＞V層相当で、丸味を帯びる。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期に属すると思われる。

第9号土坑（第41図・写真図版45）

＜位置・検出状況＞調査区南部4区の緩やかな傾斜地、O III a 14に位置する。検出面はⅢ層下位で、南部浮石を含む黑色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は長方形、断面形は皿状を呈する。

＜規模＞開口部径174×136cm、底部径155×110cm、深さ28cmである。

＜埋土＞南部浮石を含む黑色土の単層である。

＜底面＞V層上面で、ほぼ平坦である。

＜壁＞緩やかに立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期に属すると思われる。

第10号土坑（第41図・写真図版45）

＜位置・検出状況＞調査区南部4区の緩やかな傾斜地、O III h 14に位置する。検出面はⅢ層で、南部浮石を含む黑色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は長方形で、断面形は皿状を呈する。

＜規模＞開口部径270×119cm、底部径256×112cm、深さ14cmである。

＜埋土＞上位は黑色土、下位は黒褐色土。いずれも南部浮石を含む。

＜底面＞IV a 層相当で、ほぼ平坦である。

＜壁＞直立ぎみに立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期に属すると思われる。

第11号土坑（第41図・写真図版45）

＜位置・検出状況＞調査区南部4区の緩やかな傾斜地、O III g 15に位置する。検出面はⅢ層面で、南部浮石を含む黒褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は隅丸方形、断面形は皿状を呈する。

＜規模＞開口部径122×78cm、底部径104×64cm、深さ20cmである。

＜埋土＞上位は黑色土、下位は南部浮石を多量に含む黒褐色土である。

＜底面＞IV a 層相当で、南側にやや傾斜がある。

＜壁＞直立ぎみに立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期に属すると思われる。

第12号土坑（第41図・写真図版45）

＜位置・検出状況＞5区の平坦面、N III e 15に位置する。検出面はIV層で、黒褐色土の広がりが確認された。

第35号土坑に切られる。

＜形状＞平面形は略円形、断面形は皿状を呈する。

＜規模＞開口部径168cm、底部径157cm、深さ16cmである。

＜埋土＞上位は黒色土、下位は黒褐色土。いずれも南部浮石を含む。

＜底面＞V層相当で、ほぼ平坦である。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期に属すると思われる。

第13号土坑（第41図・写真図版46）

＜位置・検出状況＞調査区4区の緩やかな傾斜地、NⅢ s 17に位置する。検出面はIV b層で、黒褐色土の土層変化が確認された。

＜形状＞平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。

＜規模＞開口部径130×89cm、底部径105×70cm、深さ18cmである。

＜埋土＞南部浮石を含む黒褐色土である。

＜底面＞V層相当で、平坦である。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞116は網目状撲糸文が施文される。（第78図・写真図版83）

＜時期＞検出面から、縄文時代前期に属すると思われる。

第14号土坑（第41図・写真図版46）

＜位置・検出状況＞調査南部4区のNⅢ t 17に位置する。IV b層で、黒色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径105×80cm、底部径90×60cm、深さ14cmを測る。

＜埋土＞南部浮石を含む黒褐色土である。

＜底面＞V層相当で、平坦である。

＜壁＞ゆるやかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面や周囲の出土遺物の特徴等から縄文時代前期に属すると思われる。

第15号土坑（第41図・写真図版46）

＜位置・検出状況＞4区の緩やかな傾斜地、NⅢ t 17に位置する。検出面はIV b層で、黒色の土層変化が確認された。

＜形状＞平面形は不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。

＜規模＞開口部径90×70cm、底部径65×50cm、深さ18cmである。

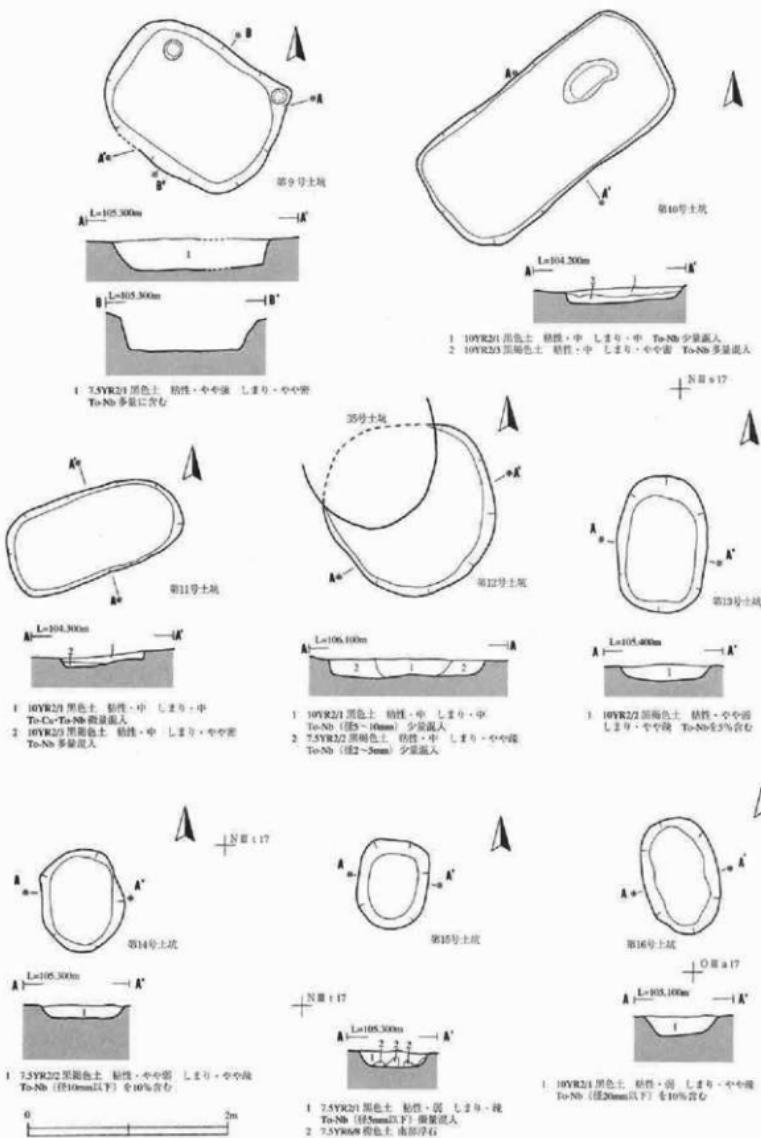
＜埋土＞南部浮石を含む黒褐色土である。

＜底面＞V層相当で、平坦である。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代に属すると思われる。



第41図 第9～16号土坑

第16号土坑（第41図・写真図版46）

＜位置・検出状況＞4区の緩やかな傾斜地、O III a 17に位置する。検出面はIV b層で、楕円状の黒色の土層変化が確認された。

＜形状＞平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径115×75cm、底部径100×50cm、深さ17cmである。

＜埋土＞南部浮石を含む黒色土である。

＜底面＞V層相当で、ほぼ平坦である。

＜壁＞緩やかに外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞土器片1点が出土している。

＜時期＞出土遺物の特徴から判断し、縄文時代前期に属すると思われる。

第17号土坑（第42図・写真図版47）

＜位置・検出状況＞7①の平坦面区、L III k 11に位置する。検出面はIV a層で、南部浮石を含む黒色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は略楕円形、断面形はフラスコ状を呈する。

＜規模＞開口部径160×145cm、底部径184×160cm、深さ143cmである。

＜埋土＞南部浮石を含む黒色土と黒褐色土である。調査に不備があり、下部は埋土を記録していない。

＜底面＞VI層相当で、ほぼ平坦である。

＜壁＞底部から内傾して立ち上がり、上面に向かって緩やかに立ち上がる。

＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞検出面から判断し、縄文時代前期以降と思われる。

第18号土坑（第42図・写真図版47）

＜位置・検出状況＞7①区平坦面、L III j 11に位置する。検出面はIV a層で、楕円状の黒褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は楕円形、断面形はフラスコ状を呈する。

＜規模＞開口部径118×165cm、底部径210×190cm、深さ143cmである。

＜埋土＞南部浮石と中振浮石を含む黒褐色土主体である。

＜底面＞VI層相当で、ほぼ平坦である。

＜壁＞底部から内傾して立ち上がり、上面に向かって緩やかに立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期以降と思われる。

第19号土坑（第42図・写真図版47）

＜位置・検出状況＞7①区、L III i 11に位置する。検出面はIV a層で、円形の褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は楕円形、断面形はフラスコ状を呈する。

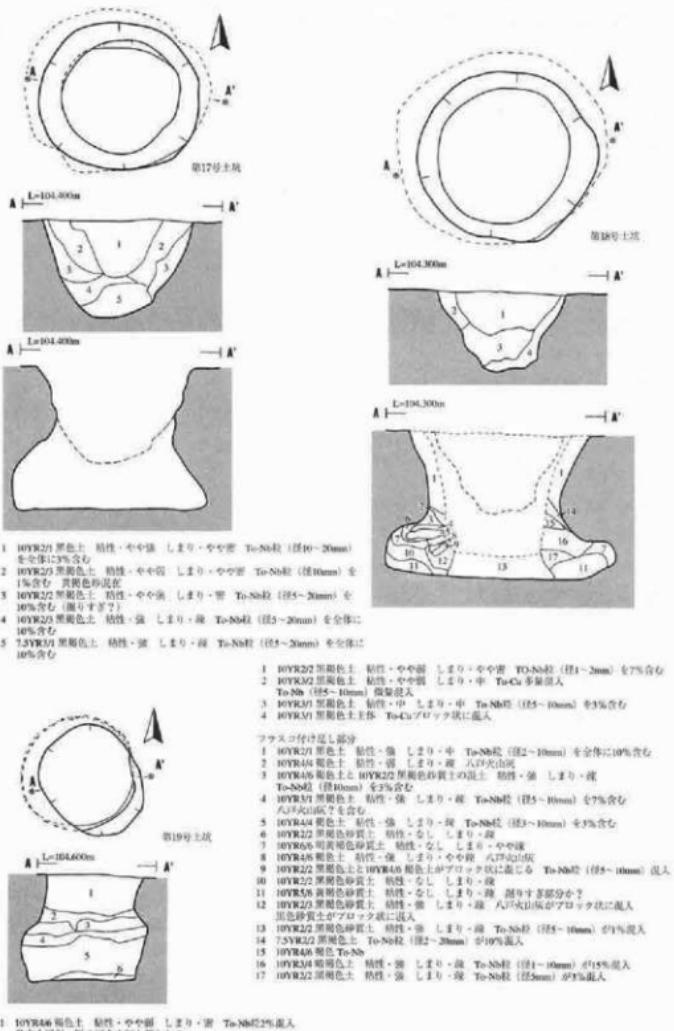
＜規模＞開口部径108×92cm、底部径122×108cm、深さ113cmである。

＜埋土＞褐色土と黒褐色土を主体とする。南部浮石が多量に混入する。人為堆積の様相を示す。

＜底面＞VI層上面で、ほぼ平坦である。

＜壁＞底部から直立ぎみに立ち上がり、中央部で最大径を測る。

＜出土遺物＞なし



第42図 第17~19号土坑

<時期>検出面等から判断し縄文時代前期以降と思われる。

第20号土坑（第43図・写真図版47）

<位置・検出状況>4区の緩やかな傾斜地、O III a 17に位置する。検出面はIV b層で、不整な黒色土の広がりが確認された。

<形状>平面形は不整な円形、断面形は浅鉢状を呈する。

<規模>開口部径95×80cm、底部径40×25cm、深さ23cmである。

<埋土>南部浮石を含む黒色土と黒褐色土。

<底面>V層相当で、丸みを帯びる。

<壁>緩やかに外傾して立ち上がる。

<出土遺物>なし

<時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期に属すると思われる。

第21号土坑（第43図・写真図版48）

<位置・検出状況>4区の緩やかな傾斜地、O III a 17に位置する。検出面はIV b層で、梢円形の黒褐色土の広がりが確認された。

<形状>平面形は梢円形で、断面形は浅鉢状を呈する。

<規模>開口部径77×58cm、底部径64×43cm、深さ19cmである。

<埋土>南部浮石を含む黒色土と黒褐色土。上位には炭化物が混入する。

<底面>V層相当で、やや東側に傾く。

<壁>緩やかに立ち上がる。

<出土遺物>なし

<時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期に属すると思われる。

第22号土坑（第43図・写真図版48）

<位置・検出状況>7①区、L III k 10に位置する。検出面はIV a層上面で、南部浮石を含む黒色土の広がりが確認された。

<形状>平面形は不整な円形で、断面形は鉢状を呈する。

<規模>開口部径135cm、底部径50×75cm、深さ87cmである。

<埋土>南部浮石を含む黒褐色土を主体とする。

<底面>V層相当で、東側にやや傾く。

<壁>緩やかに立ち上がる。

<出土遺物>なし

<時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代前期に属すると思われる。

第23号土坑（第43図・写真図版48）

<位置・検出状況>7①区の平坦面、L III d i 10に位置する。IV a層で、南部浮石を含む黒色土の広がりが確認された。

<形状>平面形は梢円形、断面形は鉢形状を呈する。

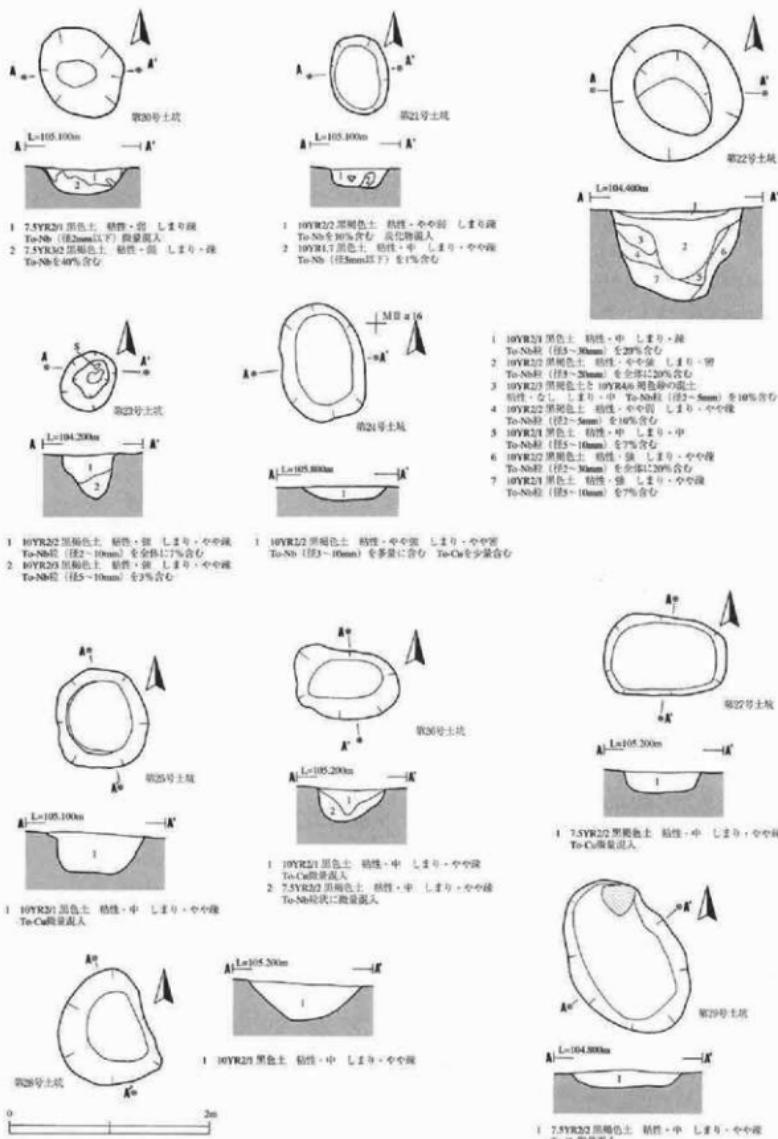
<規模>開口部径60×48cm、底部径20×8cm、深さ61cmを測る。

<埋土>南部浮石を含む黒褐色土を主体とする。

<底面>V層相当で、やや丸味を帯びる。

- <壁>外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面や周囲の出土遺物の特徴等から縄文時代前期に属すると考えられる。
- 第24号土坑（第43図・写真図版48）
- <位置・検出状況>調査区南部5②区、M III a15に位置する。
- <形状>平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。
- <規模>開口部径118×81cm、底部径90×57cm、深さ12cmである。
- <埋土>黒色土と黒褐色土を主体とする。南部浮石を含む。
- <底面>ほぼ平坦である。
- <壁>緩やかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>土器片2点が出土した。（第78図・写真図版83）
- <時期>詳細は不明であるが、検出面や周囲の出土遺物の特徴等から縄文時代前期に属すると考えられる。
- 第25号土坑（第43図・写真図版49）
- <位置・検出状況>調査南部4区の緩やかな傾斜地、O III d 16に位置する。Ⅲ層上面で、楕円状の黒色土の広がりが確認された。
- <形状>平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径98×89cm、底部径73×60cm、深さ39cmを測る。
- <埋土>中揮浮石を含む黒褐色土の単層である。
- <底面>IV a層相当で、平坦である。
- <壁>ゆるやかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>土器片1点が出土した。（第78図・写真図版83）
- <時期>詳細は不明であるが、検出面や周囲の出土遺物の特徴等から縄文時代前期以降に属する遺構と考えられる。
- 第26号土坑（第43図・写真図版49）
- <位置・検出状況>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、O III c 16に位置する。検出面はⅡ層で、不整な楕円形黒褐色土の土層変化が確認された。
- <形状>平面形は不整な楕円形で、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径102×70cm、底部径74×37cm、深さ34cmである。
- <埋土>上位は中揮浮石を含む黒色土、下位は南部浮石を含む黒褐色土である。
- <底面>Ⅲ層相当で、やや丸みを帯びる。
- <壁>北側は直立ぎみに、南側は緩やかに立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。
- 第27号土坑（第43図・写真図版49）
- <位置・検出状況>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、O III d 15に位置する。検出面はⅡ層で、楕円状の黒褐色土の土層変化が確認された。
- <形状>平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。

- <規模>開口部径122×78cm、底部径104×64cm、深さ20cmである。
- <埋土>中揮浮石を含む黒褐色土の単層である。
- <底面>Ⅲ層相当で、ほぼ平坦である。
- <壁>緩やかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>土器片1点と磨敷石1点が出土した。(第78図・写真図版83・84)
- <時期>詳細は不明であるが、縄文時代前期以降と思われる。
- 第28号土坑（第43図・写真図版49）
- <位置・検出状況>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、OⅢ d 16に位置する。検出面はⅡ層面で、梢円状の黒褐色土の土層変化が確認された。
- <形状>平面形は不整梢円形、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径112×89cm、底部径72×53cm、深さ36cmである。
- <埋土>黒色土の単層である。
- <底面>Ⅲ層相当で、丸みを帯びる。
- <壁>緩やかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>土器片2点が出土した。(第78図・写真図版84)
- <時期>詳細は不明であるが、縄文時代前期以降に属するとと思われる。
- 第29号土坑（第43図・写真図版50）
- <位置・検出状況>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、OⅢ e 16に位置する。検出面はⅡ層で、不整な梢円形黒褐色土の土層変化が確認された。
- <形状>平面形は不整な梢円形で、断面形は皿状を呈する。
- <規模>開口部径164×111cm、底部径141×75cm、深さ18cmである。
- <埋土>中揮浮石を含む黒褐色土の単層である。
- <底面>ほぼ平坦で、焼土ブロックが確認された。
- <壁>緩やかに立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。
- 第30号土坑（第44図・写真図版50）
- <位置・検出状況>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、OⅢ f 17に位置する。検出面はⅡ層で、黒色土の土層変化が確認された。
- <形状>平面形は梢円形、断面形は皿状を呈する。
- <規模>開口部径202×98cm、底部径185×80cm、深さ15cmである。
- <埋土>上位は中揮浮石を含む黒色土、下位は南部浮石を含む黒褐色土である。
- <底面>Ⅲ層相当で、やや凹凸がある。
- <壁>緩やかに立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。
- 第31号土坑（第44図・写真図版50）
- <位置・検出状況>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、OⅢ f 17に位置する。検出面はⅡ層で、黒褐色土の



第43図 第20~29号土坑

広がり確認された。

＜形状＞平面形は不整な橢円形、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径103×55cm、底部径93×44cm、深さ20cmである。

＜埋土＞中壺浮石を含む黒褐色土の單層である。

＜底面＞Ⅲ層相当で、ほぼ平坦である。

＜壁＞やや外傾して立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。

第32号土坑（第44図・写真図版50）

＜位置・検出状況＞調査南部4区の緩やかな傾斜地、OⅢ f 15に位置する。Ⅱ層で、黒色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は不整な方形、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径165×155cm、底部径128×121cm、深さ41cmを測る。

＜埋土＞上位は南部浮石を含む黒色土、下位は南部浮石を含む黒褐色土である。

＜底面＞IV a層相当で、平坦である。

＜壁＞ゆるやかに立ち上がる。

＜出土遺物＞石斧1点が出土した。（第78図・写真図版84）

＜時期＞詳細は不明であるが、検出面や周囲の出土遺物の特徴等から縄文時代中期以降と考えられる。

第33号土坑（第44図・写真図版51）

＜位置・検出状況＞5区の平坦面、NⅢ f 13に位置する。検出面はⅢ層上面で、不整な円形の黒褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は略円形で、断面形は逆台形を呈する。

＜規模＞開口部径125cm、底部径62cm、深さ87cmである。

＜埋土＞上位は黒褐色土で礫を含む。下位は赤褐色土を主体とする。いずれも南部浮石を含む。

＜底面＞VI層相当で、やや丸みを帯びる。

＜壁＞緩やかに外傾し立ち上がる。

＜出土遺物＞なし

＜時期＞出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。土壤墓の可能性がある。

第34号土坑（第44図・写真図版51）

＜位置・検出状況＞5区の平坦面、NⅢ d 14に位置する。検出面はⅢ層上面で、橢円状の黒褐色土の広がりが確認された。

＜形状＞平面形は不整橢円形、断面形は浅鉢状を呈する。

＜規模＞開口部径210×205cm、底部径70×44cm、深さ98cmである。

＜埋土＞黒褐色土と暗赤褐色土を主体とする。下位には南部浮石が混入する。

＜底面＞VからVI層相当で、中心部がやや陥没する。

＜壁＞緩やかに外傾し、上部でやや直線的に立ち上がる。

＜出土遺物＞土器片2点が出土した。（第78図・写真図版84）

<時期>詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。

第35号土坑（第44図・写真図版51）

<位置・検出状況>5区の平坦面、NⅢe15に位置する。検出面はⅢ層面で、楕円形の黒褐色土の広がりが確認された。

<形状>平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。

<規模>開口部径163×140cm、底部径143×103cm、深さ64cmである。

<埋土>上位は黒褐色土、下位は南部浮石を含む。極暗赤褐色土を主体とする。

<底面>ほぼ中央部に窓穴がある。

<壁>西側は緩やかに外傾して立ち上がる。

<出土遺物>なし

<時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。

第36号土坑（第44図・写真図版51）

<位置・検出状況>5区平坦面、NⅢc13に位置する。Ⅲ層面で、黒褐色土の広がりが確認された。

<形状>平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。

<規模>開口部径119×103cm、底部径112×85cm、深さ31cmを測る。

<埋土>十和田a降下火山灰を含む黒褐色土と中揮浮石を含む黒褐色土を主体とする。調査に不手際があり土層断面を記録していない。

<底面>Ⅳa層相当で、やや丸味を帯びる。

<壁>ゆるやかに立ち上がる。

<出土遺物>なし

<時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面や周囲の出土遺物の特徴等から縄文時代中期以降と考えられる。

第37号土坑（第44図・写真図版52）

<位置・検出状況>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、OⅢi17に位置する。検出面はⅡ層面で、黒褐色土の広がりが確認された。

<形状>平面形は不整な楕円形で、断面形は浅鉢状を呈する。

<規模>開口部径113×74cm、底部径83×45cm、深さ25cmである。

<埋土>黒褐色土を主体とする。

<底面>Ⅲ層相当で、やや丸みを帯びる。

<壁>緩やかに外傾して立ち上がる。

<出土遺物>なし

<時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。

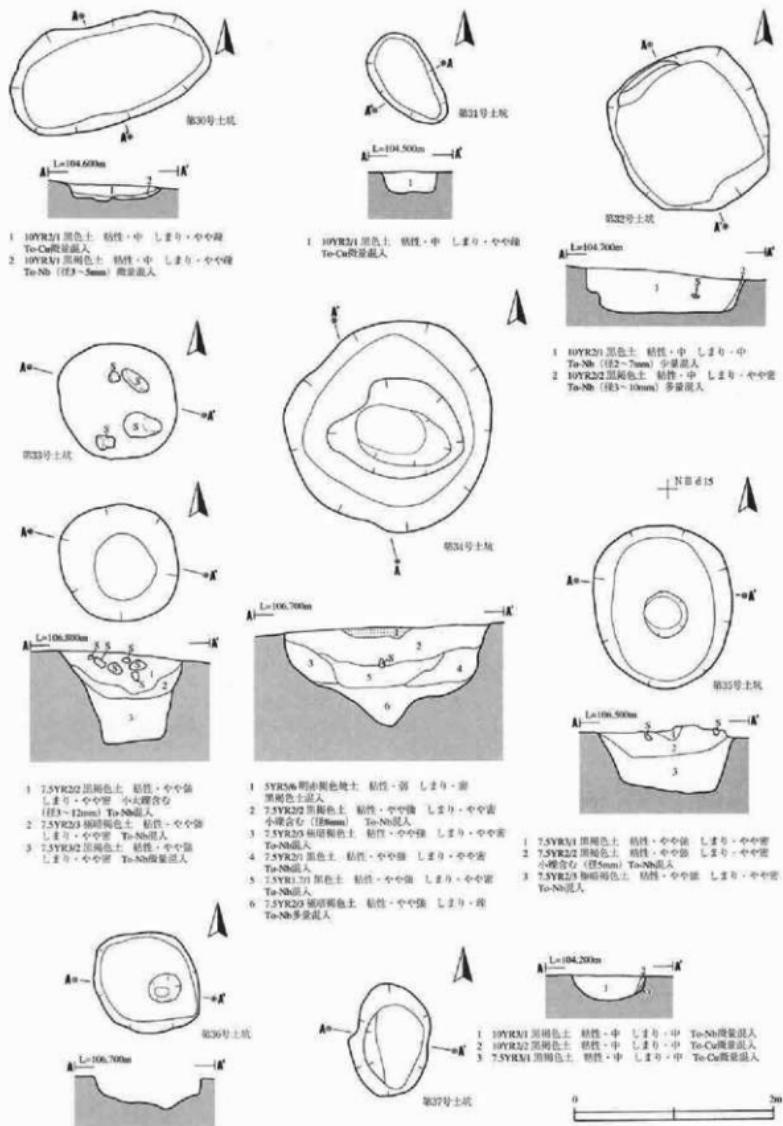
第38号土坑（第45図・写真図版52）

<位置・検出状況>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、OⅢg14に位置する。検出面はⅡ層で、黒褐色土の広がりが確認された。

<形状>平面形は不整な楕円形、断面形は皿状を呈する。

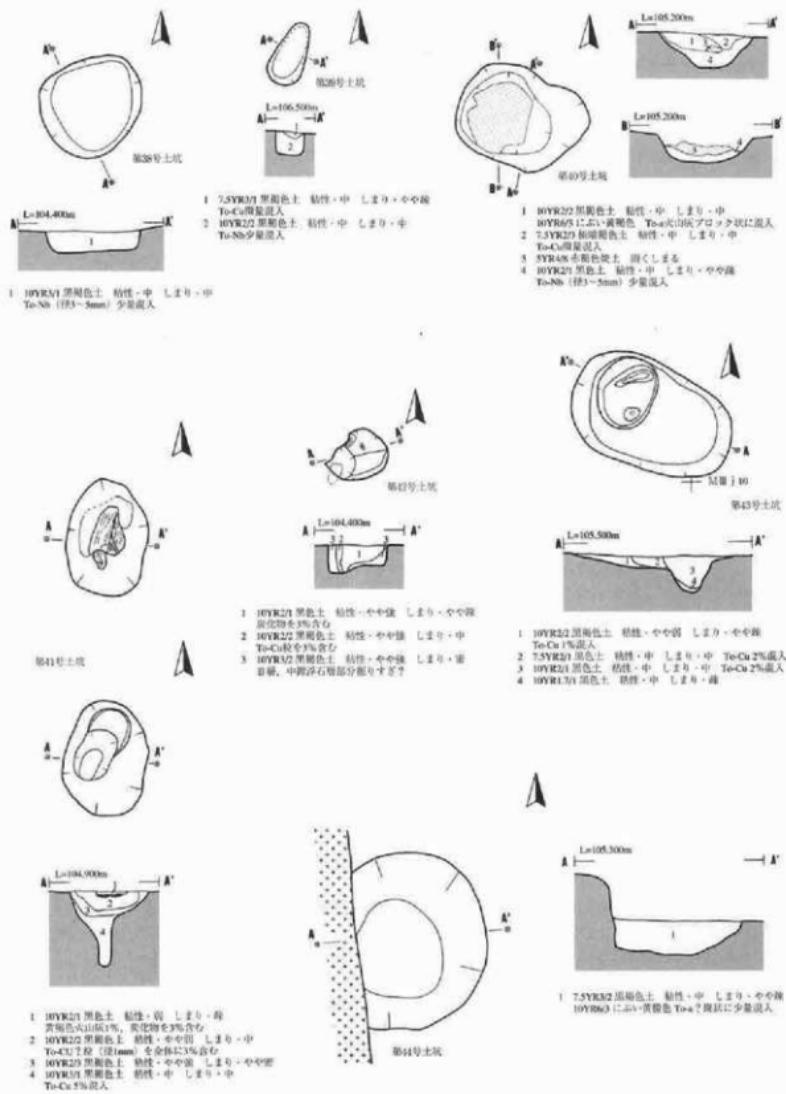
<規模>開口部径107×93cm、底部径92×80cm、深さ22cmである。

<埋土>南部浮石を含む黒褐色土の単層である。



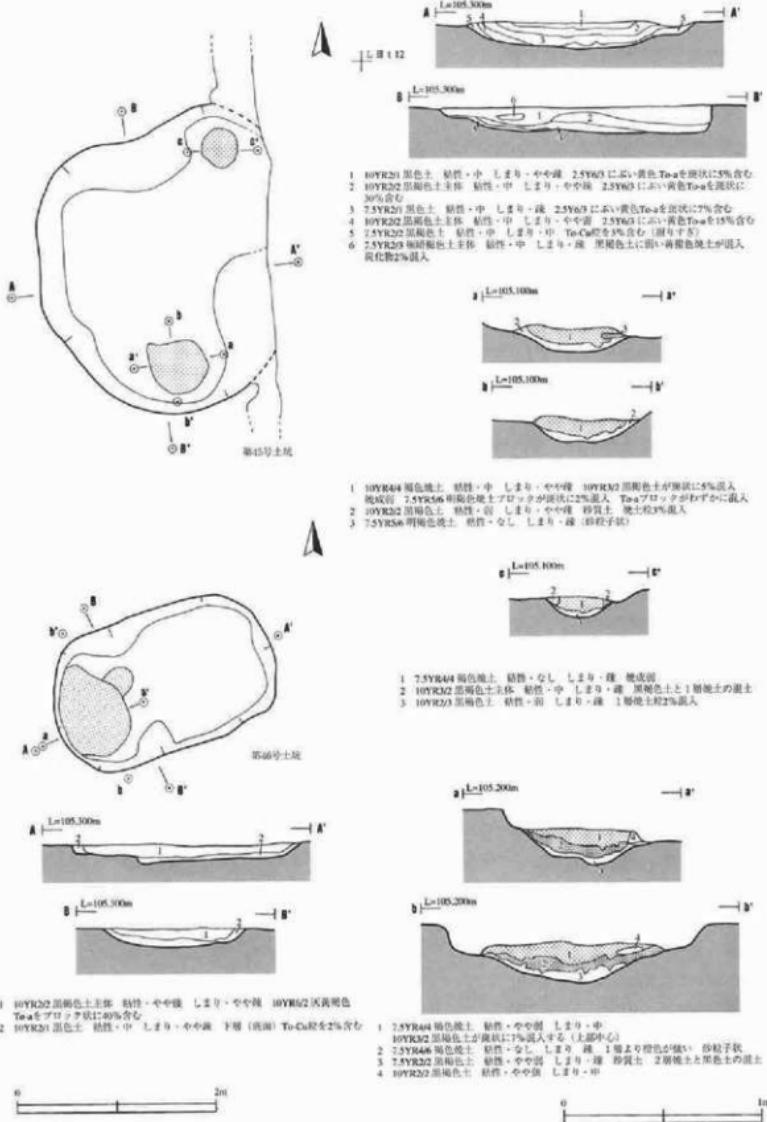
第44図 第30～37号土坑

- <底面>Ⅲ層相当で、ほぼ平坦である。
- <壁>やや直立ぎみに立ち上がる。
- <出土遺物>土器片2点が出土した。(第78図・写真図版84)
- <時期>詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。
- 第39号土坑(第45図・写真図版52)
- <位置・検出状況>5区の平坦面、MⅢe9に位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色土の広がりが確認された。
- <形状>平面形は不整梢円形、断面形は円筒形を呈する。
- <規模>開口部径65×30cm、底部径55×24cm、深さ24cmである。
- <埋土>黒褐色土を主体とする。
- <底面>Ⅳa層相当で、ほぼ平坦である。
- <壁>緩やかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。
- 第40号土坑(第45図・写真図版52・53)
- <位置・検出状況>6①区の平坦面、MⅢc9に位置する。検出面はⅢ層で、梢円状の黒褐色土の広がりが確認できた。
- <形状>平面形は不整形、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径123×94cm、底部径90×70cm、深さ33cmである。
- <埋土>黒褐色土と暗褐色土を主体とする。中位に焼土がある。(投げ込みか)
- <底面>Ⅳa層相当で、やや丸味を帯びる。
- <壁>緩やかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。
- 第41号土坑(第45図・写真図版53)
- <位置・検出状況>7①区の平坦面、LⅢm12に位置する。検出面はⅡ層で、梢円状の黒色土の広がりが確認された。
- <形状>平面形は不整梢円形、断面形は漏斗状を呈する。
- <規模>開口部径115×80cm、底部径17×30cm、深さ77cmである。
- <埋土>中揮浮石を含む黒褐色土主体。
- <底面>Ⅳa層相当である。
- <壁>底部から直立ぎみに、中場からは緩やかに立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、縄文時代に属すると思われる。
- 第42号土坑(第45図・写真図版53)
- <位置・検出状況>7③区、KⅢo8に位置する。Ⅲ層上面で、梢円状の黒色土の広がりが確認された。
- <形状>平面形は不整梢円形、断面形は半円筒形を呈する。
- <規模>開口部径56×43cm、底部径47×35cm、深さ24cmを測る。
- <埋土>中揮浮石を含む黒褐色土主体。炭化物が混入する。



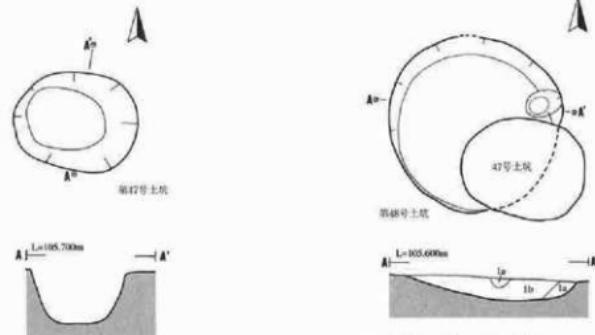
第45図 第38~44号土坑

- <底面>東側がやや浅くなる。
- <壁>直立する。
- <出土遺物>石錐 2 点が出土する。
- <時期>検出面や周囲の出土遺物の特徴等から縄文時代中期以降と思われる。
- 第43号土坑（第45図・写真図版53）
- <位置・検出状況> 6 ①区の平坦面、MⅢ j 10に位置する。検出面はⅢ層上面で、楕円状の黒褐色土の広がりが確認された。
- <形状>平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径165×105cm、底部径70×45cm、深さ35cmである。
- <埋土>中揮浮石を含む黒色土主体。
- <底面>IV a 層相当で、丸味を帯びる。
- <壁>緩やかに立ち上がる。
- <出土遺物>石皿1点が出土している。（第78図・写真図版84）
- <時期>詳細は不明であるが、縄文時代中期以降と思われる。
- 第44号土坑（第45図・写真図版54）
- <位置・検出状況> 7 ②区の、KⅢ t 8 d に位置する。検出面はⅡ層で、円形の黒褐色の広がりが確認された。西調査区外に延びる。
- <形状>平面形は略円形、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径175×165cm、底部径97×88cm、深さ33cmである。
- <埋土>十和田 a 降下火山灰を含む黒褐色土。
- <底面>ほぼ平坦である。
- <壁>緩やかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、奈良時代以降と思われる。
- 第45号土坑（第46図・写真図版54）
- <位置・検出状況> 6 ②区の平坦面、MⅢ a 11に位置する。検出面はⅢ層で、十和田 a 降下火山灰を含む黒褐色土の広がりが確認された。
- <形状>平面形は不整な楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径300×210cm、底部径210×180cm、深さ25cmである。
- <埋土>十和田 a 降下火山灰を含む黒褐色土と黒色土主体。一部、焼土と炭化物がみられる。
- <底面>Ⅲ層相当で、やや丸味を帯びる。
- <壁>緩やかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>土師器片1点が出土している。
- <時期>出土遺物等から判断し古代に属すると思われる。
- 第46号土坑（第46図・写真図版54）
- <位置・検出状況> 6 ②区の平坦面、MⅢ a 13に位置する。検出面はⅡ層で、十和田 a 降下火山灰を含む黒褐色土の広がりが確認された。
- <形状>平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。

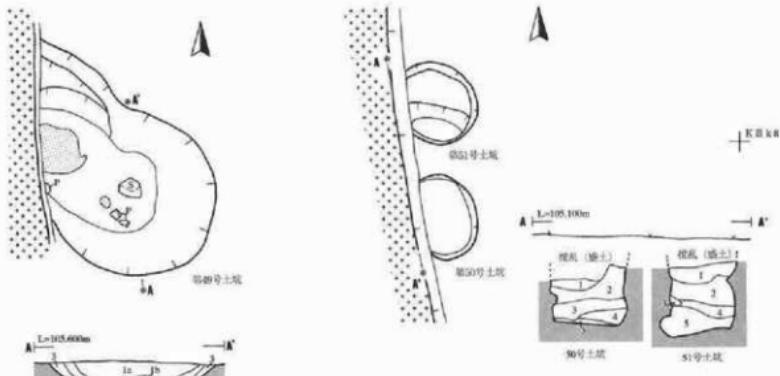


第46図 第45号・46号土坑

- <規模>開口部径230×140cm、底部径205×118cm、深さ19cmである。
- <埋土>十和田a降下火山灰を含む黒褐色土と黒色土主体。一部、焼土がみられる。
- <底面>Ⅲ層相当で、ほぼ平坦である。
- <壁>緩やかに立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>検出面や周囲の出土遺物の特徴等から古代に属すると考えられる。
- 第47号土坑（第47図・写真図版55）
- <位置・検出状況>6①区の平坦面、MⅢ g 11に位置する。検出面はⅡ層面で、楕円状の黒褐色土の土層変化が確認できた。
- <形状>平面形は楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径124×96cm、底部径82×63cm、深さ50cmを測る。
- <埋土>調査の不手際により記録していない。
- <底面>IV a層相当で、やや丸味がある。
- <壁>ゆるやかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>甕が2点出土している。132の底部に木葉痕が認められる。（第78・79図・写真図版84）
- <時期>詳細は不明であるが、検出面や周囲の出土遺物の特徴等から平安時代に属する遺構と考えられる。
- 第48号土坑（第47図・写真図版55）
- <位置・検出状況>6①区の平坦面、MⅢ g 10に位置する。検出面はⅡ層面で、円形の黒褐色土の土層変化が確認できた
- <形状>平面形は略円形で、断面形は皿状を呈する。
- <規模>開口部径171cm、底部径149cm、深さ22cmである。
- <埋土>黒褐色土主体である。上位には十和田a降下火山灰が混入する。
- <底面>Ⅲ層相当で、やや丸みを帯びる。
- <壁>北側は直立ぎみに立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>出土遺物がなく詳細は不明であるが、平安時代に属すると思われる。
- 第49号土坑（第47図・写真図版55）
- <位置・検出状況>6①区、MⅢ e 9に位置する。検出面はⅡ層面で、十和田a降下火山灰を含む黒褐色土の広がりが確認された。西側は調査区外に延びる。
- <形状>平面形は長楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。
- <規模>開口部径(285)×147cm、底部径185×80cm、深さ36cmである。
- <埋土>黒褐色土と暗褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む
- <底面>Ⅲ層相当で、やや丸味を帯びる。
- <壁>緩やかに外傾して立ち上がる。
- <出土遺物>なし
- <時期>検出状況から、平安時代に属すると思われる。
- 第50号土坑（第47図・写真図版55）
- <位置・検出状況>7③区、KⅢ 19cに位置する。検出面はⅢ層で、円形の黒褐色土の土層変化が確認さ



1a 10YR2/2 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・なし
1b 7.5YR2/0 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・なし
1c 7.5YR3/0 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・なし To-Cu微量混入



1a 10YR3/2 黑褐色土 粘性・中 しまり・なし To-Nb微量混入
1b 7.5YR2/0 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・なし
2 10YR3/0 黑褐色土 粘性・中 しまり・なし
3 10YR6/0 に占比黄褐色土 To-Cu微量多量混入
3 7.5YR2/0 黑褐色土 粘性・中 しまり・なし To-Cu微量混入

- 50号土坑
- 1 10YR2/2 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・中 深處の下部に黑色土塊、塊土。化成材混入
 - 2 7.5YR2/0 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・やや強 黄褐色To-Nb?粒 (径3mm) を含む
 - 3 10YR2/2 黑褐色土 粘性・中 しまり・微 黑色土ブロックを3%含む
浮石粒 (径2mm) を全分量3%含む
 - 4 10YR2/0 黑褐色土 粘性・中 しまり・深 黄褐色土と黒褐色土がブロック状に混入
 - 5 10YR2/0 黑褐色土 粘性・強 しまり・P To-Nb? (径5~10mm) を20%含む
- 51号土坑
- 1 7.5YR2/2 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・深 浮石粒 (径2~5mm) を7%含む
 - 2 10YR2/0 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・浅 浮石粒 (径2mm) を全分量7%含む
中にTo-Cu (基層) 見入
 - 3 10YR3/0 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・中 黑色土層表面の土が入り込む
 - 4 10YR2/0 黑褐色土 粘性・やや弱 しまり・深 浮石粒 (径2~3mm) を2%含む
 - 5 10YR2/0 黑褐色土 粘性・強 しまり・中 To-Nbを20%含む

0 2m

第47図 第47~51号土坑

れた。一部調査区外に延びる。検出が遅れたため掘りすぎている。

<形状>平面形は梢円形で、断面形は円筒形を呈する。

<規模>開口部径75×65cm、底部径72×55cm、深さ57cm(推定)である。

<埋土>黒褐色土主体である。

<底面>IV a層相当、ほぼ平坦である。

<壁>直立して立ち上がる。

<出土遺物>寛永通寶2点、鉄斧1点が出土している。(第79図・写真図版84)

<時期>出土遺物等から判断し近世の墓壙の可能性が高い。

第51号土坑（第47図・写真図版55）

<位置・検出状況>7③区、KⅢ k7に位置する。検出面はⅢ層で、円形の黒褐色土の土層変化が確認された。一部調査区外に延びる。検出が遅れたため掘りすぎている。

<形状>平面形は梢円形で、断面形は円筒形を呈する。

<規模>開口部径86×77cm、底部径75×64cm、深さ70cm(推定)である。

<埋土>黒褐色土主体である。

<底面>IV a層相当、ほぼ平坦である。

<壁>直立して立ち上がる。

<出土遺物>寛永通寶3点が出土している。

<時期>出土遺物等から判断し近世の墓壙の可能性が高い。

3. 陥し穴状遺構

全体で7基の陥し穴状遺構を検出した。いずれも長楕円形の構造を呈する。

第1号陥し穴状遺構（第48図・写真図版56）

＜位置・検出状況＞調査区中央7③区、KⅢ n 9区に位置する。II層面で検出。

＜形状＞平面形は長楕円形、断面形はV字形を呈する。＜軸方向＞W-35°-N

＜規模＞開口部径350×65cm 底径部径312×24cm 深さ148cmを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とする。南部浮石、中振浮石を含む。

＜底面＞VI b層相当で、平坦である。

＜壁＞直立する。

＜出土遺物＞後晩期の縄文土器が2点出土している。

＜時期＞出土した遺物や検出面等から縄文時代後期以降と思われる。

第2号陥し穴状遺構（第48図・写真図版56）

＜位置・検出状況＞調査区中央7②区、LⅢ d 10区に位置する。II層下位で検出。

＜形状＞平面形は長楕円形、断面形はY字形を呈する。＜軸方向＞W-62°-N

＜規模＞開口部径380×88cm 底径部径300×16cm 深さ194cmを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とする。南部浮石、中振浮石を含む。

＜底面＞VI b層相当で、平坦である。

＜壁＞底面から直立し、上方で外傾する。

＜出土遺物＞縄文土器20点余り出土している。（第79図・写真図版84）

＜時期＞出土した遺物や検出面等から縄文時代と思われる。

第3号陥し穴状遺構（第48図・写真図版56）

＜位置・検出状況＞調査区南より6①区、MⅢ g 11区に位置する。II層下位で検出。

＜形状＞平面形は長楕円形、断面形はY字形を呈する。＜軸方向＞N-70°-E

＜規模＞開口部径330×65cm、底部径335×15cm、深さ173cmを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とする。南部浮石、中振浮石を含む。

＜底面＞VI b層相当で、平坦である。

＜壁＞直立する。

＜出土遺物＞縄文土器4点が出土している。

＜時期＞出土した遺物や検出面等から縄文時代と思われる。

第4号陥し穴状遺構（第48図・写真図版56）

＜位置・検出状況＞調査区中央7④区、JⅢ f 5区に位置する。III層上面で検出。

＜形状＞平面形は長楕円形、断面形はY字形を呈する。＜軸方向＞N-42°-E

＜規模＞開口部径325×59cm 底径部径284×18cm 深さ153cmを測る。

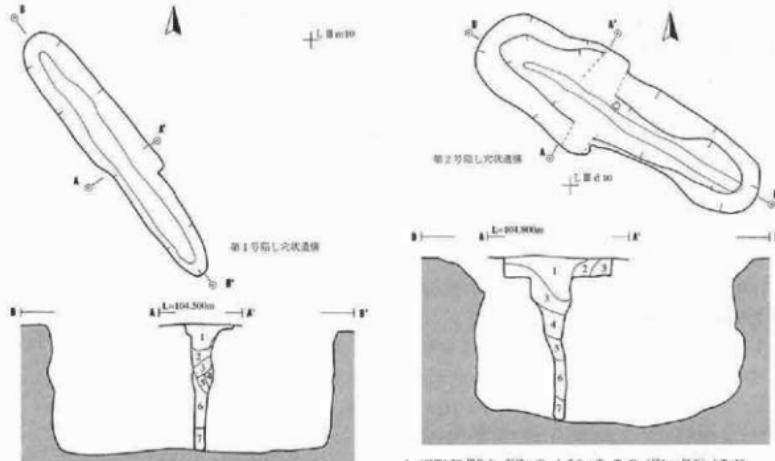
＜埋土＞黒褐色土を主体とする。南部浮石、中振浮石を含む。

＜底面＞VI b層相当で、平坦である。

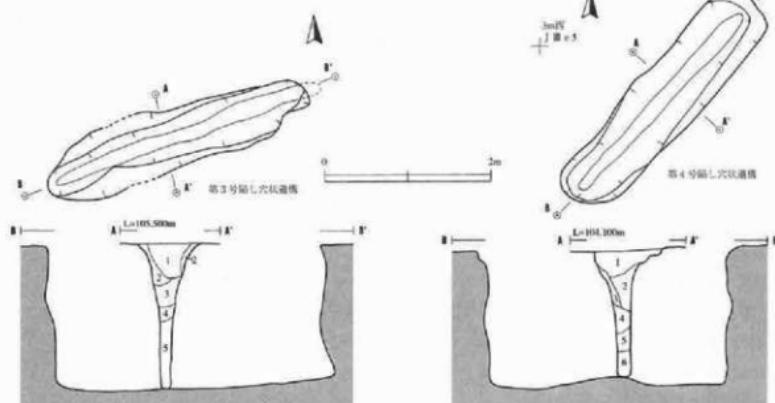
＜壁＞底面から直立し、上方で外傾する。

＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞検出面等から縄文時代と思われる。

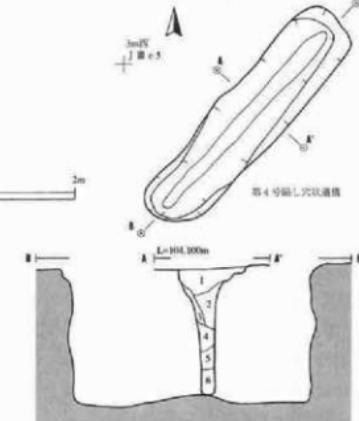


- 1 10YR2/1 黒色土、粘性、やや硬、しまり、やや緑、Te-Cuを全体に3%含む
- 2 10YR2/2 黄褐色土、粘性、適、しまり、やや密、Te-Cuアロフタ1%、Te-CuE3% 豊富
- 3 10YR4/4 黄褐色土、粘性、やや硬、しまり、やや密 Te-CuE5% 豊富
- 4 10YR2/2 黄褐色土、粘性、適、しまり、やや密 Te-CuE (深3mm) を3%含む
- 5 10YR2/2 黄褐色土～10YR4/4 黄褐色土、粘性、やや硬、しまり、硬
- 6 10YR2/2 黄褐色土、粘性、やや硬、しまり、硬 Te-NbE (15-20mm) を30%含む
- 7 10YR4/6 黒色土、粘性、やや硬、しまり、やや密 (縦さすぎ)



- 1 10YR2/2 黄褐色土、粘性、中、しまり、中 Te-NbE (15-20mm) をわずかに含む
- 2 10YR2/2 黄褐色土、粘性、中、しまり、中 色調は1層とほぼ同じであるが中間に青石斑を15%含む
- 3 10YR2/2 黄褐色土、粘性、やや硬、しまり、中 Te-NbE (15-20mm) を10%含む
- 4 10YR2/2 黄褐色土と10YR4/6 黄褐色土の風化土、粘性、やや密、しまり、やや緑、Te-NbE (15-20mm) を15%含む
- 5 10YR2/3 黄褐色土主部、粘性、やや硬、しまり、やや密 Te-NbE (15-20mm) を20%含む

- 1 10YR2/1 黒色土、粘性、中、しまり、中 Te-Cu (15mm以下) と Te-Nb (15-20mm) を各1%含む 量極多し
- 2 10YR2/2 黒色土、粘性、やや硬、しまり、やや緑 Te-Nb (15-20mm) を1%含む
- 3 10YR2/2 黑褐色土、粘性、中、しまり、中 Te-Nb (15-20mm) 0.5%含む
- 4 10YR2/1 黑褐色土、粘性、やや硬、しまり、中 Te-Nb (15-20mm) 0.5%含む
- 5 10YR2/1 黑褐色土、粘性、やや硬、しまり、やや密 Te-Nb (15-20mm) 0.5%含む
- 6 10YR2/2 黑褐色土、粘性、やや硬、しまり、やや密 Te-Nb (15-20mm) 0.5%含む
- 7 10YR2/2 黑褐色土 (粘性、やや硬、しまり、やや緑) と10YR2/4 に近い黄褐色砂質土の風土



- 1 10YR2/2 黑色土、粘性、中、しまり、中 Te-Nb (15mm) を1%含む
- 2 10YR2/2 黑褐色土、粘性、中、しまり、中 Te-Nb (15mm) を2%含む
- 3 10YR2/2 黑褐色土、粘性、中、しまり、中 Te-CuEを2%含む 全体に黄色みがかかる中粒浮石質風化土
- 4 10YR2/2 黑色土、粘性、中、しまり、やや緑 Te-NbE (15-20mm) 0.5%含む
- 5 7.5YR6/2 黄褐色風化漂石、粘性、なし
- 6 10YR2/2 黄褐色土主部、粘性、やや硬、しまり、硬 Te-NbE (15-20mm) 0.7%含む

第48図 第1～4号陥入穴状構造

第5号陥し穴状遺構（第49図・写真図版57）

＜位置・検出状況＞調査区中央7③区、KⅢe6区に位置する。Ⅲ層面で検出。
＜形状＞平面形は長楕円形、断面形はY字形を呈する。＜軸方向＞N-25°-E
＜規模＞開口部径367×58cm 底径部径326×17cm 深さ112cmを測る。
＜埋土＞黒褐色土を主体とする。南部浮石、中摺浮石を含む。
＜底面＞VIb層相当で、平坦である。
＜壁＞底面から直立し、上方で外傾する。

＜出土遺物＞縄文土器1点が出土している。（第79図・写真図版84）

＜時期＞出土した遺物や検出面等から縄文時代と思われる。

第6号陥し穴状遺構（第49図・写真図版57）

＜位置・検出状況＞調査区中央7②区、KⅢt9区に位置する。VIA層で検出。検出が遅れたため下部のみの記録である。
＜形状＞平面形は長楕円形、断面形はY字形を呈すると思われる。＜軸方向＞N-25°-W
＜規模＞開口部径348×18cm 底径部径300×10cm 深さ52cmを測る。
＜埋土＞黒褐色土を主体とする。南部浮石を含む。
＜底面＞VI層相当で、平坦である。
＜壁＞底面から直立する。

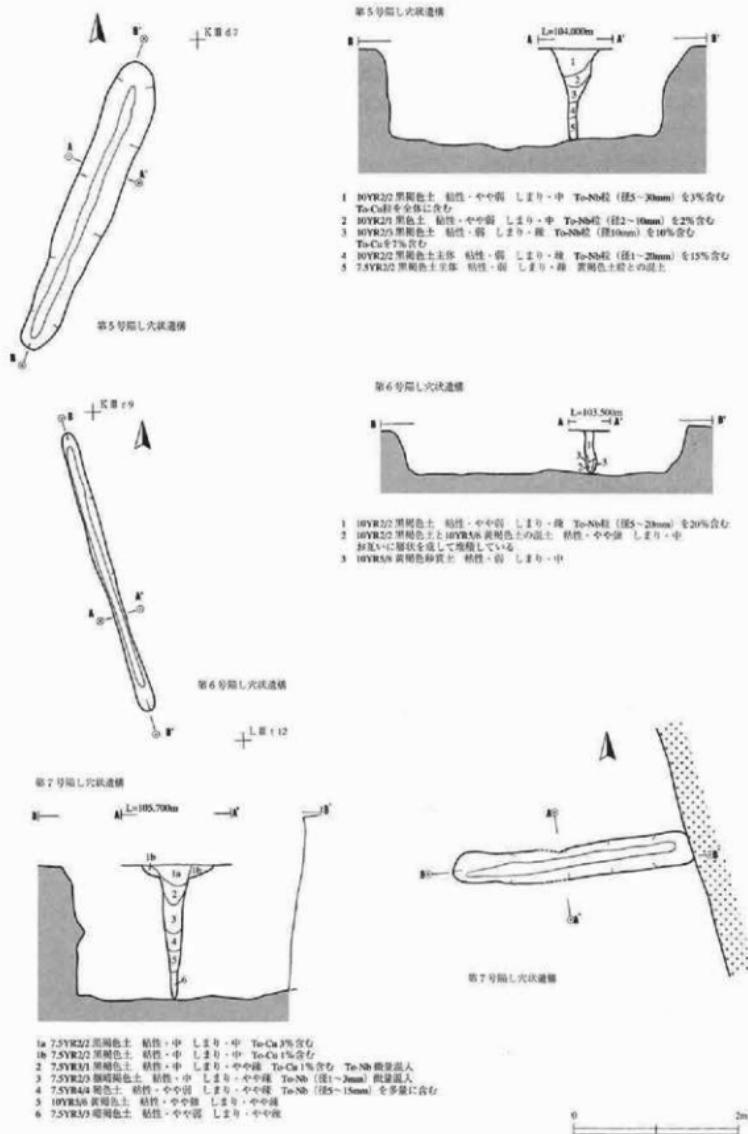
＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞検出面等から縄文時代と思われる。

第7号陥し穴状遺構（第49図・写真図版57）

＜位置・検出状況＞調査区中央6②区、LⅢs10,s11区に位置する。
＜形状＞平面形は長楕円形、断面形はY字形を呈する。N-90°-W
＜規模＞開口部径290×40cm 中端部分径257×14cm 底径部径255×14cm 深さ164cmを測る。
＜埋土＞黒褐色土を主体とする。南部浮石を含む。
＜底面＞VI層相当で、平坦である。
＜壁＞底面から直立する。
＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞検出面等から縄文時代と思われる。



第49図 第5~7号陷し穴状造構

4.柱穴状ピット（第50・51図） 遺物（第79図・写真図版84）

いずれも規則的な配置はみられず、住居跡の柱穴とは断定できなかった。時期についても不明である。
埋土は黒褐色土を主体とする。

ピット群（P77～P129）

＜位置＞調査区中央7①区 (1) L III j 11～L III h 12区 (2) L III i 10～L III l 12区

＜検出状況＞ II層面で検出

＜規模・形状＞(1) 8×10mの範囲、(2) 10×6mの範囲、径15～30cm 深さ10～50cm (30cm前後が多い)。

P 130・P 131・P 132

＜位置＞調査区中央7①区 L III l 11区の平坦面。L III i 10区の平坦面。

＜検出状況＞IV b層で検出 ＜形状＞平面形はほぼ円形を呈する。＜規模＞開口部径35～40cm、底部径22～33cm 深さ23cm前後を測る。

P 133

＜位置＞調査区北寄り7④区 J III e 5区に位置する。＜検出状況＞II層で検出。＜形状＞平面形は梢円形、断面形は円筒形を呈する。＜規模＞開口部径34×32cm 底部径24×18cm 深さ27cmを測る。

P 134

＜位置＞調査区北寄り7④区、J III e 5区、P 133の北105cmの地点に位置する。＜検出状況＞II層で検出
＜形状＞平面形は梢円形、断面形は円筒形を呈する。＜規模＞開口部径36×29cm、底部径16×15cm 深さ27cmを測る。

P 135

＜位置＞調査区北寄り7④区、J III g 6区の平坦面に位置する。＜検出状況＞II層で検出。＜形状＞平面形は梢円形、断面形はV字形を呈する。＜規模＞開口部径60×47cm、底部径20×18cm、深さ43cmを測る。

P 136

＜位置＞調査区南寄り6①区、M III j 9区平坦面に位置する。＜検出状況＞II層で検出。＜形状＞平面形は円形、断面形は円筒形を呈する。＜規模＞開口部径28cm、底部径20cm、深さ27cmを測る。

P 137

＜位置＞調査区南寄り6①区、M III k 10区の平坦面に位置する。＜検出状況＞II層で検出。＜形状＞平面形は不整円形、断面形は深鉢形を呈する。＜規模＞開口部径35cm 底部径17cm 深さ38cmを測る。

P 138

＜位置＞調査区南寄り6②区、L III r 10区の平坦面に位置する。＜検出状況＞II層で検出。＜形状＞平面形は不整円形、断面形は逆台形を呈する。＜規模＞開口部径23×20cm、底部径10cm、深さ11.7cmを測る。

P 139

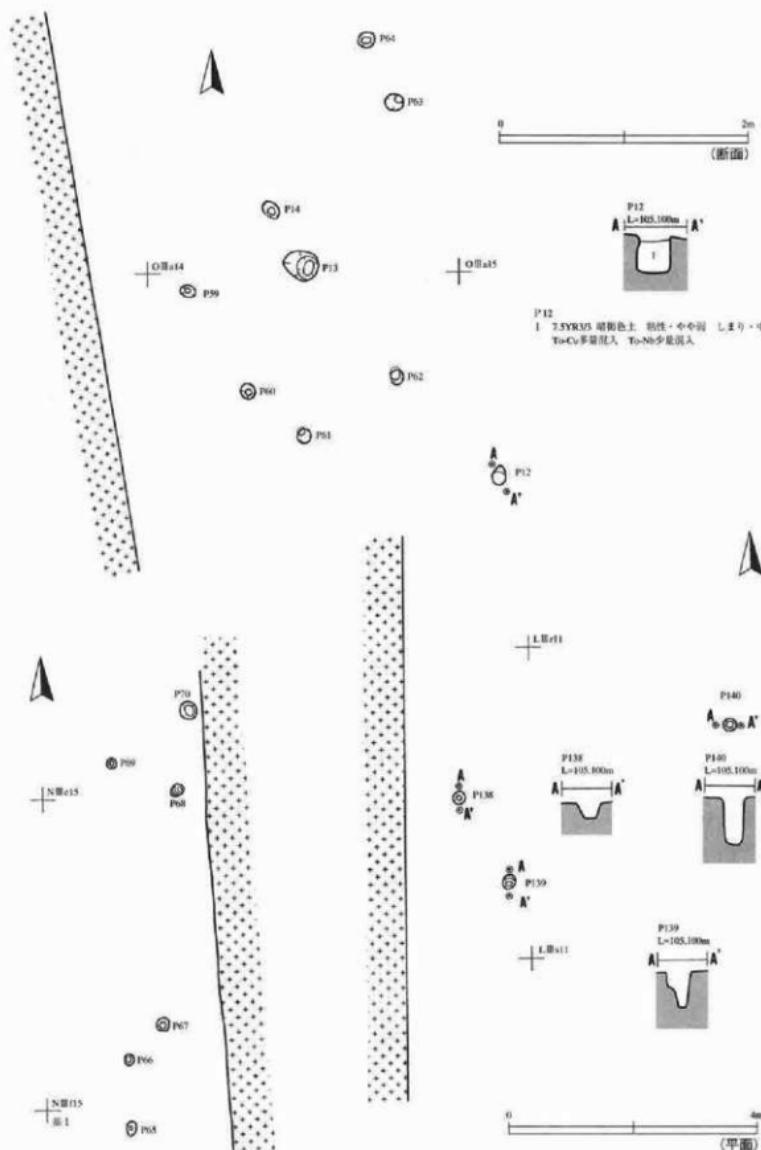
＜位置＞調査区南寄り6②区、L III r 10区の平坦面、P 138の南東約130cmに位置する。＜検出状況＞II層で検出。＜形状＞平面形は不整円形、断面形は中端を持つ円筒形を呈する。＜規模＞開口部径20×19cm、底部径13×9cm、深さ28cmを測る。

P 140

＜位置＞調査区南寄り6②区、L III r 11区の平坦面に位置する。＜検出状況＞II層で検出。＜形状＞平面形は不整円形、断面形は円筒形を呈する。＜規模＞開口部径20×18cm、底部径14×11cm、深さ37cmを測る。



第50図 柱穴状ピット (1)



第51図 柱穴状ビット (2)

5. 石圓炉・焼土遺構

石圓炉 2基と焼土23基が検出された。焼土の規模・形状は一様ではないが、いずれも強く赤変している。焼土の周囲からは明確な柱穴は検出されず、住居の床面と判断できる痕跡も確認されない。

第1号石圓炉（第52図・写真図版58）

＜位置＞4区の平坦面、OⅢa14区に位置する。

＜検出面＞II層面で、石圓炉の構成縦を検出した。構成縦と思われるものが周囲に散在する。住居に伴う跡と考えられるが、壁の立ち上がりや柱穴を検出できないため独立した石圓炉として登録した。重機による搅乱があり、破壊された可能性が高い。

＜規模・形状＞63×68cm、亜角縦8個で構成される。焼土の範囲35×54cm ＜厚さ＞11cm

＜遺物＞出土していない。

＜時期＞詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代に属すると思われる。

第2号石圓炉（第52図・写真図版58）

＜位置＞6①区の平坦面、MⅢ G11区に位置する。

＜検出面＞II層面で検出された。上面には十和田a降下火山灰が堆積する。

＜規模・形状＞180×190cm、炉は砂岩で構築される。焼土の範囲90×80cmの円形 ＜厚さ＞15cm前後

＜遺物＞土師器片数十点が確認された。

＜時期＞出土遺物の特徴から判断し、平安時代と思われる。周囲に第24号住居跡があることから、これに連する施設と思われる。

第1号焼土（第52図・写真図版58）

＜位置＞調査区中央7①区の平坦面、LⅢ f 10区に位置する。

＜検出面＞Via層で検出された。

＜規模・形状＞122×43cmの不整な長楕円形 ＜厚さ＞15~23cm ＜遺物＞出土していない。

＜時期＞詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

第2号焼土（第52図・写真図版58）

＜位置＞調査区中央7①区の平坦面、LⅢ n 11区に位置する。

＜検出面＞Via層で検出された。

＜規模・形状＞124×30cmの長楕円形、 ＜厚さ＞13cm ＜遺物＞出土していない。

＜時期＞詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

第3号焼土（第53図・写真図版59）

＜位置＞調査区中央7①区の平坦面、LⅢ l 11区に位置する。

＜検出面＞Via層で検出された。

＜規模・形状＞58×21cmの不整形 ＜厚さ＞19cm ＜遺物＞出土していない。

＜時期＞詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

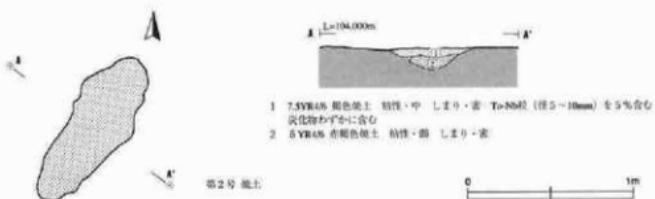
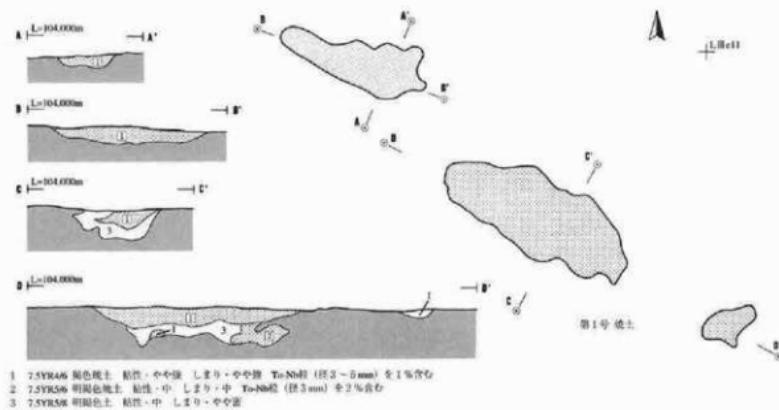
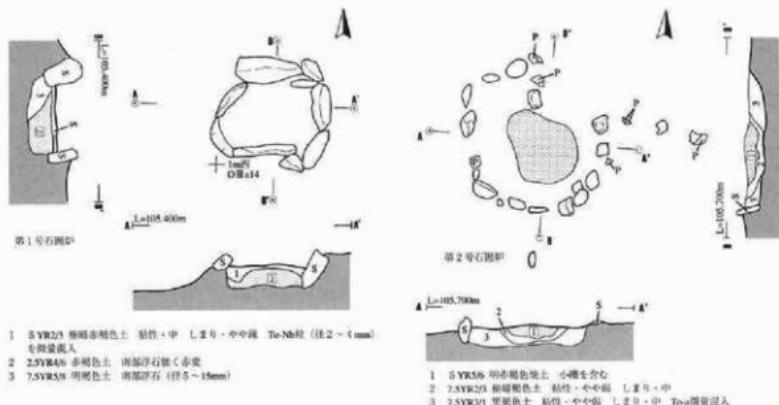
第4号焼土（第53図・写真図版59）

＜位置＞調査区中央7①区の平坦面、LⅢ k 11区に位置する。

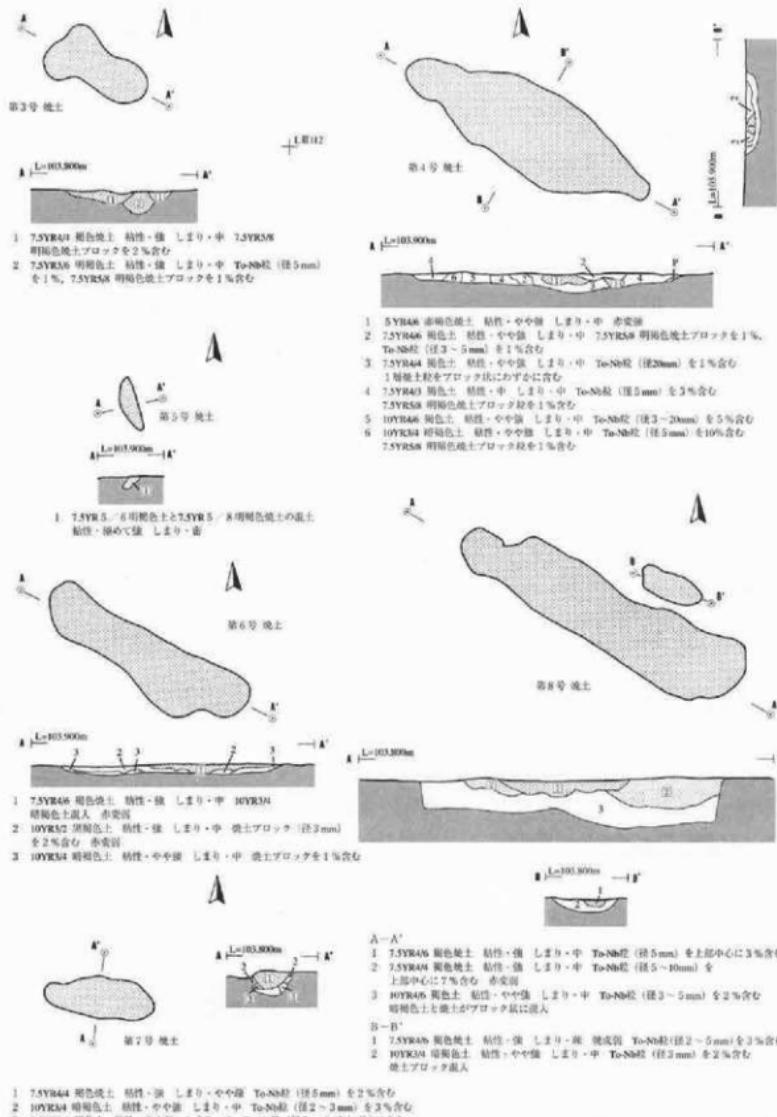
＜検出面＞Via層で検出された。

＜規模・形状＞161×51cmの不整な長楕円形 ＜厚さ＞18cm

＜遺物＞貝殻腹縁圧痕を施す土器片1点が出土している。（第79図・写真図版84）



第52図 第1号・2号石圓炉、第1号・2号燒土



第53図 第3~8号焼土

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期中葉に属すると思われる。炉穴の可能性もある。

第5号焼土（第53図・写真図版59）

<位置>調査区中央7①区の平坦面、L III k 11に位置する。第4号焼土の北45cmにある。

<検出面>V1a層で検出された。

<規模・形状>31×7cmの長楕円形 <厚さ>8cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

第6号焼土（第53図・写真図版59）

<位置>調査区中央7①区の平坦面、L III l 10区に位置する。

<検出面>V1a層で検出された。

<規模・形状>132×19cmの長楕円形、<厚さ>5cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

第7号焼土（第53図・写真図版60）

<位置>調査区中央の平坦面、L III l 10区、6号焼土の北東2.3mに位置する。

<検出面>V1a層で検出された。

<規模・形状>67×24cmの長楕円形 <厚さ>14cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

第8号焼土（第53図・写真図版60）

<位置>調査区中央7①の平坦面、L III k 10区に位置する。

<検出面>V1a層で検出された。

<規模・形状>187×32cmの長楕円形 <厚さ>16~27cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

第9号焼土（第54図・写真図版60）

<位置>調査区中央7①区の平坦面、L III j 1 1区に位置する。

<検出面>V1a層で検出された。

<規模・形状>196×31cmの不整な長楕円形 <厚さ>11cm前後 <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

第10号焼土（第54図・写真図版61）

<位置>調査区中央7①区の平坦面、L III j 10区、第9号焼土の北東2.1mに位置する。

<検出面>V1a層で検出された。

<規模・形状>130×37cmの長楕円形 <厚さ>11cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

第11号焼土（第54図・写真図版61）

<位置>調査区中央7①区の平坦面、L III h 10区に位置する。

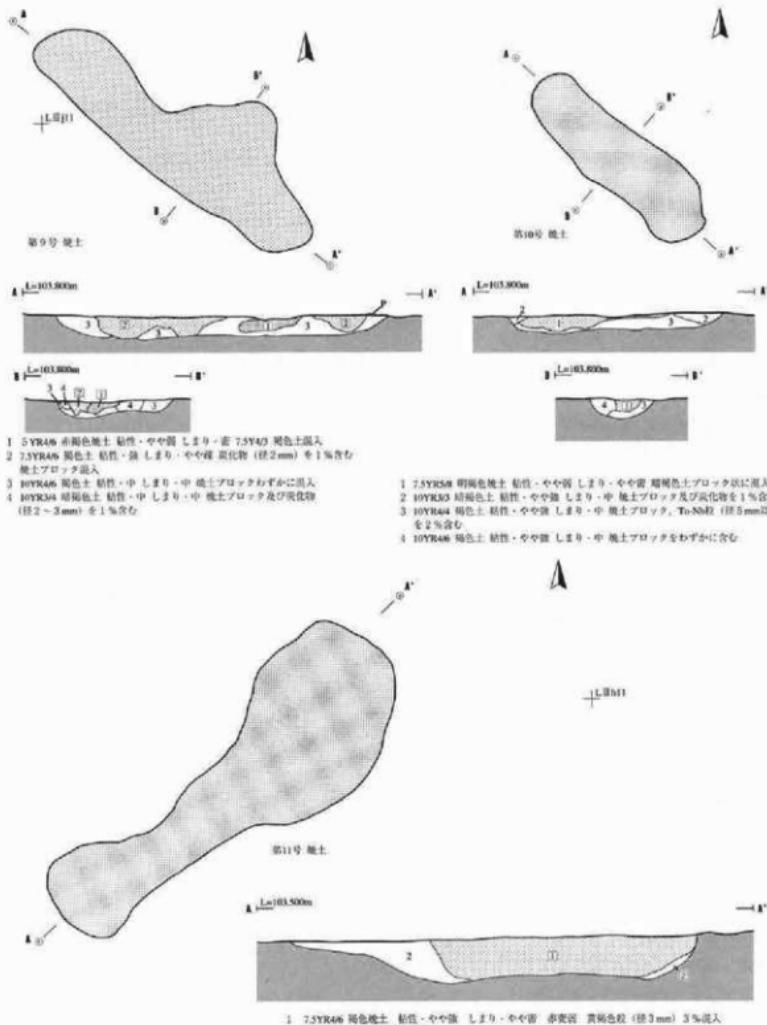
<検出面>V1a層で検出された。

<規模・形状>248×35cmの不整な長楕円形 <厚さ>21cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。

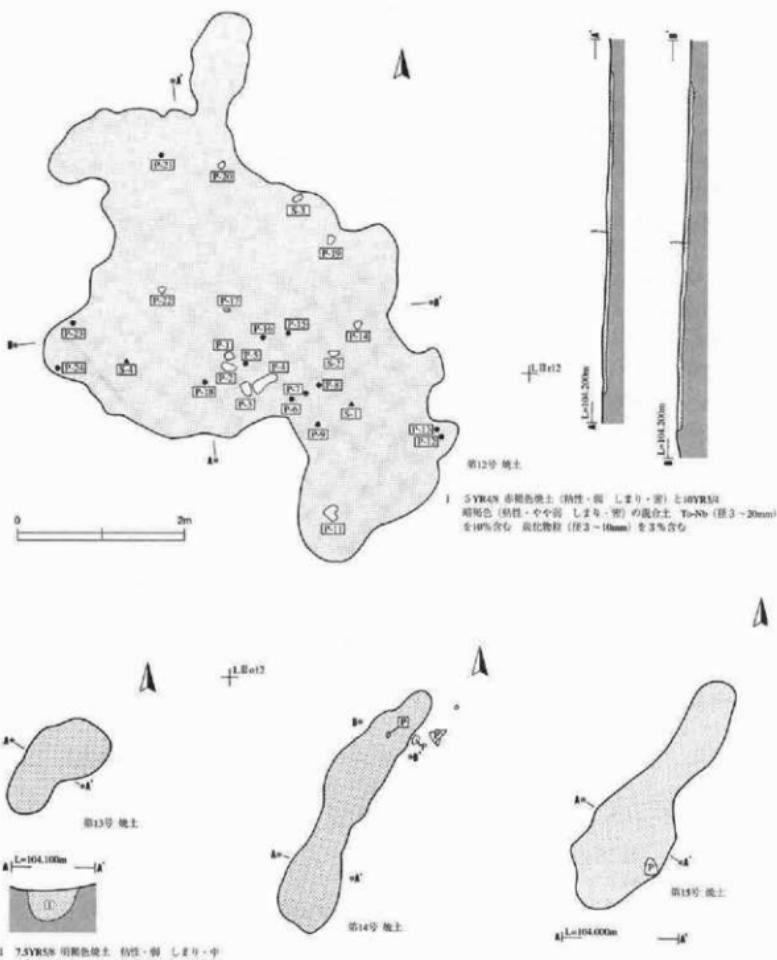
第12号焼土（第55図・写真図版61）

<位置>調査区南寄り6②区、L III q 11,r11区に位置する。



第54図 第9~11号地土

- <検出面> VI層で検出された。比較的範囲の大きい焼土であり、焼失した住居跡とも考えられるが、住居となる痕跡は確認できない。
- <規模・形状>600×345cmの不整形 <厚さ>約5～7cm
- <遺物>縄文早期中葉と思われる土器片が多数と石器1点が出土した。土器はいずれも貝殻模様が施される。(第79・80図・写真図版84・85)
- <時期>出土した遺物の特徴から縄文早期中葉と思われる。
- 第13号焼土（第55図・写真図版61）
- <位置>調査区南寄り6③区、L III o10区に位置する。
- <検出面> VI層で検出された。
- <規模・形状>52×30cmの不整円形 <厚さ>19cm <遺物>出土していない。
- <時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。
- 第14号焼土（第55図・写真図版62）
- <位置>調査区南寄り6③区、L III o12区に位置する。
- <検出面> VI層で検出された。
- <規模・形状>320×68cmの不整な長楕円形 <厚さ>9～23cm
- <遺物>石器2点が出土している。(第80図・写真図版85)
- <時期>検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。
- 第15号焼土（第55図・写真図版62）
- <位置>調査区南寄り6③区、L III n 12,o12区、第14号焼土の北側30cmに位置する。
- <検出面> VI層で検出された。
- <規模・形状>280×41cmの不整形 <厚さ>20～50cm <遺物>出土していない。
- <時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。
- 第16号焼土（第56図・写真図版62）
- <位置>調査区南寄り6③区、L III n 10区に位置する。
- <検出面> VI層で検出された。
- <規模・形状>200×30cmの不整長楕円形 <厚さ>8～19cm <遺物>出土していない。
- <時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代早期に属すると思われる。
- 第17号焼土（第56図・写真図版62）
- <位置>4区、O III e 16に位置する。
- <検出面> II層で検出された。
- <規模・形状>53×23cmの不整形 <厚さ> 5～9cm <遺物>出土していない。
- <時期>検出状況や周囲の出土遺物の特徴から判断し、縄文時代中期以降と思われる。
- 第18号焼土（第56図・写真図版63）
- <位置>5区、N III e 14に位置する。
- <検出面> II層中で検出された。第34号土坑の上面に広がる。
- <規模・形状>80×120cmの不整形 <厚さ>11cm <遺物>出土していない。
- <時期>検出状況等から判断し、縄文時代と思われる。
- 第19号焼土（第56図・写真図版63）



第55図 第12~15号焼土

<位置>5区の平坦面、N III d 14に位置する。

<検出面> II層中で検出された。

<規模・形状>45×50cmの不整楕円形 <厚さ>3~9cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代に属する可能性がある。

第20号焼土（第56図・写真図版63）

<位置>4区、O III h 15に位置する。

<検出面> III層中で検出された。

<規模・形状>52×45cmの不整形 <厚さ>9cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代前期以降と思われる。

第21号焼土（第56図・写真図版63）

<位置>4区、O III g 14に位置する。

<検出面> III層中で検出された。

<規模・形状>35×19cmの不整形 <厚さ>5cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代前期以降と思われる。

第22号焼土（第56図・写真図版64）

<位置>調査区南寄り 6②区、L III q 12区に位置する。

<検出面> VI層で検出された。

<規模・形状>22×18cmの不整形 <厚さ>約2cm <遺物>出土していない。

<時期>詳細は不明であるが、検出状況から縄文時代中期以降と思われる。

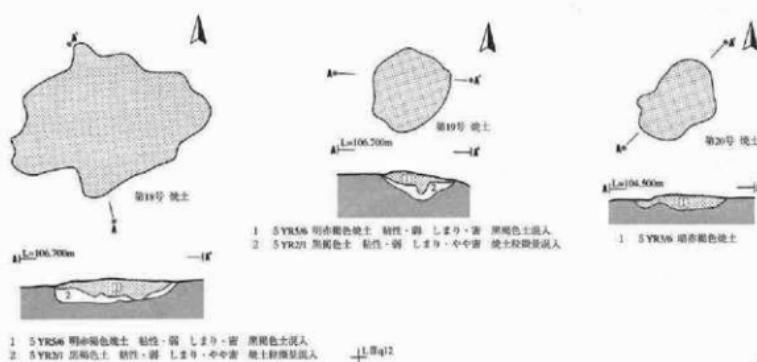
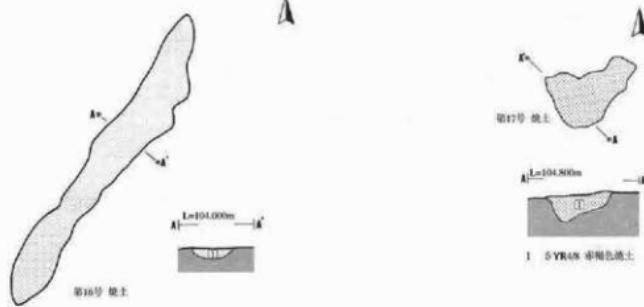
第23号焼土（第56図・写真図版64）

<位置>調査区中央 7②区、K III q 9区に位置する。

<検出面> II層中で検出された。

<規模・形状>52×11cmの不整形 <厚さ>3cm <遺物>出土していない。

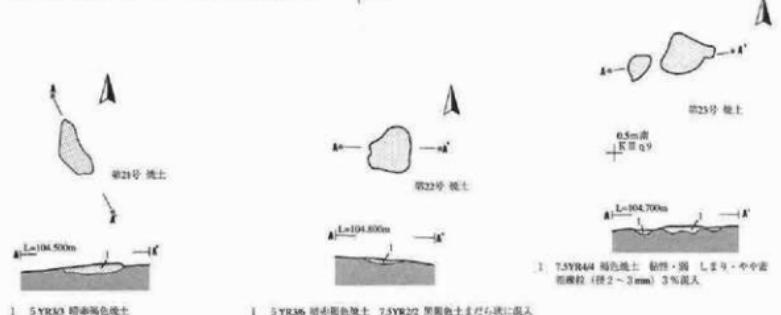
<時期>詳細は不明であるが、検出状況から古代以降と思われる。



1. 5YR5/6 明赤褐色燒土：粘性・弱 しまり・青 黑褐色土混入
2. 5YR2/1 黑褐色土：粘性・弱 しまり・やや青 烧土粒微混入

+ L. Sq. 2

1. 5YR5/6 明赤褐色燒土：粘性・弱 しまり・青 黑褐色土混入
2. 5YR2/1 黑褐色土：粘性・弱 しまり・やや青 烧土粒微混入



1. 5YR5/6 明赤褐色燒土：粘性・弱 しまり・青 黑褐色土混入
2. 5YR2/1 黑褐色土：粘性・弱 しまり・やや青 烧土粒微混入



第56図 第16~23号焼土

6. 溝状遺構

調査区全体で17条検出した。

第1号溝状遺構（第57図・写真図版64）

<位置>調査区南部4区の緩やかな傾斜地、O III h 17～g 18区に位置する。<検出状況>II層上面で検出。

<形状>平面形は溝状、断面形は皿状を呈する。<規模>長さ9.3m 幅35～138cm 深さ7cmを測る。

<埋土>黒褐色土を主体とする。上面に十和田a降下火山灰が堆積する。<出土遺物>出土していない。

<時期>不明である。

第2号溝状遺構（第57図・写真図版64）

<位置>調査区南部4区の緩やかな傾斜地 O III i 17～h 18区に位置する。<検出状況>II層上面で検出。

第2号溝状遺構に平行する。<形状>平面形は溝状、断面形は皿状を呈する。<規模>長さ8.95m、幅47～123cm、深さ11cmを測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。上面に十和田a降下火山灰が堆積する。

<出土遺物>出土していない。<時期>不明である。

第3号溝状遺構（第57図・写真図版65）

<位置>調査区南部4区 N III e 13～a14区に位置する。<検出状況>II層上面で検出。<形状>平面形は溝状、断面形はU字形を呈する。<規模>長さ22m 幅21～45cm 深さ25～30cmを測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む。<出土遺物>出土していない。<時期>不明である。

第4号溝状遺構（第57図・写真図版65）

<位置>調査区南寄り6区 M III f 11区の平坦面に位置する。<検出状況>II層面で検出。第5,6号溝状遺構に平行する。<形状>平面形は溝状、断面形は皿状を呈する。<規模>長さ5.38m、幅24cm、深さ5cmを測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む。<出土遺物>出土していない。<時期>不明である。

第5号溝状遺構（第57図・写真図版65）

<位置>調査区南寄り6区、M III f 11区の平坦面に位置する。<検出状況>II層面で検出。<形状>平面形は溝状、断面形は皿状を呈する。<規模>長さ4.5m 幅25cm 深さ8cmを測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む。<出土遺物>出土していない。<時期>不明である。

第6号溝状遺構（第57図・写真図版65）

<位置>調査区南寄り6区、M III g 11～f 11区に位置する。<検出状況>II層面で検出した。<形状>平面形は溝状、断面形は皿状を呈する。<規模>長さ4.87m 幅26cm 深さ8cmを測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む。<出土遺物>出土していない。<時期>不明であるが、畠跡の可能性がある。

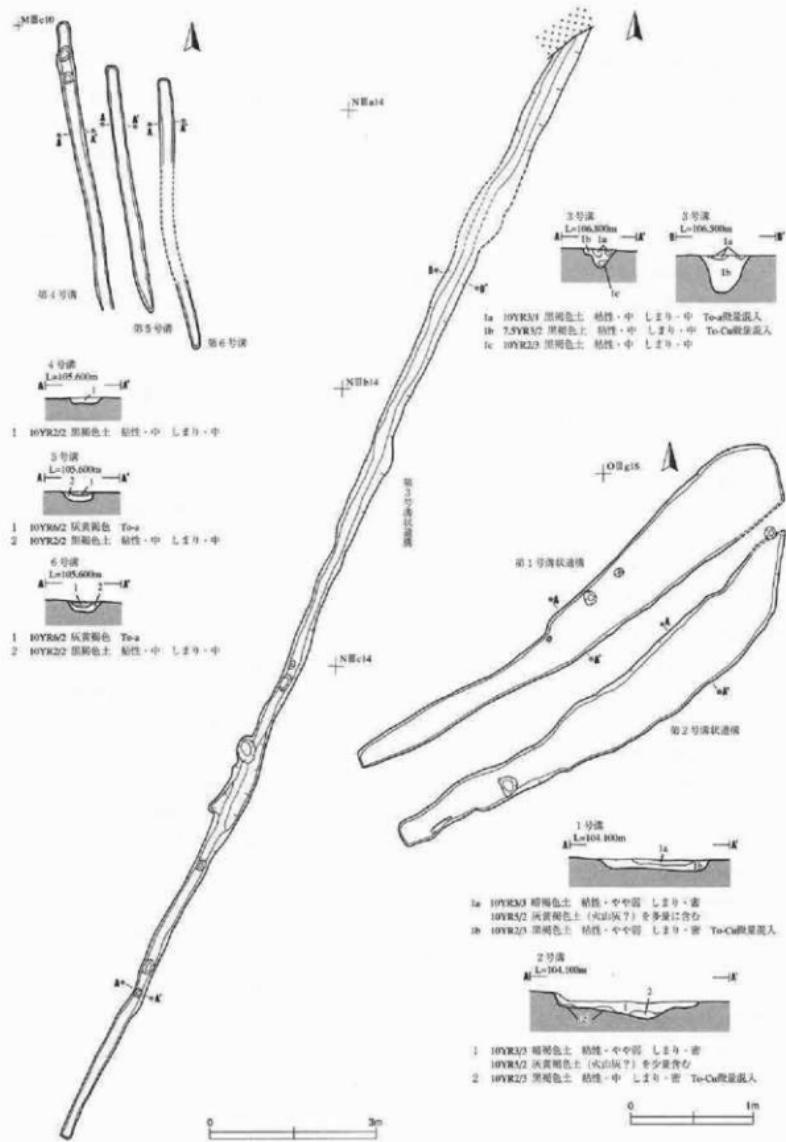
第7号溝状遺構（第58図・写真図版66）

<位置>調査区中央6③～7②区、L III n 12～L III b 10区の平坦面に位置する。<検出状況>II層面で検出した。<形状>平面形は溝状ではほ直線的に延びる。断面形は概ね浅鉢状を呈する。<規模>長さ70m、幅35cm前後、深さ15cm前後を測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む。

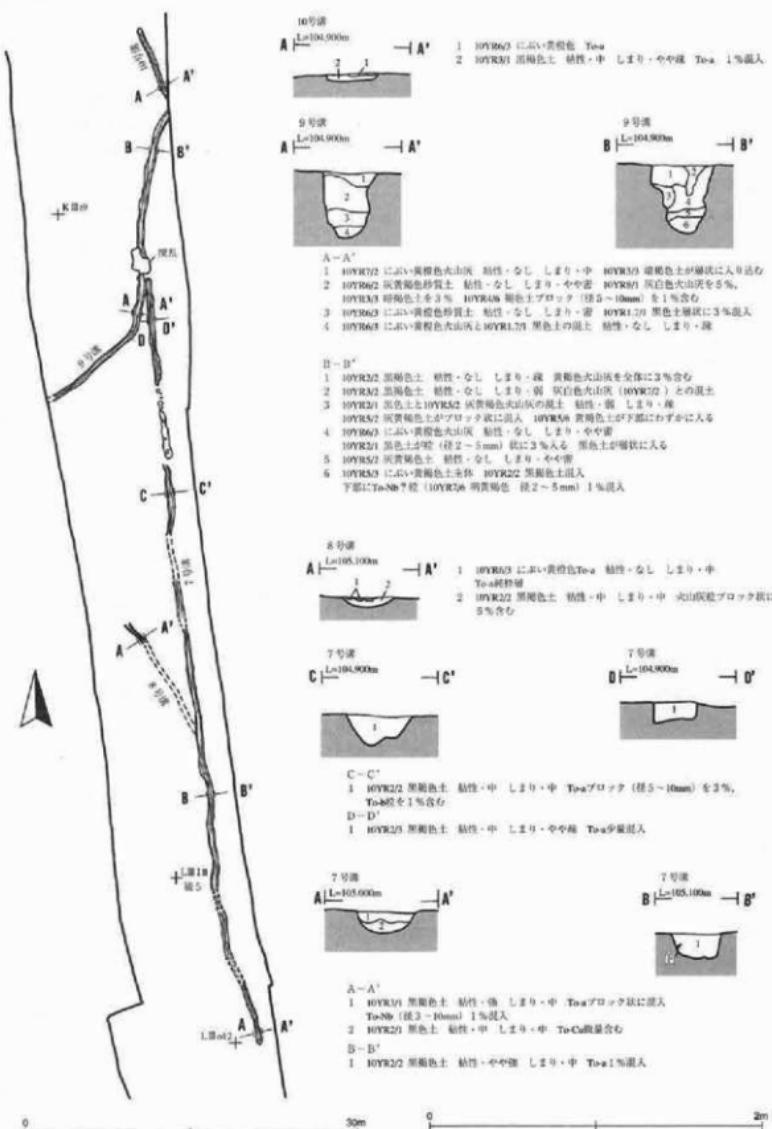
<出土遺物>縄文土器5点、土器部6点が出土している。<時期>出土遺物や検出面から古代と思われる。

第8号溝状遺構（第58図・写真図版67）

<位置>調査区中央7①区、L III j 11～L III i 10区の平坦面に位置する。<検出状況>II層面で検出した。<形状>平面形は溝状、断面形は浅鉢状を呈する。<規模>長さ11m、幅35cm前後、深さ5～10cmを測る。



第57図 第1～6号溝状遺構



第58図 第7~10号溝状堆積

<埋土>黒褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む。<出土遺物>出土していない。<時期>検出面等から古代と思われる。

第9号溝状遺構（第58図・写真図版67）

<位置>調査区中央7②区、LⅢ d 9～KⅢ s 11区の平坦面に位置する。<検出状況>Ⅱ層面で検出した。第13号溝状遺構を切る。<形状>平面形は溝状、断面形はU字形を呈する。<規模>長さ30m、幅35cm前後、深さ40cm前後を測る。<埋土>にぶい黄橙色沙質土を主体とする。<出土遺物>出土していない。<時期>検出面等から古代と思われる。

第10号溝状遺構（第58図・写真図版68）

<位置>調査区中央7②区、KⅢ r 10～KⅢ q 10区の平坦面に位置する。<検出状況>Ⅱ層面で検出した。<形状>平面形は溝状、断面形は皿状を呈する。<規模>長さ6.8m 幅35cm 深さ5cm前後を測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む。<出土遺物>出土していない。<時期>検出面等から古代と思われる。

第11号溝状遺構（第59図・写真図版68）

<位置>調査区中央7②区、KⅢ q 9～KⅢ p 10区の平坦面に位置する。<検出状況>Ⅱ層面で検出した。<形状>平面形は溝状、断面形は浅鉢状を呈する。<規模>長さ16m、幅220cm前後、深さ27cm前後を測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。十和田a降下火山灰を含む。<出土遺物>出土していない。<時期>検出面等から縄文～古代と思われる。

第12号溝状遺構（第59図・写真図版69）

<位置>調査区南寄り5区、MⅢ r 11～MⅢ o 15区の平坦面に位置する。<検出状況>Ⅱ層面で検出した。南西および北東部は調査区外へのびる。第14、15号溝状遺構に切られる。<形状>平面形は溝状、断面形は浅鉢状を呈する。<規模>長さ20m、幅120cm前後、深さ30cm前後を測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。<出土遺物>石器1点が出土している。（第80図・写真図版85）<時期>検出面等から古代以降と思われる。

第13号溝状遺構（第59図・写真図版69）

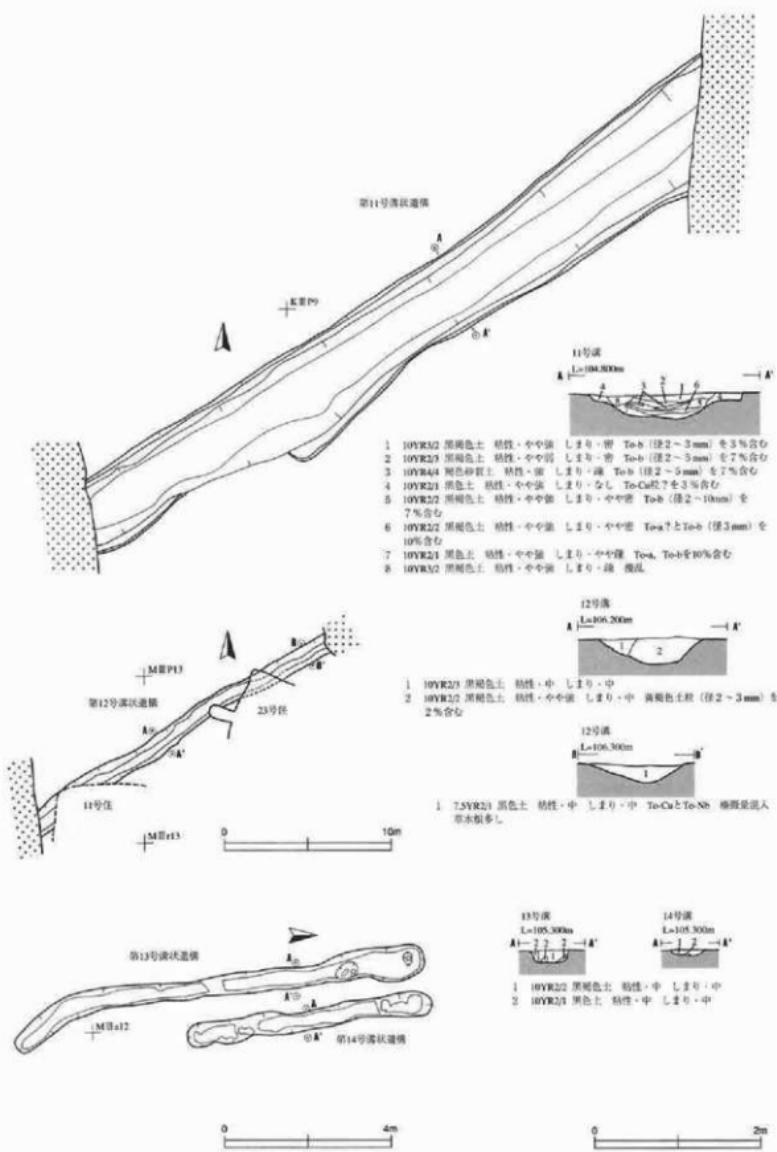
<位置>調査区南寄り6②区、LⅢ t 11区の平坦面に位置する。<検出状況>Ⅱ層上面で検出した。<形状>平面形は溝状、断面形は浅鉢状を呈する。<規模>長さ10m、幅45cm、深さ13cmを測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。<出土遺物>出土していない。<時期>検出面や周囲の状況等から古代～中世と思われる。

第14号溝状遺構（第59図・写真図版69）

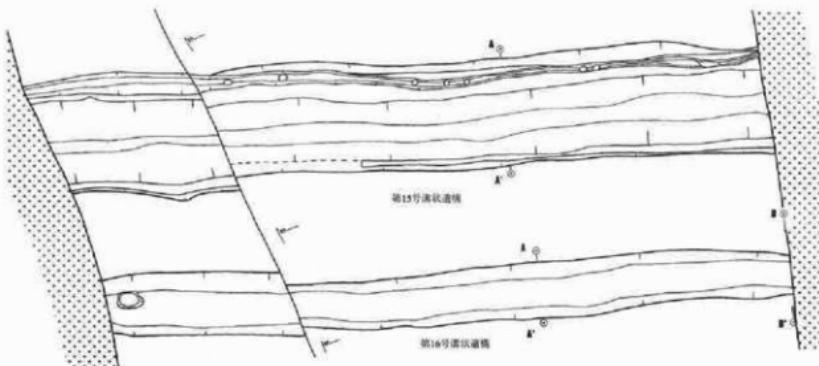
<位置>調査区南寄り6②区、LⅢ t 11区の平坦面に位置する。第13号溝状遺構の東に平行する。<検出状況>Ⅱ層上面で検出した。<形状>平面形は溝状、断面形は皿状を呈する。<規模>長さ195cm 幅17cm前後、深さ7cm前後を測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。<出土遺物>出土していない。<時期>検出面や周囲の状況等から古代～中世と思われる。

第15号溝状遺構（第60図・写真図版70）

<位置>調査区北寄り7④区、JⅢ g 3～JⅢ g 6区の平坦面に位置する。<検出状況>Ⅱ層面で検出した。<形状>平面形は溝状、断面形は逆三角形を呈する。北側に溝がもう一条平行する。<規模>長さ17.2m、幅160cm、深さ84cmを測る。北側部分は長さ17.5m 幅30cm 深さ21cmを測る。<埋土>黒褐色土を主体とする。<出土遺物>土器3点が出土している。<時期>検出面や周囲の状況等から古代以降と思われる。区画溝の可能性がある。



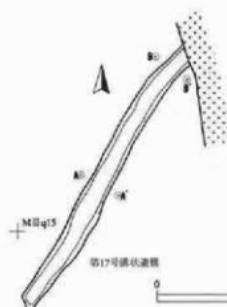
第59図 第11～14号溝状堆積



A



1. HYRK20 黒色土 粘性・中 しまり・やや硬 断面風呂? 下部にTo-Cr混入
2. HYRK20 黒色土とHYRK17の黒色土の疊土 粘性・中 しまり・中 (裏りすぎ?)
3. HYRK20 黒褐色土 粘性・中 しまり・薄 To-Nbと思われる白色粒2%
4. HYRK20 黒色土 粘性・強 しまり・やや硬 黄褐色粒(径2mm)を2%含む
5. HYRK20 黒褐色土 粘性・中 しまり・薄 黄褐色粒(径2~4mm)を7%含む
6. HYRK20 黒色土 粘性・やや強 しまり・薄 To-Nb粒(径2~10mm)を3%含む
7. HYRK20 黒色土 粘性・中 しまり・やや強 To-Nb粒(径5~10mm)を10%含む 部分が全体に混入 (上: 細=30:50)
8. HYRK17 黒色土 粘性・強 しまり・薄 To-Nb粒(径5~10mm)を7%含む
9. HYRK17 黑色土 粘性・やや強 しまり・中 黄褐色粒(径2mm)をわずかに含む
10. HYRK20 黑褐色土 粘性・やや強 しまり・中 黄褐色粒(径1~2mm)を全体に3%含む



第60図 第15~17号溝状構

第16号溝状遺構（第60図・写真図版70）

＜位置＞調査区北寄り 7④区、J III h 3～J III h 6区に位置する。＜検出状況＞Ⅱ層面で検出、第15号溝状遺構の南側に平行する。＜形状＞平面形は溝状、断面形は逆台形を呈する＜規模＞長さ16.8m、幅120cm深さ50cmを測る。＜埋土＞黒褐色土を主体とする。南部浮石をわずかに含む。＜出土遺物＞出土していない。＜時期＞検出面や周囲の状況等から古代以降と思われる。

第17号溝状遺構（第60図・写真図版70・71）

＜位置＞調査区南寄り 5②区、M III q 15～M III p 15区に位置する。＜検出状況＞Ⅱ層面で検出した。北東部は調査区外にのびる。＜形状＞平面形は溝状、断面形は浅鉢状を呈する。＜規模＞長さ358cm、幅19～30cm、深さ7～13cmを測る。＜埋土＞黒褐色土を主体とする。中標浮石を含む。＜出土遺物＞出土していない。＜時期＞検出面や周囲の状況等から古代以降と思われる。

7. 崩状遺構（第61・62図・写真図版71・72）

＜位置＞調査区南寄り 6②区 M III a 12～L III r 12区に位置する。

＜検出状況＞Ⅱ層面で検出した。東部は調査区外にのびる。該部分は削平される。

＜形状＞平面形は溝状、畝間部分は浅鉢状を呈する。

＜規模＞106m²の範囲内に18条の畝間が見られる。長さ各106～630cm 幅38～70cm 深さ10cm前後を測る。＜埋土＞十和田a降下火山灰を含む黒褐色土を主体とする。

＜出土遺物＞縄文土器6点と土師器片1点が出土している。縄文土器は崩造成時に混入したものと思われる。土師器片は12号住居の土器片と接合したことから、住居に伴う崩跡の可能性がある。

＜時期＞検出面や周囲の状況等から古代と思われる。

付篇参照

8. 井戸跡（第63図・写真図版72）

＜位置＞調査区北寄り 7④区、J III n 5区の平坦面に位置する。

＜検出状況＞Ⅱ層面で検出した。円形の黒色土と礫が確認された。崩落の危険性があり、完掘不能であった。

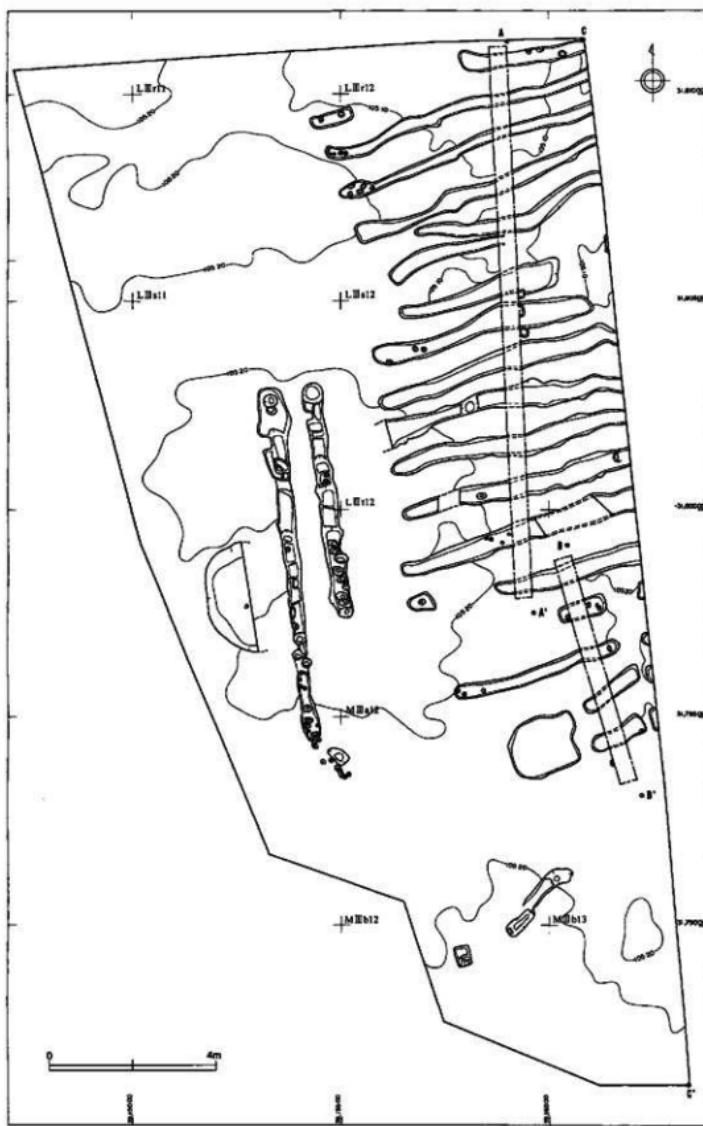
＜形状＞平面形はほぼ円形を呈する。

＜規模＞開口部径407cm、底部径259cm、深さ250cm（推定）を測る。10～50cm前後の礫が径230cmの円形に組まれる。

＜埋土＞十和田a降下火山灰を含む黒褐色土を主体とする。

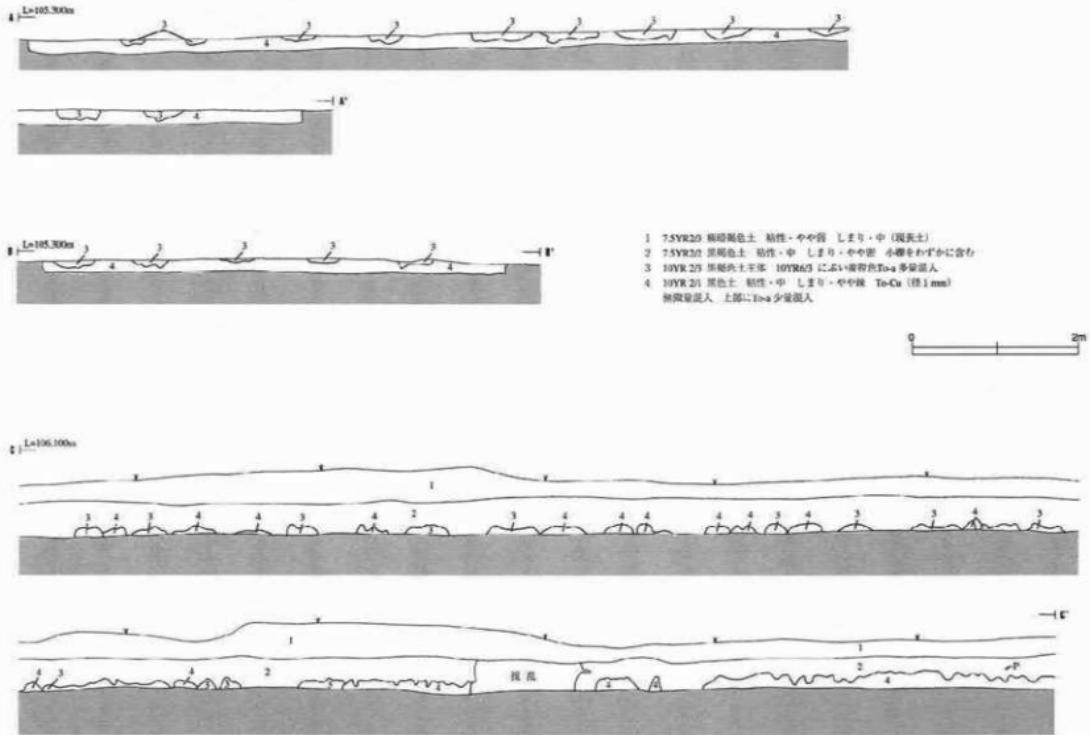
＜出土遺物＞近現代の陶磁器が出土した。

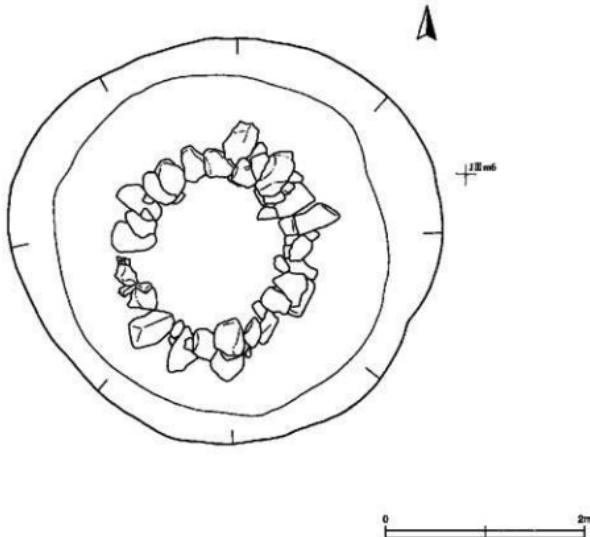
＜時期＞検出面や周囲の状況等から判断し近現代のものと思われる。



第61図 異状造構(1)

第62図 高状造構(2)





第63図 井戸跡

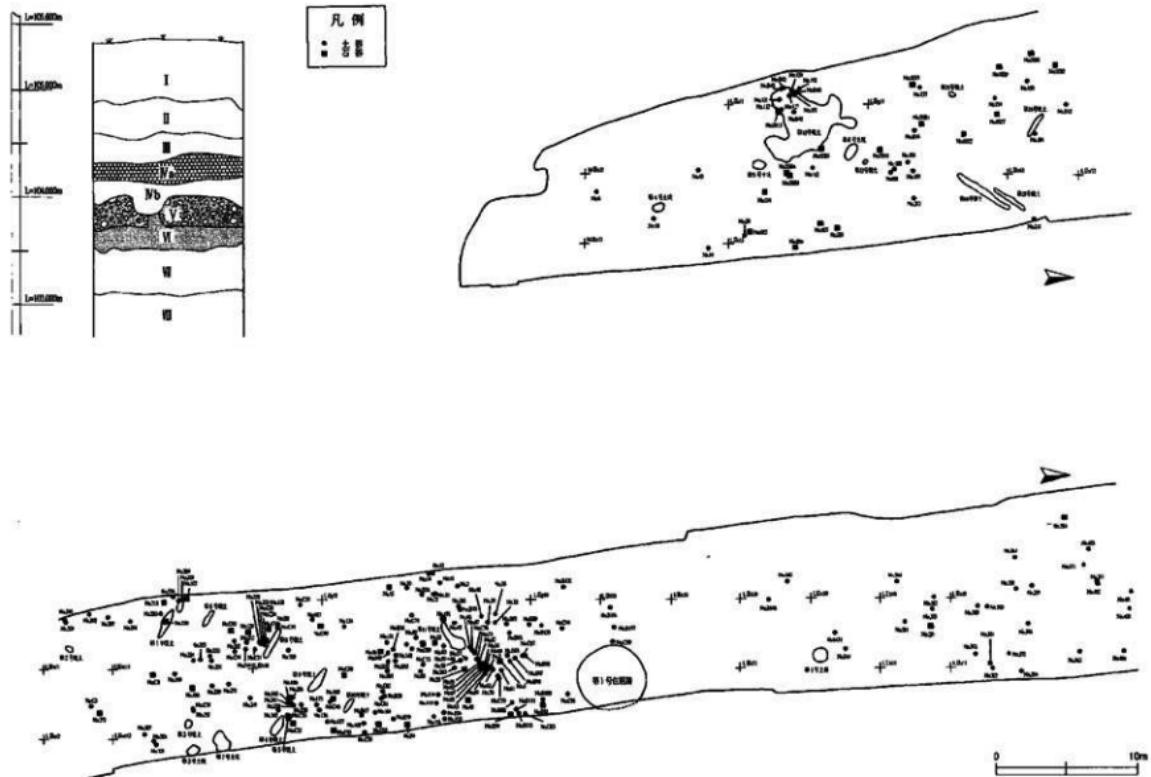
9. 遺物包含層

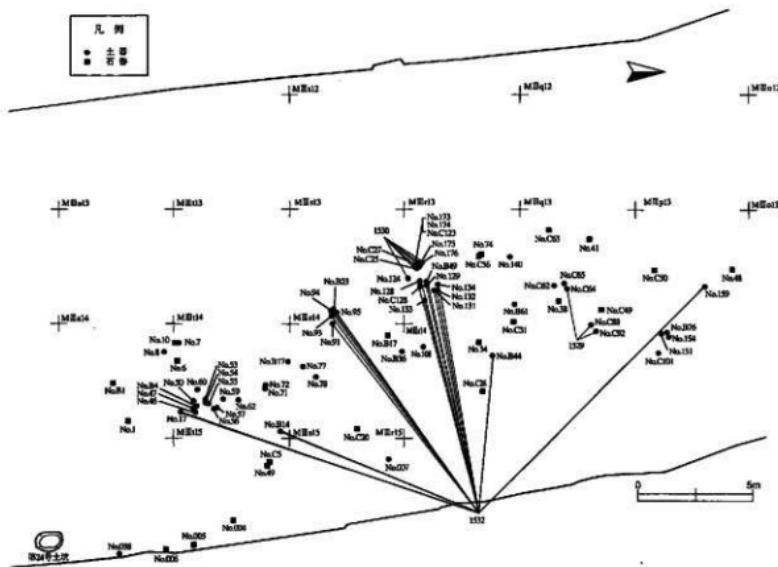
(1) 縄文早期遺物包含層

調査区の中央部6②区～7②区にかけて縄文早期遺物包含層が広がる。明確な包含層を把握することは困難であるが、長瀬B遺跡の調査結果から推定し、馬瀬川方向に向かって、東方に延びているものと思われる。当層は基本土層のⅦ層にあたる。出土した遺物は全て南部浮石の下からで、土器型式は寺の沢式に比定される。取り上げはほとんどを点取りとし、掲載した遺物の出土地点については取り上げ番号を記した。

(2) 縄文前期遺物包含層

調査区の中央部5区～6①区にかけて縄文前期遺物包含層が広がるが、密度としては薄くはない。層位はIV a層で、南部浮石の上層にあたる。土器型式は長七谷地Ⅲ群に比定される。





第65図 遺物包含層（前期）

V. 遺構外出土遺物

1. 土器 (第81~93図・写真図版86~94)

遺構外から出土した土器類の総量は、大コンテナ (42×32×30cm) 約14箱である。この内縄文土器は12箱、土師器は2箱である。縄文土器は早期から晩期にわたるが、半数は縄文早期の土器である。出土地点は調査区中央部5区から7-②区にかけてが大半を占める。特に遺物包含層としてとらえた範囲からの出土が顕著である。

ここでは、最近の土器編年研究の成果を考慮に入れながら、縄文時代早期をI群、前期をII群、中期をIII群、後期をIV群、晩期をV群、弥生時代をVI群、古代の土師器をVII群に時期区分した。これらの中で細分可能なものについては従来の土器型式によって分類を試みた。なお、実測図及び写真図版の掲載にあたっては基本土層のVI層（早期）、IVa層（前期初頭）、その他の層に分け掲載した。

＜第I群土器＞ 縄文時代早期中葉に位置づけられる土器群で、寺の沢式土器に比定される一群である。出土層位は基本土層のVI層である。胎土には浮石を含むものが圧倒的に多く、焼成は良好である。内面はナデまたはミガキによる調整がなされる。復原個体数は多くはないが、器形は殆ど弾状の尖底深鉢形土器である。尖底部の角度は60°~80°の間に集中する（第109図）。体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものが多い。口縁部形態は平縁口縁、左右不均整の波状口縁、片口状口縁に大別されるが、平縁口縁の割合が多い。口唇部形態は内角に明確な棱があり外傾するもの（外削ぎ）とやや丸味を呈し後が明確でないものの2種類に分類される。口唇部には貝殻腹縁压痕文・短貝殻腹縁压痕文・ヘラ刻みなどが施される。施文文様は貝殻文・刺突文・沈線文の3要素が認められ、これらの要素の組み合わせは以下のとおりである。

- A 貝殻文のみを施文するもの
- B 刺突文のみを施文するもの
- C 貝殻文と刺突文を施文するもの
- D 刺突文と沈線文を施文するもの
- E 貝殻文と刺突文と沈線文を施文するもの
- F 貝殻文と沈線文を施文するもの

各要素の出現の比率は、貝殻文が圧倒的に多い。貝殻文は施文手法の違いにより、貝殻腹縁压痕文（腹縁を短く加工した貝を押圧した文様を含む）、貝殻腹縁押し引き文、貝殻背压痕文に分けられる。貝殻腹縁压痕文は斜位・綫位・横位に单一あるいは組合せにより施文する。斜位の施文は同一の傾きで地的に施される場合が多いが、傾きを変えることで羽状に施文するものもある。綫位・横位の組み合わせで幾何学的文様を構成するものもみられる。

刺突文には、棒状工具、ヘラ状工具、竹管様工具等が用いられている。区画文として施文されているものもみられる。

沈線文は幅1~2mm程度の浅い施文が多い。刺突文とあわせて口縁部文様帯を構成するものや区画文として施文されているものなどがある。

＜第II群土器＞ 縄文時代前期に位置づけられる土器群である。出土層位はIVa層からIII層下位である。

1 a 類 前期初頭に位置づけられる土器群で、長七谷地Ⅲ群に比定される一群である。口縁はほとんどが平縁を呈する。底部は丸底を基本とするが、体部下半から口縁部までほぼ真っ直ぐに立ち上がるものと体部下半から口縁部までやや外傾して立ち上がり口縁がやや開くものと2種類に分けられる。口唇部は丸味をもってつくられるものと平坦に整形しているものがある。胎土には植物纖維や浮石が含まれるものが多い。器面には0段多条によるLR、RL2本の異原体を用いて羽状縄文を表すことを特徴としている。羽状縄文は原体を強く回転押捺しているため条がやや深く、条と条の境に明瞭な稜が見られるものが多い。

1 b 類 前期初頭に位置づけられる土器群で、上川名II式、花積下層式に類似する一群である。口縁は平縁や波状を呈する。胎土には纖維・浮石を含む。撚糸圧痕による渦巻文や刺突文・隆帯などを組み合わせ施文する。

1 c 類 前期初頭に位置づけられる土器群で、早稻田6類に類似する土器である。285、286は同一個体と推定され、縄文のみを施す平縁の深鉢である。底部は乳房状の尖底である。胎土に纖維を含む。

2 類 前期末葉に位置づけられる土器群で、円筒下層d式に比定される一群である。木目状撚糸文や多軸絡条件が用いられる。胎土に纖維・浮石が混入する。

<第Ⅲ群土器> 縄文時代中期に位置づけられる土器群である。

1 a 類 中期中葉に位置づけられる土器群で、円筒上層c土器に類似する一群である。301は貼り付けとヘラ状工具による刺突文がみられる。

1 b 類 中期中葉に位置づけられる土器群で、大木8b式に類似する一群である。302は口縁部がやや外反する山形口縁で渦巻状の貼り付けがみられる。

2 類 中期末葉に位置づけられる土器群で、大木10式に比定される一群である。小破片が多く器形や形態の詳細が明確なものは少ないが、口縁部が外反ぎみに直立する器形が主体であると思われる。

<第Ⅳ群土器> 縄文時代後期に位置づけられる土器群である。

1 類 後期初頭に位置づけられる土器群である

2 類 後期前葉の十腰内I式に相当すると思われる土器群である。沈線文を主体としている。

3 類 後期中葉の十腰内II式に相当すると思われる土器群である。

4 類 後期末葉の十腰内V式に相当すると思われる土器群である。

<第Ⅴ群土器> 縄文時代晩期に位置づけられる土器群である。

1 類 晩期中葉前半、大洞C1式に相当すると思われる土器群である。347は2個1対の小突起をもち、口縁部に沈線が施される。

2 類 晩期中葉後半、大洞C2式に相当すると思われる土器群である。磨消縄文が施されるほか、口縁部等に連続する刻目や沈線が用いられている。

3 類 晩期終末期、大洞A'式に相当すると思われる土器群である。356は変形工字文が施される口縁部片である。

<第VI群土器> 弥生時代中期に位置づけられる土器と思われる。357は体部に3条の平行沈線をもつ壺と思われる。

<第VII群土器> 古代の土師器である。遺構外遺物であるが何らかの遺構に伴う遺物と思われる。いずれも

非ロクロ成形の土師器である。358は丸底風の杯である。359は底部に木葉痕のある外面ヘラミガキ調整の鉢、360は頭部に平行沈線が施されるハケメ・ヘラミガキ主体の甕である。

2. 石器・石製品類 (第94~103図・写真図版95~100)

今回の調査で出土した石器・石製品の総数は大コンテナで6箱を数える。これらの内使用痕の認められない剥片類、破損及び風化の著しい砾石器を除いて登録し、内151点を実測掲載した。

石製品を含め器種ごとに分類したが、その器種内で形状や個々の特徴等により細分したものもある。細分の仕方については以下に示した。なお、実測図及び写真図版の掲載にあたっては基本土層のVI層(早期)、IVa層(前期初頭)、その他の層に分け掲載した。

A. 石鎚

茎の有無と基部の形状から以下のように細分される。

I群 有茎鎚

1類 凸基

II群 無茎鎚

1類 平基 (VI層、IVa層で多く出土している。)

2類 凹基

III群 棒状

B. 石匙

ツマミの位置と刃部の縦・横によって2つに分類した。

I群 横形のもの

II群 縦形のもの

C. 石箒

D. 尖頭器

ほぼ全体に成形加工が及び尖った刃部を有する。

E. 不定形石器

上記以外の剥片石器を一括し、形状と刃部の形態により分類した。

I群 剥片の1縁辺、2~3縁辺、全縁に刃部加工が施される石器で、各種スクレーパー類とされる石器である。

II群 細部加工剥片・使用痕の認められる剥片

F. 磨製石斧

G. 磨石・敲石・凹石類

これらを一括して扱い、複数の使用痕が認められる場合はそれぞれの組み合わせで細分した。

I群 磨石……磨面(擦面)を有する砾石器

II群 凹石……凹みを有する砾石器

III群 敲石……敲打痕を有する砾石器

IV群 磨石と凹石の特徴を有する砾石器

V群 敲石と凹石の特徴を有する砾石器

VI群 磨石と敲石の特徴を有する砾石器

H. 石皿

片面に使用痕をもつ。

I. 石錐

491は中央部が太い溝状に加工される。

J. 砥石

492は四面使用の砥石である。

K. 有孔石製品

493については用途不明である。

L. 扱状耳飾り

再加工痕が認められる。付篇P207~210参照。

3. 土製品（第104図・写真図版101）

遺構外から出土した土製品類（ミニチュア土器を含める）は土偶1点、ミニチュア土器2点、円盤状土製品7点、泥面子1点である。

A. 土偶

495は頭部から胸部が残存する土偶で、沈線文・刺突文で描かれる。縄文後期と推定される。

B. ミニチュア土器

手づくねのミニチュア土器である。

C. 円盤状土製品

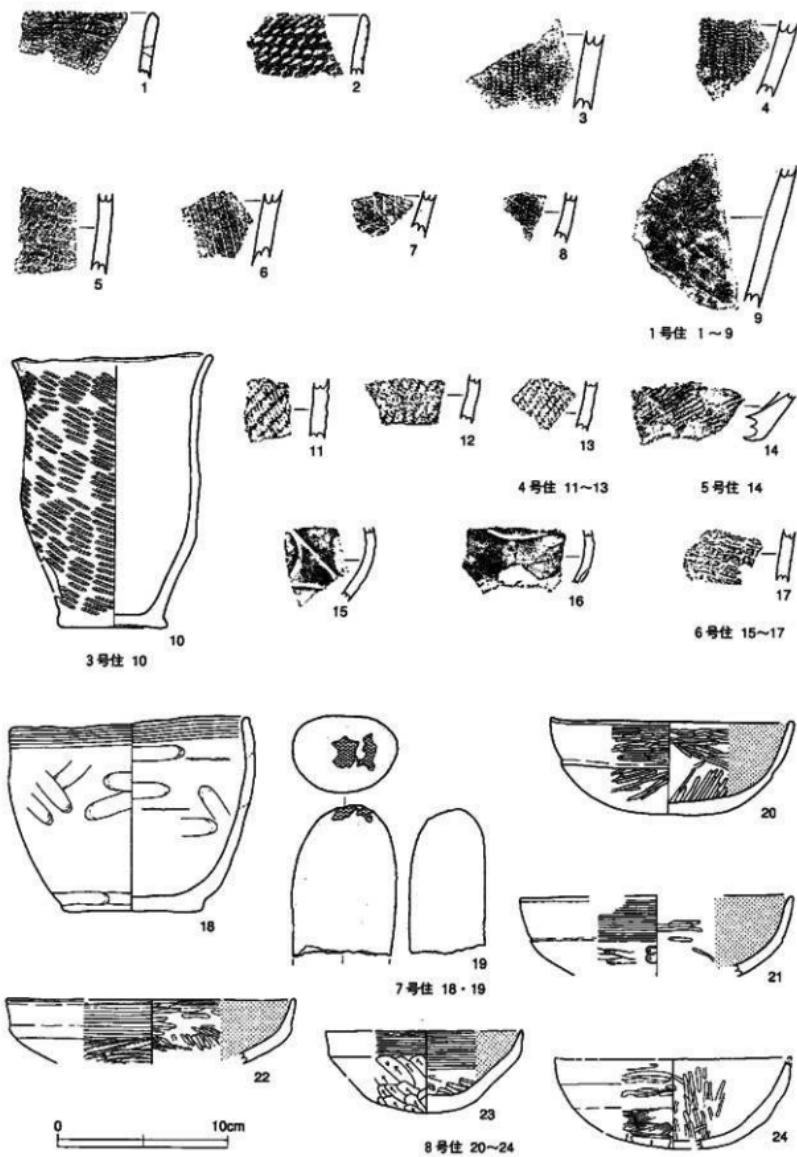
いずれも側縁打欠きで、一部研磨された様子がうかがえる。

D. 泥面子

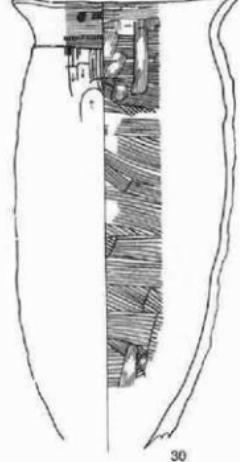
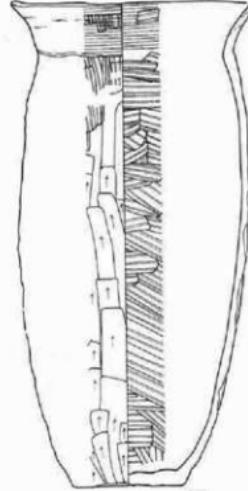
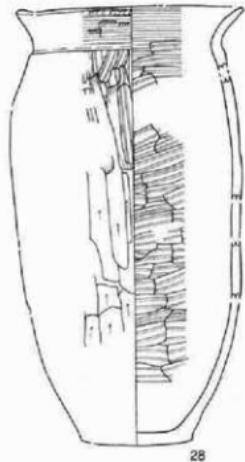
近世の遺物と思われる。

4. 金属製品（第105図・写真図版102）

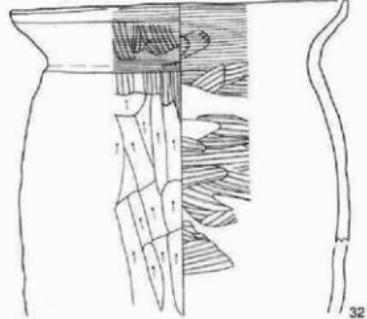
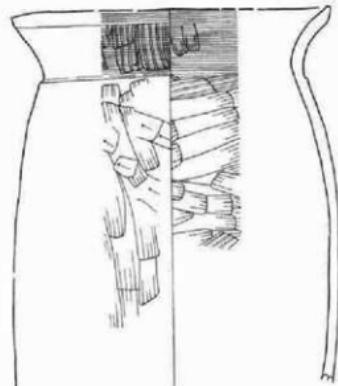
508から511は鉢写しの模鋳銭の可能性が大きい。514から516は遺構外出土遺物であるが、近世の墓壙に関わる錢貨と思われる。



第66図 造模内出土遺物 (1)

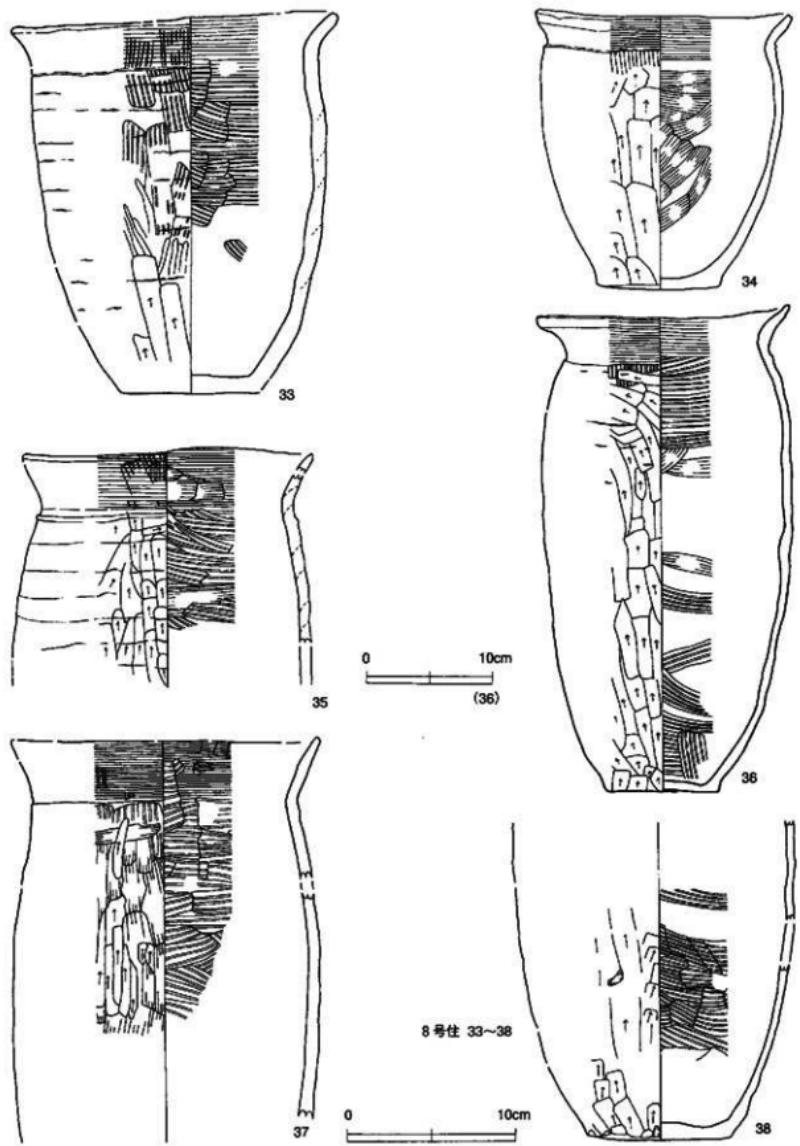


0 10cm
(28~30)

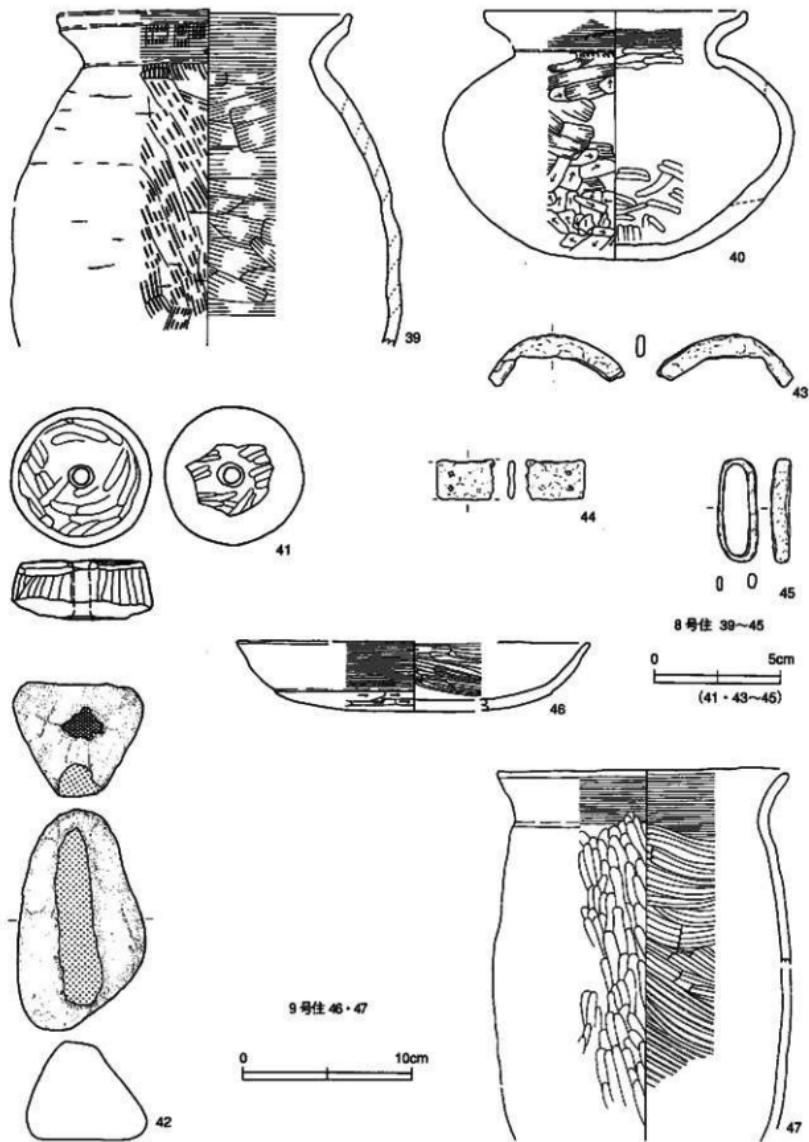


0 10cm
8号住 25~32

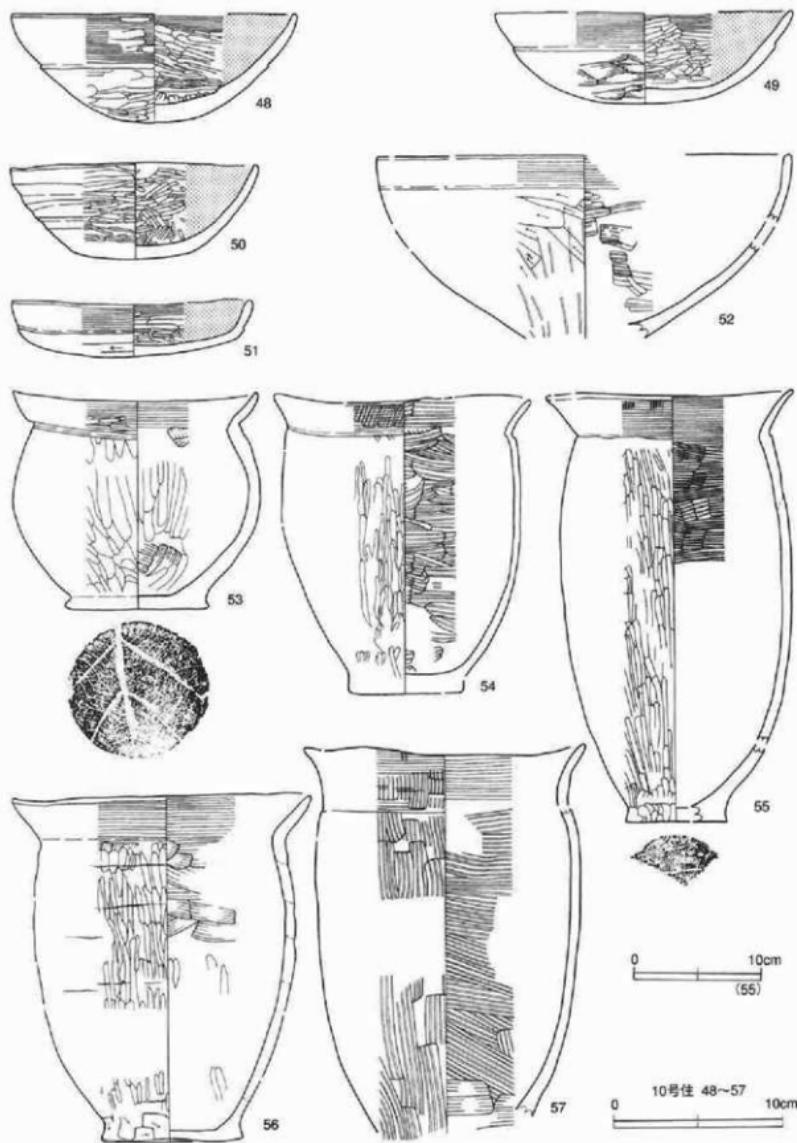
第67図 造構内出土遺物（2）



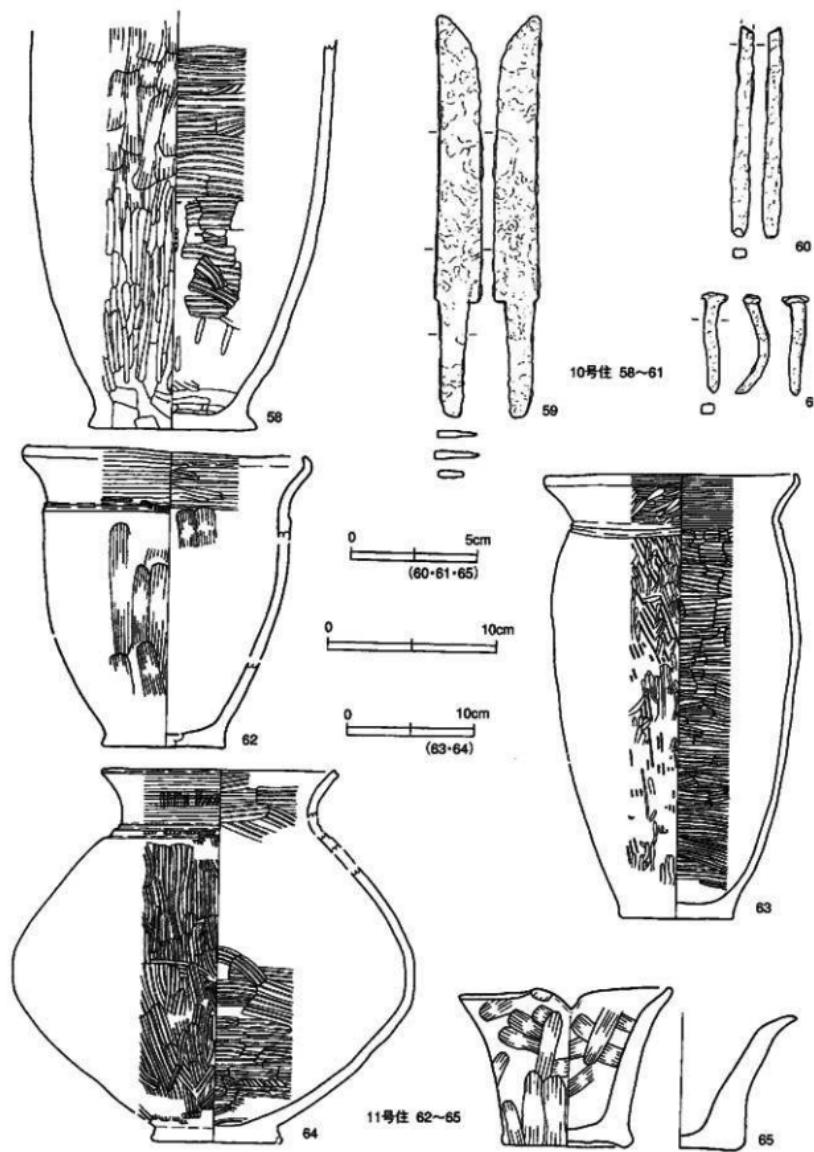
第68図 造模内出土遺物 (3)



第69図 遺構内出土遺物（4）



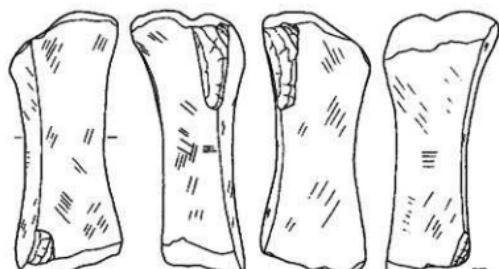
第70図 造構内出土遺物 (5)



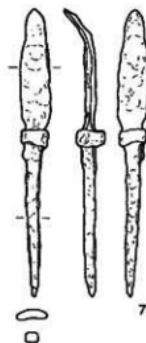
第71図 遺構内出土遺物 (6)



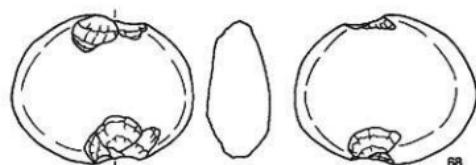
66



67



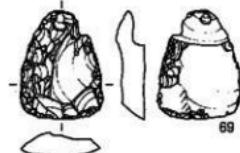
68



69



70



71

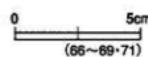


72

11号住 66~72

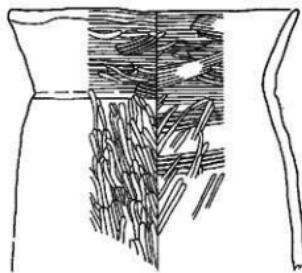


11号住 73



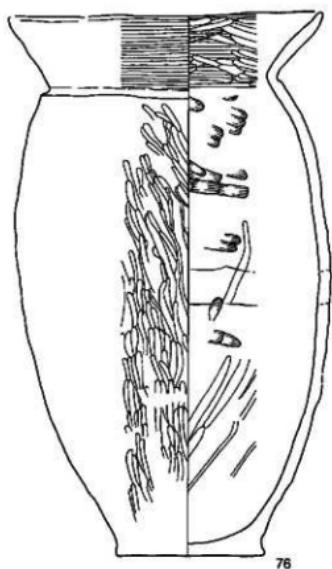
74

13号住 74·75



75

第72图 造模内出土遗物(7)

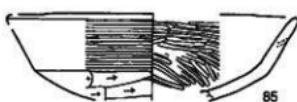
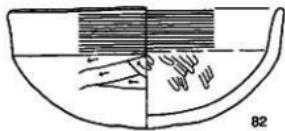


13号住 76~79

0 5cm
(77~79)



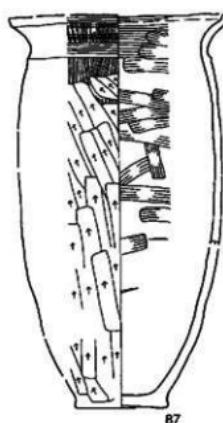
14号住 80



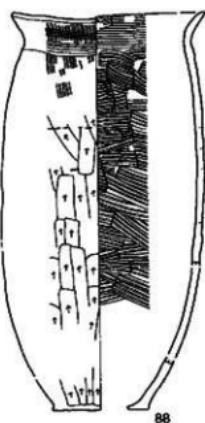
15号住 81~86

0 10cm

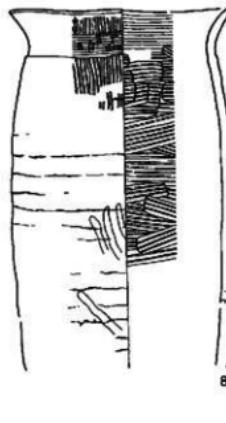
第73図 遺構内出土遺物 (8)



87

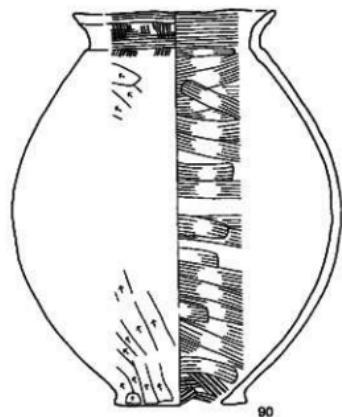


88



89

0
10cm
(87 - 88)



90



91



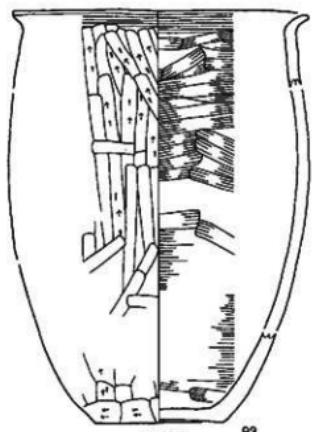
92

15号住 87~92

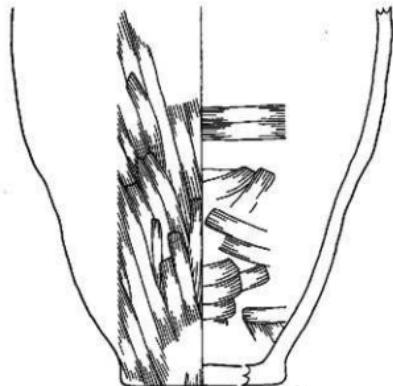
0
10cm
(89 - 90)

0
5cm

第74図 遺構内出土遺物（9）



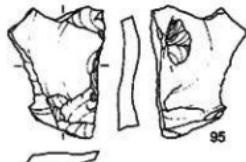
93



94



0 10cm
(95)

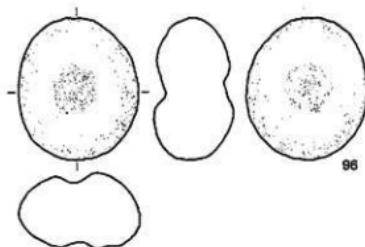


95

0 5cm
(95)



97

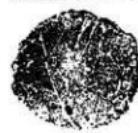


96

20号住 93~96



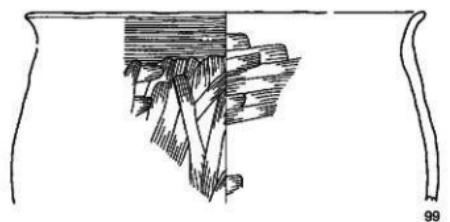
98



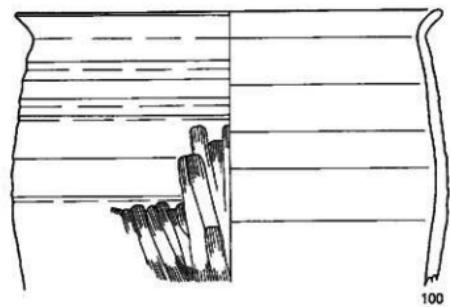
21号住 97·98

0 10cm

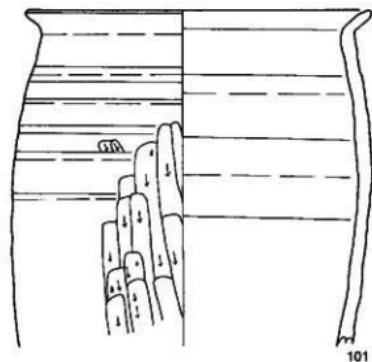
第76図 遺構内出土遺物 (10)



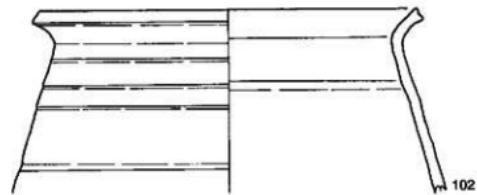
99



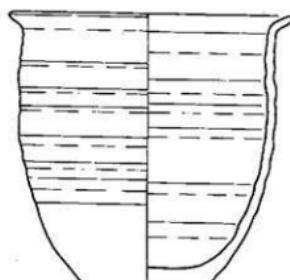
100



101



102



103

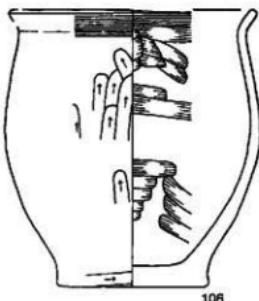


104

21号住 99~104



105

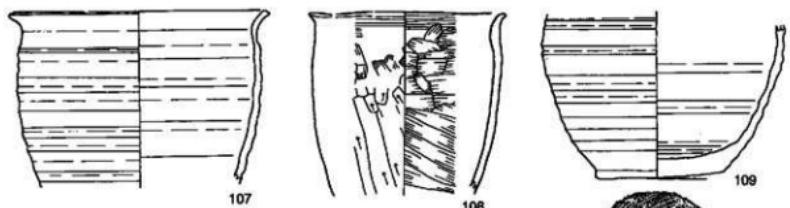


106

22号住 105~106



第76図 遺構内出土遺物 (11)



22号住 107

108

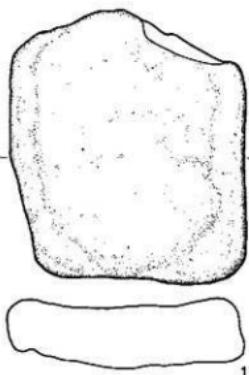
109



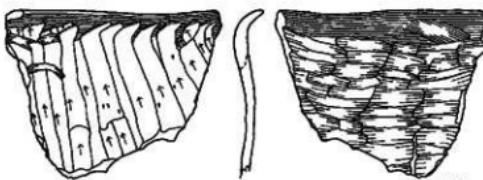
110



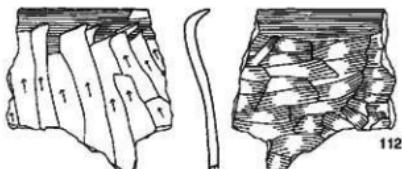
23号住 108・109



112

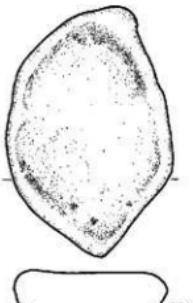


113



115

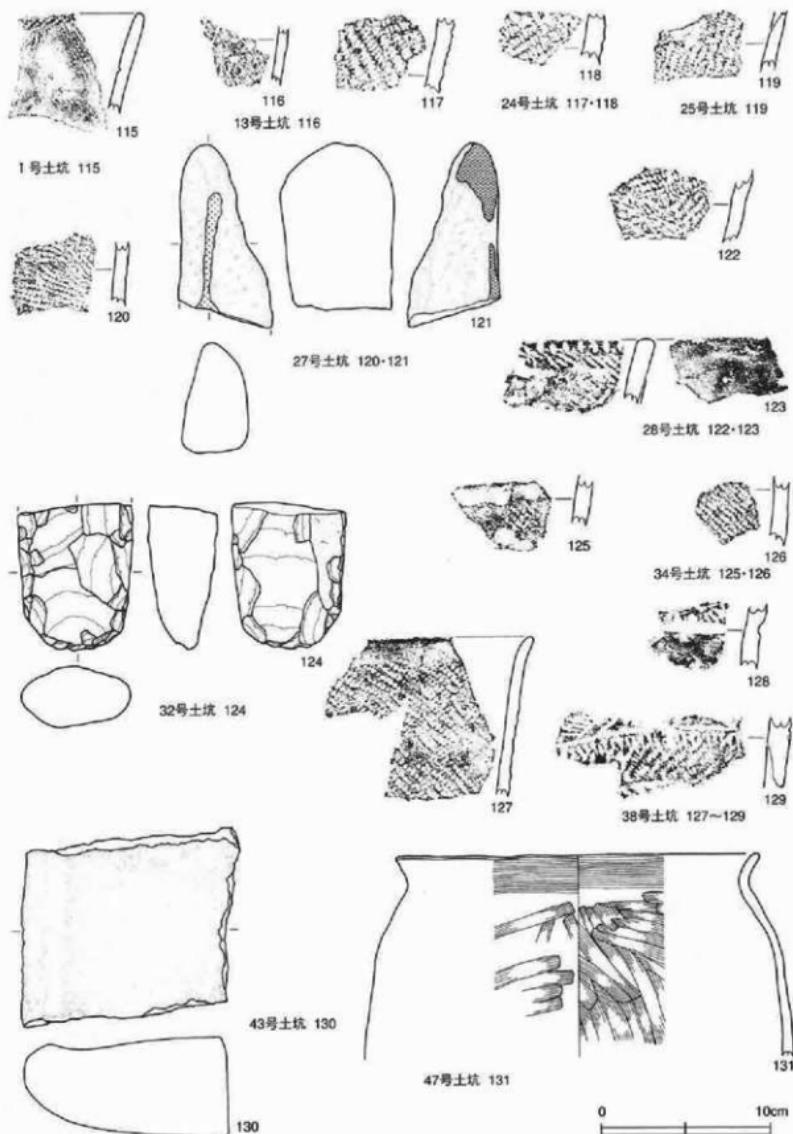
24号住 110～114



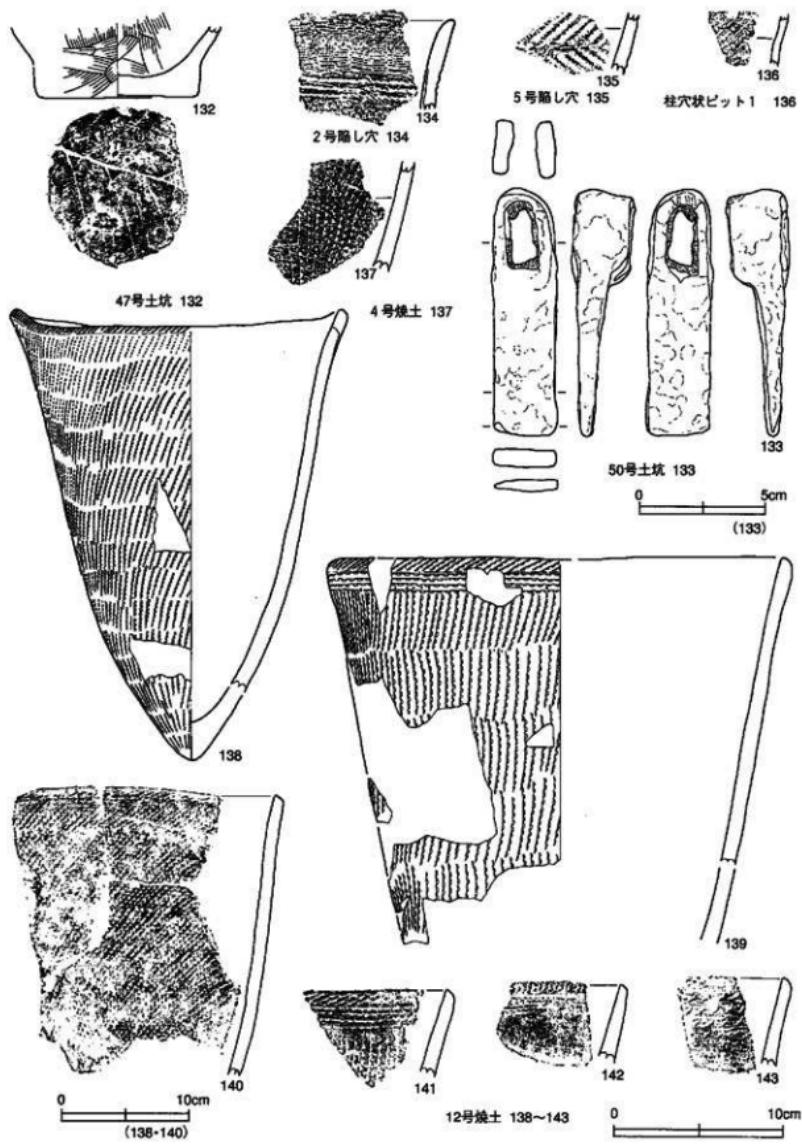
117



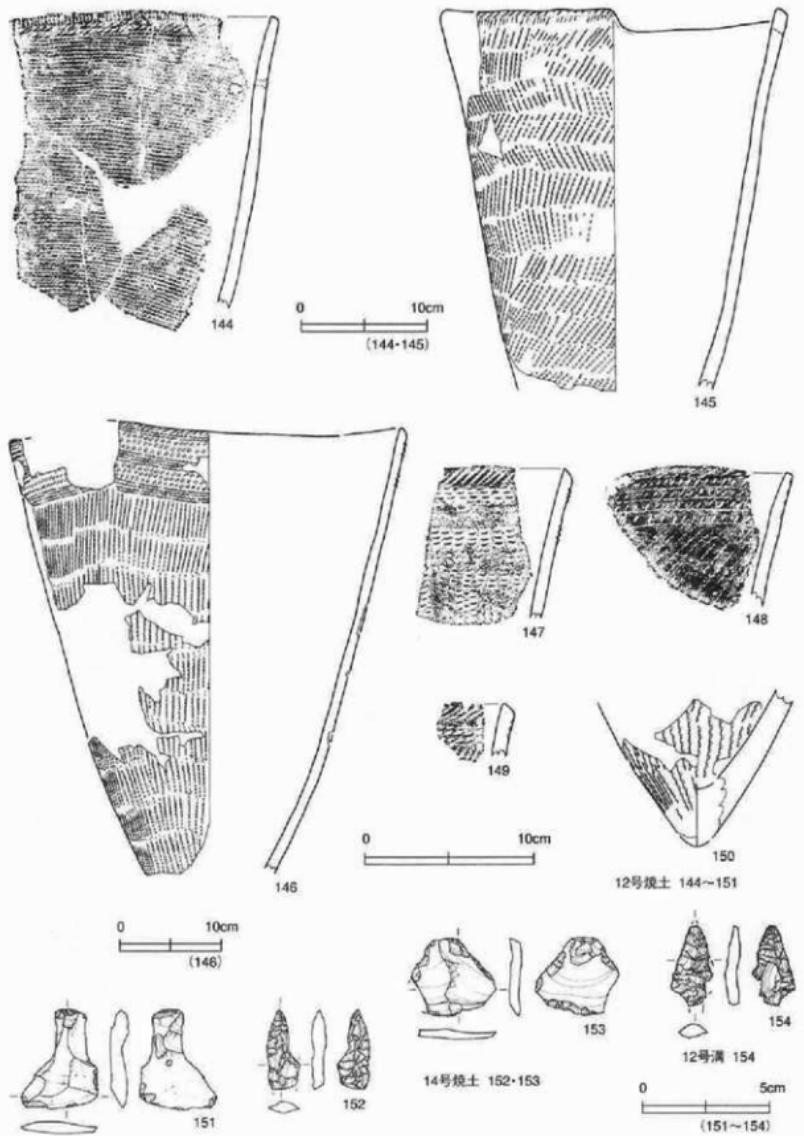
第77圖 遺構内出土遺物 (12)



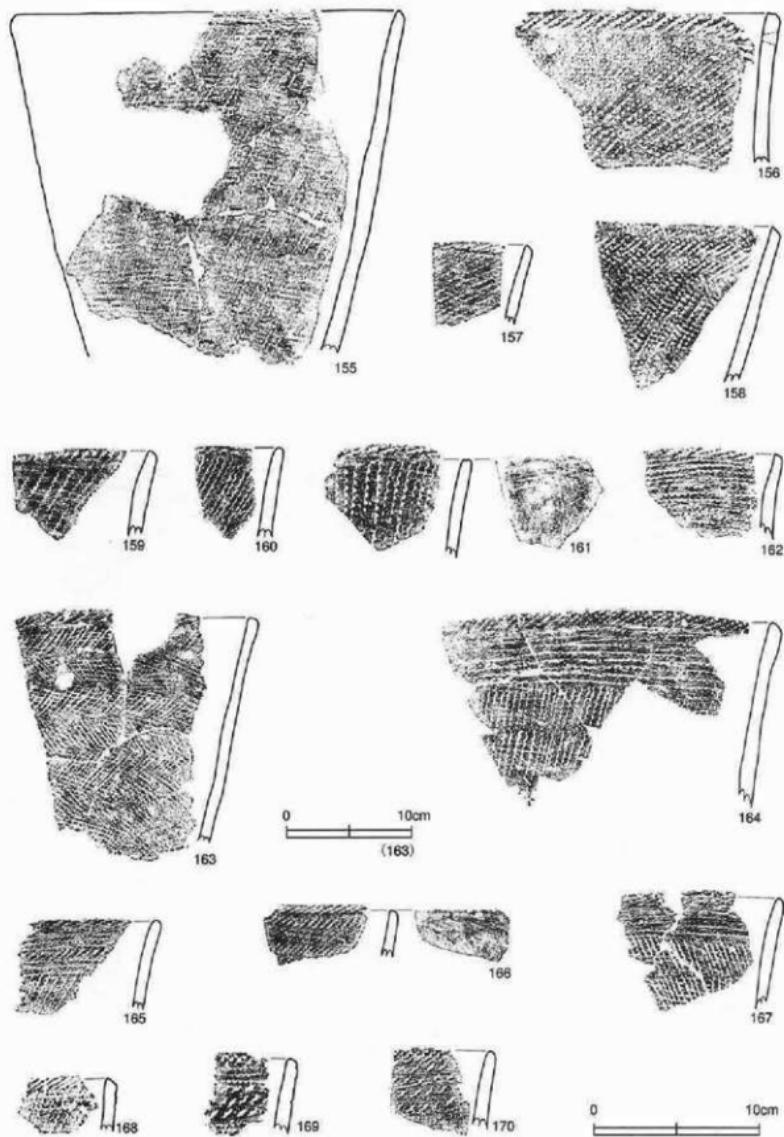
第78図 遺構内出土遺物 (13)



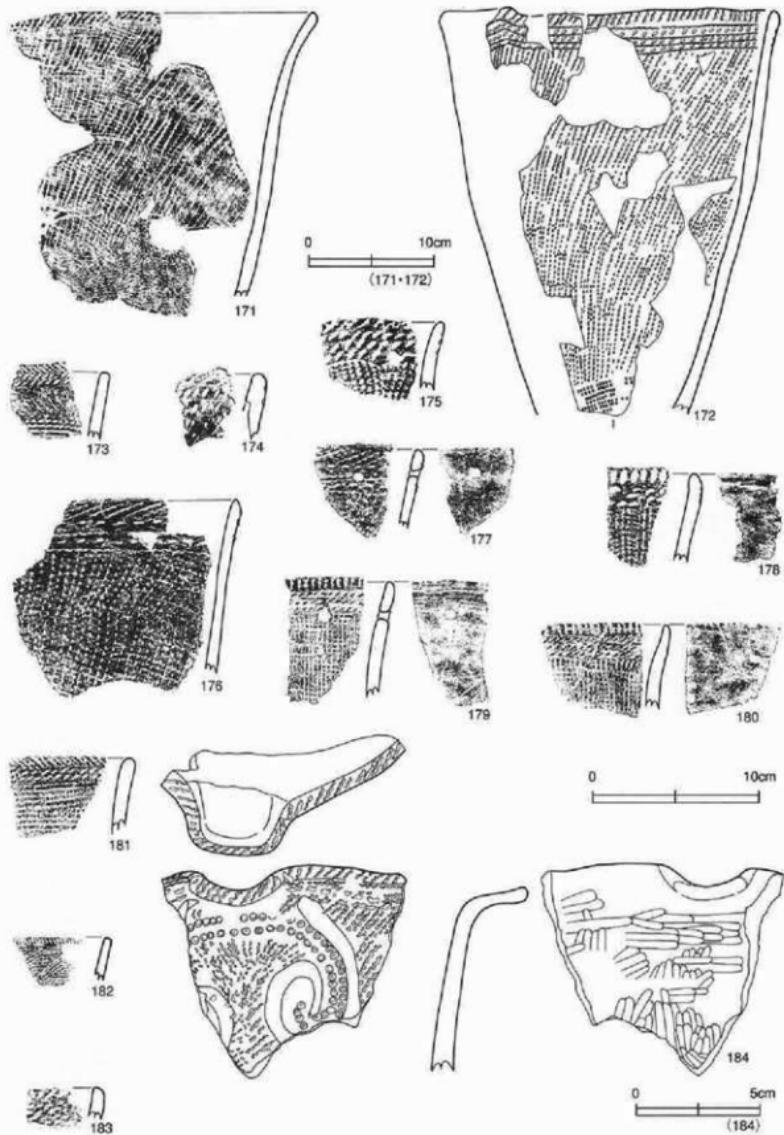
第79図 遺構内出土遺物 (14)



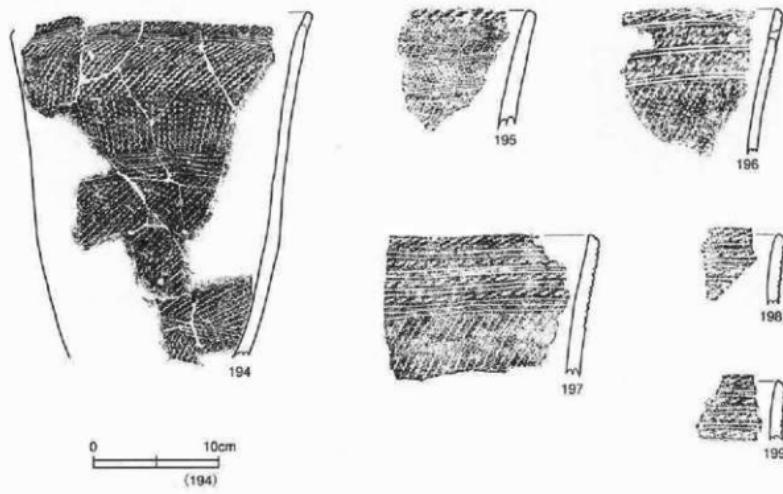
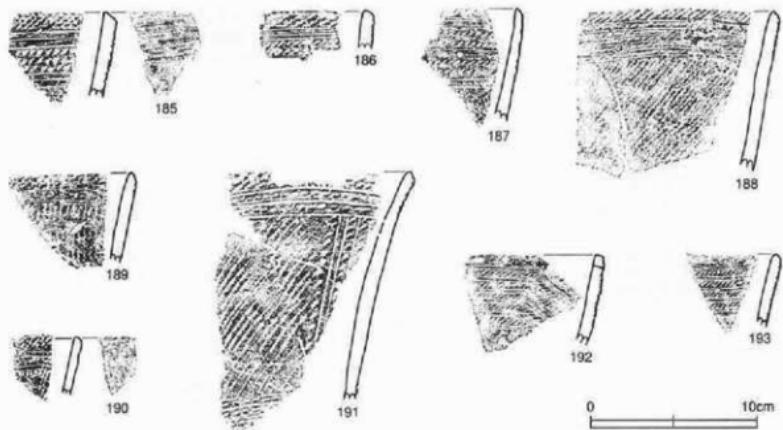
第80圖 造構內出土遺物 (15)



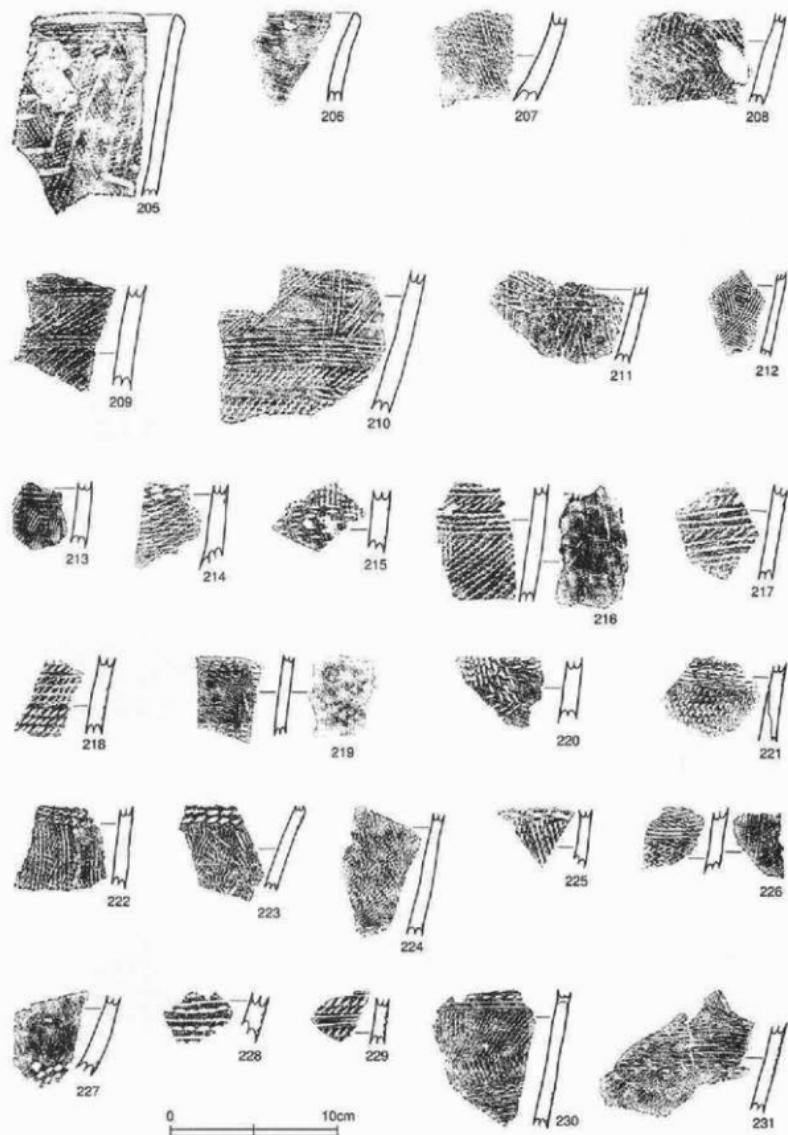
第81図 遺構外出土土器(1)～VI層～



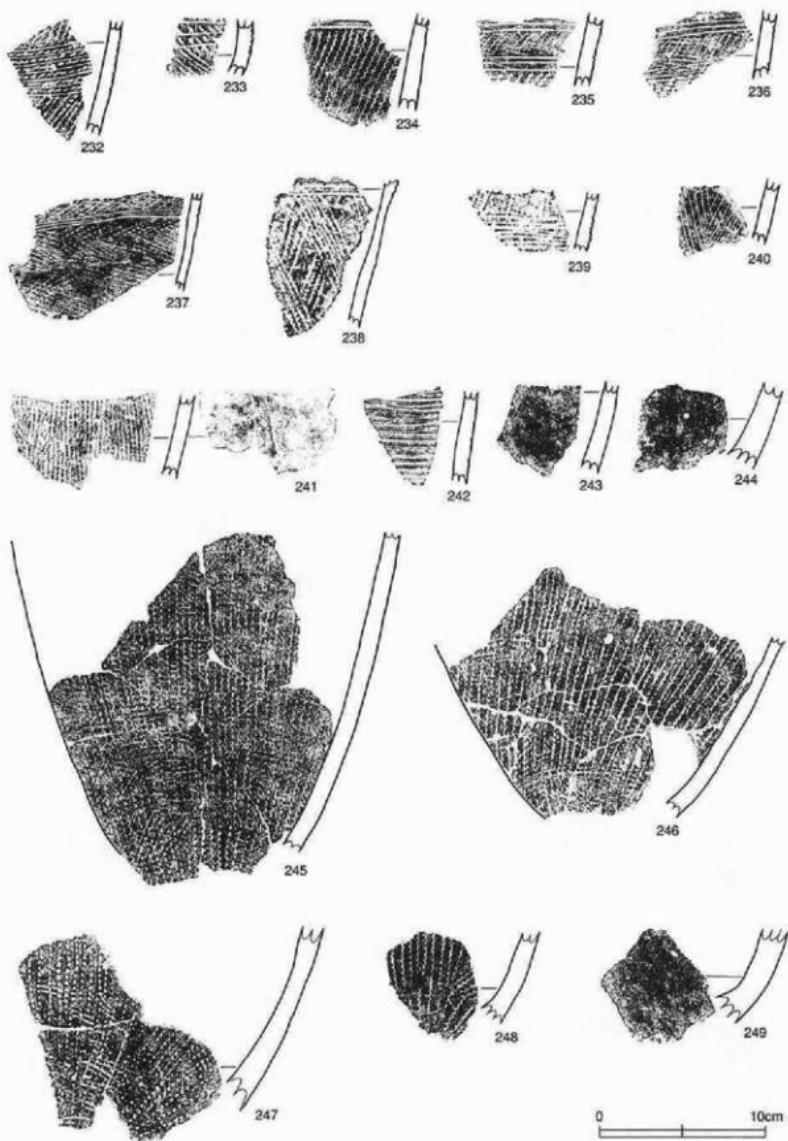
第82図 遺構外出土土器(2)～VI層～



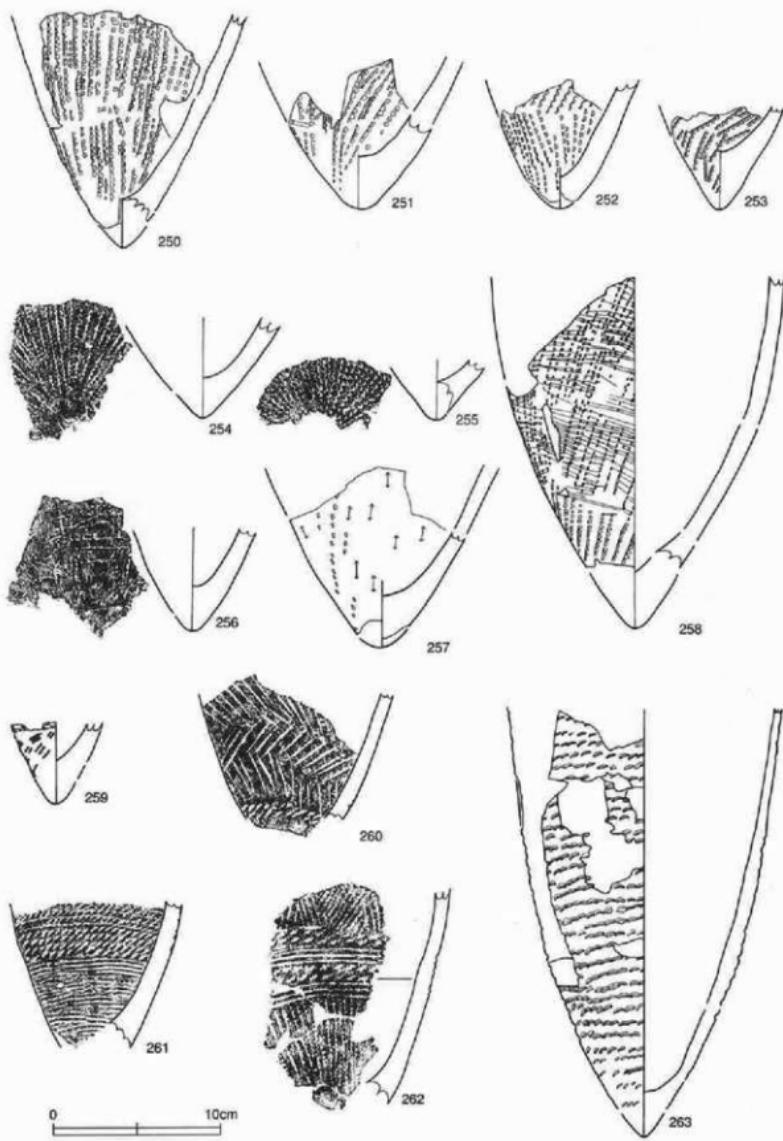
第83図 遺構外出土土器(3)～VI層～



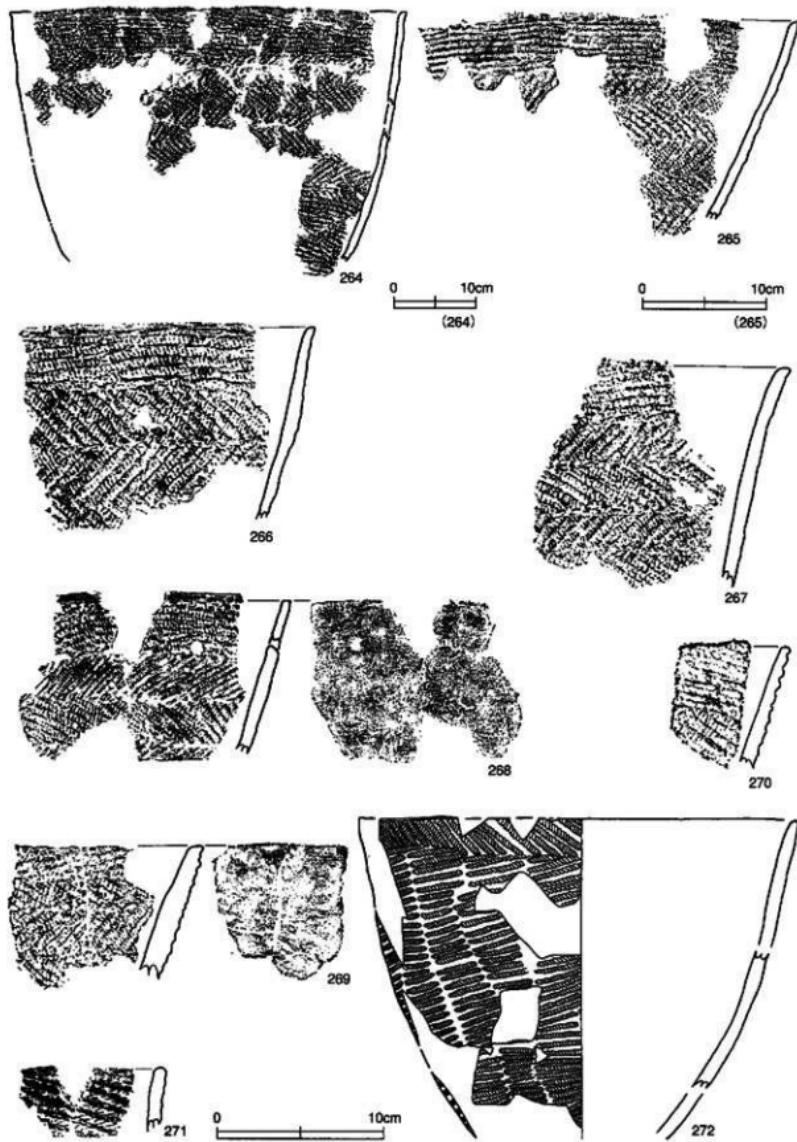
第84図 遺構外出土土器(4)～VI層～



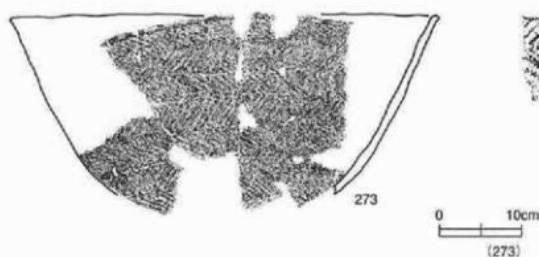
第85図 遺構外出土土器(5)～VI層～



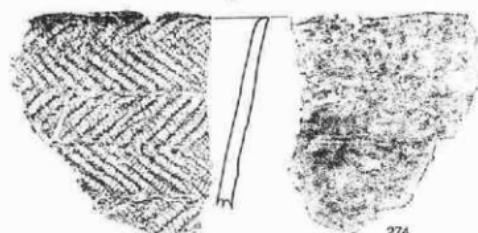
第86圖 遺構外出土土器（6）～Ⅵ層～



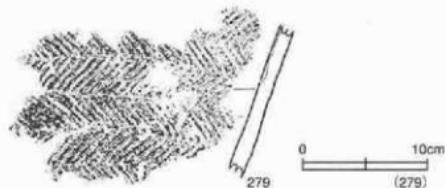
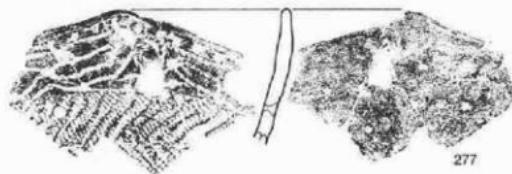
第87図 遺構外出土土器(7)~IVa層~



0
10cm
(273)



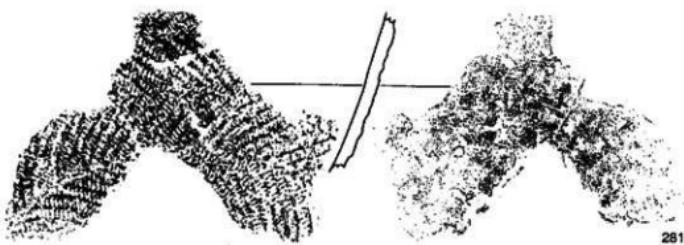
0
10cm



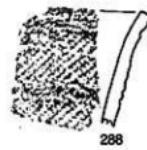
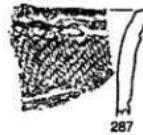
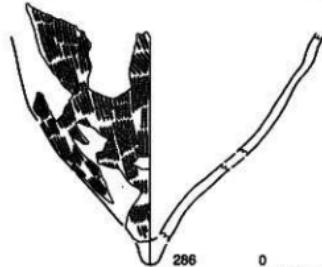
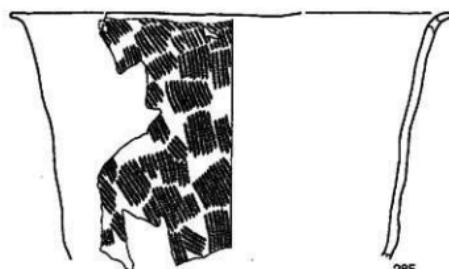
0
10cm
(279)



第88図 遺構外出土土器 (8) ~IV a層~



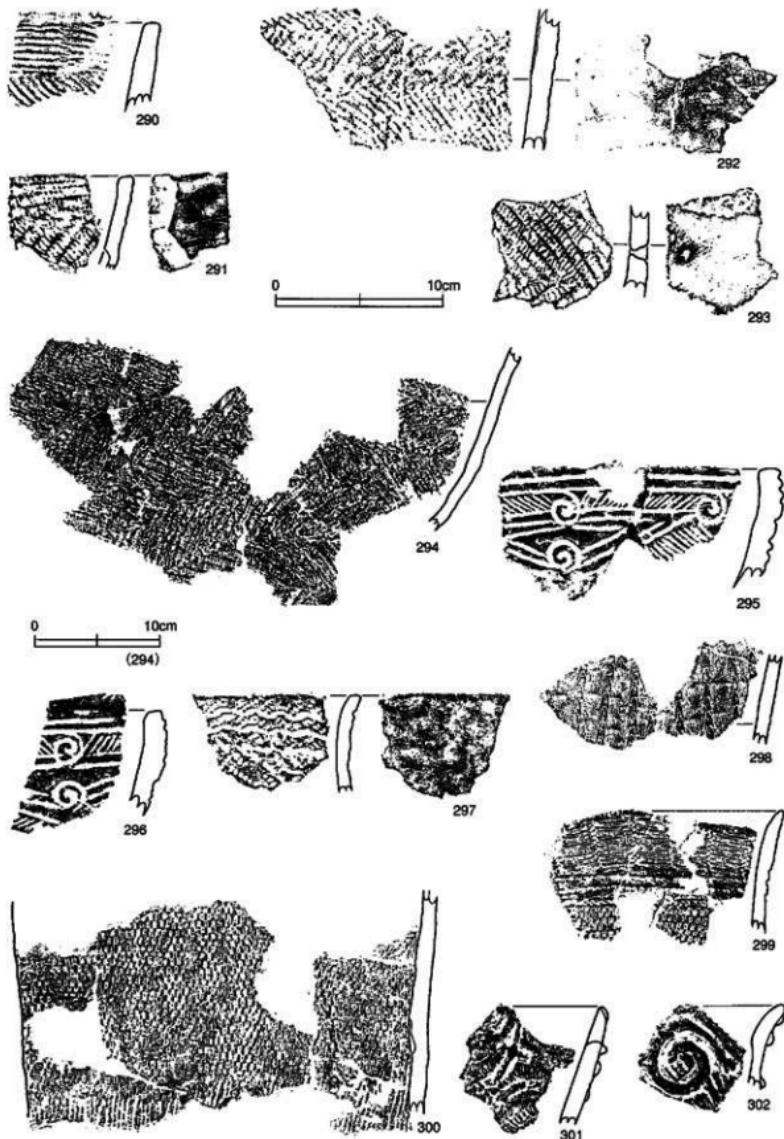
0 10cm



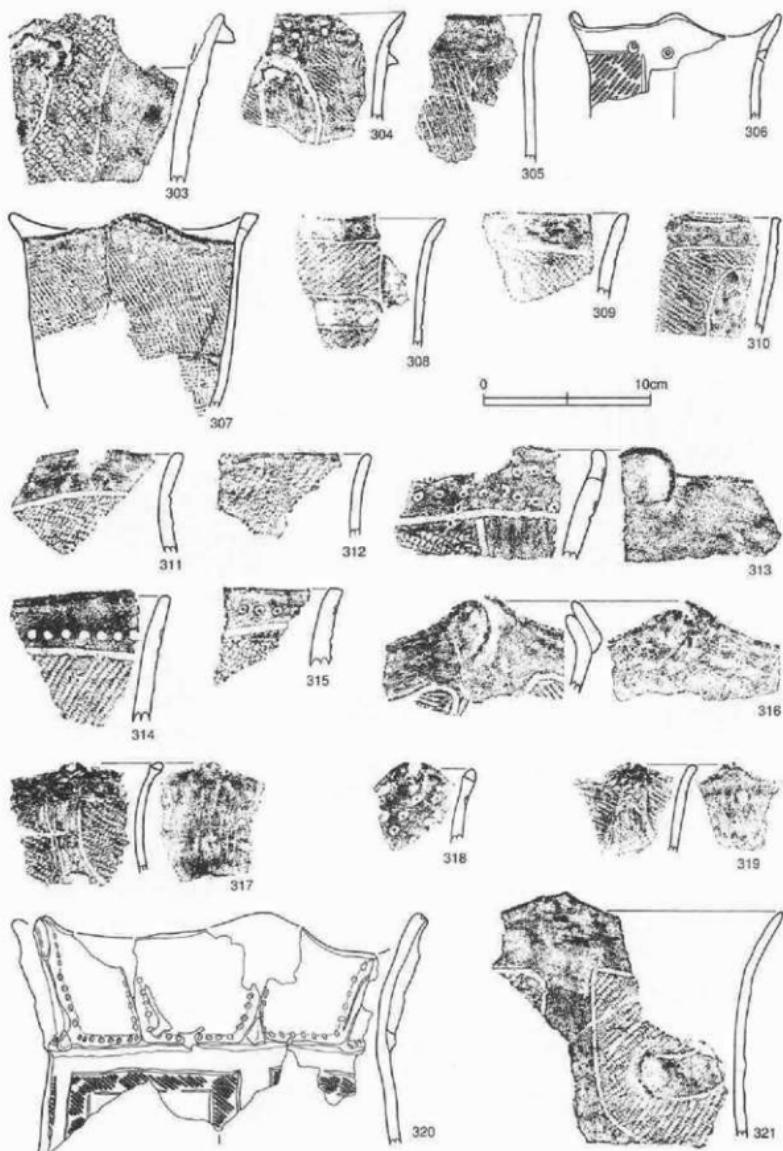
0 10cm
(285-286)



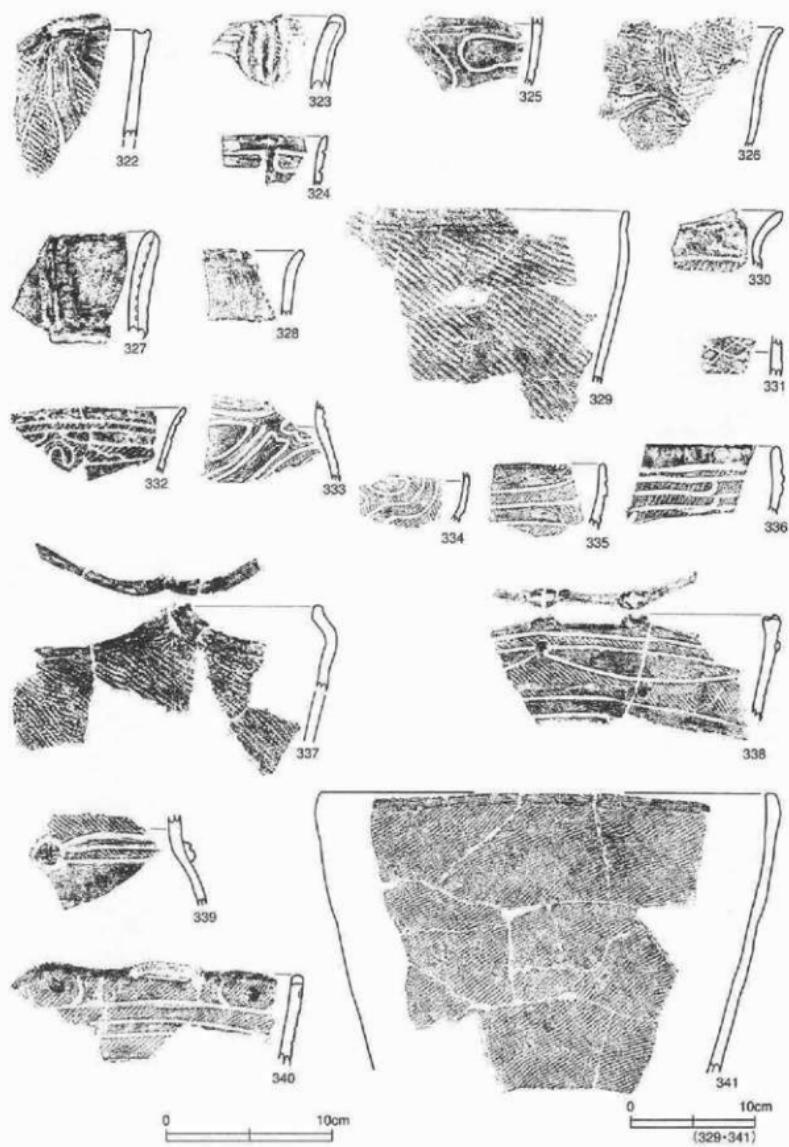
第80圖 造橋外出土土器 (9) ~IV a層~



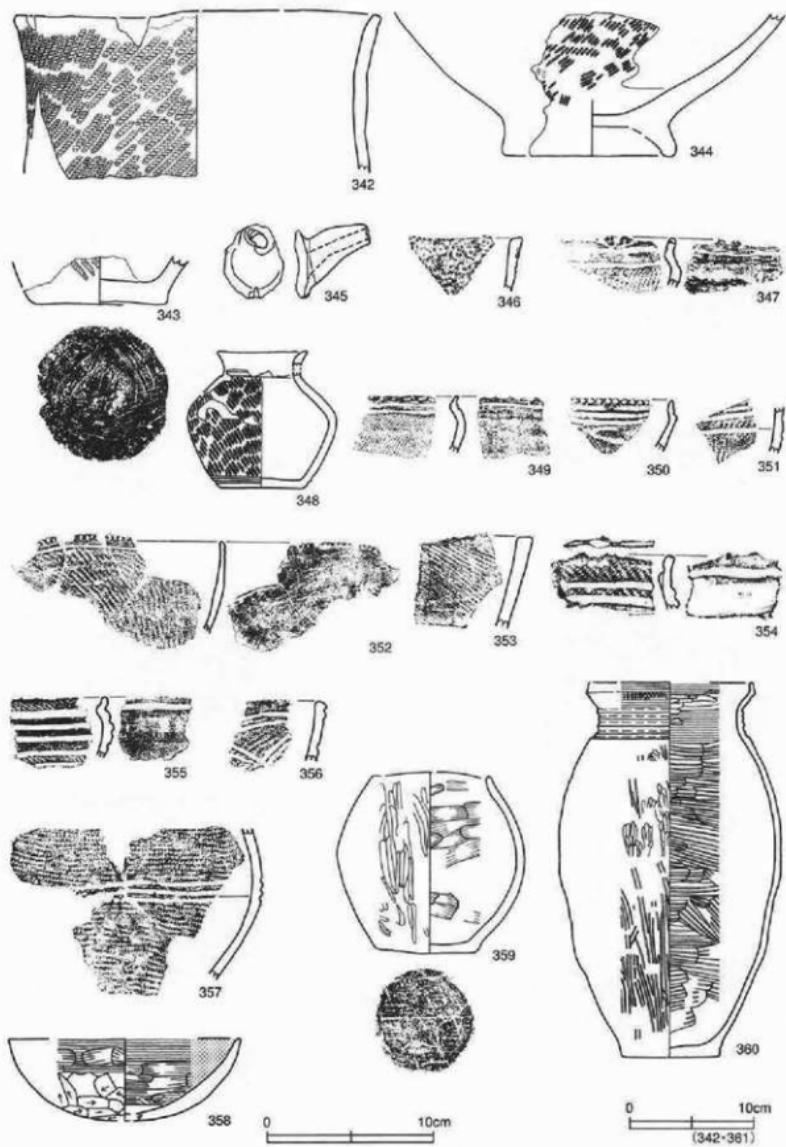
第90圖 遺構外出土土器 (10)



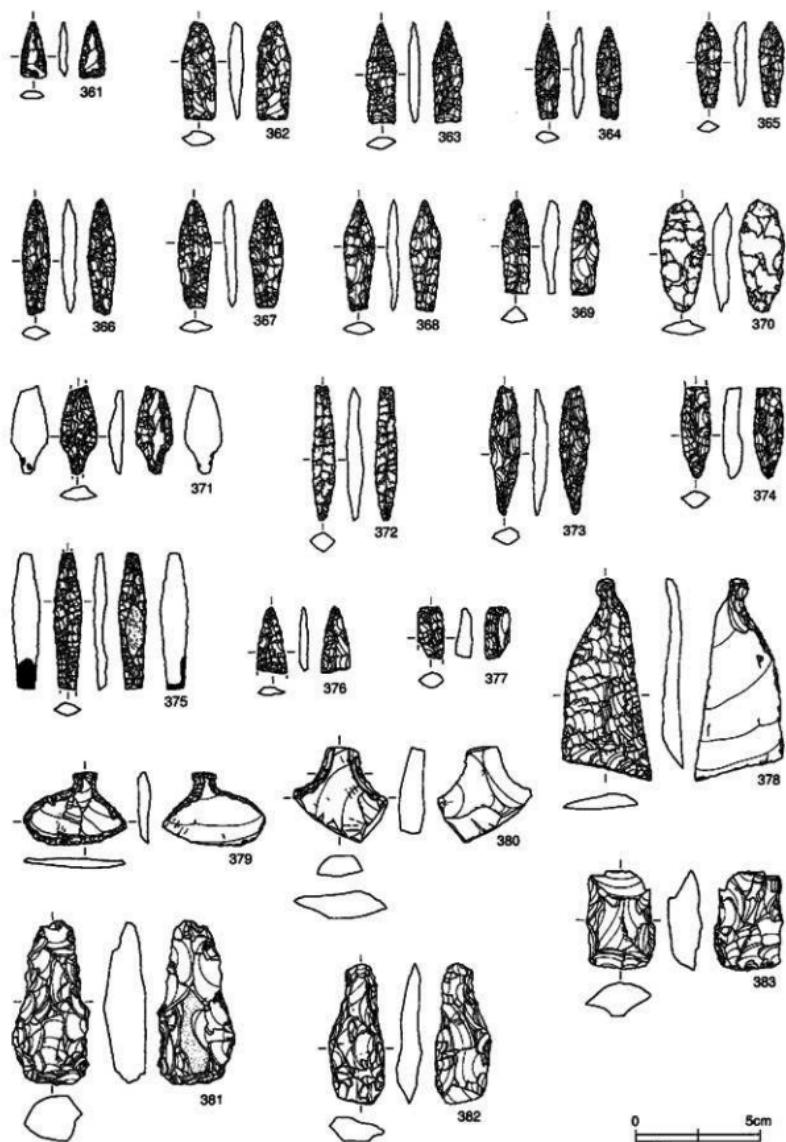
第91図 遺構外出土土器 (11)



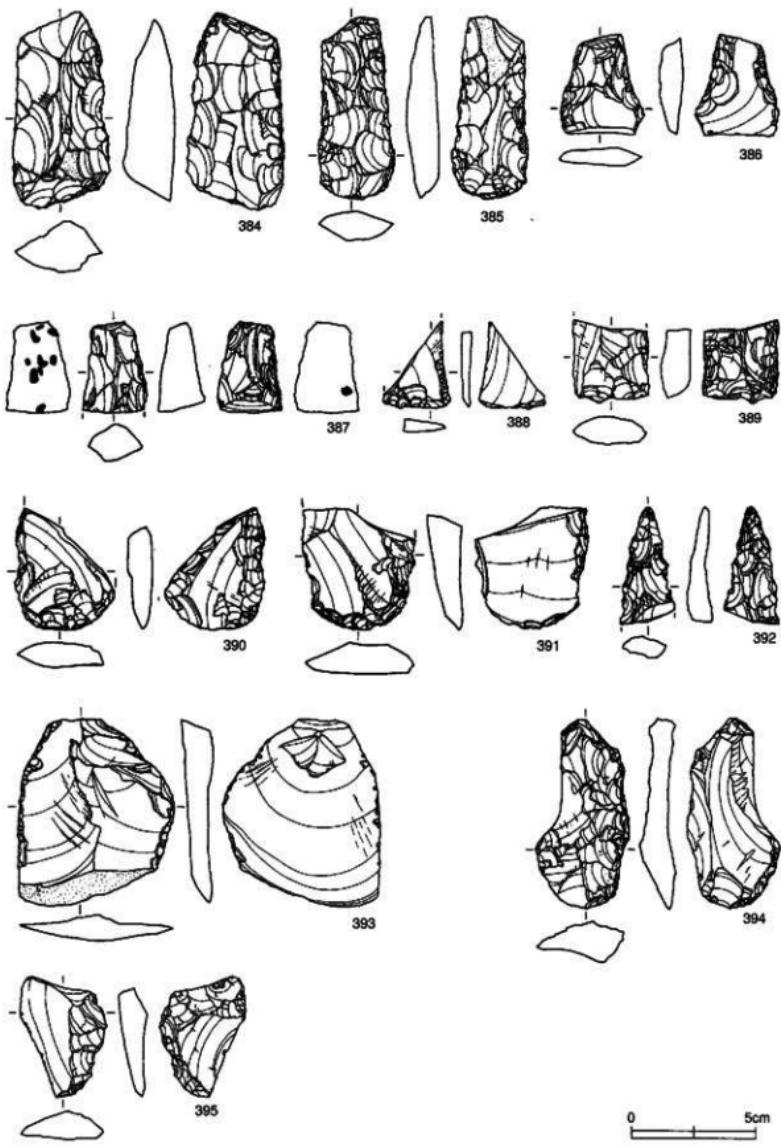
第92図 遺構外出土土器 (12)



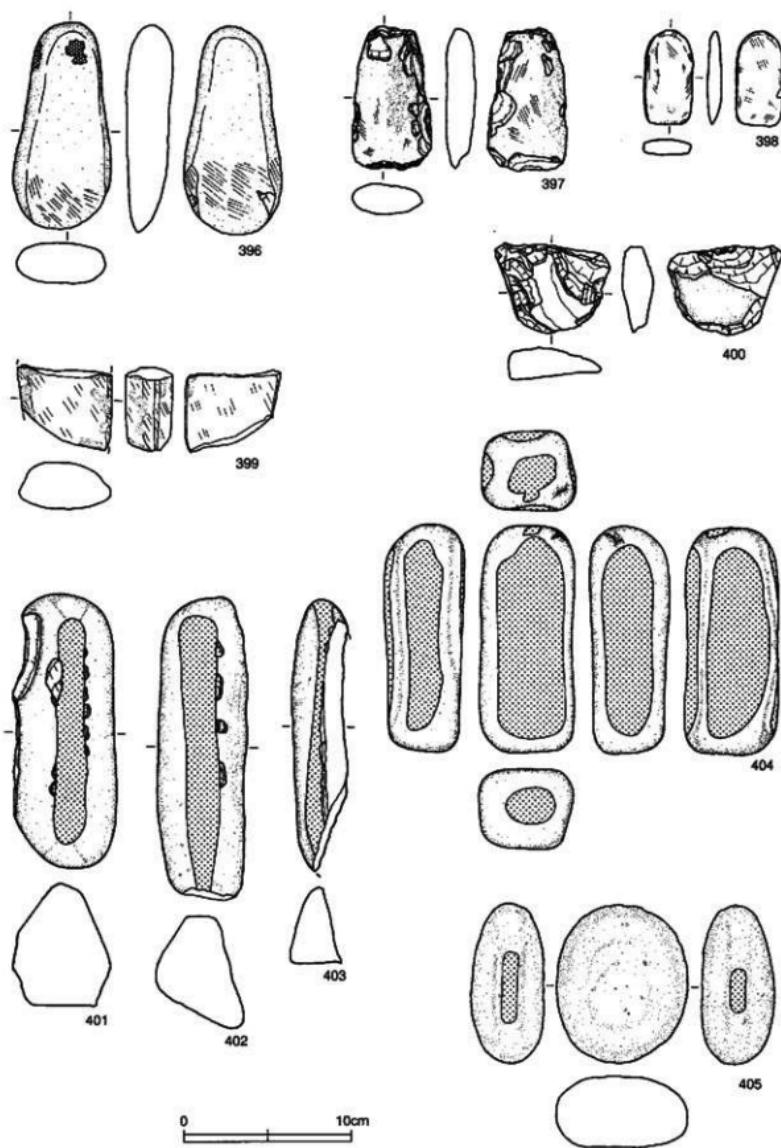
第93図 遺構外出土土器 (13)



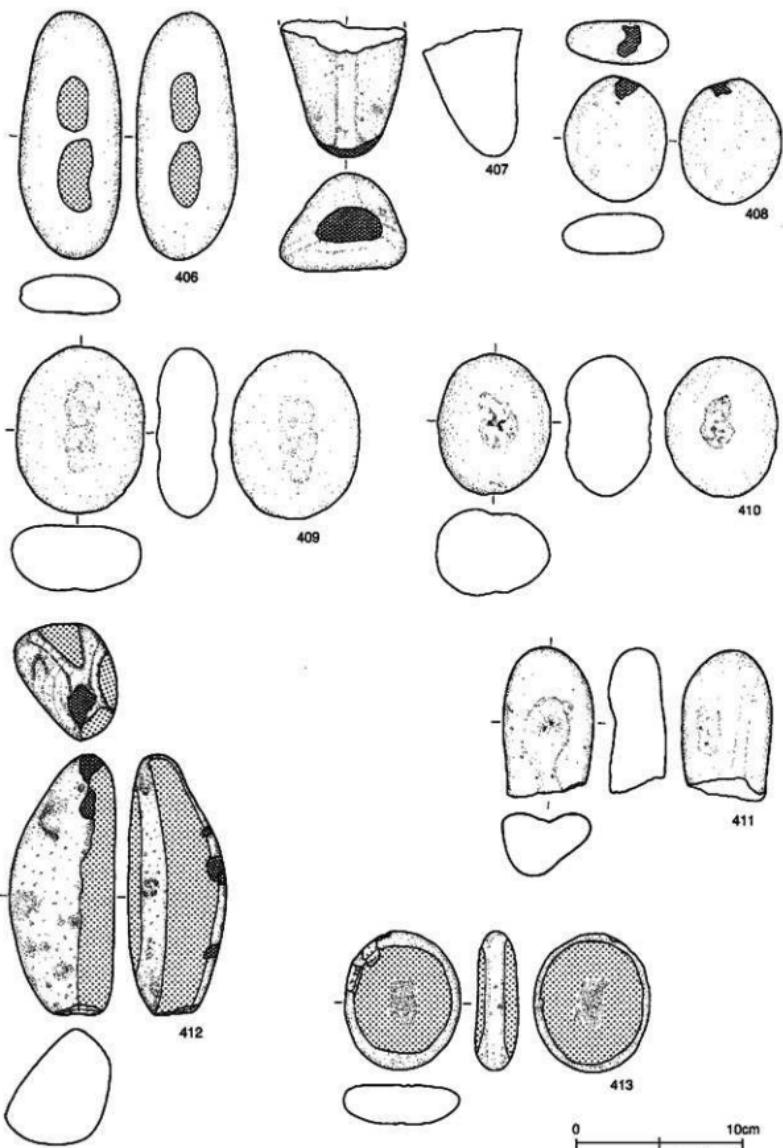
第94図 遺構外出土石器(1)～V層～



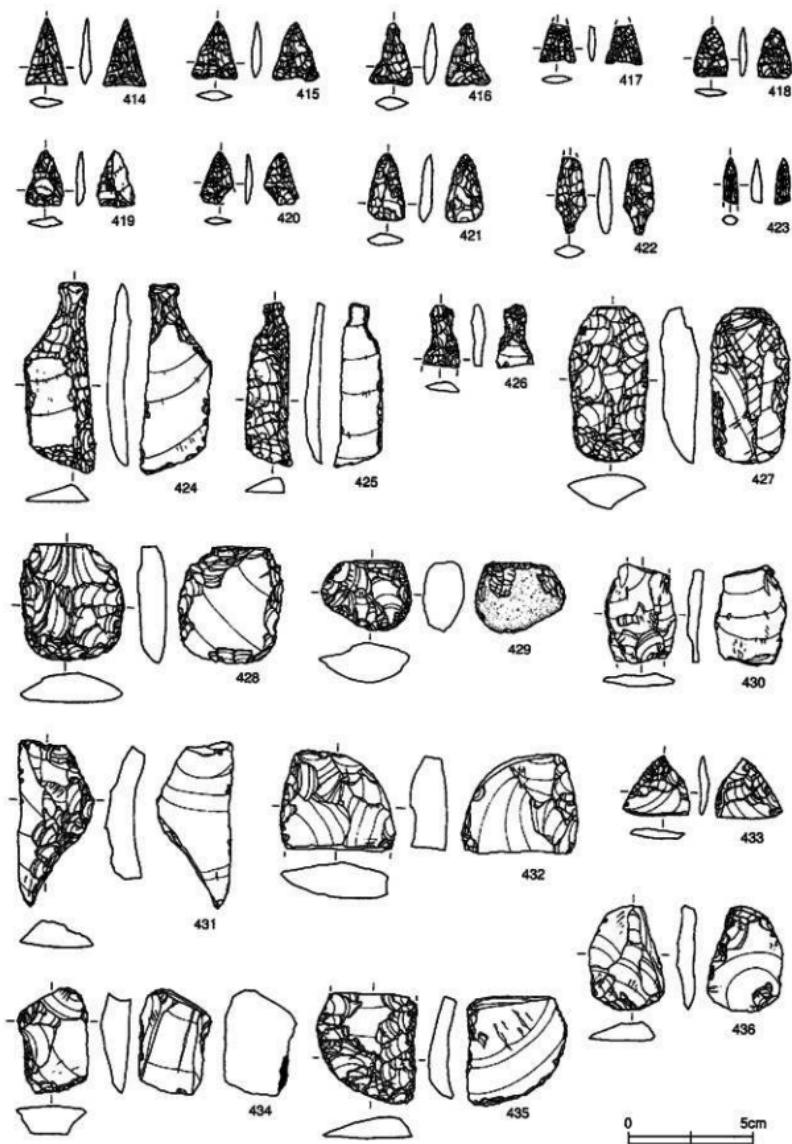
第95図 遺構外出土石器(2)～VI層～



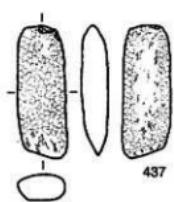
第96図 遺構外出土石器（3）～V層～



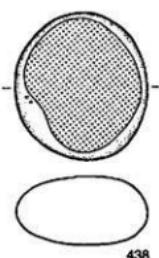
第97図 遺構外出土石器（4）～VI層～



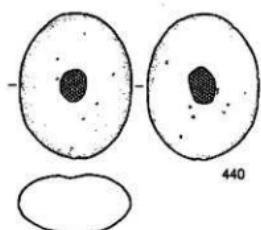
第96図 造構外出土石器（5）～Iwama層～



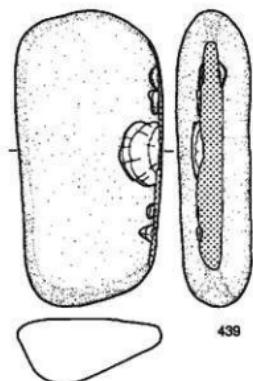
437



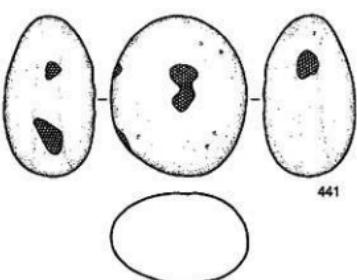
438



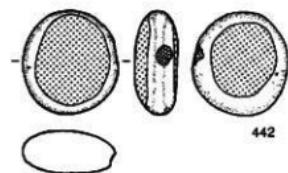
440



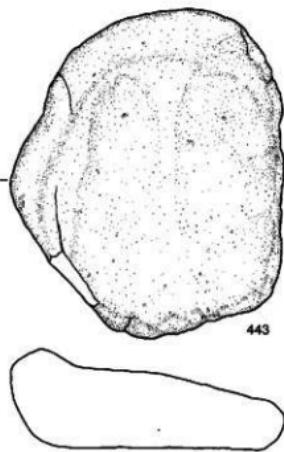
439



441



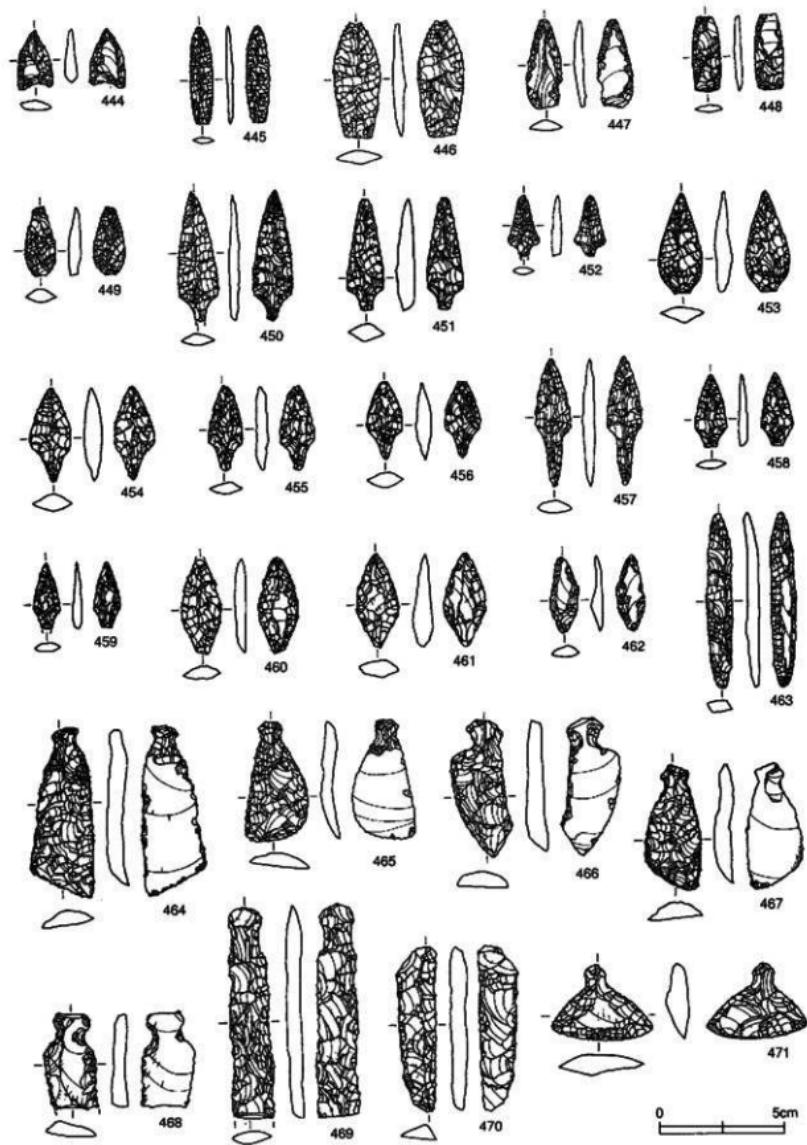
442



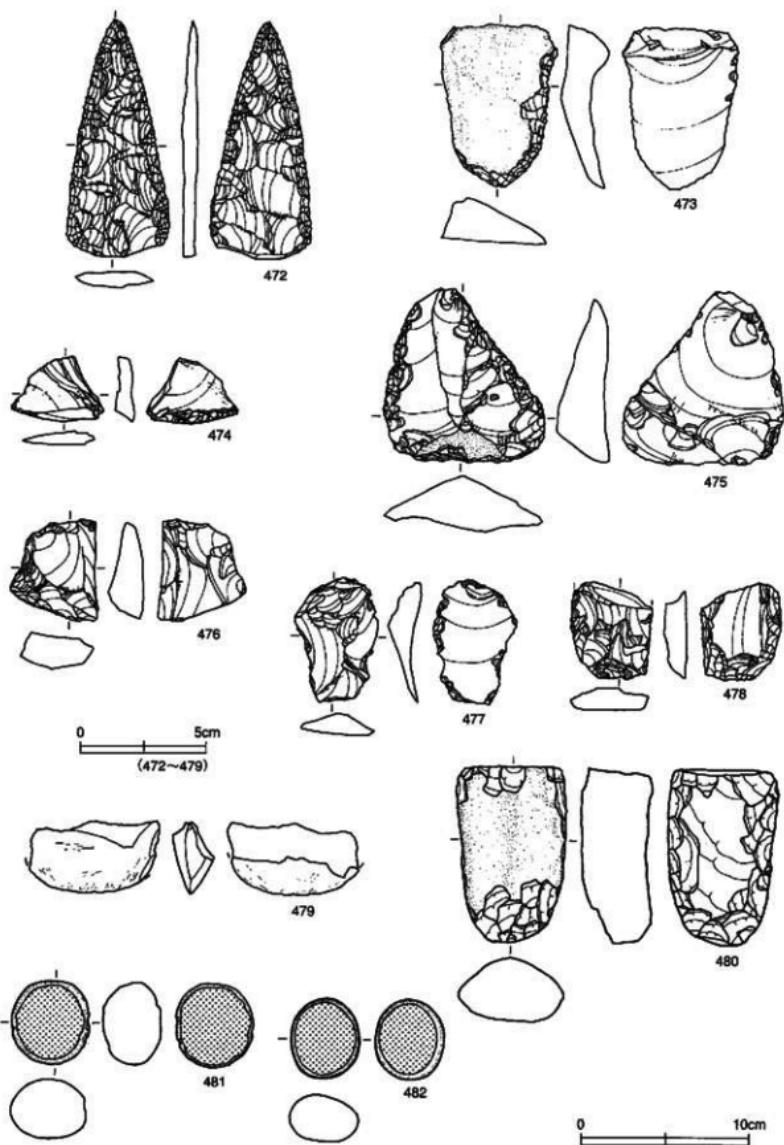
443

0 10cm

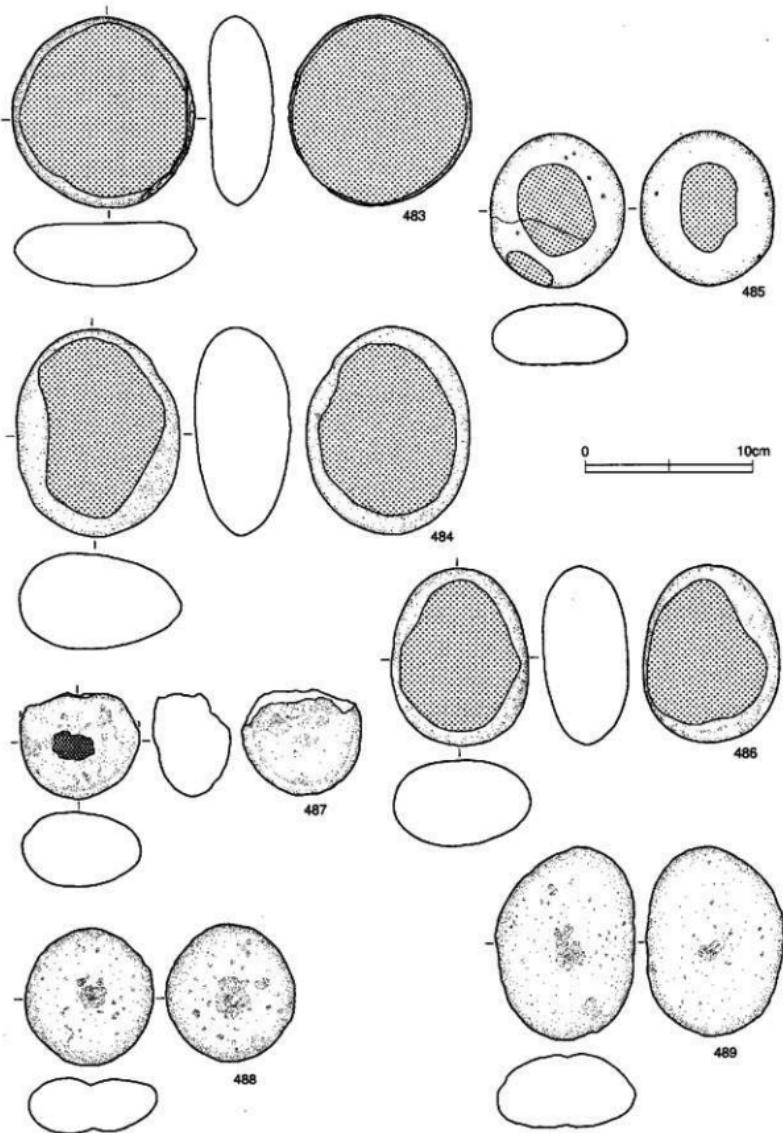
第99圖 遺跡外出土石器(6) ~N a層~



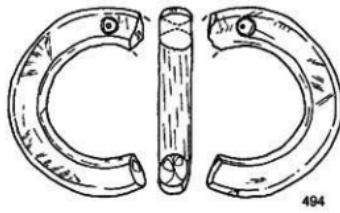
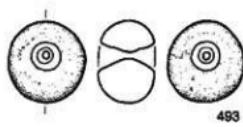
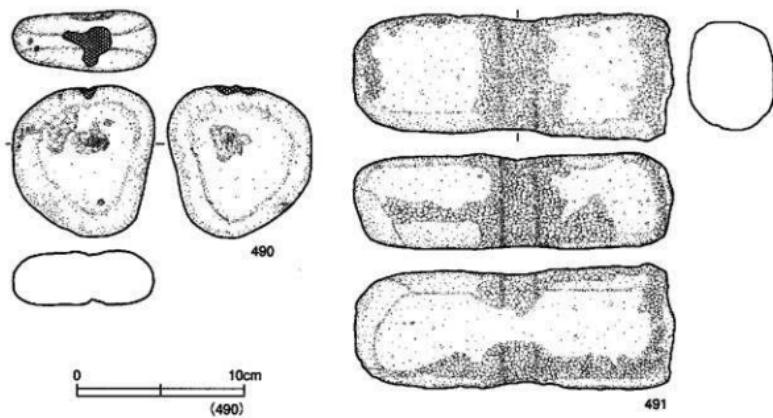
第100圖 遺構外出土石器（7）



第101図 遺構外出土石器 (8)



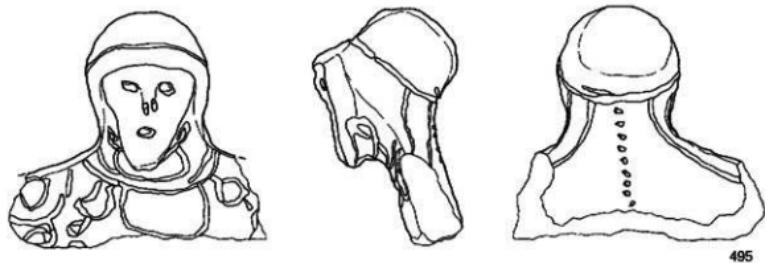
第102図 遺構外出土石器 (9)



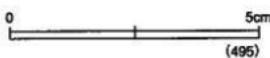
0 5cm
(493)

0 5cm
(494)

第103図 造模外出土石器 (10)・石製品

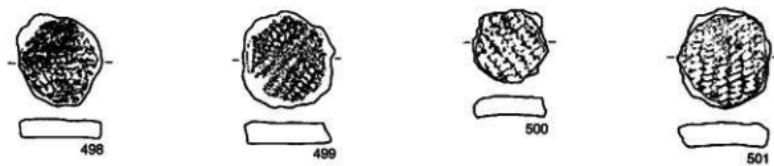


495



496

497

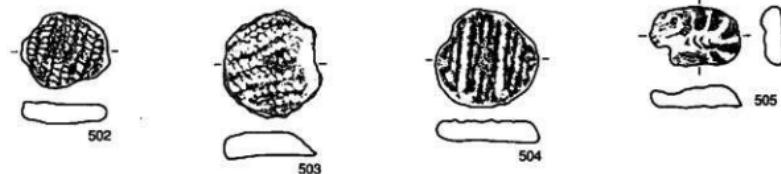


498

499

500

501

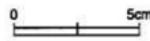


502

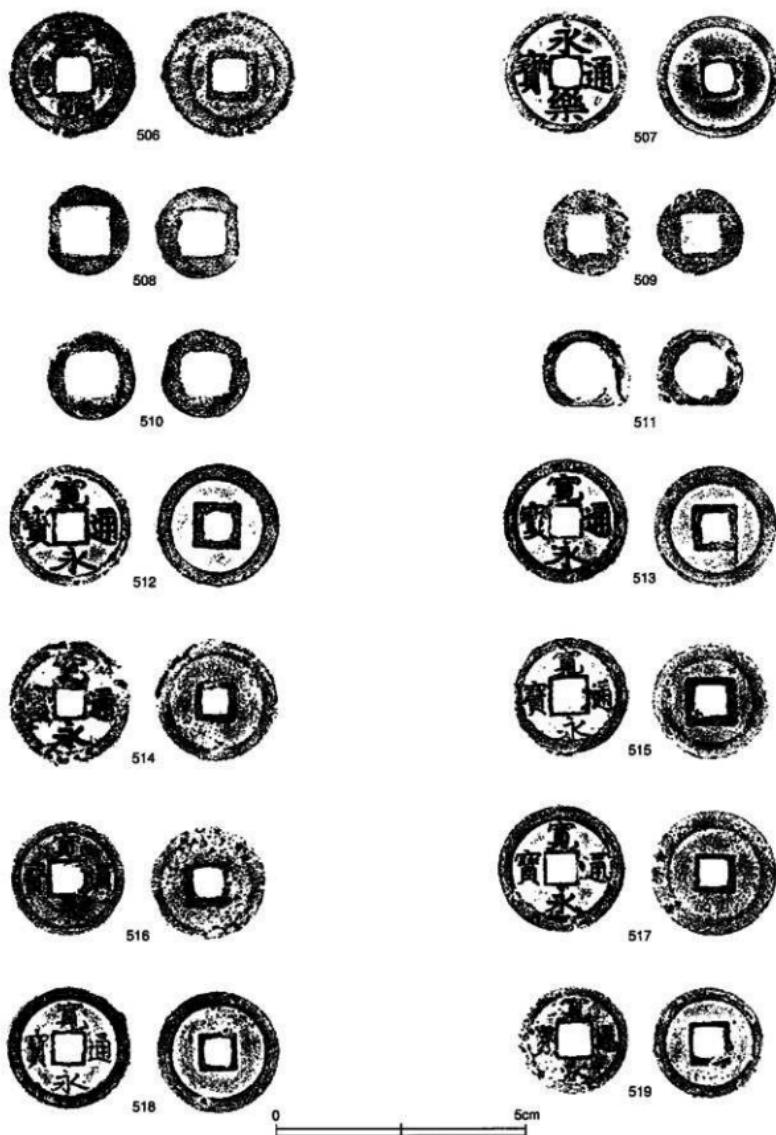
503

504

505



第104図 遺構外出土土製品



第105圖 通鑄外出土貨幣

第2表

土器観察表

(縄文土器観察表)

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類
1	寺住 NO 1	深鉢	口縁部	口唇部具紋縦彎底、貝殻腹縫彎底、浮石含む、補修孔	ミガキ	I
2	1号住 NO 6	深鉢	口縁部	口唇部具紋縫彎底、貝殻腹縫彎底、刺突文、浮石含む	ミガキ	I
3	1号住 NO 7	深鉢	体部	貝殻腹縫押し引き文、浮石含む	ナデ	I
4	1号住 NO 9	深鉢	体部	貝殻腹縫彎底、浮石含む	ナデ	I
5	1号住 NO 5	深鉢	体部	貝殻腹縫彎底、浮石含む	ナデ	I
6	1号住 NO 3	深鉢	体部	貝殻腹縫彎底、浮石含む	ナデ	I
7	1号住 NO 4	深鉢	体部	貝殻腹縫彎底、浮石含む、炭化物付着	ミガキ	I
8	1号住 NO 8	深鉢	体部	貝殻腹縫彎底、浮石含む	ナデ	I
9	1号住 NO 2	深鉢	体部	貝殻腹縫彎底、条文文、浮石含む	ナデ	I
10	3号住 石垣跡	深鉢	口縁～底部	L.R.、ミガキ、砂粒含む	ナデ	II 2
11	4号住 墓土	深鉢	体部	L.R.、織維含む	ナデ	III～IV
12	4号住 墓土	深鉢	体部	L.R.、浮石含む	ナデ	III～IV
13	4号住 墓土	深鉢	体部	L.R.	ナデ	III～IV
14	5号住 墓土	深鉢	底部	L.R.	ナデ	III～IV
15	6号住 墓土	鉢	体部	沈黙、外面ミガキ、16と同一個体	ナデ	IV～V
16	6号住 墓土	鉢	体部	沈黙、外面ミガキ	ナデ	IV～V
17	6号住 墓土	深鉢	体部	不整被繪文、浮石含む	ナデ	B～III
115	1号土坑 墓土	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、条文文、浮石含む	ナデ	I
116	13号土坑 墓土	深鉢	体部	網目状捺糸文、砂粒含む	ナデ	IV
117	24号土坑 墓土	深鉢	体部	羽状捲文、織維、浮石含む	ナデ	II 1 a
118	24号土坑 墓土	深鉢	体部	L.R.、浮石・織維含む	ナデ	II 1 a
119	25号土坑 墓土	深鉢	体部	L.R.、浮石含む	ナデ	II 1 a
120	27号土坑 墓土	深鉢	体部	L.R.、金環母	ナデ	II 1 a
122	28号土坑 墓土	深鉢	体部	L.R.、織維・浮石含む	ナデ	II 1 a
123	28号土坑 墓土	深鉢	口縁部	R.L.、口唇部刺突、織維、海綿骨針含む	ミガキ	II 1 a
125	34号土坑 墓土	深鉢	体部	L.R.、砂粒	ナデ	IV
126	34号土坑 墓土	深鉢	体部	L.R.、砂粒含む、黒斑あり	ナデ	IV
127	38号土坑 墓土	深鉢	口縁部	L.R.、砂粒含む	ナデ	IV
128	38号土坑 墓土	深鉢	体部	撚糸文、沈黙文	ナデ	IV
129	38号土坑 墓土	深鉢	体部	撚糸文底、刺突列、羽状捲文、織維、砂粒含む	ナデ	II 1 a
134	2号坑・穴埋土	深鉢	口縁部	撚糸文底、多輪轍条文	ナデ	II 2
135	5号坑・穴埋土	深鉢	体部	羽状捲文、織維、砂粒含む	ナデ	II 1 a
136	1号穴付P埋土	深鉢	口縁部	撚糸文底、金環母・砂粒含む	ミガキ	IV
137	4号焼土	深鉢	体部	貝殻腹縫彎底、浮石含む	ミガキ	I
138	12号焼土	深鉢	口縁～底部	口唇部左右不均整皮状、貝殻腹縫彎底	ナデ	I
139	12号焼土	深鉢	口縁～体部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底	ミガキ	I
140	12号焼土	深鉢	口縁～体部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、浮石含む	ミガキ	I
141	12号焼土	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、浮石含む	ミガキ	I
142	12号焼土	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、条文文、浮石含む	ナデ	I
143	12号焼土	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、短貝殻腹縫彎底	ミガキ	I
144	12号焼土	深鉢	口縁～体部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底	ナデ	I
145	12号焼土	深鉢	口縁～体部	口唇部左右不均整波状、貝殻腹縫彎底	ナデ	I
146	12号焼土	深鉢	口縁～体部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底	ナデ	I
147	12号焼土	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、刺突文(片刃)浮石	ナデ	I
148	12号施土	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、刺突文、浮石含む	ナデ	I
149	12号施土	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、刺突文(片刃)	ナデ	I
150	12号焼土	深鉢	口縁部	貝殻腹縫彎底	ナデ	I
155	早NO 51,55,60	深鉢	口縁～体部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、浮石含む	ナデ	I
156	7①区NO 116	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、補修孔	ミガキ	I
157	7②区NO 367	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底	ミガキ	I
158	7①区NO 249	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻押し引き、外削ぎ、浮石	ナデ	I
159	7②区NO 344	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、外削ぎ、浮石含む	ミガキ	I
160	7①区NO 294	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底	ミガキ	I
161	7②区NO 88	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底	ミガキ	I
162	7①区NO 13	深鉢	口縁部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、外削ぎ、浮石含む	ミガキ	I
163	早NO 137,150	深鉢	口縁～体部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、外削ぎ、浮石含む	ミガキ	I
164	7①区NO B 89	深鉢	口縁～体部	口唇部貝殻腹縫彎底、貝殻腹縫彎底、外削ぎ、浮石含む	ミガキ	I

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類
165	7①区N O 113	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、2条平行、外削ぎ	ミガキ	I
166	7①区N O C 99	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕、外削ぎ、浮石含む	ミガキ	I
167	7①区N O 107	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、2条平行、外削ぎ	ミガキ	I
168	6②区N O B 48	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、外削ぎ、浮石	ミガキ	I
169	早N O 184	深鉢	全体部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕列	ミガキ	I
170	7②区N O 362	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕列、貝紋腹縫、条痕文	ミガキ	I
171	早N O 14	深鉢	口縁～全体部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、只缺背圧痕	ミガキ	I
172	早N O 124,148	深鉢	口縁～全体部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、只缺背圧痕	ナデ	I
173	7②区N O 393	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、刻突、片刃平棒工具	ナデ	I
174	早N O 18	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、刻突、片刃平棒工具	ナデ	I
175	7②区N O 352	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、刻突(片刃)、補修孔	ミガキ	I
176	7①区N O 176	深鉢	口縁～全体部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、刻突(片刃)	ミガキ	I
177	7①区N O 240	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、刻突(片刃)、浮石	ミガキ	I
178	7①区N O 35	深鉢	口縁部	口唇部へ刻み、貝紋押し引き文、刻突文(片刃)	ナデ	I
179	7②区N O 401	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、条痕文、刻突(片刃)、内面条痕文	ナデ	I
180	7②区N O 406	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、条痕文、刻突文(片刃)、炭化物	ミガキ	I
181	7①区N O 83	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋押し引き文、刻突文(片刃)	ミガキ	I
182	7②区N O 144	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋押し引き文、刻突文(片刃)	ナデ	I
183	7②区N O 389	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、条痕文、沈織文、海綿骨針含む	ミガキ	I
184	7①区N O C 3	深鉢	口縁部	片状口縁、口唇貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕、刻突文	ミガキ	I
185	7①区N O 284	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、刻突文、沈織文	ミガキ	I
186	早N O 58	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、刻突文(兩方平棒工具)、沈織文	ミガキ	I
187	7①区N O 262	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋押し引き文、刻突文、沈織文	ミガキ	I
188	7②区N O 351	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、刻突文、沈織文	ナデ	I
189	L III d 11 Y層	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、刻突文、沈織文	ミガキ	I
190	7①区N O C 14	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、沈織文、刻突文	ミガキ	I
191	7①区N O 110	深鉢	口縁～全体部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、刻突文、沈織文	ミガキ	I
192	7①区N O 59	深鉢	口縁部	左右不均整波状、口唇貝紋腹縁圧痕、爪形刻突、沈織文	ミガキ	I
193	7①区N O 114	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、爪形刻突、沈織文、外削ぎ	ミガキ	I
194	早N O 221	深鉢	口縁～全体部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、浮石含む	ミガキ	I
195	7①区N O 73	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕(羽状)、刻突、沈織文	ナデ	I
196	7①区N O C 37	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕、沈織文、外削ぎ	ミガキ	I
197	N O B 16	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕、沈織文	ミガキ	I
198	6③区 ?	深鉢	全体部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、浮石含む	ミガキ	I
199	L III g 11 III層	深鉢	口縁部	貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕、沈織文、浮石含む	ナデ	I
200	早N O 8	深鉢	口縁部	左右不均整波状、口唇貝紋腹縁圧痕、沈織文、浮石含む	ミガキ	I
201	7②区N O 364	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、沈織文、外削ぎ	ミガキ	I
202	7①区N O 334	深鉢	口縁部	左右不均整波状、口唇貝紋腹縁圧痕、沈織文、浮石含む	ミガキ	I
203	7①区N O 265	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕、沈織文	ナデ	I
204	7①区N O 106	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕、沈織文	ミガキ	I
205	早N O 218	深鉢	口縁部	口唇貝紋腹縁圧痕、貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縁圧痕、沈織文	ミガキ	I
206	7①区N O 67	深鉢	全体部	条痕文、浮石含む	ナデ	I
207	7①区N O 20	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、浮石含む	ナデ	I
208	7②区N O 372	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、浮石含む	ナデ	I
209	7①区N O B 130	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、浮石含む	ミガキ	I
210	7①区N O 200	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、浮石含む、黒斑あり	ナデ	I
211	7①区N O 54	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、雲母含む	ナデ	I
212	7②区N O 340	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、海綿骨針含む	ナデ	I
213	7①区N O B 137	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、条痕文	ミガキ	I
214	7②区N O 340	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、刻突文(兩方平棒工具)、条痕文、浮石	ナデ	I
215	7②区N O 396	深鉢	全体部	貝紋押し引き文、刻突文(片刃)、浮石含む	ミガキ	I
216	7①区N O 187	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、刻突文(片刃)、浮石含む	ミガキ	I
217	7②区N O 381	深鉢	全体部	貝紋腹縁圧痕、短貝紋腹縫、刻突文(片刃)、浮石	ミガキ	I
218	7①区N O 310	深鉢	全体部	貝紋腹縫、刻突文(片刃)、浮石含む	ナデ	I
219	7②区N O 394	深鉢	全体部	貝紋腹縫、刻突文(片刃)、浮石含む	ミガキ	I
220	7③区VII層	深鉢	全体部	貝紋押し引き文、刻突文(片刃)、浮石含む	ミガキ	I
221	K III d 8 VI層	深鉢	全体部	貝紋腹縫、刻突文(片刃)、海綿骨針含む	ミガキ	I
222	7②区N O 382	深鉢	全体部	貝紋条痕文、刻突文(片刃)、海綿骨針含む	ミガキ	I

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類
223	7②区NO 358	深鉢	体部	貝殻条底文、刺突文、海錦青針含む	ミガキ	I
224	7②区NO 371	深鉢	体部	貝殻条底文、刺突文（片刃）、海錦青針含む	ミガキ	I
225	7②区NO 403	深鉢	体部	貝殻条底文、刺突文（片刃）、海錦青針含む	ナデ	I
226	7②区NO 400	深鉢	体部	貝殻条底文、刺突文（片刃）、海錦青針含む	ミガキ	I
227	7①区NO 38	深鉢	体～底部	貝殻条底文、刺突文（片刃）、浮石含む	ナデ	I
228	7①区NO C 96	深鉢	体部	刺突文（片刃）、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
229	7①区NO 175	深鉢	体部	刺突文（片刃）、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
230	7①区NO C 46	深鉢	体部	貝殻条底文、刺突文（片刃）、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
231	7①区NO 168	深鉢	体部	貝殻条底文、刺突文（片刃）、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
232	7①区NO B 17	深鉢	体部	貝殻条底文、刺突文（片刃）、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
233	7①区NO C 62	深鉢	体部	貝殻条底文、刺突文（片刃）、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
234	7①区NO 164	深鉢	体部	貝殻条底文、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
235	L III h 12. VI層	深鉢	体部	貝殻条底文、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
236	7①区NO 220	深鉢	体部	貝殻条底文、沈線文、条底文、浮石含む	ミガキ	I
237	7①区NO C 71	深鉢	体部	貝殻条底文、沈線文、条底文、浮石含む	ミガキ	I
238	早NO 188	深鉢	口縁部	貝發押引き文、沈線文、浮石含む	ミガキ	I
239	早B 21	深鉢	体部	貝發押引き文、沈線文（片刃）、沈線文、浮石含む	ナデ	I
240	7①区NO B 134	深鉢	体部	貝殻条底文、沈線文、浮石含む、黒斑あり	ミガキ	I
241	7②区NO 361	深鉢	体部	貝殻条底文、海錦青針含む	ミガキ	I
242	7②区NO 402	深鉢	体部	貝殻条底文、浮石含む	ミガキ	I
243	7①区NO I 20	深鉢	体部	無文、外外面ミガキ、浮石含む	ミガキ	I
244	7②区NO 390	深鉢	体～底部	条底文、外外面ミガキ、浮石含む、黒斑あり	ナデ	I
245	早NO B 98	深鉢	体～底部	貝殻条底文	ミガキ	I
246	早NO 22.40.46	深鉢	体～底部	貝殻条底文	ナデ	I
247	早NO 10	深鉢	底部	貝殻条底文	ミガキ	I
248	早NO 32	深鉢	底部	貝殻条底文	ナデ	I
249	早NO 383	深鉢	底部	貝殻条底文	ミガキ	I
250	早NO 39.110	深鉢	体～底部	貝殻条底文	ナデ	I
251	早NO B 8	深鉢	底部	貝殻条底文	ミガキ	I
252	L III s II VI層	深鉢	底部	貝殻条底文	ミガキ	I
253	早NO 200	深鉢	底部	貝殻条底文	ナデ	I
254	早NO 110	深鉢	底部	貝殻条底文	ミガキ	I
255	早NO B 32	深鉢	底部	貝殻条底文	ミガキ	I
256	早NO 10	深鉢	底部	貝殻条底文	ナデ	I
257	早NO C 53	深鉢	底部	貝殻条底文、外外面ミガキ	ナデ	I
258	早NO 52.61.62	深鉢	体～底部	貝發押引き文	ミガキ	I
259	早NO B 96	深鉢	底部	貝發押引き文、刺突文（片刃）	ナデ	I
260	早B NO 151	深鉢	底部	貝發押引き文、刺突文（片刃）	ナデ	I
261	早NO 309	深鉢	底部	貝發押引き文、刺突文、条底文	ナデ	I
262	早NO 188.191	深鉢	体～底部	貝發押引き文、刺突文、条底文	ナデ	I
263	早NO 30.40.80	深鉢	体～底部	刺突文	ナデ	I
264	前NOC 88	深鉢	口縁～体部	口縁R L、羽状網文（L R, R L）、織維、浮石	ナデ	II 1 a
265	前NO 46.47.54	深鉢	口縁～体部	口縁R L、羽状網文（L R, R L）、織維、浮石、深付着	ナデ	II 1 a
266	前NO 53.57	深鉢	口縁部	口縁R L、羽状網文（L R, R L）、織維、浮石多量混入	ナデ	II 1 a
267	前NO 154	深鉢	口縁部	口縁R L、羽状網文（L R, R L）、織維、浮石多量混入	ミガキ	II 1 a
268	前NO 71.72	深鉢	口縁部	口縁R L、羽状網文（L R, R L）、織維、浮石	ナデ	II 1 a
269	前NO 38	深鉢	口縁部	口縁条底文、羽状網文、織維、浮石含む	ナデ	II 1 a
270	M III o 14 IV a	深鉢	口縁部	口縁条底文、R L、織維、浮石含む	ナデ	II 1 a
271	前NOC 101	深鉢	口縁部	捲糸压痕、織維、浮石含む	ナデ	II 1 a
272	M III p 12 IV a	深鉢	口縁～体部	K L、織維、浮石含む	ナデ	II 1 a
273	前NO 124	鉢	口縁～体部	羽状網文（L R, R L）、織維、浮石多量混入	ナデ	II 1 a
274	前NO 62. 140	深鉢	口縁部	羽状網文（L R, R L）、内削ぎ、織維、浮石多量混入	ナデ	II 1 a
275	前NO 108	深鉢	口縁部	羽状網文（L R, R L）、織維、浮石多量混入	ミガキ	II 1 a
276	前NO B 36	深鉢	口縁部	羽状網文（L R, R L）、内削ぎ、織維、浮石多量混入	ナデ	II 1 a
277	前NO B 61	深鉢	口縁部	口形凹缺、刻み、捲糸压痕、羽状網文、堆修孔	ナデ	II 1 a
278	前NO 133	深鉢	体部	捲糸压痕、羽状網文、浮石含む	ナデ	II 1 a
279	O III d 18 III層	深鉢	体部	羽状網文（L R, R L）、織維、浮石多量混入	ナデ	II 1 a
280	前NO 6.10	深鉢	体部	羽状網文（L R, R L）、織維、浮石多量混入	ナデ	II 1 a

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類
281	前NO 50,54,55,56	深鉢	体部	羽状縞文（L.R.、R.L.）、織維・浮石多量混入	ナデ	H1 a
282	前NO 77,B 17	深鉢	口縁部	山形口縁、撚糸压痕、円形刺突、L.R.、織維・浮石含む	ミガキ	H1 b
283	前NO 8,10	深鉢	口縁部	平縁、撚糸压痕、円形刺突、L.R.、織維・浮石含む	ナデ	H1 b
284	前NO 78	深鉢	口縁部	平縁、撚糸压痕、円形刺突、L.R.、織維・浮石含む	ナデ	H1 b
285	L.IV r 10 IV a 層	深鉢	口縁～体部	R.L.	ナデ	H1 c
286	L.III r 10 IV a 層	深鉢	体～底部	285と同一個体、乳房状尖底	ナデ	H1 c
287	M.III b 12 IV a 層	深鉢	口縁部	平縁、撚糸压痕、L.R.、織維・浮石含む	ナデ	H1 a
288	M.III b 12 IV a 層	深鉢	口縁部	撚糸压痕、L.R.、織維・浮石含む	ナデ	H1 a
289	前NO 7	深鉢	体部	貼り付け、L.R.、織維・浮石含む	ナデ	H1 a
290	O.III d 18 II 層	深鉢	口縁部	R.L.、黒斑あり、織維・浮石含む	ナデ	H1 a
291	N.III c 14 II 層	深鉢	口縁部	口唇部R.L.、体部L.R.、黒斑あり、砂粒・浮石含む	ナデ	H1 a
292	O.III h 16 III 層	深鉢	体部	羽状縞文、砂粒・浮石含む	ナデ	H1 a
293	O.III a 15 III 層	深鉢	体部	羽状縞文、砂粒孔あり、砂粒・浮石含む	ナデ	H1 a
294	O.III d 18 IV a 層	深鉢	体部	羽状縞文、砂粒・浮石含む	ナデ	H1 a
295	O.II l 14 III 層	深鉢	口縁部	撚糸压痕、浮帶文、刻み、砂粒・浮石含む	ナデ	H1 b
296	O.III i 14 IV 層	深鉢	口縁部	撚糸压痕、刻み・浮石・織維含む、295と同一個体	ナデ	H1 b
297	N.III b 14 III 層	深鉢	口縁部	縞格文・浮石含む	ナデ	H2
298	M.III n 11 IV a 層	深鉢	体部	木目状撚糸文、浮石含む	ナデ	H2
299	L.III c 11 III 層	深鉢	口縁部	撚糸文、多輪輪条体、砂粒・浮石含む	ナデ	H2
300	L.III d 10 III 層	深鉢	体部	299と同一個体、多輪輪条体、織維含む	ナデ	H2
301	M.III o 14 IV a 層	深鉢	口縁部	貼り付け、刻美文、砂粒含む	ナデ	H1 a
302	J.III j 6 III 層	深鉢	口縁部	山形口縁、溝状凹貼り付け、浮石含む	ナデ	H1 b
303	L.III g 11 III 層	深鉢	体部	貼り付け、沈線区画充填縞文、L.R.、砂粒含む	ミガキ	H2
304	L.III o 11 III 層	深鉢	口縁部	円形刺突、貼り付け、沈線、L.R.、砂粒含む	ナデ	H2
305	N.III c 14 II 層	深鉢	口縁部	撚糸压痕、砂粒含む	ミガキ	H2
306	O.IV a 14 II 層	深鉢	口縁部	R.L.、沈線文、薄擦孔あり、炭化物付着、金雲母含む	ナデ	H2
307	L.III j 11 III 層	深鉢	口縁～体部	山形口縁、L.R.、炭化物付着	ミガキ	H2
308	O.III a 14 II 層	深鉢	口縁部	沈線文、R.L.、磨消縞文、ひれ状突起、金雲母含む	ナデ	H2
309	L.III s 12 III 層	深鉢	口縁部	沈線文、L.R.、磨消縞文、砂粒含む	ナデ	H2
310	L.III t 12 III 層	深鉢	口縁部	貼り付け、沈線文、磨消縞文、L.R.、砂粒含む	ナデ	H2
311	L.III o 10 III 層	深鉢	口縁部	沈線文、L.R.、金雲母・砂粒含む	ミガキ	H2
312	O.III c 14 II 層	深鉢	口縁部	撚糸压痕、砂粒含む	ミガキ	H2
313	L.III g 10 III 層	深鉢	口縁部	山形口縁、口内面貼り付け、円形刺突、沈線、L.R.	ミガキ	H2
314	L.III l 10 III 層	深鉢	体部	円形刺突、沈線文、R.L.、砂粒含む	ナデ	H2
315	L.III r 11 III 層	深鉢	口縁部	平縁、円形刺突、沈線、L.R.	ナデ	H2
316	O.III e 17 II 層	深鉢	口縁部	山形口縁、沈線文、L.R.、砂粒含む	ナデ	H2
317	L.III j 10 III 層	深鉢	体部	小山形口縁、刻み、円形刺突、沈線文、L.R.、黒斑あり	ナデ	H2
318	L.III j 9 III 層	深鉢	体部	小山形口縁、刻み、円形刺突、砂粒含む	ナデ	H2
319	L.III l 11 III 層	深鉢	体部	小山形口縁、刻み、刺突文、沈線文、L.R.、砂粒含む	ナデ	H2
320	M.III s 11 II 層	深鉢	口縁～体部	円形刺突、貼り付け、沈線区画、砂粒・金雲母含む	ナデ	H1
321	O.III b 14 II 層	深鉢	口縁～体部	山形口縁、沈線文、R.L.、磨消縞文、ひれ状貼り付け	ナデ	H1
322	L.III t 10 III 層	深鉢	口縁部	沈線文、磨消縞文、砂粒含む	ナデ	H1
323	N.III e 13 II 層	深鉢	口縁部	沈線文、砂粒含む	ミガキ	H1
324	P.III c 20 III 層	深鉢	口縁部	沈線文、刺突、砂粒含む	ミガキ	H1
325	M.III p 12 III 層	深鉢	口縁部	沈線文、海綿骨針・砂粒含む	ナデ	H1
326	L.III b 10 II 層	深鉢	口縁部	刺突文、沈線文、磨消縞文、沈文、海綿骨針・砂粒含む	ミガキ	H1
327	N.III d 13 II 層	深鉢	口縁部	隆脊、円形刺突外、砂粒含む	ナデ	H2
328	L.III s 11 III 層	深鉢	口縁部	条線文、やや外反	ナデ	H2
329	M.III e 11 III 層	深鉢	口縁～体部	撚糸压痕、L.R.、砂粒含む	ナデ	H2
330	N.III c 13 II 層	深鉢	口縁部	小山形口縁、撚糸压痕、L.R.、砂粒含む	ミガキ	H2
331	P.III e 20 II 層	深鉢	体部	網目状撚糸文、砂粒含む	ナデ	H2
332	L.III t 11 III 層	深鉢	口縁部	沈線文、磨消縞文、L.R.	ナデ	H2
333	M.III s 12 II 層	深鉢	体部	沈線文、磨消縞文、L.R.	ナデ	H2
334	L.III i 10 II 層	深鉢	体部	沈線文、L.R.、浮石・砂粒含む	ナデ	H2
335	L.III i 10 II 層	深鉢	口縁部	沈線文、磨消縞文、L.R.、砂粒含む	ナデ	H2
336	N.III f 14 II 層	深鉢	口縁部	沈線文、L.R.、磨消縞文、砂粒含む	ミガキ	H2
337	L.III j 10 III 層	深鉢	口縁部	小山形口縁、L.R.、砂粒含む	ナデ	H3
338	K.III i 18 III 層	深鉢	口縁部	口唇小突起、沈線文、磨消縞文、R.L.、砂粒含む	ナデ	H4

番号	出土地点・層位	器種	部位	文様など	内面	分類
339	K III i 8 II層	深鉢	体部	ボタン状貼り付け、刻み、沈線、R.L.	V	ナデ IV 4
340	M III m 10 II層	深鉢	口縁部	小山形口縁、側突、沈線、廣角網文、R.L.、砂粒含む	ナデ	IV
341	L III f 9 III層	深鉢	口縁～体部	平縁、R.L.、砂粒含む	ナデ	IV
342	L III s 10 III層	深鉢	口縁～体部	R.L.	ナデ	IV
343	N III g 14 III層	深鉢	底部	R.L.、底面条線文	ナデ	IV
344	J III e 6 III層	鉢	体～底部	R.L.	ナデ	IV
345	L III d 9 III層	注口	注口部	欠損、砂粒含む	ナデ	IV
346	L III p 10 III層	深鉢	口縁部	竹苞刺突、砂粒含む	ナデ	III～IV
347	O II o 17 II層	鉢	体部	2個1対小突起、沈線、磨消網文、R.L.、内面沈線	ミガキ	V 1
348	N III i 12 II層	兼	口縁～底部	R.L.、沈線文、砂粒含む	ナデ	V1～V2
349	G III i 19 II層	鉢	口縁部	口唇刻み、沈線文、R.L.、内面沈線、砂粒少數含む	ミガキ	V 2
350	M III p 11 III層	鉢	口縁部	口唇刻み、沈線文、磨消網文、R.L.、砂粒少數含む	ミガキ	V 2
351	P III c 15 II層	深鉢	体部	沈線文、R.L.、磨消網文、砂粒含む	ミガキ	V 2
352	L III i 9 III層	鉢	口縁部	口唇刻み、沈線文、R.L.、浮石含む	ナデ	V 2
353	P III c 19 II層	深鉢	口縁部	平縁、R.L.、黒斑あり	ナデ	V 2
354	N III f 12 II層	鉢	口縁部	2個1対小山形口縁、R.L.、2条平行沈線、海綿骨針含む	ミガキ	V 2
355	N III a 14 III層	鉢	口縁部	平行沈線文、R.L.、内面沈線、砂粒少數含む	ミガキ	V 2
356	4区T 3～4 II?	鉢	口縁部	変形工字文、砂粒含む	ナデ	V 3
357	L III s 11 III層	兼	体部	3条平行沈線、R.L.、砂粒含む	ナデ	V1

(土師器観察表)

():准定値

番号	出土地点	器種	外面調整 (口縁部)	外面調整 (体部～底部)	内面調整 (口縁部)	内面調整 (体部～底部)	法量 (ca)			備考
							口径	底径	器高	
18	7号住理土	鉢	ヨコナデ	指ナデ	ヨコナデ	指ナデ	14.1	8.2	11.6	輪積み底 8袋
20	8号住NO.15	坪	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	14.4	—	5.8	外面有段、内黒
21	8号住カマド	坪	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	16.2	—	4.8	外面有段、内黒
22	8号ENO.26	坪	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	17.0	—	3.8	内黒
23	8号住NO.27	坪	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラミガキ	11.6	—	5.0	内黒
24	8号ENO.15	坪	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	13.9	—	4.6	
25	8号ENO.20	坪	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	13.0	—	4.8	輪積み底、内黒
26	8号住NO.5	坪	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラミガキ	12.0	7.2	4.8	
27	8号ENO.31	高坪	—	—	—	—	(8.0)	—	4.2	脚部
28	8号住埋土	甕	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヘラケズリ	ヨコナデ	ハケメ	17.5	(8.8)	35.0	頸部有段
29	8号住NO.25	甕	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヘラケズリ	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	19.5	8.7	38.8	頸部有段、輪積み底
30	8号ENO.24	甕	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	17.9	—	36.2	頸部沈継状の有段
31	8号住埋土	甕	ハケメ→ヨコナデ	ナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ→ヨコナデ	ハケメ	18.9	—	22.4	頸部有段
32	8号住NO.2	甕	ヨコナデ→ケズリ	ハケメ→ヘラケズリ	ケズリ→ヨコナデ	ハケメ	20.0	—	18.4	頸部有段
33	8号ENO.16	甕	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヨキナタギ	ヨコナデ	ハケメ	19.3	8.1	22.8	頸部沈継状の底、輪積み底
34	8号ENO.8	甕	ヨコナデ	ハケメ→ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	15.3	7.4	16.7	
35	8号住埋土	甕	ハケメ→ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ・ハケメ	16.9	—	13.8	頸部有段、輪積み底
36	8号ENO.22	甕	ヨコナデ	ハケメ→ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	20.5	9.0	39.0	
37	8号ENO.19	甕	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ・ケズリ	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	18.3	—	24.1	
38	8号住NO.3	甕	—	ヘラケズリ	—	ハケメ	—	8.5	21.5	
39	8号ENO.9	甕	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	14.7	—	20.2	口縁部・頸部有段、輪積み底
40	8号ENO.1	甕	ヨコナデ	ヘラナデ・ケズリ	ヨコナデ	ヘラミガキ	15.7	6.0	14.8	球調塊、頸部有段、輪積み底、内面丸味
46	9号住カマド	坪	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(21.0)	—	4.0	外面有段、底部ヘラケズリ
47	9号住カマド	甕	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヨコナデ	ハケメ	17.2	—	22.2	頸部有段
48	10号住床塗	坪	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ	(16.8)	—	6.4	外面有段、底鈎内面丸み、内黒
49	10号住NO.1	坪	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ	(17.6)	—	(5.4)	外面有段、内黒
50	10号住床塗	坪	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	14.6	6.0	5.6	外面有段、内黒
51	10号住埋土	坪	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ	14.2	12.0	3.4	外面有段、内黒
52	10号住埋土	鉢	ヨコナデ	ヘラケズリ→ハケメ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ→ハケメ	(24.8)	—	11.0	外面沈継状の段
53	10号住NO.3	甕	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ	ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ	(14.4)	8.4	13.1	頸部有段、底部木葉痕、底部外面張り出し
54	10号住埋土	甕	ヨコナデ→ハケメ	ヘラミガキ	ハケメ	ハケメ	15.2	6.5	18.1	頸部有段、底部内面丸味
55	10号住埋土	甕	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ	ヨコナデ	ハケメ	19.6	(8.6)	34.6	頸部有段、底部内面卵形、輪積み底
56	10号住NO.10	甕	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ・ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ	17.6	8.3	20.7	輪積み底、底部外面張り出し
57	10号住埋土	甕	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラミガキ・ヘラミガキ	16.7	—	23.7	
58	10号住NO.1	甕	—	ヘラナデ・ミガキ	—	ヘラミガキ・ハケメ	—	9.8	24.4	底部外面張り出し、底鈎内面や丸味
62	11号住NO.1	甕	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラナデ	16.5	7.3	18.0	口縁部や内溝、頸部有段
63	11号住NO.2	甕	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ・ヘラミガキ	ヨコナデ	ハケメ	20.3	9.0	35.7	頸部有段、底部内面卵形
64	11号住NO.16	甕	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	18.7	10.3	29.8	球調塊、頸部有段、底部外面張り出し小
73	12号住、島状	鉢	指ナデ	—	ヘラナデ	ヘラナデ	10.8	7.6	6.2	6②区島状造焼と接合、輪積み底

番号	出土地点	器種	外面調整 (縦横部)	外面調整 (体部～底部)	内面調整 (縦横部)	内面調整 (体部～底部)	法量(cm)			備考
							口径	底径	器高	
74	13号住NO.4	环	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	17.1	10.0	3.0	外面有段、内黒
75	13号住NO.2	壺	ヨロナデ→ミガキ・ハメ	ヘラミガキ	ヨロナデ→ミガキ・ヘラナデ	ハメヘラミガキ	17.2	—	15.8	頸部有段
76	13号住壺十	壺	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	18.6	8.7	32.4	頸部有段、底部内面丸味、輪積み痕
80	14号住埋土	环	ヘラミガキ	ケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	21.6	—	4.4	外面有段、内黒
81	15号住NO.3	环	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	13.2	—	5.0	外面有段、内黒
82	15号住壺西	环	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラミガキ	16.0	—	7.3	
83	15号住NO.7	环	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	16.0	—	6.0	
84	15号住NO.14	环	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ・ヘラケズリ	ヨコナデ→ミガキ	ヘラミガキ	16.0	—	4.6	輪積み痕
85	15号住壺東	环	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	17.0	—	5.2	輪積み痕
86	15号住壺上	壺		ヘラナデ		ヘラケズリ	—	8.8	5.6	輪積み痕
87	15号住焼土	壺	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	21.3	9.2	39.4	頸部沈巣状の段、輪積み底、底部張り出し
88	15号住壺上	壺	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ	ハケメ	19.3	9.6	39.8	頸部沈巣状の段、輪積み底
89	15号住壺上	壺	ハケメ→ヨコナデ	ヘラミガキ・ハケメ	ヨコナデ	ハケメ	17.8	—	29.1	頸部沈巣状の段、輪積み底
90	15号住床面	壺	ハケメ→ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ	16.0	10.4	31.8	頸部沈巣状の段、底部内面丸味
93	20号住カマド	壺	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	23.5	10.2	33.3	底部木葉痕
94	20号住カマド	壺		ヘラナデ		ヘラナデ	22.6	9.5	23.2	
97	21号住壺上	壺	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	21.5	—	12.7	
98	21号住カマド	壺		ヘラナデ		ヘラナデ	—	7.3	6.2	底部木葉痕
99	21号住壺上	壺	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	23.8	—	11.5	
100	21号住壺上	壺	ロクロ	ロクロ・ヘラナデ	ロクロ	ロクロ	25.3	—	16.3	
101	21号住カマド	壺	ロクロ	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	20.5	—	20.3	
102	21号住床底	壺	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	22.3	—	11.1	
103	21号住カマド	壺	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	16.9	7.6	16.6	回転糸切り痕
105	22号住床面	环	ロクロ	ロクロ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	15.6	6.4	5.2	墨書き、内黒
106	22号住床面	壺	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	14.4	8.0	16.6	
107	22号住焼土	壺	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	15.3	—	10.4	
108	23号住カマド	壺	ヨコナデ	ヘラナデ・ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	11.8	—	10.9	
109	23号住床面	壺		ロクロ		ロクロ	—	7.6	9.8	回転糸切り痕
110	24号住NO.15	环	ロクロ	ロクロ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	14.2	5.8	5.8	回転糸切り痕、内黒
111	24号住NO.6	壺	ヨコナデ→ケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ	12.7	—	10.1	輪積み痕
112	24号住NO.4	壺	ヨコナデ→ケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	7.7	—	10.0	
131	47号土坑埋土	壺	ヨコナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	21.5	—	12.3	
132	47号土坑埋土	壺		ヘラナデ		ヘラナデ	—	9.5	5.1	底部木葉痕
338	LIII 1 II層	环	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ	13.9	—	4.9	内黒
339	KIII 1 S II層	环	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	7.1	6.1	10.8	底部木葉痕
360	MIII m 1 II層	壺	ハケメ→ヨコナデ	ヘラミガキ・ハメ	ヨコナデ→ミガキ	ハケメ	15.8	8.0	30.0	頸部平行沈痕、底部内面やや丸味

第3表

石器・石製品観察表

番号	出土地点・層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質(山地)	備考
19	7号住埋土	石斧	8.8	6.1	4.5	416.6	安山岩(二戸市周辺)	
42	8号住N O 2	磨石十石	12.9	7.4	5.8	827.5	砂岩(二戸市周辺)	
67	11号住埋土	石斧	10.6	4.4	4.6	204.1	砂岩(二戸市周辺)	四面使用、一部欠損
68	11号住N O 1	石鏟	6.0	7.2	2.5	140.0	安山岩(二戸市周辺)	未製品
69	11号住N O 1	石鏟	4.4	3.3	0.9	14.7	頁岩(二戸市周辺)	一部欠損
95	20号住埋土	不定形石器	5.4	3.8	0.8	15.6	頁岩(北上山地)	1縫辺刃部加工
96	20号住埋土	石斧	8.5	7.2	4.7	355.2	安山岩(奥羽山脈)	
104	21号住埋土	磨製石斧	2.6	4.4	1.0	13.9	砂岩(北上山地)	刃部のみ
113	24号住N O 13	石斧	16.5	14.1	3.6	1625.4	安山岩(二戸市周辺)	
114	24号住N O 15	石斧	14.9	10.0	2.3	497.0	安山岩(二戸市周辺)	
121	27号土坑埋土	磨石十石	11.1	5.6	6.7	454.7	安山岩(奥羽山脈)	
124	32号土坑埋土	石斧	8.7	6.8	4.0	326.1	角閃石岩(北上山地)	
130	43号土坑埋土	石鏟	11.8	12.0	5.5	1482.3	安山岩(二戸市周辺)	
151	12号焼土	不定形石器	4.0	3.0	0.7	3.7	凝灰岩(奥羽山脈)	2縫辺刃部加工
152	14号焼土 N O 8	石鏟	3.2	1.3	0.6	1.8	頁岩(北上山地)	一部欠損
153	14号焼土 N O 6	不定形石器	3.1	3.4	0.5	4.8	頁岩(北上山地)	3縫辺刃部加工
154	12号深埋土	石鏟	3.3	1.7	0.6	2.6	頁岩(二戸市周辺)	一部欠損、有茎凸基
361	早N O 4	石鏟	2.3	1.0	0.3	0.5	頁岩(北上山地)	無茎平基
362	早N O 22	石鏟	3.9	1.4	0.6	3.0	頁岩(北上山地)	無茎平基
363	7①区早N O 128	石鏟	4.1	1.2	0.5	2.1	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
364	7①区早N O C 8	石鏟	3.7	0.9	0.5	1.9	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
365	7①区早N O 126	石鏟	3.4	1.0	0.5	1.4	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
366	早N O B 1	石鏟	4.6	1.1	0.6	2.7	頁岩(北上山地)	無茎平基
367	早N O 16	石鏟	4.3	1.3	0.5	2.9	頁岩(北上山地)	無茎平基
368	早N O 32	石鏟	4.4	1.2	0.5	2.1	頁岩(北上山地)	無茎平基
369	7①区早N O 166	石鏟	3.8	1.1	0.6	2.4	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
370	7①区早N O 25	石鏟	4.5	1.8	0.7	5.9	頁岩(二戸市周辺)	
371	M III r15 四層	石鏟	3.5	1.5	0.6	2.6	頁岩(北上山地)	有茎凸基、アスファルト着付
372	7①区早N O 45	石鏟	5.4	0.9	0.6	2.9	頁岩(二戸市周辺)	棒状、無の可能性
373	7①区早N O 215	石鏟	5.2	6.2	0.6	3.9	頁岩(二戸市周辺)	棒状、尖頭端?
374	7①区早N O 103	石鏟	3.6	1.2	0.8	3.3	頁岩(二戸市周辺)	棒状
375	早N O 19	石鏟	5.5	1.1	0.5	2.7	頁岩(北上山地)	無茎平基、アスファルト付着
376	早N O 3	石鏟	2.7	1.2	0.4	1.0	頁岩(北上山地)	基部欠損
377	7①区早N O 272	石鏟	2.1	1.1	0.6	1.3	頁岩(二戸市周辺)	先端部、基部欠損
378	M III o 14 N a 層	石匙	8.1	3.6	0.8	17.1	頁岩(北上山地)	
379	L III t 11 N a 層	石匙	3.0	4.1	0.4	4.4	頁岩(北上山地)	
380	7①区早N O 22	石匙	3.8	3.8	1.0	14.9	頁岩(二戸市周辺)	欠損
381	7①区早N O 117	石鏟	6.6	3.1	1.7	32.4	頁岩(二戸市周辺)	
382	7①区早N O C 33	石鏟	5.7	2.2	1.1	11.5	頁岩(二戸市周辺)	
383	7①区早N O C 69	石鏟	4.0	2.7	1.4	14.8	頁岩(二戸市周辺)	
384	7①区早N O B 39	石鏟	7.3	3.9	2.0	60.8	頁岩(二戸市周辺)	
385	7①区早N O C 40	石鏟	7.2	3.0	1.3	28.9	頁岩(二戸市周辺)	
386	7①区早N O C 33	石鏟	4.1	3.4	1.0	11.5	頁岩(二戸市周辺)	一部欠損
387	早N O 13	石鏟	3.6	2.5	1.9	14.9	頁岩(北上山地)	アスファルト付着
388	7①区早N O 86	石鏟	3.5	2.7	0.5	3.6	頁岩(二戸市周辺)	欠損
389	早N O 9	石鏟	3.3	3.1	1.2	14.8	頁岩(北上山地)	欠損
390	7①区早N O 220	石鏟	4.9	4.0	1.0	19.7	珪質頁岩(二戸市周辺)	欠損
391	7①区早N O C 32	石鏟	4.9	4.5	1.4	29.7	頁岩(二戸市周辺)	欠損
392	早N O 7	尖頭器	4.7	2.2	1.0	7.6	頁岩(北上山地)	先端部のみ
393	7①区早N O 170	不定形石器	7.5	6.3	1.3	50.4	頁岩(二戸市周辺)	2縫辺刃部加工
394	早N O 29	不定形石器	7.6	3.7	1.6	32.9	頁岩(北上山地)	2縫辺刃部加工
395	早N O 6	不定形石器	4.9	3.5	1.2	15.5	頁岩(北上山地)	1縫辺刃部加工
396	7①区早N O 99	磨製石斧	12.3	5.9	2.5	392.8	粉岩(二戸市周辺)	數度あり
397	7①区早N O 256	磨製石斧	8.6	4.6	1.8	123.3	綠色岩(北上山地北側)	鈎欠損
398	7①区早N O C 58	磨製石斧	5.6	2.9	0.9	24.1	頁岩(二戸市周辺)	
399	7②区早N O 284	磨製石斧	5.0	5.8	2.8	114.1	砂岩(二戸市周辺)	欠損
400	7①区早N O 6	石斧	5.4	6.9	1.4	70.2	砂岩(二戸市周辺)	
401	6②区早N O B 4	磨石	16.3	6.2	7.3	1246.1	安山岩(奥羽山脈)	

番号	出土地点・層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質(山地)	備考
402	6②区平NOB 3	磨石	18.3	5.3	6.7	776.4	安山岩(奥羽山脈)	
403	7①区平NO 3	磨石	16.3	3.2	4.5	326.1	砂岩(二戸市周辺)	
404	6区早NO 31	磨石	13.2	5.7	4.8	680.3	角閃矽岩(北上山地)	
405	7①区平NO 117	磨石	9.4	7.8	4.3	497.9	砂岩(二戸市周辺)	
406	早NO 27	磨石	14.8	6.1	2.2	379.2	はんない岩(北上山地)	
407	7①区平NO 122	敲石	8.1	7.5	4.6	345.2	安山岩(二戸市周辺)	欠損
408	7①区平NO 192	敲石	7.1	6.1	2.3	157.6	安山岩(二戸市周辺)	
409	7①区平NO 65	凹石	9.9	7.6	3.7	440.7	安山岩(二戸市周辺)	
410	7②区平NO 291	凹石	8.4	6.8	5.1	345.4	安山岩(二戸市周辺)	
411	6②区平NO B 5	凹石	9.5	5.4	4.5	224.9	安山岩(奥羽山脈)	欠損
412	7①区平NO B 33	磨石+敲石	15.5	7.5	5.8	821.9	安山岩(二戸市周辺)	
413	7①区平NO C 62	磨石+凹石	8.2	6.9	2.3	195.6	安山岩(二戸市周辺)	
414	5区前NO C 5	石鏟	2.7	1.7	0.4	1.1	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
415	5区前NO 6	石鏟	2.3	1.8	0.4	0.6	凝灰岩(二戸市周辺)	無茎平基
416	5区前NO C 50	石鏟	2.5	1.7	0.5	0.9	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
417	5区前NO C 28	石鏟	1.5	1.4	0.3	0.4	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基、先端部欠損
418	5区前NO 74	石鏟	2.0	1.4	0.3	0.6	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
419	5区前NO 38	石鏟	2.2	1.5	0.4	0.9	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
420	5区前NO C 63	石鏟	2.1	1.4	0.3	0.4	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基、一部欠損
421	5区前NO 1	石鏟	2.7	1.4	0.5	0.8	凝灰岩(二戸市周辺)	無茎平基
422	5区前NO C 20	石鏟	3.0	1.1	0.5	1.5	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基、先端部欠損
423	5区前NO C 56	石鏟	1.8	0.6	0.4	0.3	頁岩(二戸市周辺)	無茎可能
424	5区前NO 48	石匙	7.6	2.8	0.9	14.8	頁岩(二戸市周辺)	
425	5区前NO C 31	石匙	6.6	1.8	0.7	6.7	頁岩(二戸市周辺)	
426	5区前NO B 17	石匙	2.5	1.5	0.5	1.6	頁岩(二戸市周辺)	欠損
427	5区前NO 41	石匙	6.2	3.1	1.6	31.4	頁岩(二戸市周辺)	
428	5区前NO 34	石匙	4.7	4.1	1.1	29.5	頁岩(二戸市周辺)	
429	M III o 14 IV a 層	石匙	2.8	3.6	1.6	17.7	頁岩(北上山地)	破損後再加工
430	M III o 14 IV a 層	不定形石器	4.0	2.9	0.5	5.5	頁岩(北上山地)	1縫辺刃部加工
431	M III a 11 IV a 層	不定形石器	6.7	3.0	1.5	21.7	頁岩(奥羽山脈)	1縫辺刃部加工
432	5区前NO B 1	不定形石器	4.2	4.7	1.4	32.7	頁岩(二戸市周辺)	1縫辺刃部加工
433	5区前NO 7	不定形石器	2.5	2.6	0.4	2.2	頁岩(二戸市周辺)	2縫辺刃部加工
434	M III o 14 IV a 層	不定形石器	4.3	2.9	1.1	11.9	頁岩(北上山地)	2縫辺刃部加工
435	M III o 14 IV a 層	不定形石器	4.5	4.0	1.0	16.9	頁岩(北上山地)	2縫辺刃部加工
436	M III o 14 IV a 層	不定形石器	4.2	3.0	0.8	7.7	頁岩(北上山地)	2縫辺刃部加工
437	M III r 15 IV a 層	磨製石斧	8.0	3.0	1.6	63.6	ホルンフルス	(北上山地)
438	5②区前NO 4	磨石	8.8	7.9	4.1	369.7	安山岩(奥羽山脈)	
439	5区前NO C 49	磨石	17.6	8.8	3.5	1114.8	砂岩(北上山地)	
440	M III o 14 IV a 層	陰石	8.7	6.7	3.5	284.9	安山岩(奥羽山脈)	
441	5②区前NO 5	敲石	9.7	8.2	5.5	658.4	安山岩(奥羽山脈)	
442	5②区前NO 6	磨石+敲石	6.2	2.7	2.1	120.9	安山岩(奥羽山脈)	
443	5区前NO 49	石皿	19.8	16.4	4.5	2229.9	安山岩(奥羽山脈)	
444	O III c 15 II 層	石鏟	2.4	1.4	0.5	1.4	頁岩(北上山地)	無茎凹基
445	K III 1 Ⅸ 層	石鏟	3.9	0.9	0.3	0.9	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基
446	O III d 16 III 層	石鏟	4.6	1.8	0.5	3.9	頁岩(北上山地)	無茎平基
447	N III d 13 II 層	石鏟	3.5	1.4	0.4	2.2	頁岩(北上山地)	無茎平基
448	N III a 13 IV b 層	石鏟	3.0	1.1	0.3	1.2	頁岩(二戸市周辺)	無茎平基、先端部欠損
449	M III a 9 II 層	石鏟	2.7	1.2	0.5	1.7	頁岩(北上山地)	無茎平基
450	N III a 15 III 層	石鏟	5.2	1.6	0.5	3.3	頁岩(北上山地)	有茎凸基
451	L III s 11 II 層	石鏟	4.4	1.4	0.8	3.5	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基
452	N III c 14 II 層	石鏟	2.4	1.3	0.4	0.9	頁岩(北上山地)	有茎凸基
453	K III p 10 II 層	石鏟	4.0	1.7	0.7	3.5	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基
454	K III o 8 II 層	石鏟	3.7	1.6	0.8	2.7	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基
455	M III j 10 IV 層	石鏟	3.4	1.4	0.5	2.0	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基
456	O III g 18 II 層	石鏟	3.1	1.4	0.6	2.1	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基
457	M III c 10 II 層	石鏟	5.1	1.4	0.5	2.7	頁岩(北上山地)	有茎凸基
458	K III o 8 II 層	石鏟	2.9	1.3	0.4	1.3	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基
459	K III o 8 II 層	石鏟	2.6	1.1	0.4	0.9	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基

番号	出土地点・層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質(山地)	備考
460	O III d 17 II層	石礫	3.7	1.7	0.5	2.8	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基、先端部欠損
461	7④区NO I	石礫	3.7	1.6	0.6	3.3	頁岩(二戸市周辺)	有茎凸基
462	O III g 17 II層	石礫	3.0	1.2	0.5	1.3	頁岩(北上山地)	有茎凸基
463	O III b 14 II層	石礫	7.0	1.0	0.5	4.4	頁岩(北上山地)	棒状
464	O III c 14 II層	石礫	6.8	2.5	0.6	10.0	頁岩(北上山地)	
465	O III e 16 II層	石礫	4.7	2.5	0.6	6.5	頁岩(北上山地)	
466	M III d 11 II層	石起	6.9	2.0	0.9	8.3	頁岩(北上山地)	
467	O III b 15 II層	石起	4.8	2.2	0.7	6.5	黒曜石	
468	N III b 14 II層	石起	3.9	2.1	0.5	5.7	頁岩(北上山地)	一部欠損
469	K III i 9 IV a 層	石起	8.5	1.7	0.7	11.9	頁岩(二戸市周辺)	一部欠損
470	K III i 9 IV a 層	石起	6.7	1.6	0.7	6.6	頁岩(二戸市周辺)	
471	L III h 9 IV a 層	石起	3.0	4.0	0.9	6.7	珪質頁岩(二戸市周辺)	
472	O III b 15 II層	尖頭器	9.5	4.1	0.7	27.1	頁岩(北上山地)	
473	N III c 13 II層	不定形石器	6.5	4.7	2.1	53.6	頁岩(北上山地)	2種刃刃部加工
474	O III b 18 II層	不定形石器	2.6	3.7	8.0	5.7	頁岩(二戸市周辺)	1種刃刃部加工
475	N III a 12 II層	不定形石器	7.0	6.5	2.	77.8	頁岩(二戸市周辺)	3種刃刃部加工
476	O III d 15 II層	不定形石器	4.1	3.5	1.5	20.8	頁岩(北上山地)	2種刃刃部加工
477	O III a 14 II層	不定形石器	5.0	3.3	1.0	13.4	頁岩(北上山地)	3種刃刃部加工
478	N III f 12 II層	不定形石器	3.9	3.2	0.9	13.7	頁岩(北上山地)	3種刃刃部加工
479	P III b 19 II層	石斧	2.9	5.0	1.5	27.6	砂岩(北上山地)	刃部のみ
480	O III f 16 II層	石斧	10.5	6.6	4.2	427.8	角閃岩(北上山地)	
481	O III c 14 II層	磨石	5.0	4.6	4.5	114.5	安山岩(奥羽山脈)	
482	L III r 11 II層	磨石	4.9	4.2	2.7	72.7	安山岩(奥羽山脈)	
483	O III e 16 II層	磨石	11.3	10.9	3.9	756.3	角閃岩(北上山地)	
484	M III b 9 II層	磨石	12.4	9.8	5.4	1034.2	安山岩(奥羽山脈)	
485	L III r 10 II層	磨石	9.3	8.1	3.6	413.9	安山岩(奥羽山脈)	
486	O III b 14 II層	磨石	10.7	8.2	5.0	653.6	安山岩(奥羽山脈)	
487	O III d 16 II層	敲石	6.3	7.1	4.4	281.6	安山岩(奥羽山脈)	欠損
488	J III f 6 II層	凹石	8.2	7.7	3.3	279.9	安山岩(二戸市周辺)	
489	K III aII II層	凹石	11.3	8.3	4.2	630.6	安山岩(二戸市周辺)	
490	L III aII II層	敲石+凹石	9.0	8.5	3.4	405.1	安山岩(二戸市周辺)	
491	K III g 9 II層	石錐	12.9	4.4	3.4	407.9	安山岩(二戸市周辺)	
492	O III f 16 II層	純石	7.0	4.1	3.0	37.1	燧灰岩(奥羽山脈)	四面使用、欠損
493	K III f 9 IV層	有孔石製品	3.3	3.1	2.3	21.9	砂岩(北上山地)	穿孔1.1cm
494	M III p 13 II層	抉狀耳飾り	3.8	2.8	0.7	6.8		

第4表
土製品観察表

番号	出土地点・層位	器種	部位	備考
41	8号住 NO 35 A	劫鍵車		上端幅4.6cm、下端幅5.5cm、高さ2.2cm、ヘラミガキ
65	11号住 NO 3	ミニチュア		ヘラナデ
66	11号住 NO 5	ミニチュア		手づくね、ヘラナデ
91	15号住 墓	劫鍵車		上端幅3.4cm、下端幅5.2cm、高さ2.9cm、ヘラミガキ
92	15号住 床面	劫鍵車		上端幅3.9cm、下端幅4.8cm、高さ2.2cm、ヘラケズリ、ヘラミガキ
495	O III c 15 II層	土偶	頭部～胸部	沈線文、刺突文
496	L III e 11 II層	ミニチュア		手づくね
497	L III i 9 II層	ミニチュア		手づくね
498	L III e 11 II層	円盤状土製品		側縫打欠、一部研磨、L R
499	L III e 11 II層	円盤状土製品		側縫打欠、I R
500	O III c 14 II層	円盤状土製品		側縫打欠、一部研磨、L R
501	N III e 15 II層	円盤状土製品		側縫打欠、R L
502	L III o 12 II層	円盤状土製品		側縫打欠、一部研磨、L R
503	5区T 2 1層	円盤状土製品		側縫打欠、一部研磨、L R
504	L III o 12 II層	円盤状土製品		側縫打欠、一部研磨、L R
505	O III e 14 I層	泥皿子		蝶形

第5表
金属製品観察表

番号	出土地点・層位	種別	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考
43	8号住 墓土3層	不明	5.3	0.9	0.3	7.0	鉄、処理後実測
44	8号住 NO 37 A	刀子	2.1	1.4	0.2	2.0	鉄、処理後実測、破損
45	8号住 NO 33 A	絹金具	4.1	0.5	0.2	4.0	鉄、処理後実測
59	10号住 NO 1	刀子	24.0	2.3	0.2	96.0	鉄、処理後実測
60	10号住 墓土7層	釘	8.3	0.6	0.4	6.0	鉄、処理後実測
61	10号住 墓土3層	釘	4.0	0.6	0.4	5.0	鉄、処理後実測
70	11号住 NO 2	ヤリガンナ	17.1	1.8	0.6	42.0	鉄、処理後実測、刀子の可能性
71	11号住 NO 3	刀子	8.8	1.0	0.3	18.0	鉄、処理後実測、木質部残存
72	11号住 NO 1	鎌	13.5	3.4	0.3	101.0	鉄、処理後実測
133	50号土坑 墓土	鉄斧	9.8	2.5	0.7	141.0	鉄、処理後実測、木質部残存
506	○Ⅲ h 17 I層	鉄貨	直徑 2.4	穿径 0.8	0.15	3.4	銅、銅名不明
507	7④区	鉄貨	直徑 2.4	穿径 0.6	0.2	3.0	銅、永楽通寶
508	G II o 17 II層	鉄貨	直徑 1.8	穿径 0.9	0.05	0.5	銅、無文銭、鉛写し模辨銭の可能性
509	G II o 17 II層	鉄貨	直徑 1.7	穿径 0.8	0.1	0.5	銅、無文銭、鉛写し模辨銭の可能性
510	G II o 17 II層	鉄貨	直徑 1.8	穿径 1.0	0.05	0.5	銅、無文銭、鉛写し模辨銭の可能性
511	G II o 17 II層	鉄貨	直徑 1.7	穿径 1.1	0.05	0.6	銅、無文銭、鉛写し模辨銭の可能性
512	50号土坑 墓土	鉄貨	直徑 2.4	穿径 0.6	0.15	3.6	銅、寛永通寶（古）初鋤 1636年
513	50号土坑 墓土	鉄貨	直徑 2.4	穿径 0.6	0.1	3.4	銅、寛永通寶（古）初鋤 1636年
514	K III k 7 II層	鉄貨	直徑 2.4	穿径 0.6	0.15	3.9	銅、寛永通寶（古？）初鋤 1636年
515	K III k 7 II層	鉄貨	直徑 2.3	穿径 0.7	0.1	2.9	銅、寛永通寶（新）初鋤 1697年
516	K III k 7 II層	鉄貨	直徑 2.2	穿径 0.6	0.1	2.5	銅、寛永通寶（新）初鋤 1697年
517	51号土坑 墓土	鉄貨	直徑 2.5	穿径 0.7	0.15	3.8	銅、寛永通寶（新）初鋤 1697年
518	51号土坑 墓土	鉄貨	直徑 2.4	穿径 0.6	0.1	3.6	銅、寛永通寶（新）初鋤 1697年
519	51号土坑 墓土	鉄貨	直徑 2.2	穿径 0.6	0.1	2.1	銅、寛永通寶（新）初鋤 1697年

第6表
ガラス製品観察表

番号	出土地点・層位	種別	直徑 mm	内径 mm	備考
77	13号住カマド付近	ガラス玉	4.2	1.5	青淡色
78	13号住カマド付近	ガラス玉	3.8	1.3	青淡色
79	13号住カマド付近	ガラス玉	3.8	1.5	青淡色

VI. まとめ

1. 遺構

今回の調査で検出された遺構は、堅穴住居跡（以下、住居跡と略す）24棟、住居状遺構1棟、土坑51基、柱穴状ピット140基、石圓炉2基、焼土遺構23基、陥し穴状遺構7基、溝状遺構17条、壇状遺構1ヶ所、井戸跡1基である。堅穴住居跡の密度は大きくなはないが、検出面や出土遺物から判断し米沢遺跡の性格は、縄文時代、奈良時代、平安時代の集落跡として位置づけられると思われる。住居跡の時期は、縄文早期1棟、前期1棟、中～後期3棟、後～晚期1棟、奈良時代13棟、平安時代5棟に大別される。調査区における分布をみると、南側に縄文前期と中～後期あわせて3棟、中央部の平坦面に早期1棟中～後期1棟、後～晚期1棟、古代の住居跡18棟が分布する。なお、調査区の南側及び北西側では遺構は全く検出されていない。それぞれの時期にわたって多くの住居が検出されていないため、時期別の特徴や時間的変遷を明らかにするには、資料不足ではあるが、縄文早期及び前期の住居跡は炉を持たず、中～後期の住居跡ではIV層上位に床面をもち、炉は石圓炉である。後晚期の住居跡はⅢ層に床面をもち、炉は不明である。縄文早期の住居跡が1棟検出されたが、周囲に比較的多くの焼土が検出されており屋外炉の可能性が想定される。隣接する長瀬B遺跡では南部浮石を含む埋土と寺の沢式土器が確認されておりほぼ同時期の遺構と思われる。

奈良時代の住居跡の割合が多いが、これらも隣接する長瀬B遺跡の住居群と同様の特徴を有しており、一つの集落を形成していたものと思われる。周辺の遺跡等から推察すると地形的な制約もあり、馬瀬川流域に沿った形で集落が展開しているのが見てとれる。主軸方位は概ね奈良時代が北西から西方向、平安時代が北東から東方向である。

土坑については、用途不明のものが多いが、住居跡の周囲から検出されており、住居跡と何らかの関係を有するものと思われる。これらの中には墓壙と思われるものも含まれると思われる。柱穴状ピットは140基検出されたが、周囲に壁や床面などは確認できず、これらの配列からは住居跡の柱穴とは断定できない。焼土遺構についても、いずれも赤変しているが、周囲からは明確な柱穴は検出されず、住居跡の床面と判断できる痕跡も確認されない。

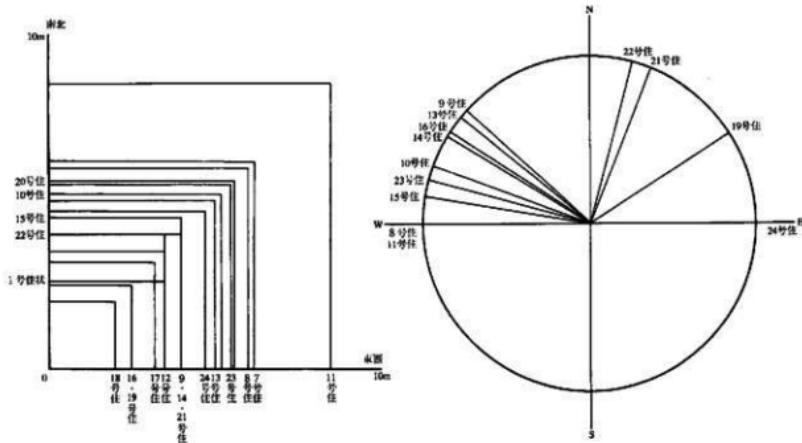
陥し穴状遺構が7基検出されたことから、縄文時代の一時期には狩り場として利用されたことが理解される。

溝状遺構は17条検出されたが用途は不明である。中には区画溝として用いられた可能性があるものも存在する。

壇状遺構が1ヶ所検出されている。小規模ながらも意図的な生産行為が行われたものと推測される。自然科学分析結果から陸稻栽培の可能性も考えられる。

2. 遺物

今回の調査で出土した土器類の総量は、大コンテナで26箱である。このうち遺構内からは12箱、遺構外からは14箱出土した。遺構外土器の内、約6箱は遺物包含層からの出土である。古代以降の遺物と縄文時代の遺物は約半分である。時期別でみると、縄文時代早期中葉、前期初頭から末葉、中期中葉から末葉、後期初頭から末葉、晚期中葉から末葉、弥生時代、奈良時代、平安時代がみられる。この中で主体となるのは、早期中葉期と古代である。早期の土器ほとんどが貝殻文を主体とする寺の沢式の土器と思われる。三沢市小田内沼（4）遺跡出土の土器と同時期と考えられる。早期遺物包含層の上層には南部浮石が比較的厚く堆積していることから、南部浮石下以前であることは明らかである。南部浮石の上位のIV a層では前期初頭の



第106図 住居跡規模及び輪方向分布図

長七谷地Ⅲ群の土器が出土している。

当遺跡出土の土器器については概ね8世紀前半と10世紀前半に分けられると思われる。出土した8世紀前半の壺の特徴としては、底部が丸底または丸底風で内面が黒色処理されしかもよくみがかれ、内外の段が明瞭なものが多く見られる。壺は器形的には体部上半にややふくらみを有し、調整は全般にヘラミガキ、ハケメを主体とし、底部内面はやや丸味を帯びたもの・平底のものが見られる。全体的には長瀬B遺跡とはほぼ同時期の遺物である。馬淵川下流域では田面木遺跡、酒美平遺跡、丹後平古墳などで同様の資料が認められる。10世紀前半代の土器器については、壺が全てロクロ使用のものとなり、壺はロクロ使用と不使用のものが認められる。これらが出土した住居跡の埋土状況から判断し、十和田a降下火山灰以後の遺物であることが推測される。

出土量のみで遺跡の時期を判断するわけにはいかないが、概ね当遺跡は縄文時代早期中葉期から平安時代までが中心といえるであろう。

3. おわりに

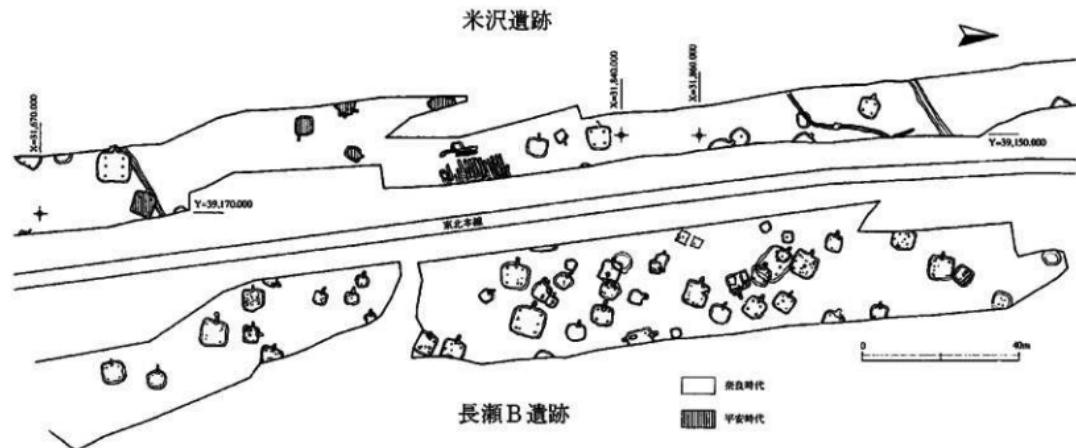
調査の結果、以上のような遺構や遺物が確認され、本遺跡の性格・内容の一端が明らかになった。執筆者の不勉強もあり比較・検討・考察が十分とはいせず、周辺遺跡との関連や土器の縄年の位置付けなど検討を加えるべき点が数多くあると思われるが、ご容赦願いたい。この報告書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いである。

第7表 古代の住居跡一覧表

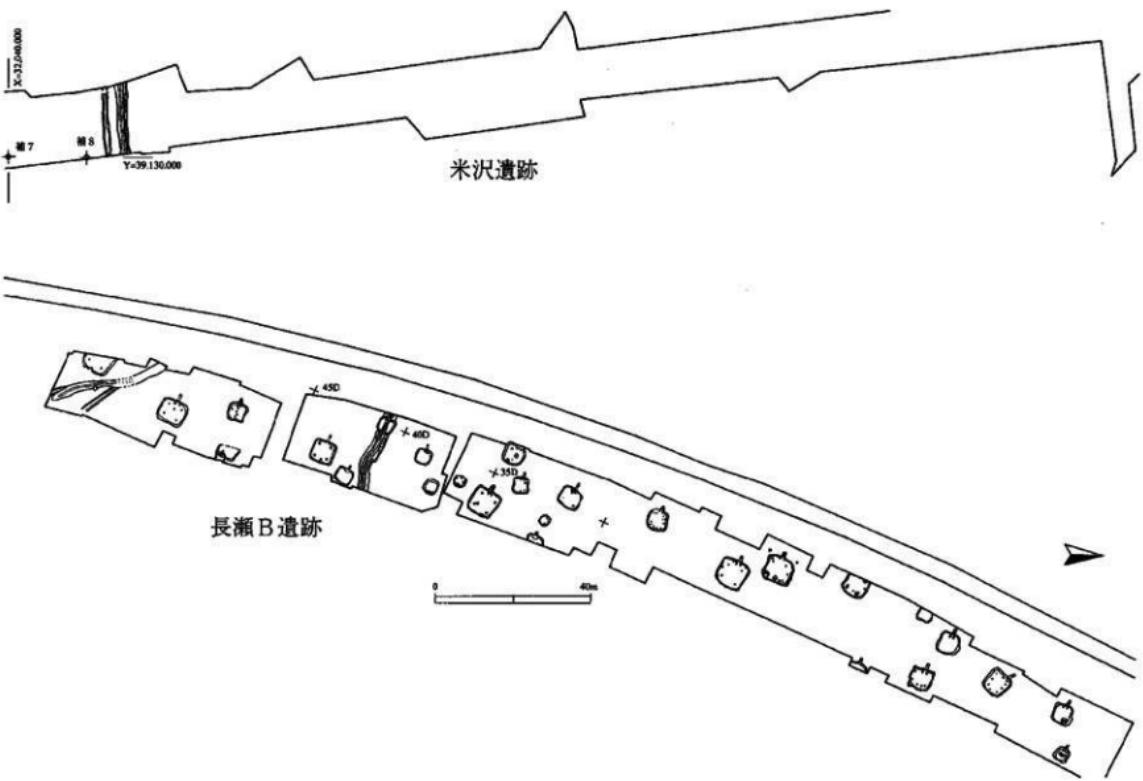
遺構名	平面形 (m)	規模 (cm)	床面積 (m ²)	カマツの位置	主軸方位	() 内は推定		
						付属施設	柱穴配置	鏡失の有無
第7号住居跡	楕丸方形	一辺 6.2	北東壁 45 ~ 50 南東壁 40 ~ 43	(31.3)			3	
第8号住居跡	楕丸方形	一辺 6.0	北壁 68 ~ 71 南壁 70.0 西壁 63 ~ 67 東壁 60.0	(36.0)	西壁中央部	N - 90° - W	4	四角形 有
第9号住居跡	楕丸方形	一辺 4.0	北西壁 55 ~ 71 南西壁 64 ~ 74	(16.0)	北西壁中央部	N - 48° - W	1	有
第10号住居跡	楕丸方形	一辺 5.2	北西壁 66 ~ 68 南東壁 63 ~ 69 南西壁 64 ~ 67 北東壁 73 ~ 81	27.0	北西壁中央部	N - 70° - W	4	四角形 有
第11号住居跡	楕丸方形	一辺 8.5	北壁 48 ~ 56 南壁 53 ~ 59 西壁 50 ~ 60 東壁 48 ~ 53	72.25	西壁中央部	N - 90° - W	6	四角形 有
第12号住居跡	楕丸方形	一辺 3.5	北壁 52 ~ 54 東壁 42 ~ 48 南壁 33 ~ 36	(27.0)				
第13号住居跡	楕丸方形	一辺 5.0	北西壁 30.0 南西壁 70.0	(25.0)	北西壁中央部	N - 51° - W	1	有
第14号住居跡	楕丸方形	一辺 4.0	北西壁 30.0 南西壁 30.0	(12.3)	北西壁中央部	N - 59° - W		
第15号住居跡	楕丸方形	4.0 × 4.5	北西壁 65.4 北東壁 50.4 南西壁 81.8 南東壁 66.3	18.0	北西壁中央部	N - 81° - W	7	有
第16号住居跡	楕丸方形	一辺 2.5	北西壁 45.0 南西壁 43.1	(6.25)	北西壁北隅	N - 57° - W		
第17号住居跡	楕丸方形	一辺 3.2	北壁 44.7 南壁 54.9	(10.24)				
第18号住居跡	楕丸方形	一辺 2.0	南壁 53.5 南壁 57.7	(4.0)			2	
第19号住居跡	楕丸方形	一辺 2.5	北西壁 58.3 北東壁 52.4 南西壁 54.9 南東壁 51.6	6.25	北東壁中央 南寄り	N - 58° - E	貯藏穴 9	有
第20号住居跡	楕丸方形	一辺 5.6	北西壁 55.0 南東壁 40 ~ 43 南西壁 37 ~ 45	(28.0)	北西壁北寄り			有
第21号住居跡	楕丸方形	一辺 4.0	北東壁 68 ~ 70 南東壁 62.0 南西壁 61 ~ 62	(17.6)	北東壁東寄り	N - 22° - E	出入り口 ? 2	有
第22号住居跡	楕丸方形	4.0 × 3.5	北西壁 68 ~ 71 北東壁 (28 ~ 38) 南西壁 55 ~ 62 南東壁 (20 ~ 36)	14.0	北東壁中央部	N - 15° - E	1	
第23号住居跡	楕丸方形	一辺 5.5	北西壁 43 ~ 45 北東壁 (35 ~ 40) 南西壁 42 ~ 48 南東壁 (37 ~ 42)	30.25	北東壁中央部	N - 75° - W	4	四角形 有
第24号住居跡	楕丸方形	一辺 4.7	北壁 59 ~ 64 南壁 55 ~ 61 南壁 59 ~ 66 西壁 60 ~ 67	22.1	北東壁南端 住居の南東隅	N - 90° - E	貯藏穴	
第1号住居跡 遺構	楕丸方形	3.5 × 2.6	北西壁 65 ~ 67 北東壁 63 ~ 68 南西壁 46 ~ 58 南東壁 72 ~ 78	9.1				

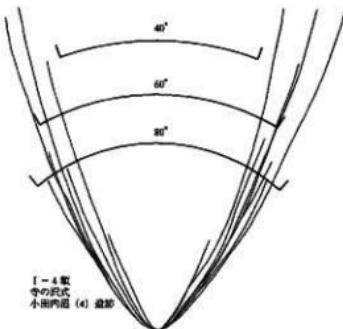
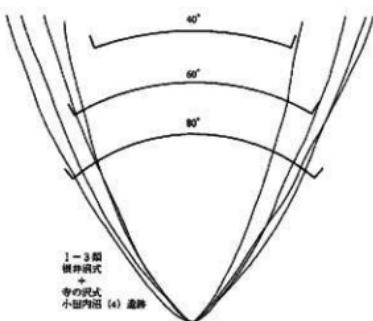
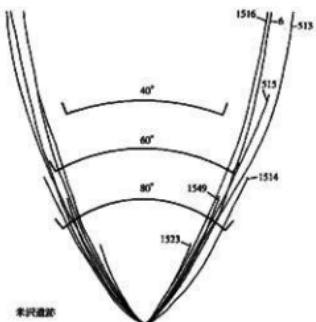
第107図 長瀬B・米沢遺跡開拓断面図(1)

- 691 -

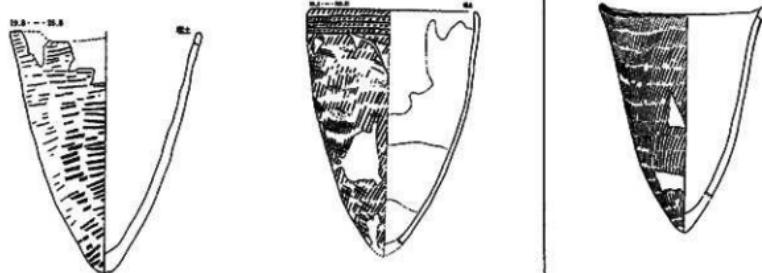
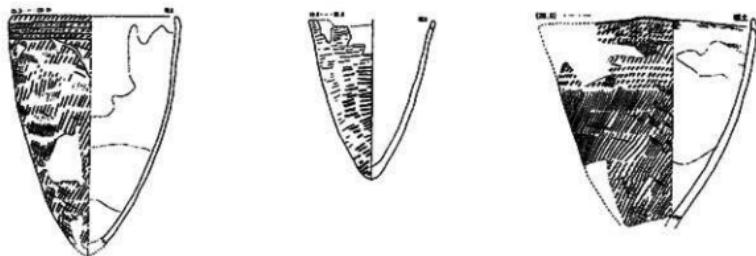


第109図 長瀬B・米沢遺跡断面構造図(2)

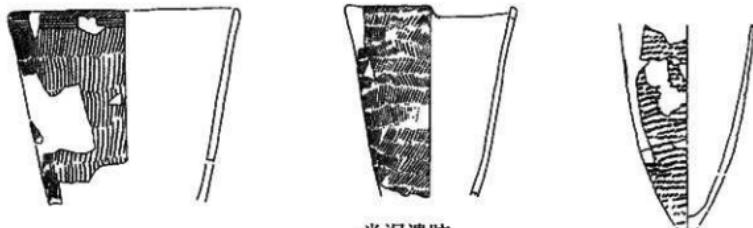




第109図 尖底部角度

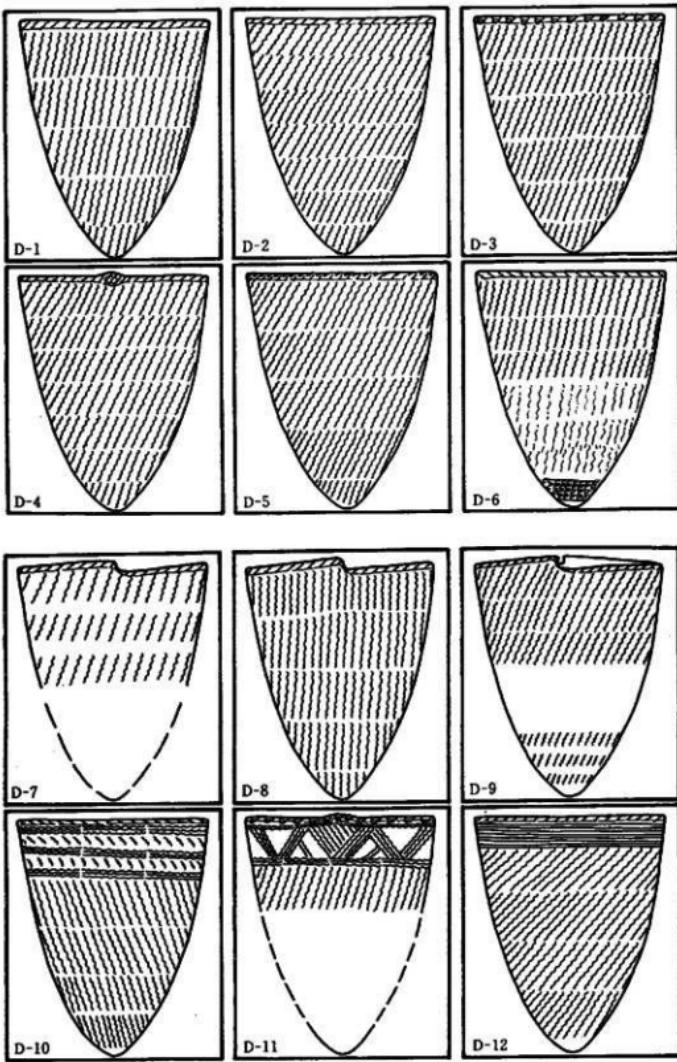


二戸市長瀬B遺跡



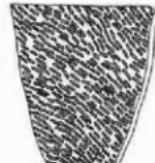
米沢遺跡

第110図 土器模式図1 (早期)



三沢市小田内沼（4）遺跡

第111図 土器模式図2（早期）

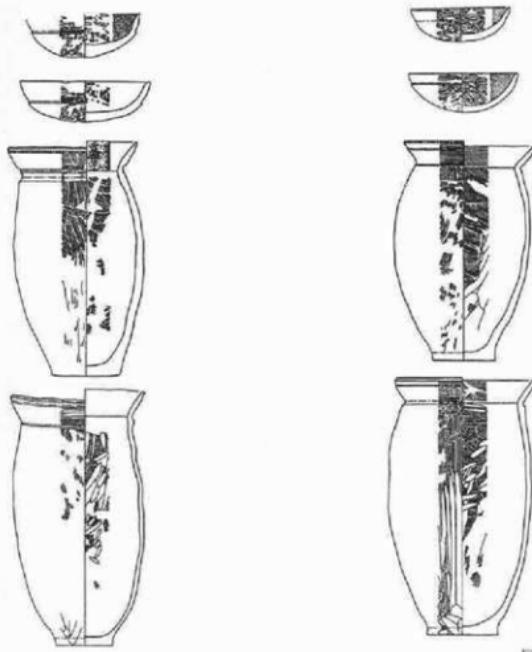


八戸市長七谷地遺跡

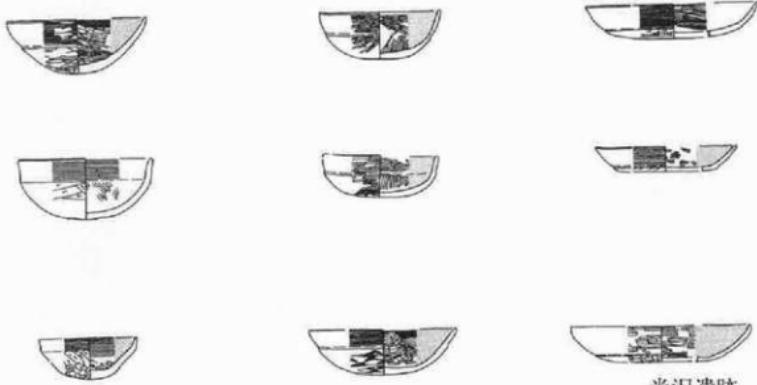


米沢遺跡

第112図 土器模式図3 (前期)

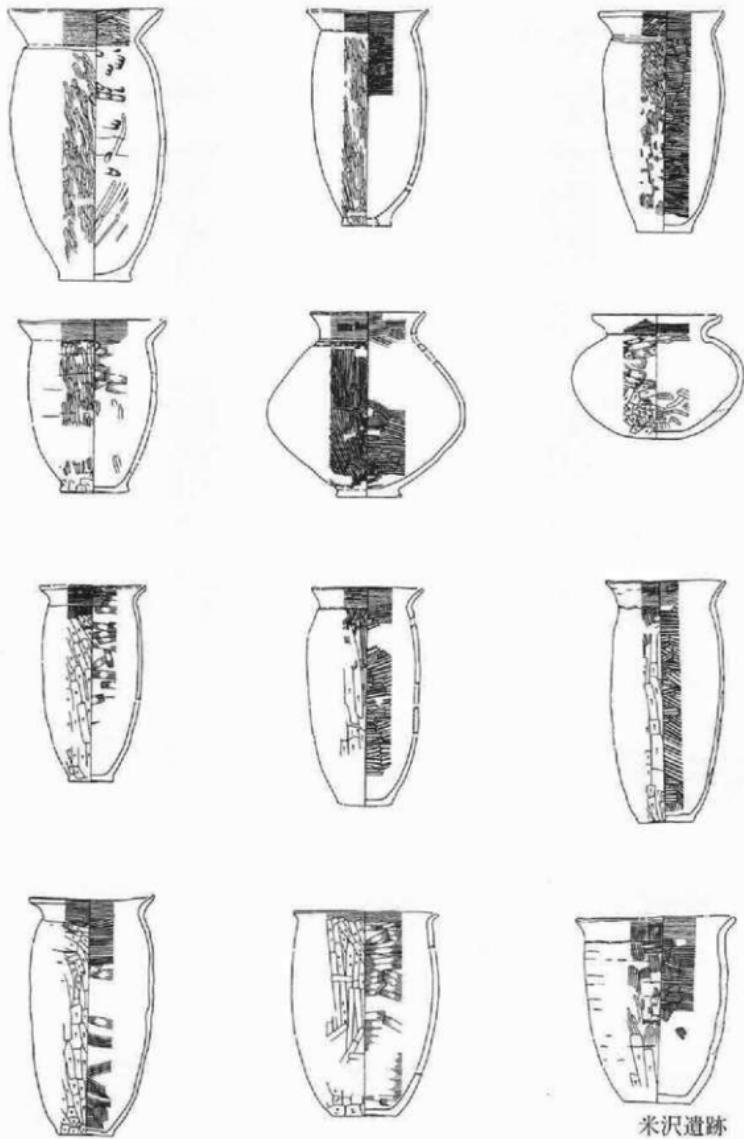


長瀬B遺跡



米沢遺跡

第113図 土師器模式図4



米沢遺跡

第114図 土師器模式図5

《参考・引用文献》

- 岩手県文化振興事業団（1983）：「長瀬B遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第55集
- 岩手県文化振興事業団（1983）：「上里遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第55集
- 岩手県滝沢村教育委員（1986）：「滝舟沢遺跡」滝沢村文化財調査報告書第2集
- 高橋信雄・熊谷常正・小田野哲彦（1982）：「岩手の土器」岩手県立博物館
- 富樫泰時（1989）：「貝殻沈線文土器様式」「縄文土器大観」第1巻、小学館
- 三宅徹也（1989）：「内筒土器下唇様式」「縄文土器大観」第1巻、小学館
- 磯崎正彦ほか（1968）：「十腰内遺跡」「岩木山」岩木山刊行会
- 岩手県文化振興事業団（1997）：「上野生遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第253集
- 岩手県文化振興事業団（1994）：「大日向II遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第225集
- 岩手県文化振興事業団（1993）：「新山権現社遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第188集
- 岩手県文化振興事業団（1998）：「江利家IV遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第277集
- 秋田県埋蔵文化財センター（1990）：「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書」
- 秋田県埋蔵文化財センター（1990）：「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書」秋田県文化財調査報告書第193集
- 青森県教育委員会（1985）：『先場遺跡発掘調査報告書』
- 「土偶藝術と信仰」「古代史先史3」講談社
- 岩手県文化振興事業団（1983）：「駒形塙遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第55集
- 岩手県文化振興事業団（1997）：「祝内B遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第253集
- 岩手県文化振興事業団（1994）：「上田面I遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第225集
- 岩手県文化振興事業団（1993）：「上田面II遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第188集
- 岩手県文化振興事業団（1998）：「大芦遺跡発掘調査報告書」岩埋文報告書第277集
- 秋田県埋蔵文化財センター（1990）：「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書」
- 青森県三沢市教育委員会：（平成3）『小田内沼（1）・（4）遺跡発掘調査報告書』
- 三沢市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 青森県教育委員会（1980）：『長谷谷地貝塚遺跡発掘調査報告書』青森県埋文報第57集
- 二宅徹也（1976）：「下田代納屋B遺跡発掘調査報告書」青森県立郷土館調査報告
- 秋田県教育委員会（1988）：「寒川I遺跡発掘調査報告書」
- 名久井文明（1989）：「東北地方北部における縄文時代早期貝殻層縄文土器の系統」第4回縄文文化検討会シンポジウム
- 二戸市教育委員会（昭56）：「中曾根II遺跡発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（平成2）：「紀要X」
- 第24回古代城壁官衙跡研究会（1998）：「東方地方の古代集落」
- 宇部剛保（1989）：「青森県における7-8世紀の土器一馬瀬川下流域を中心として」『北海道考古学第25号』北海道考古学会
- 鈴木道之介（1991）：『石器入門事典』柏書房
- 町田勝則（1996）：『石器の研究法』（財）長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ

付篇 分析・鑑定

1. 炭化材の樹種同定

高橋 利彦（木工舎「ゆい」）

1998年度二戸市米沢遺跡出土炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は平安時代のものとされる竪穴住居址3遺構（SI06・SI07・SI08）から検出されたもの7点（No. 1～7）と、約1.3万年前に十和田火山から噴出したとされている八戸火山灰中から検出されたもの1点（No. 8）の計8点である（表1参照）。

2. 方法

試料を室内で自然乾燥させたのち木口・極目・板目の3断面を作製、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（加速電圧10KV）で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版（図版1）も作製した。電子顕微鏡観察に当たっては（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝致します。なお、ネガ・フィルムと残った炭化材は木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

No. 1はナナカマド属の一種に、No. 2～4はコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種に同定された。

No. 5～7は木本ではなく、イネ科草木（ススキ？）であった。

No. 8は試料が細片であったうえに非常に脆く、観察用の材片を得ることができなかつた。試料は針葉樹のようであるが確認できなかつた。

試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本I・II」（佐竹ほか 1989）にしたがい、一般的な性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」（平井 1979～1982）も参考にした。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科 No.2, 3, 4

環孔材で孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大導管は横断面では梢円形、小導管は横断面では多角形、ともに単独。穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属（落葉ナラ類）の中で果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、カシワ（*Quercus dentata*）・ミズナラ（*Q. crispula*）・コナラ（*Q. serrata*）・ナラガシワ（*Q. aliena*）といくつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かつた。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・構材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。

・ナナカマド属の一種 (*Sorbus* sp.) バラ科 No.1

散孔材で、横断面では角張った梢円形～多角形、単独および2～5個が複合する。年輪界付近でやや急に密度を減少させる。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性～異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は短接線状。年輪界は不明瞭。

ナナカマド属は羽状複葉をもつナナカマド (*Sorbus comixta*) の仲間と単葉をもつアズキナシ (*S. alnifolia*) の仲間に分けられ、6種が自生しきくつかの品種がある。このうち最も分布域の広いのはアズキナシで、北海道から九州まで（伊豆半島を除く）の底山地に普通に見られる。アズキナシの材は重硬・強靭で、器具・建築・家具・旋作・薪炭材などに用いられる。

・イネ科草本（ススキ？）[cf. *Miscanthus sinensis*] No.5, 6, 7

中実の茎（桿）の基本組織の中に維管束が散在する不齊中心柱をもつ。

炭化材の中には稀にタケア科が検出されることがあるが、タケア科は中空の桿をもち、試料より硬質の炭化物となることからそれ以外の草本のものと判断した。イネ科草本の中で試料のように経が大きく木質化した桿をもつものとしてはススキとヨシ (*Phragmites communis*) が思いつくが、ススキの桿は中実であるがヨシの桿は中空であることから、試料はススキの可能性が高いと考える。ただ、草本に関する検討は十分とはいえないため、現時点では確定できない。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧表で示す（表1）。

表1 米沢遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構など (現場登録)	種名
1	SI07床 No.1	ナナカマド属の一種
2	SI08床 No.4	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
3	SI08床 No.5	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
4	SI08床 No.7	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
5	SI06埋土下部	イネ科草本（ススキ？）
6	SI07床上7cm	イネ科草本（ススキ？）
7	SI08床上	イネ科草本（ススキ？）
8	4区深掘りセクション VII層	針葉樹？

4. 考察

今回同定対象とした平安時代のものとされる堅穴住居址検出の炭化材のうち、SI07試料（No.1）はナナカマド属に、SI08試料（No.2～4）はコナラ節に同定された。用材に関しては、試料の出土状況などについての情報がほとんどないため議論できないが、筆者がこれまでに検討してきた住居址出土炭化材の中では、コナラ節は玉山村芋田Ⅱ遺跡の9～10世紀のものとされるE15住居址試料¹⁾で、また、ナナカマド属は九戸村南田Ⅰ遺跡の10世紀のものとされるSI02試料（ただし類似種とされている）²⁾でも認められている。

No.8は、残念ながらその樹種のみならず針葉樹であることも確認できなかったが、十和田火山の東側では十和戸八戸火葬流に飲み込まれた埋没林が各地で検出され、カラマツ属（*Larix*）やトウヒ属（*Picea*）を主体とする亜寒帯性針葉樹林があったことが明らかにされており（大池ほか 1977, 寺田ほか 1994など）、試料もそうした森林の構成種に由来する可能性もある。

ところで、今回の試料のように炭化材が、材としての構造を保ったまま残存・出土するのは、その木材が適度の断面積³⁾をもっていたり、炭化が進んだ段階で火が消えるなど“好”条件がいくつも重なった場合に限られる（高橋 1998）。イネ科のうちタケア科は桿の木質化が進んでいるため炭化「材」として出土することも稀にはあるが、草本が検出された例はほとんどない⁴⁾。スキが直接火を受ければ、燃え尽きて試料のように桿の構造をとどめることはまずないと思う。燃焼途中で土や水を使って消化した場合でも、土ではその量や硬さ・撒き方によってはスキの形が崩れ、試料のような出土状況は示さないだろうし、余熱で灰化が進んでしまうと思う。水を使った場合には冷却は急速にできるだろうが、やはり撒き方によっては形が崩れてしまうだろう。間接的に熱を受けた場合には試料のように炭化が進むのかはわからない。これまで述べてきたことはあくまで机上の思考にすぎないから、様々な場合を想定した燃焼実験を行う必要があると思う。

＜注＞

- 既報の「芋田Ⅱ遺跡出土炭化材樹種同定報告書」（木工舎「ゆい」1998）を参照のこと。
- 同じく「芋田Ⅱ遺跡出土炭化材樹種同定報告書」（木工舎「ゆい」1998）を参照のこと。
- 断面積が大きすぎるを中心部まで火が回らずに消えることがある。この状態で埋積すると未炭化部分は腐朽が進み、出土する炭化材の量は、断面積が小さく内部まで炭化が進んだものより少なくなってしまう場合もある。
- 筆者の知る範囲では、ヨシ属が群馬県赤城村の勝保沢中ノ山遺跡の奈良時代とされる墓壙から1点（鈴木・能城 1988）、スキと見られるイネ科草本が宮古市近内中村遺跡の縄文時代晩期とされる住居址埋土中から1点（鎌田 1999）報告されているのみである。

引用文献

- 平井信二 1979～1982 「木の事典 第1巻～第17巻」、かなえ書房。
鎌田祐二 1999 宮古市近内中村遺跡、「岩手考古学会第22回研究大会発表資料」、3-4。
大池昭二・松山力・竹内貞子 1977 八戸浮石層直下の埋没化石林の¹⁴C年代—日本の第四紀層の¹⁴C年代（118）—、地球科学、31:136-137。
佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫（編） 1989 「日本の野生植物 木本I・II」、平凡社、321,305pp.
鈴木三男・能城修 1988 群馬県勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種、「勝保沢中ノ山遺跡I～開越自働車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第22集」、群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文

化財調査事業団, 180-192.

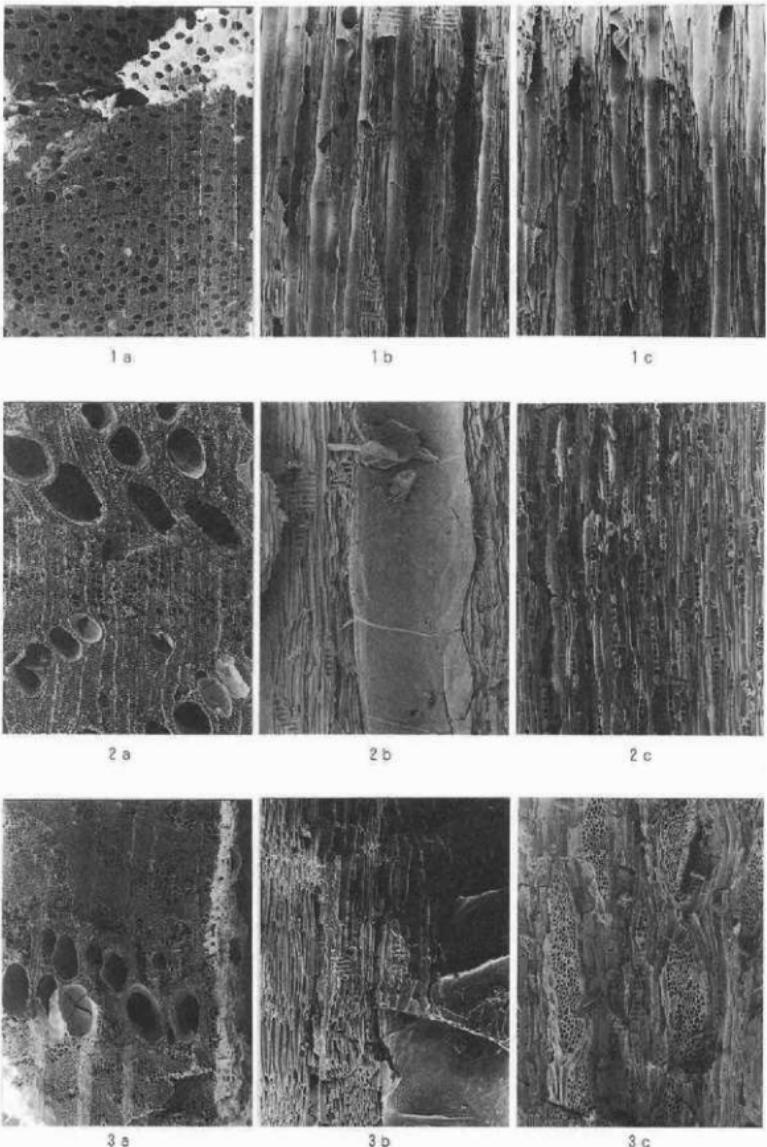
高橋 利彦 1998 杉の堂遺跡出土炭化材の樹種, 「水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集 杉の堂
遺跡 一市道杉の堂・北田線改良工事に伴う発掘調査報告書 I -」, (財) 水沢市埋蔵文化財調査
センター, 16-17.

寺田 和雄・太田 貞明・鈴木 三男・能城 修一・辻 誠一郎 1994 十和田火山東麓における八戸テフラ直下の
埋没林への年輪年代学の適用, 第四紀研究, 33:153-164.

- 図版 1 1. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 No.2
 2. ナナカマド属の一種 No.1
 3. イネ科草本(ススキ?) No.6

a : 木口 x40 b : 枠目 x100 c : 板目 x100

図版1



1999年度二戸市米沢遺跡出土炭化材の樹種同定

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は7点（No.1-7）で、奈良時代のものとされる7住居跡（SI06・SI10・SI11・SI12・SI14・SI16・SI18）の床面から検出されたものである（表1参照）。SI16を除く6住居跡は焼失住居址とされ、試料はその構築材と考えられている。No.6の用途は不明である。

2. 結果

No.6は炭化が不十分なためか、非常に軟らかくSEM用の断面が作製できなかった。実体顕微鏡による観察のみであったため確実な同定ができるず類似種としたが、試料は以下の3分類群（ここでは亞科・節・種の異なる階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本I」（佐竹ほか1989）にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第2巻」（平井1979）も参考にした。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*) クルミ科 No. 2. (6)

散孔材で年輪界付近で管径を減少させる。管孔は單独および2-4個が複合、横断面では梢円形。道管は單穿孔をもつ。放射組織は同性～異性、1-4細胞幅、1-50細胞高。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。No.6は上記のようにSEM観察ができなかったため類似種とした。

オニグルミは北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほか、各種器具・家具材などの用途も知られている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Pinus* sp.) ブナ科 No. 3, 4, 5, 7

環孔材で孔眼部は1-3列。孔眼外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～梢円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ属は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で果実（ドングリ）が開花の年に熟すグループで、カシワ（*Quercus dentata*）、ミズナラ（*Q. crispula*）、コナラ（*Q. serrata*）、ナラガシワ（*Q. aliena*）といいくつかの変品種がある。カシワ・ミズナラ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（青森県を除く）・四国・九州に分布する。このうちコナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途があり、薪炭材としてはクヌギに次ぐ優良材である。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfamily *Bambusoideae* sp.) No.1

中空の桿の基本組織の中に維管束が散在する不齊中心柱をもつ。

タケ亜科（タケ・ササ類）には多数の種が含まれるが、解剖学的特徴のみでは区別できない。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧表で示す（表1）。

表1 米沢遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構・層位など (現場登録)	樹種
1	SI06 床面焼土内	イネ科タケ亜科
2	SI10 床面 No.1A	オニグルミ
3	SI11 床面 No.1	コナラ属コナラ亜属コナラ節
4	SI12 床面 No.1	コナラ属コナラ亜属コナラ節
5	SI14 床面 No.1	コナラ属コナラ亜属コナラ節
6	SI16 床面	オニグルミ類似種
7	SI18 床面 No.1	コナラ属コナラ亜属コナラ節

3. 考察

同定対象とした試料は、コナラ節4点(SI11・SI12・SI14・SI18)、オニグルミ・オニグルミ類似種各1点(SI10・SI16)、タケ亜科1点(SI06)に同定された。昨年検討した試料は、SI08の床面検出材3点がコナラ節に、SI06の埋土下部から検出されたものがイネ科草本(スキ?)に同定されている¹⁾。1住居址1-3点の炭化材が検討されたにすぎないため断定はできないが、材質の重硬なコナラ節が多いことから本遺跡の住居ではコナラ節を主な構造材として用いていた可能性もある²⁾。

同時代の類例としては、盛岡市台太郎遺跡のRA081住居³⁾や、青森県南部町前比良遺跡の3号住居跡(鷲倉 1988)⁴⁾からもコナラ節が認められている。一方、二戸市上台遺跡の2住居からはクマシデ属とスキ属が認められている⁵⁾。

<注>

- 1) 「米沢遺跡出土炭化材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1999)を参照のこと。
- 2) ただし、炭材として硬くて良質なコナラ節は、炭化材としても他の樹種より残存しやすい可能性もあり(パリノ・サーヴェイ株式会社 1986), 検出例の多さが本来の用材の多さに直ちに結びつかない可能性もある。
- 3) 既報の「台太郎遺跡出土炭化材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1998)を参照のこと。
- 4) 埋土検出材のほとんどがコナラとコナラ?とされ、ヤチダモも1点ある。また床面からはイネ科草本も認められている。
- 5) 既報の「上台遺跡出土炭化材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1999)を参照のこと。

引用文献

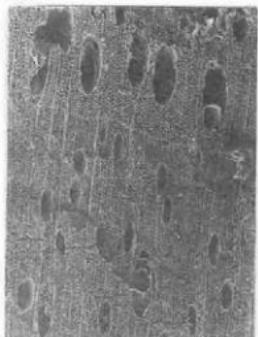
- 平井信二 1979 「木の事典 第2巻」, かなえ書房.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1986 上貝塚遺跡 001 住居跡の炭化材樹種同定, 「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V 一谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)」, 日本道路公団東京第一建設局・(財)千葉県文化財センター, 386-388.
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本I」, 平凡社, 321pp.
- 鶴倉巳三郎 1988 前比良遺跡の炭化木, 「青森県埋蔵文化財調査報告書第108集 前比良遺跡 一県営三戸地区広域営農団地農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー 昭和62年度」, 青森県教育委員会, 46-47.

- 図版1 1. オニグルミ No.2
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 No.5
3. イネ科タケ亜科 No.1

a : 木口 x40 b : 柄目 x100 c : 板目 x100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ, 柄目では左から右.

図版1



1 a



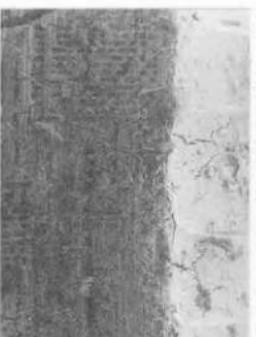
1 b



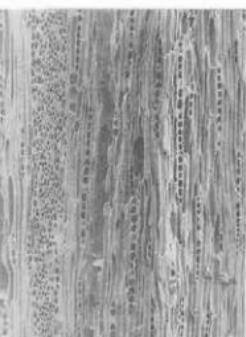
1 c



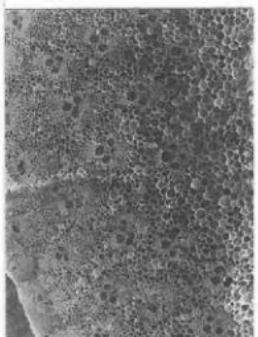
2 a



2 b



2 c



3 a

2000年度二戸市米沢遺跡出土炭化材樹種同定

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料はNo.1～4の4点で、奈良時代のものとされるSI21住居跡（No.1, 2）と平安時代？のものとされるSI25住居跡（No.3, 4）の床面から検出されたものである。いずれも用途などは明らかにされていない。

遺跡は馬淵川左岸の米沢段丘上（標高約105m）に立地する。

2. 方法

試料の木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接縫断面）3断面を作製し、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（SEM、加速電圧10kV）で観察・同定した。併せて各分類群1点の電子顕微鏡写真図版を作製した（図版1・2）。SEM観察にあたっては（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、ネガ・フィルムと残った炭化材は木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料の中には確実な同定ができず類似種としたものもあったが、以下の4分類群（ここでは属と種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本 I・II」（佐竹ほか1989）にしたがい、県内での自然分布については「岩手県植物誌」（岩手植物の会 1970）を参照した。また、一般的な性質については「木の事典 第4・10・16巻」（平井 1980-1982）も参考にした。

・ヤナギ属 (*Salix* sp.) ヤナギ科 No. 4

散孔材で、道管は年輪全体にはほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。管孔は単独および2-3個が複合、横断面では梢円形～やや角張った梢円形。道管は單穿孔をもち、放射組織の直立細胞との間では網目状の壁孔が目立つ。放射組織は異性、単列、1-1.5細胞高。年輪界はやや不明瞭。

ヤナギ属は国内に約35種が知られ、主観雜種も多く分類の困難な群である。時に植栽される落葉低木または高木である。県内にはタチヤナギ (*Salix subfragilis*)・キツネヤナギ (*S. vulpina*)など10種ほどが自生する。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく耐朽性は低い。大径木が少ないと小細工物にする程度で、とくに重要な用途は知られていない。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No. 1

環孔材で孔周部は多列、孔周外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配置する。大道管は単独、横断面では円形～梢円形、小道管は単独および2-3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った梢円形～多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では横断～網目状となる。放射組織は同性、単列、1-1.5細胞高。軟組織は周囲状、短接縫状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、構木などに用いられる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No. 3

環孔材で孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減し、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では梢円形、単独。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥壁が認められる。放射組織は異性、1-10細胞幅、1-60細胞高でしばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きいが加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途に用いられ、国産広葉樹材の中で最も良質のもの一つにあげられる。

・ヌルデ類似種 (cf. *Rhus javanica* var. *roxburghii*) ウルシ科 No. 2

環孔材と思われる2年枝で、孔圈部は多列、孔圈外で急に管径を減じたのち漸減する。大道管は横断面では梢円形、単独または複合、小道管は横断面ではやや角張った梢円形で2-5個が複合する。道管は單穿孔をもつ。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-40細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界はやや不明瞭。若齢のため本来の形質を示していない可能性もあるため類似種としておく。

ヌルデは北海道から琉球の山野に普通の落葉小高木である。材は軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽性は高い。器具材や施作・薪炭材として用いられるほか、杭や浮子としての用途も知られる。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧で表す（表1）。

表1 米沢遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構・層位 (現場登録)	時代	樹種
1	SI21・床面直上	奈良	クリ
2	SI21・床面直上焼土	奈良	ヌルデ類似種
3	SI21・床面直上	平安？	ケヤキ
4	SI21・床面直上	平安？	ヤナギ属

4. 考察

今回同定対象とされた試料は、上記の4分類群に同定された。昨年検討したSI10・11・12・14・16・18出土材6点は、コナラ節(4点)とオニグルミ(類似種を含む)(2点)に、一昨年検討したSI08出土材3点はいずれもコナラ節に同定されている。これらのはほとんどは建築材とみられるものであることから、用途の違いが用材の違いとなって表れている可能性もある。

また、本遺跡で得られた結果は、炭化の仕方・程度によっては、炭材としても良質で各地・各時代の遺跡からの出土例が多数報告されている(伊東ほか 1987, 伊東 1990)コナラ節に加えて、ヤナギ属・オニグルミ・ヌルデなどの軟質材も残りうる(高橋 1998)ことを明確に示している。

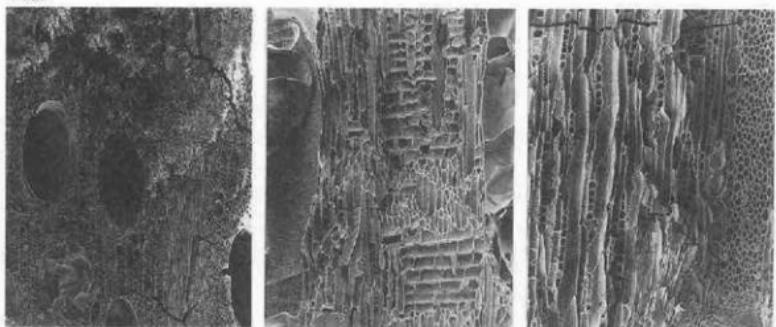
試料に近い時代の堅穴住居跡から検出された炭化材では、南隣の一戸町一戸城跡の奈良・平安時代のものとされる5住居跡出土の52点が、コナラ(22)・ヤチダモ(14)・ヤナギ(7)・クリ(3)・サワグル

ミ (2) ・ ケヤキ (2) ・ クヌギ (1) ・ ヤマグワ (1) に同定されている例 (鷲倉 1982) がある。今回の試料と共に分類群もふくまれているが、これらもその用途・性格は明らかにされてはいない。

引用文献

- 平井信二 1980-1982 「木の事典 第4・10・16巻」, かなえ書房.
- 伊東隆夫・山口和穂・林 昭三・布谷知夫・島地 謙 1987 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途, 木材研究・資料, 第23号, 42-210
- 伊東隆夫 1990 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II, 木材研究・資料, 第26号, 91-189.
- 岩手植物の会 1970 「岩手県植物誌」, 703pp.
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本I・II」, 平凡社, 321, 305pp.
- 鷲倉巳三郎 1982 炭化木の樹種について, 「一戸町文化調査報告書第2集 一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書II 一一戸城跡ー」, 一戸町教育委員会・建設省岩手工事事務所, 303-308.
- 高橋利彦 1998 杉の堂遺跡出土炭化材の樹種, 「水沢市埋蔵文化調査センター調査報告書第10集 杉の堂遺跡 一市道杉の堂・北田線改良工事に伴う発掘調査報告書Iー」, (財) 水沢市埋蔵文化財調査センター, 16-17.

図版1



1 a

1 b

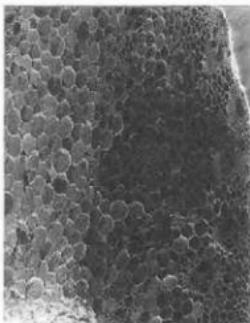
1 c



2 a

2 b

2 c



3 a

図版2



4 a

4 b

4 c

図版1 1. ヤナギ属 No. 4

2. クリ No. 1

3. ケヤキ No. 3

図版2 4. スルデ類似種 No. 2

a : 木口 x40 b : 横目 x40 c : 板目 x100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、横目では左から右。

2. 米沢遺跡出土火山灰の分析鑑定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

岩手県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、岩手火山、秋田駒ヶ岳火山、十和田火山など東北地方北部に分布する火山のほか、遠く北海道、中部、中国、九州、さらには、中国北朝鮮国境などに位置する火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる（たとえば、早田・八木、1991など）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、遺跡発掘調査の際に認められたテフラについて、発掘調査担当者により採取された試料を対象に火山ガラス比分析、重鉱物組成分析（以上を合わせてテフラ組成分析と呼ぶ）、屈折率測定を行って、示標テフラとの同定を行うことになった。

2. 分析試料

テフラ分析の対象となった試料は、10号竪穴住居跡から採取された合計8試料である。

3. 分析・測定方法

（1）テフラ組成分析（火山ガラス比・重鉱物組成分析）

テフラ組成分析の手順は、次の通りである。

- 1) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 2) 80°Cで恒温乾燥。
- 3) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子篩別。
- 4) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別組成を求める（火山ガラス比分析）。
- 5) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

（2）屈折率測定

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井、1972, 1993）による。

4. 分析結果

10号住居内埋土試料のテフラ組成ダイヤグラムを図7に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果を表16および表17に示す。試料に含まれる火山ガラスは32%で、量の多い順に軽石型（繊維束状、スponジ状:22.8%）、中間型（6%）、バブル型（平板状:3.2%）からなる。色調としては、無色透明の火山ガラスが認められる。重鉱物としては、量の多い順に磁鉄鉱(41.6%)、斜方輝石(37.2%)、单斜輝石(20.8%)などが含まれている。

10号住居跡に含まれる火山ガラスの割合は50.4%で、量の多い順位に軽石型（繊維束状、スponジ状:36%）、中間型（11.6%）、バブル型（平板状:2.8%）からなる。色調としては、無色透明のほか、淡褐色、淡灰色、淡緑色などの火山ガラスが認められる。重鉱物としては、量の多い順に斜方輝石(46%)、磁鉄鉱(37.6%)、单斜輝石(16%)などが含まれている。

屈折率測定の結果を表18に示す。試料に含まれる火山ガラス(α)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.502-1.507と1.706-1.709である。このことから、本試料にはTo-aに由来するテフラ粒子が含まれていると考えられ

る。

なお、本試料に含まれるTO-a起源の火山ガラスの屈折率は、町田ほか(1981)や町田・新井(1992)などのテフラ・カタログに記載されているTo-aのそれより高い。これは、カタログに値が載せられている火山ガラスが給源である十和田火山近傍で採取されたもので、十分に水和が行われていない分厚いガラスが多く含まれているためと考えられる。実際、十和田火山から遠い岩手県南部や、仙台市周辺さらには福島市周辺で検出されたTo-aに含まれる火山ガラスの屈折率については、今回の値と同じような値が得られる（古環境研究所、未公表資料）。

5.まとめ

岩手県内の発掘調査において認められたテフラ試料について、火山ガラス比分析、重鉱物組成分析（以上、テフラ組成分析）と屈折率測定を行った。その結果、十和田a火山灰(To-a, 915AD)に由来する可能性の高いテフラ粒子が検出された。なお、テフラが一次堆積層として認められたか否かについては、現地において土層断面を観察できなかったことから言及できない。

*1 放射性炭素 (^{14}C) 年代。

*2 B-Tの噴出年代については、923-924年（町田・福沢, 1996)、937年（池田ほか, 1997)、944-947（早川・小山, 1998）などの説がある。

文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 早川由紀夫 (1983) 十和田火山中探テフラ層の分布、粒度組成、年代。火山, 28, p.263-273.
- 早川由紀夫・小山真人 (1998) 日本海をはさんで10世紀に相次いで起きた二つの大噴火の年月日。火山, 第2集, 43, p.403-407.
- 池田まゆみ・福沢仁之・岡村 真・松岡裕美 (1997) 青森県小川原湖と十三湖における過去2300年間の環境変動と地震津波。平成8年度文部省科研費研究成果報告書「汽水湖堆積物を用いた過去2000年間の気候・海水準・降水量変動の解明」(研究代表者 福沢仁之), p.124-159.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.
- 町田 洋・福沢仁之 (1996) 湖沼堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代。日本第四紀学会講演要旨集, no.26, p.80-81.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之 (1966) 馬瀬川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀研究, 5, p.29-35.
- 早田 勉・八木浩司 (1991) 東北地方の第四紀テフラ研究。第四紀研究, 30, p.369-378.

3. 岩手県米沢遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 米沢遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、1987）。

米沢遺跡の発掘調査では、十和田a火山灰（To-a, 915年）の直下から畠状遺構が検出された。ここでは、同遺構におけるイネ科栽培植物の検討を主目的として分析を行った。

2. 試料

分析試料は、東側断面および東壁面北側から採取された計6点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケア科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、スキ属型（おもにスキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔シダ類〕

〔樹木〕

その他

5. 考察

（1）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものは、イネをはじめオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ族型（キビが含まれる）、ジユズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) イネ

イネは、東側断面の歯部（試料1）および東壁面北側の歯部（試料5、6）から検出された。密度は700～1,400個/gと低い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。ただし、これらの遺構は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことには考えにくい。したがって、これらの遺構もしくはその近辺で稻作が行われていた可能性が考えられる。

2) ヒエ属型

ヒエ属型は、分析を行ったすべての試料から検出された。このうち、東側断面の歯部（試料1）では密度が3,600個/gと比較的低い値であり、その他の試料でも700～2,100個/gと低い値であるが、ヒエ属は葉身中ににおける植物珪酸体の密度が低いことから、植物体量としてはかなり過大に評価する必要がある。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌヒエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを完全に識別するには至っていない（杉山ほか、1988）。ただし、ここでは畠状遺構から検出されていることから、栽培種に由来するものである可能性が高いと考えられる。以上のことから、To-a直下の畠状遺構ではヒエが栽培されていた可能性が高いと考えられる。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族B（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、全体的に棒状珪酸体やイネ科（未分類等）が多量に検出され、ウシクサ族Aやクマザサ属型も比較的多く検出された。また、部分的にヨシ属、ススキ属型、ミヤコザサ節型、シダ類、樹木起源なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にクマザサ属型が優勢であることが分かる。

以上の結果から、To-a直下層の堆積当時は、クマザサ属（チシマザサ節やチマキザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育するイネ科植生であり、周囲ではヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

クマザサ属は水点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも綠を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高橋、1992）。遺跡周辺にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

6.まとめ

植物珪酸体分析の結果、十和田a火山灰（To-a, 915年）直下の畠状遺構では、分析を行ったすべての試料からヒエ属型が検出され、ヒエが栽培されていた可能性が高いと判断された。また、一部の試料からイネが検出され、稻作が行われていた可能性も認められた。

当時の遺跡周辺は、クマザサ属（チシマザサ節やチマキザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育するイネ科植生であり、周囲ではヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

参考文献

- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究、第2号、p.27-37.
杉山真二（1987）タケア科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—。考古学と自然科学、20、p.81-92.
高橋成紀（1992）北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—。どうぶつ社。
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学、9、p.15-29.

表1 岩手県、米沢遺跡における植物珪酸体分析結果

検査密度(単位:×100個/g)

分類群	地点・試料 学名	東側断面				東壁面北側	
		1	2	3	4	5	6
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	7				14	7
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	36	20	7	7	21	14
キビ族型	<i>Paniceae</i> type	80	60	28	14	56	68
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)			21	7	7	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	7	7				7
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A</i> type	58	87	78	56	77	96
ウシクサ族B	<i>Andropogoneae B</i> type						7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except Miyakozasa)	72	140	176	153	92	123
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Miyakozasa	7		14	28	7	
未分類等	Others	36	13	21	7		7
その他のイネ科	Others						
表皮毛起源	Husk hair origin	14	53	35	14	14	34
棒状珪酸体	Rod-shaped	579	867	769	548	676	902
茎部起源	Stem origin				7		
未分類等	Others	470	693	579	548	563	676
シダ類	Fern	14					
樹木起源	Arboreal						
その他	Others		7	7			
植物珪酸対总数	Total	1382	1946	1736	1388	1528	1940

おもな分類群の推定生産量(単位: × 10³ t)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.21				0.41	0.20
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	3.04	1.68	0.59	0.58	1.77	1.15
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)			1.34	0.44	0.44	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09	0.08				0.08
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except Miyakozasa)	0.54	1.05	1.32	1.15	0.69	0.92
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Miyakozasa	0.02		0.04	0.08	0.02	

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. Medake						
ネザサ節型	<i>Pleoblastus</i> set. Nezasa						
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except Miyakozasa)	96	100	97	93	97	100
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. Miyakozasa	4		3	7	3	

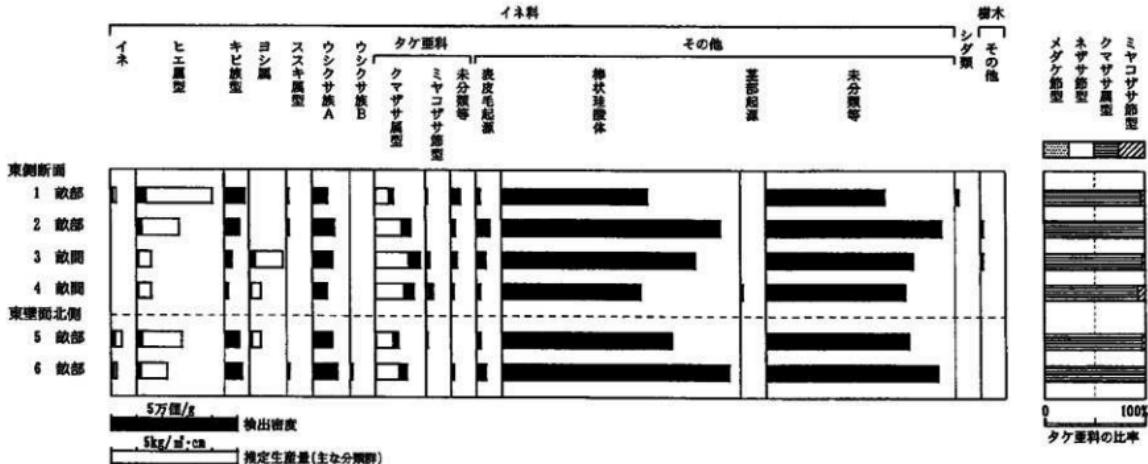
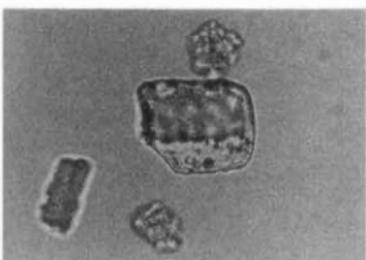


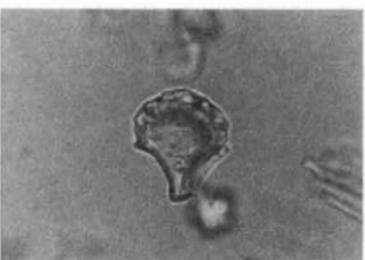
図1 米沢道跡、To-a直下畠遺構における植物珪酸体分析結果

植物珪藻体（プランツ・オパール）の顕微鏡写真
 (倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	東側断面	1
2	イネ	東壁面北側	5
3	イネ（側面）	東側断面	1
4	ヒエ属型	東側断面	1
5	ヒエ属型	東側断面	2
6	キビ族型	東壁面北側	6
7	ヨシ属	東壁面北側	5
8	ススキ属型	東壁面北側	6
9	ウシクサ族A	東側断面	2
10	ウシクサ族B	東側断面	1
11	クマザサ属型	東側断面	2
12	クマザサ属型	東壁面北側	6
13	ミヤコザサ節型	東側断面	1
14	棒状珪藻体	東壁面北側	5
15	シダ類	東壁面北側	1



1



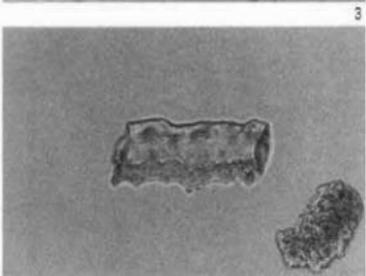
2



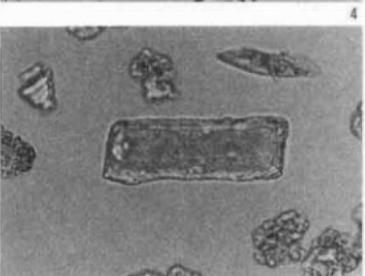
3



4



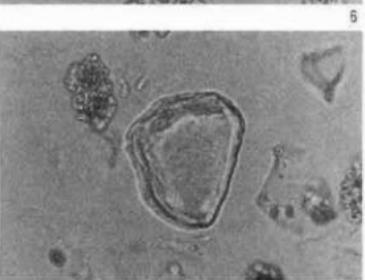
5



6



7



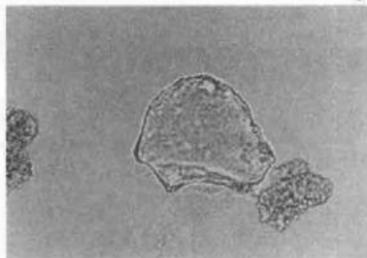
8



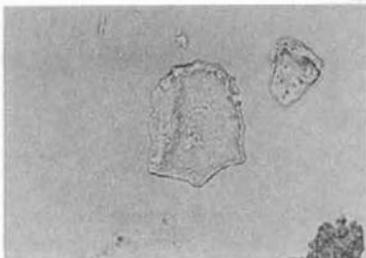
9



10



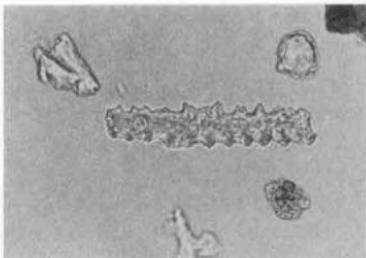
11



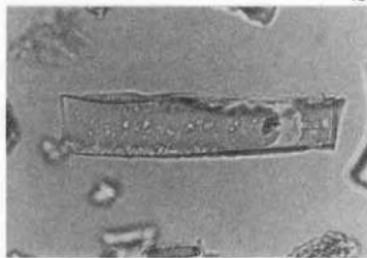
12



13



14



15

A scale bar at the bottom right of the page. It features three horizontal lines of increasing length, labeled '0', '50', and '100 μm' respectively, to indicate the scale of the micrographs.

II. 米沢遺跡における花粉分析

1. はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は、分解されにくく堆積物中に比較的良好に保存される。花粉は、風媒花植物であれば空中に飛散し、虫媒花植物ならば昆虫により運搬され、多くの場合、地表に落葉後土壤中あるいは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。花粉分析では、堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から地層の対比を行ったり、植生や土地条件などの古環境や古気候の推定が行われる。一般には、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆地などのやや広域な植生や環境の復元に用いられるが、考古遺跡では、堆積域の狭い遺構などの堆積物から、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

ここでは、十和田a火山灰（To-a, 915年）の直下から検出された畠状造構について、花粉分析から同造構における畠作物の検討を行うとともに、植生、環境の推定を行う。

2. 試料

試料は、十和田a火山灰直下の畠状造構の軸部（試料1、2）、畠間部（試料3、4）の4点である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨ててという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉8、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉7、シダ植物胞子2形態の計18である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

スギ、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科

[草本花粉]

イネ科、アカザ科—ヒユ科、セリ亜科、オミナエシ科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

各試料とも花粉が少なかった。草本花粉が多く、イネ科、ヨモギ属が比較的多く出現する。他にタンボボ亜科、キク亜科が出現する。樹木花粉は少なく、コナラ属コナラ亜属を主に出現する。歯（試料1、2）と歯間（試料3、4）による花粉構成の差はないが、歯（試料1、2）の方が相対的に花粉数が多い。寄生虫卵および消化残渣は検出されなかった。

5. 花粉分析からみた植生と環境

各試料とも花粉の産出量が少ないが、これは花粉の集積する水成の環境でなかったためと考えられる。草本花粉のイネ科、ヨモギ属がやや多いことから、相対的に乾燥した環境を好むヨモギ属やイネ科の耕地雑草が生育していたようである。明らかな栽培植物は検出されなかったが、イネ科には雜穀類が含まれるため、雜穀の栽培の可能性も考えられる。なお、畑作の栽培植物は花粉生産数の極めて少ない風媒花植物が多く、花粉分析には反映されにくい。寄生虫卵は検出されなかったが、蟲の乾燥した環境下では分解された可能性がある。樹木は周囲には少なく、コナラ属コナラ亜属（ミズナラなど）を主にやや遠方に分布していたと考えられる。

参考文献

中村純（1973）花粉分析。古今書院, p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店, p. 248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

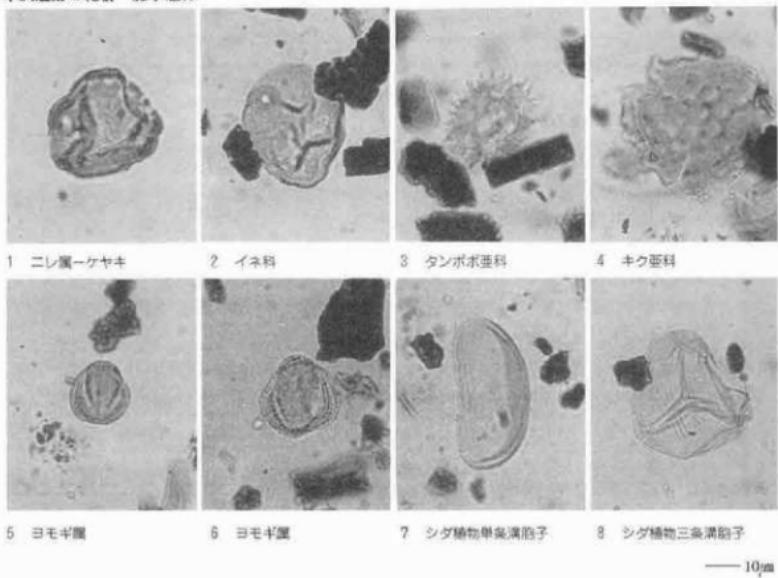
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

表1 米沢遺跡における花粉分析結果

分類群		1	2	3	4
学名	和名	数	数	試験	試験
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1			
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		3		1
<i>Betula</i>	カバノキ属	1			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシテ属-アサガ				2
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属		3	1	1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亞属	1			
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属ケヤキ	1			1
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1			
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	22	13	3	6
Chenopodiaceae Amaranthaceae	アサガ科-ヒユ科	1			
Apidiaceae	セリ亞科	1			
Valerianaceae	オミナエシ科				1
Lacturoideae	タンボボ亞属	1	2		2
Asteroidae	キク亞科		6		
Araceae	ヨモギ属	50	62	12	9
Fern spore	シダ植物胞子				
Monocolate type spore	單胞壁胞子	1			
Trilate type spore	三条壁胞子	1		1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	3	7	1	6
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	74	84	15	18
Total pollen	花粉总数	78	91	16	24
Unknown pollen	未定名花粉	2	2	0	1
Fern spores	シダ植物胞子	2	0	1	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)

米沢遺跡の花粉・胞子遺体



III. 米沢遺跡における種実同定分析

1. 試料

試料は、十和田a火山灰直下の畠状造構の歯部（試料1、2）、歯間部（試料3、4）の4点で、花粉分析の試料と同一のものである。

2. 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料200ccに水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 握拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比を行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

3. 結果

分析の結果、畠状造構の歯の試料1、2、歯間の試料3、4の各試料とも、種実は検出されなかった。

4. 考察

米沢遺跡において十和田a直下より検出された畠状造構の歯および歯間の堆積物について種実類の抽出を試みた。その結果、種実類は検出されず、栽培植物の検討を行うことは困難であった。

一般に、乾燥あるいは乾湿を繰り返す環境下では、土壤生成作用によって有機質は分解されやすい。本遺跡で検出された畠跡においても、このような原因で有機質である種実類が分解されたと考えられる。

参考文献

南木聰彦（1993）葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283.

4. 米沢遺跡出土の耳飾り玉の非破壊による蛍光X線分析結果

薦科哲男

(京都大学原子炉実験所)

出土玉類の色調をみて白とか緑色が主体のとき、ヒスイ以外に玉髓、メノウなどが考えられるが、遺跡の発掘調査報告書などには一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態で、命名定義が不十分なものが多いと思われる。玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覺悟して硬度を調べる、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というものは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが見出されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、見出後は、専ら国内説で、岩石学的方法1) および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法2, 3) が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は含有元素分析による蛍光X線分析法と含有イオン、色中心を分析する電子スピン共鳴法を併用することにより産地分析を正確に行なった例4) が報告されている。石織など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉など玉類は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになる玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。今回分析を行なった玉は二戸市に位置する米沢遺跡の縄文時代～平安時代で縄文時代前期の層から出土した耳飾りである。

蛍光X線スペクトルを図1(65421)に示した。分析された元素はナトリウム(Na)は痕跡程度で、マグネシウム(Mg)、珪素(Si)は主成分的に分析され、アルミニウム(Al)元素も相対的に大きくなっている。また、カリウム(K)も含有され、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)は相対的に少なく、カリウムを置換して残ったと思われるルビジウム(Rb)が観測されている。バリウム(Ba)元素はピークとして確認されるが、痕跡程度のピークとしてはストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、また、鉄(Fe)元素は純粋結晶鉱物以外の岩石には一般的に含有されている元素で、鉄ピークに対してマンガン(Mn)ピークが大きいのが特徴的である。これらピークの相対的高さの結果を表1に比重の結果とともに示した。現在調査を終えている10ヶ所のヒスイ（硬玉、軟玉）産地および、10ヶ所の碧玉産地の玉材の組成と一致しなかった。また、耳飾り玉はMg/Siの比が大きいことから瑪瑙の可能性も非常に低いと思われ、マグネシウムが主成分の岩石は透角閃石、陽起石など軟玉の可能性が推測されるが、比重が2.666で軟玉に達しない。比重と成分から超塩基性岩に由来する蛇紋石とか非常に柔らかいと滑石の玉類と推測され、この玉の

原材の産地は、何処かの変成岩帯に由来すると思われるが、現段階では、原石産地の調査に加えて似た組成の玉類の分析データを蓄積することが大切と思われる。ヒスイ（硬玉、軟玉）以外の玉類の石材産地は原石産地が不明のものが多く産地が特定できないが。非破壊の元素分析からでも、岩石名を特定する場合の誤判定を避ける非常に貴重な資料となるため、組成分析はできる限り実行することが大切で、不定形の非破壊分析には同時多元素分析の方法でなければ、定形試料用の逐次元素分析法（波長分散型）では計算された結果は精密分析値の様に計算されるが、いくら分析者が正確な分析を強調しても、実態は、試料が少しでも動くと分析値が大きく変動するため元素間ピークの相対的な高さの関係すら不確実になることを理解しておかなければならない。同時多元素分析（エネルギー分散型）では原理的に変動の影響が少ないので特徴である。岩石名決定には最低条件として組成分析結果との整合性を考慮すべきと思われる。

参考文献

- 1) 茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 菊科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3) 菊科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。
櫛原考古学研究所紀要『考古学論叢』、14:95-109
- 4) 菊科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina (1992), Allotment of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 6) 番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録
No.18:11-15
- 7) 河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。
岩石植物鉱床学雑誌22:195-201

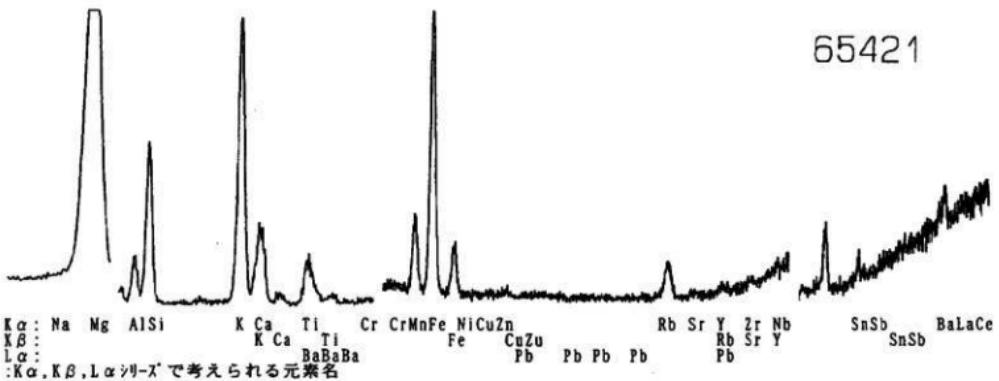


図1 米沢遺跡出土の耳飾り玉(65421)の蛍光X線スペクトル

表1-1 米沢遺跡出土玉の元素比および比重の分析結果

遺物名	分析番号	元素比								
		Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Ti/Si	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe
耳飾り	65421	0.190	8.384	0.201	2.533	0.607	0.449	0.000	0.262	0.001
JG-1 ^{a)}		0.006	0.110	0.073	4.047	3.046	0.898	0.001	0.023	0.001

表1-2 米沢遺跡出土玉の元素比および比重の分析結果

遺物名	分析番号	元素比								
		Rb/Fe	Sr/Fe	Y/Fe	Zr/Fe	Nb/Fe	Ba/Zr	Ba/Sr	La/Sr	Ce/Sr
耳飾り	65421	0.156	0.018	0.000	0.022	0.032			42.033	
JG-1 ^{a)}		0.270	0.360	0.062	0.268	0.029	7.432	5.522	0.234	0.232

表1-3 米沢遺跡出土玉の元素比および比重の分析結果

遺物名	分析番号	元素比								
		K/Fe	K/Ca	Ca/K	Ca/Fe	Ti/K	Ti/Fe	Ti/Ca	Fe/Zr	Rb/Zr
耳飾り	65421	0.028	4.173	0.240	0.006	0.177	0.006	0.740	45.860	7.134
JG-1 ^{a)}		0.107	1.329	0.753	0.083	0.222	0.023	0.295	3.738	1.008

表1-4 米沢遺跡出土玉の元素比および比重の分析結果

遺物名	分析番号	元素比							遺物重量 グラム	比重	
		Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr		
耳飾り	65421	0.815	0.000	1.446	56.252	8.751	0.000	1.227	1.774	6.77534	2.666
JG-1 ^{a)}		1.346	0.231	0.108	2.778	0.749	0.172	0.743	0.080		

a):標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.
Geochemical Journal, Vol. 8 175-192.

5. 米沢遺跡出土ガラス玉の非破壊分析法による検査結果

岩手県立博物館 咲山 まどか, 赤沼 英男

米沢遺跡の奈良時代に比定される住居跡から、3点のガラス玉（すべて小玉、青淡色）が検出された。古代のガラス玉については研究者によって組成に関する自然科学的調査が行われている。その結果によると、6世紀ごろまでは主として青緑色のアルカリ石灰ガラスが多くみられ、7世紀末ごろからは国産の船ガラスの製造が行われていたものと推定されている。^{1)~3)} ガラス玉3点についてエレクトロン・プローブ・マイクロ・アナライザ（EPMA）およびエネルギー分散型蛍光X線分析装置（EDS）により分析し、融剤と着色剤に關し検討したところ、アルカリ石灰ガラスであり、接着剤としては鉄鉱物を素材としていることが明らかとなった。以下では自然科学的調査によって得られた知見について述べる。

1. 分析資料

分析した資料は米沢遺跡から出土したガラス玉3点である。資料の外観形状ならびに色を表1に、外観写真を写真1、EDSでのX線の照射位置を写真2に示す。

2. 分析方法

分析対象としたガラス玉をアルコールで超音波洗浄した後、十分に自然乾燥した。資料の変色を抑制するためEDSのX線照射範囲を0.1mm²に絞込み分析を行った。次に資料をカーボン蒸着し、EPMA分析に供した。

測定条件は以下のとおりである。

EPMA		EDS	
電圧	15kV	電圧	30kV
分析結晶	LiF, PETJ, TAP, LDE2	電流	0.3mA

3. 分析結果ならびに考察

No.1（小玉・青淡色）のEPMAによる分析結果を図1aに示す。これにより、この小玉はケイ素（Si）を主成分とし、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）を含み、他に微量のナトリウム（Na）が含有されていることがわかった。また、EDSによる分析結果を図2aに示す。NaのK_α線（1.0keV）、MgのK_α線（1.2keV）、AlのK_α線（1.5keV）、SiのK_α線（1.7keV）、カリウム（K）のK_α線（3.3keV）、CaのK_α線（3.7keV）、マンガン（Mn）のK_α線（5.9keV）、鉄（Fe）のK_α線（6.7keV）、銅（Cu）のK_α線（8.0keV）、鉛（Pb）のL_α線（10.6eV）が確認された。これらの半定量値が60%以上80%未満を「++++」、4%以上8%未満を「+++」、2%以上5%未満を「++」、1%以上2%未満を「+」とし、結果を整理すると表2のとおりとなる。図1a、図2a、表2に従えば、主原料にSi、融剤にはCa、Naが使用されており、着色剤はFe鉱物と推定された。

ところでガラスは珪酸を主要原料に、融剤にNa、Caなどのアルカリ元素を使用したアルカリ石灰ガラスと、融剤にPbを使用した鉛ガラスに分類される。上記の分析結果からNo.1ガラスはNa、Caを融剤とするアルカリ石灰ガラス（中でも特にNaの多いソーダ石灰ガラス）として扱うことができる。着色剤としてFeを含み、青淡色を呈している。同様に他の2点の分析結果をまとめると図1b、図2b、図2c、表2のごとくになる。これらもNa、Caの多いソーダ石灰ガラスに分類される。青淡色の着色剤もNo.1ガラス同様鉄酸化物が使われたものと推定された。

図3に肥原により明らかにされた弥生時代から奈良時代のガラス組成の変遷を示す³⁾。今回調査を行った資料No.1~3のガラスはソーダ石灰ガラスで、奈良時代に比定されており、直線Dの延長上にある。今回の調査により、ソーダ石灰ガラスの使用が、奈良時代まで伸びることが推定された。今後更に分析数を増やし、また破壊可能な資料についてはICP（誘導プラズマ発光分光光度計）による定量分析がなされることにより、詳細が明らかになることが期待される。

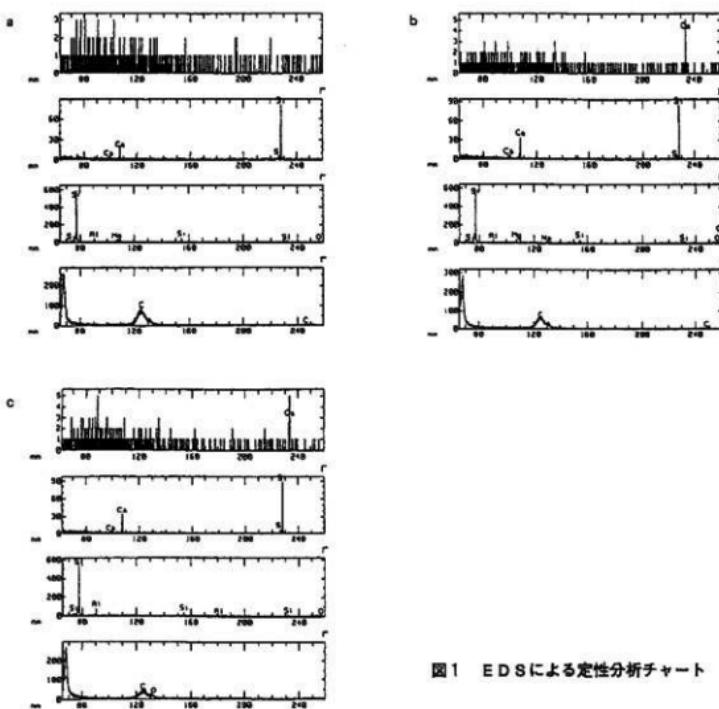


図1 EDSによる定性分析チャート

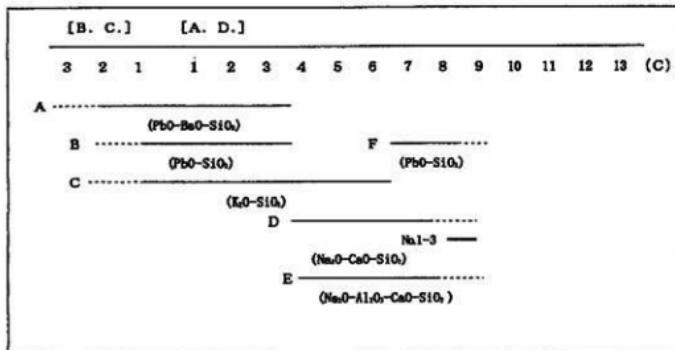


図3 古代ガラスの組成変遷

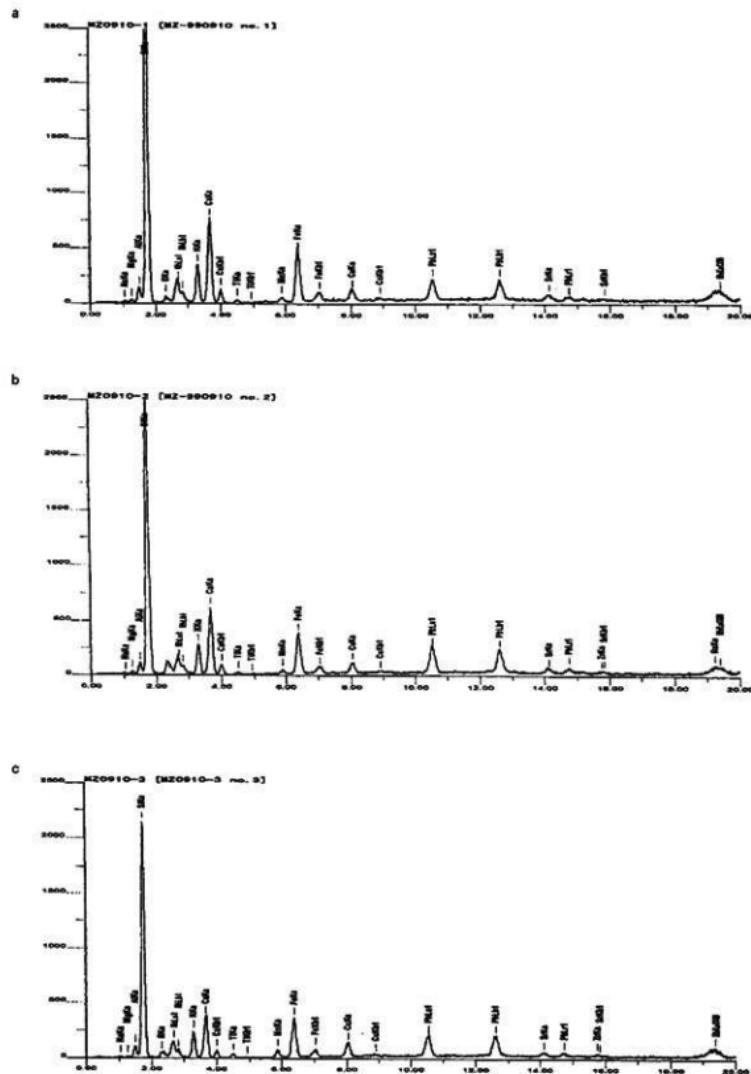


図2 EDSによる定性分析チャート

註

- 1) 富沢威他『古代ガラスの化学』「化学の領域」43
- 2) 吉武素水『ガラスの製造』・ガラス・35~73
- 3) 小林行雄『統古代の技術』堺書房、東京
- 4) 日本の美術37「ガラス」
- 5) 肥塚隆保「文化財論叢」966 国立奈良文化財研究所

表1 資料一覧

資料No.	遺物番号	内眼観察		直径(mm)	内径(mm)	出土地	推定年代		
		色	形						
1	MZ990910-1	青	丸	完	形	4.2	1.5	米沢(二戸市)	奈良
2	MZ990910-2	青	丸	完	形	3.8	1.5	米沢(二戸市)	奈良
3	MZ990910-3	青	丸	完	形	3.8	1.3	米沢(二戸市)	奈良

資料番号、遺物番号、内眼観察、年代は埋蔵文化財センター工藤氏による。

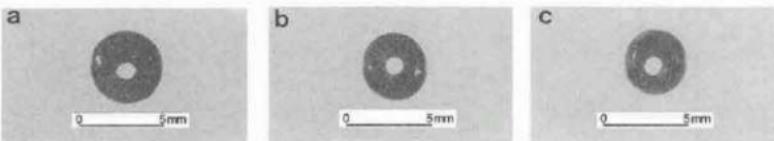


写真1 資料の外観写真

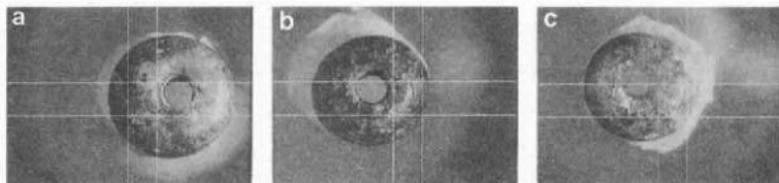


写真2 EDSのX線照射位置

表2 米沢遺跡出土ガラス玉の半定量分析結果

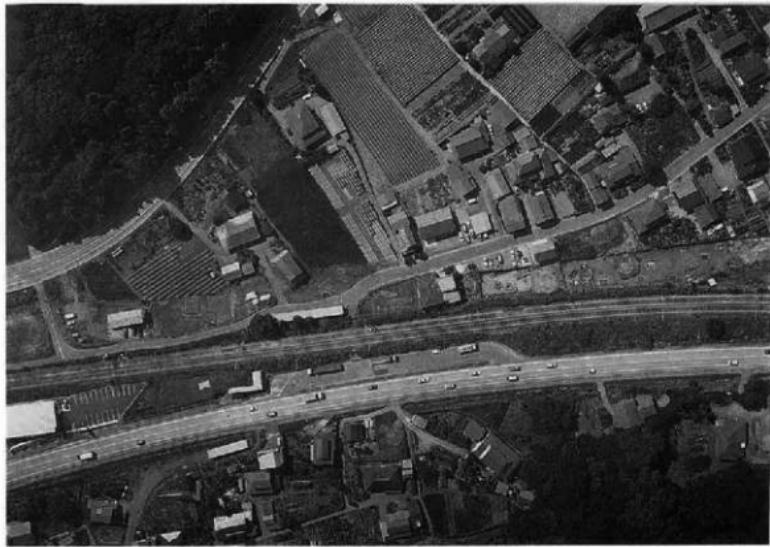
資料No.	主原料		融剤						着色剤		
	S I	P b	C a	N a	A l	K	M g	M n	F e	C u	
1	+++++	+++	++++	++++	+++	+++	+++	+	++	+	
2	+++++	+++	++++	++++	++++	+++	+++	+	++	+	
3	+++++	+++	++++	++++	++++	+++	+++	+	++	+	

表の「+++++」は6.0%以上8.0%未満、「++++」は4.9%以上8.0%未満、「+++」は2.0%以上5.0%未満、「++」は1.0%以上2.0%未満、「+」は1.0%未満。の半定量値を表す。

写 真 図 版



道路遠景（南から）



調査区中央部全景（東から）

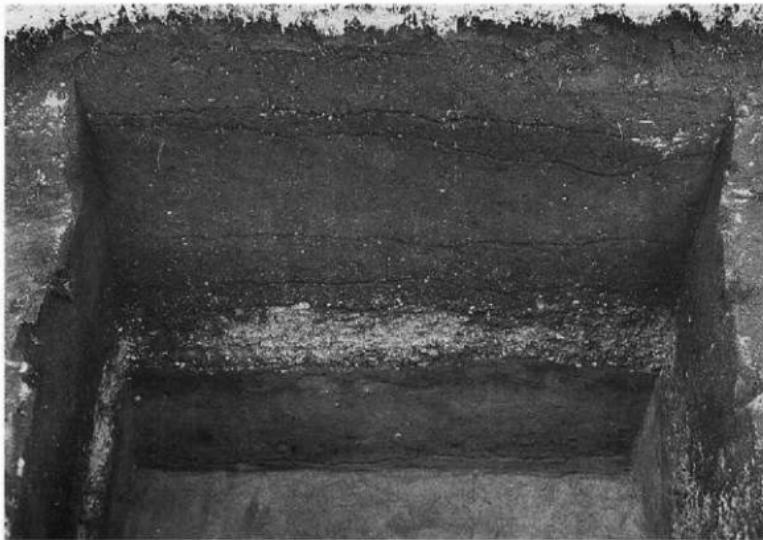
写真図版1 全景写真



5区調査前風景（南から）



7-②区調査前風景（南から）



基本土層

写真図版2 調査前風景・基本土層



検出



炭化材・遺物出土状況

写真図版3 第1号住居跡（1）



平面



断面

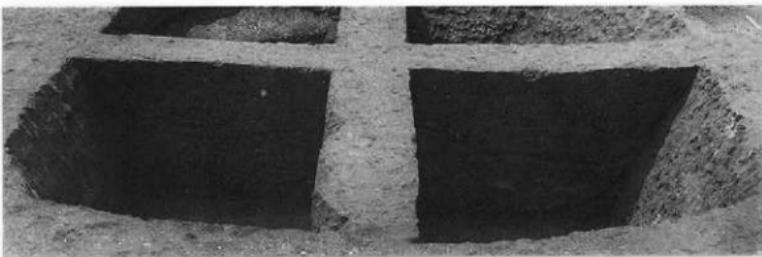


断面

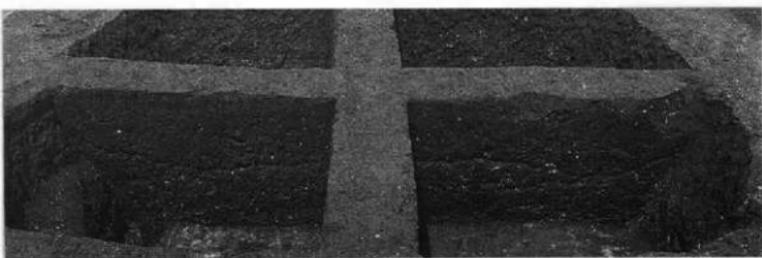
写真図版4 第1号住居跡（2）



平面



断面

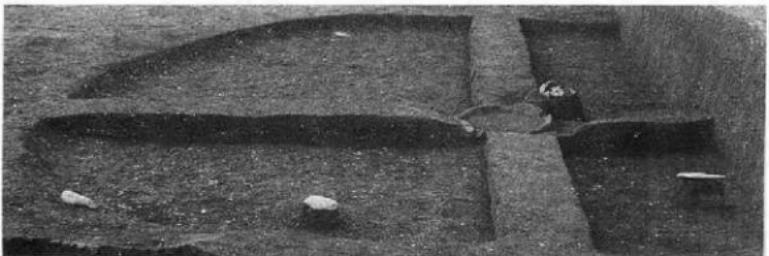


断面

写真図版5 第2号住居跡



平 面



断 面



炉 平面

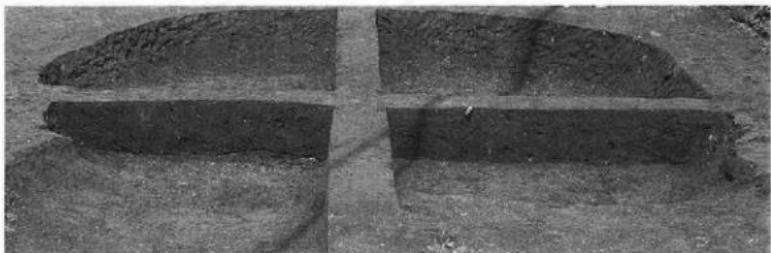


遗物出土状况

写真図版 6 第3号住居跡



平面



断面

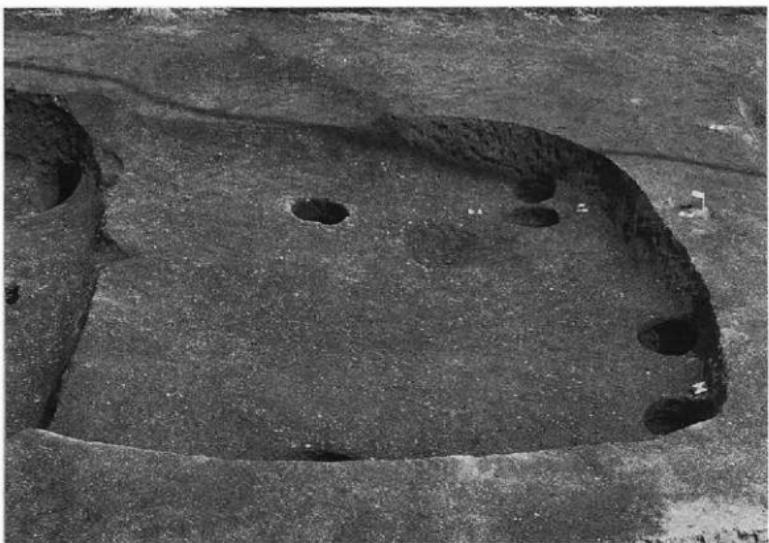


炉 平面



炉 断面

写真図版7 第4号住居跡



平 面



断 面

写真図版 8 第 5 号住居跡



平面



断面

写真図版9 第6号住居跡



平面 (H11年度)



断面 (B-B')



断面 (A-A')



遗物出土状況

写真図版10 第7号住居跡 (1)



平面（H10年度）



断面（C-C'）



断面（D-D'）

写真図版11 第7号住居跡（2）



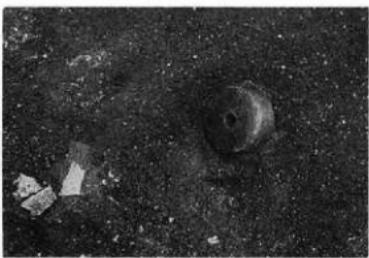
炭化材・遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

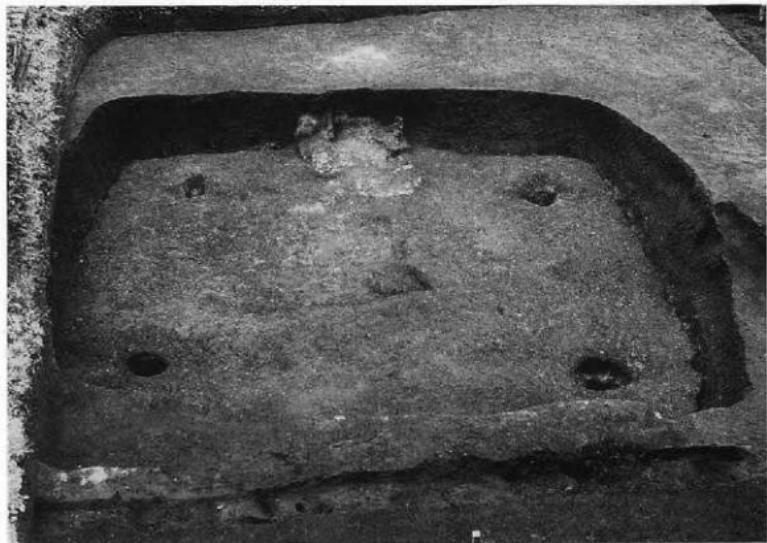


遺物出土状況



火山灰検出

写真図版12 第8号住居跡（1）



平面



断面



カマド検出



煙道部 断面

写真図版13 第8号住居跡（2）



平面



遗物出土状况



烟道部 断面



断面

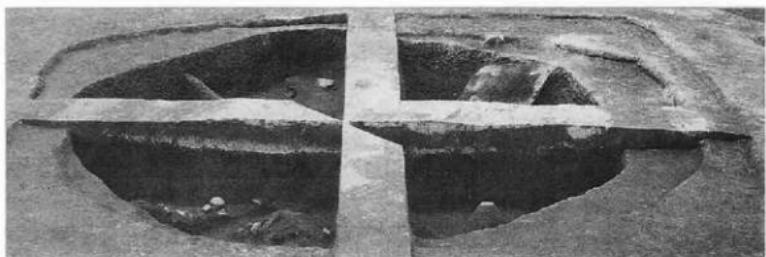


断面

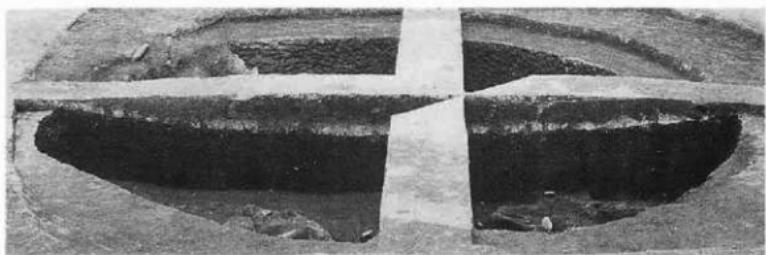
写真図版14 第9号住居跡



炭化材・遺物出土状況



断面



断面

写真図版15 第10号住居跡（1）



平面



カマド検出



袖部 断面



煙道部 断面

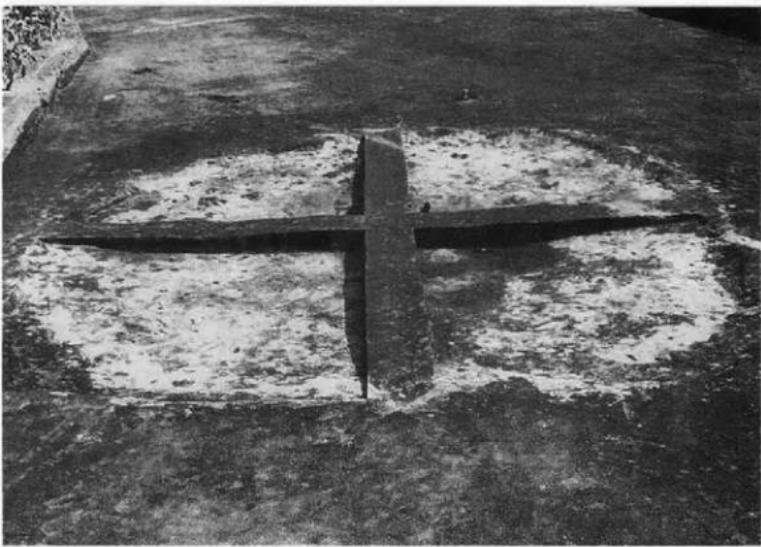


焼焼部 断面

写真図版16 第10号住居跡（2）



検出



火山灰検出

写真図版17 第11号住居跡（1）



平面



断面

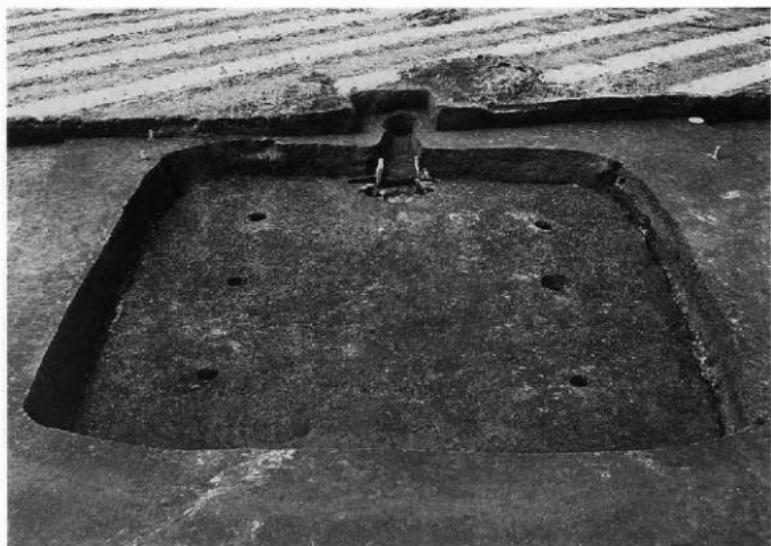


遺物出土状況



カマド焼出

写真図版18 第11号住居跡（2）



平面



焼焼部 平面



焼焼部 断面



焼焼部 断面

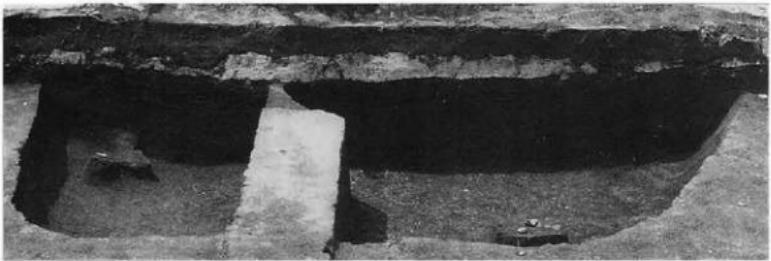


袖部 断面

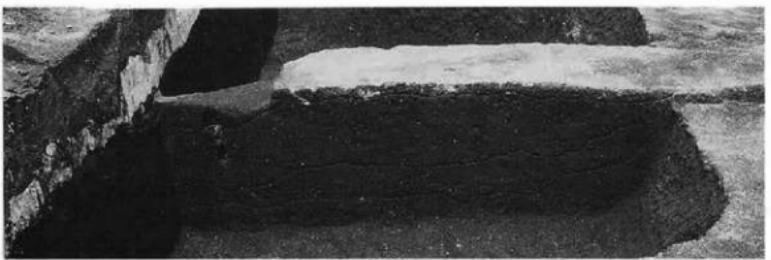
写真図版19 第11号住居跡（3）



平 面



断 面



断 面

写真図版20 第12号住居跡



炭化材検出



断面



断面

写真図版21 第13号住居跡（1）



平面



炭化材・遺物出土状況



煙道部 断面



煙道部 断面

写真図版22 第13号住居跡（2）



平面



断面

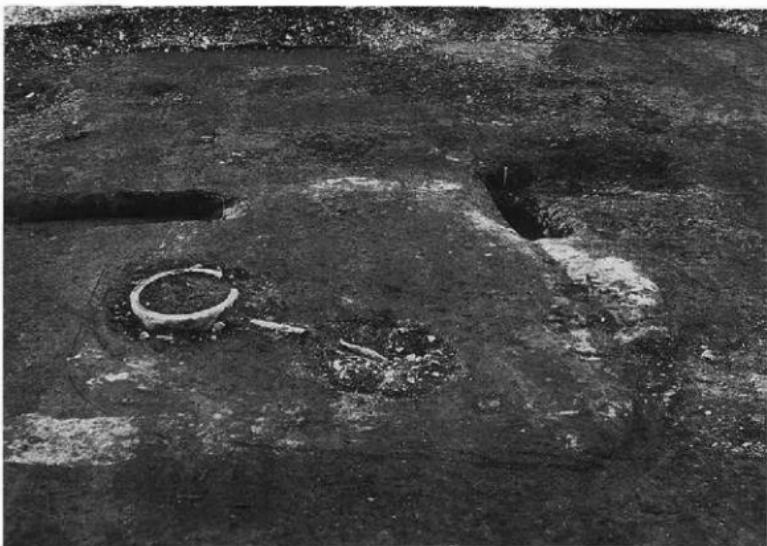


カマド検出

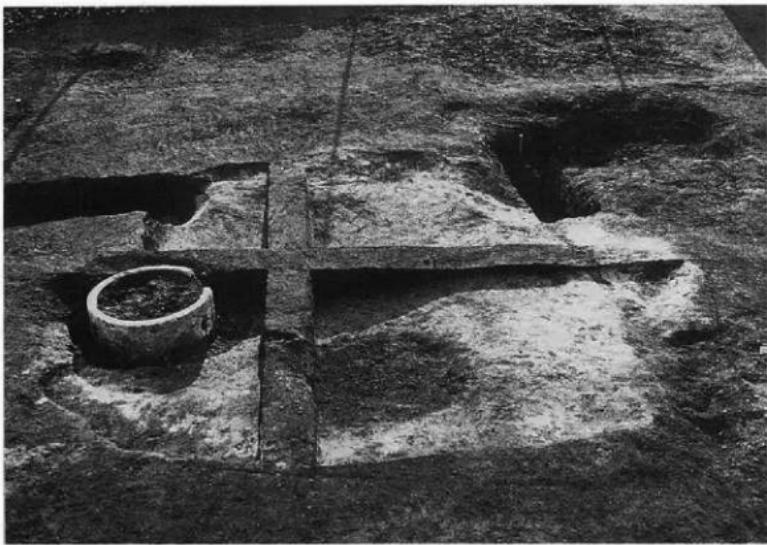


袖部 断面

写真図版23 第14号住居跡



検出

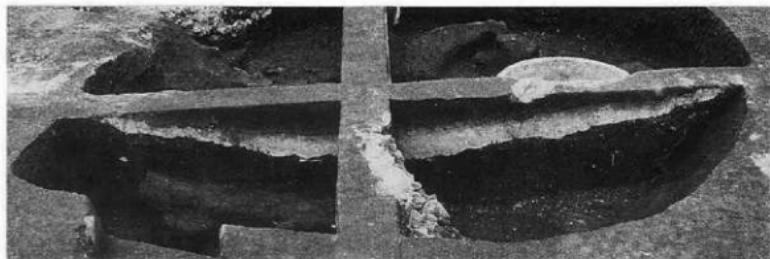


火山灰検出

写真図版24 第15号住居跡（1）



炭化材・遺物出土状況



断面

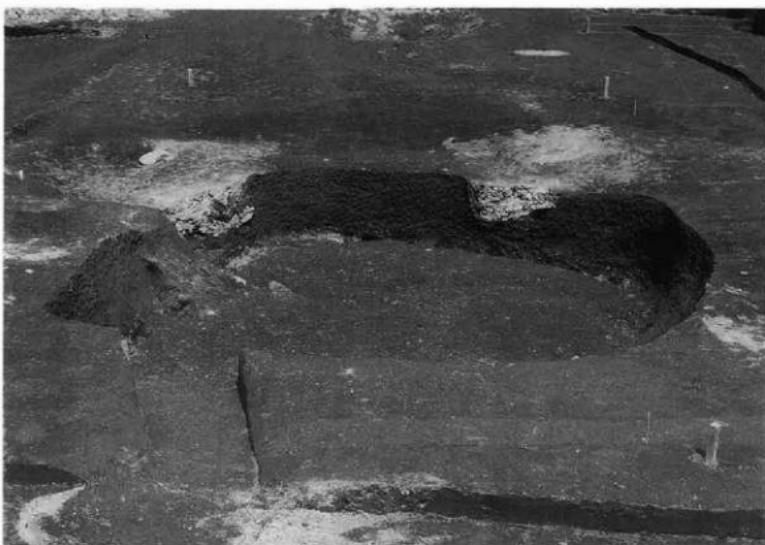


遺物出土状況



壁溝 断面

写真図版25 第15号住居跡（2）



平面



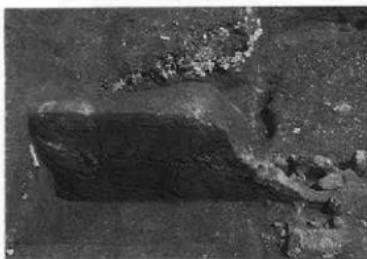
カマド検出



袖部 断面

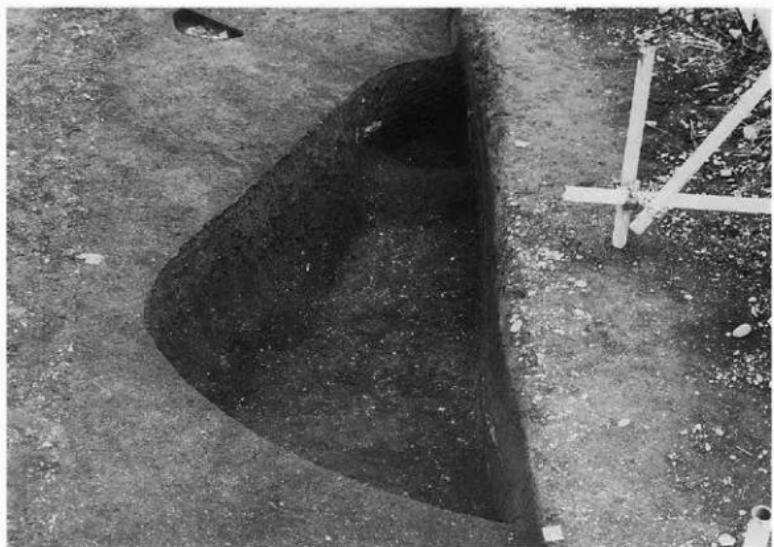


燃焼部 断面

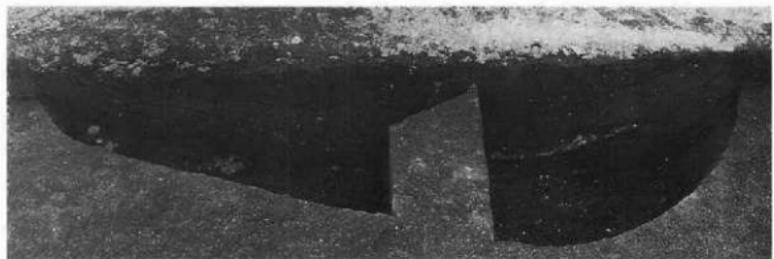


煙道部 断面

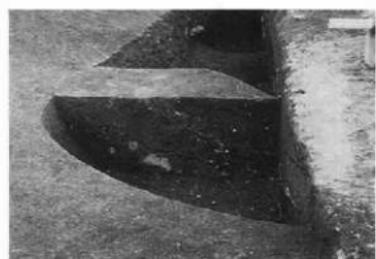
写真図版26 第15号住居跡（3）



平面



断面



断面



烟道部 断面

写真図版27 第16号住居跡



平面



断面

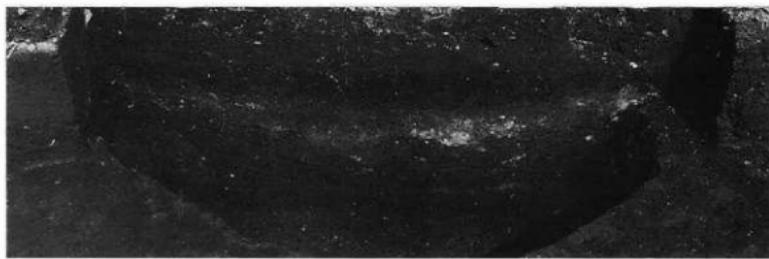


断面

写真図版28 第17号住居跡



平面



断面

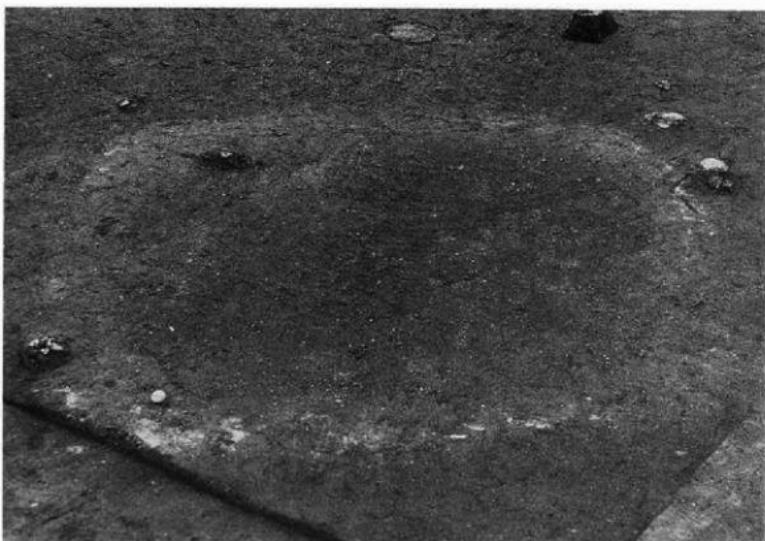


6-②③区積査状況



作業風景

写真図版29 第18号住居跡



検出

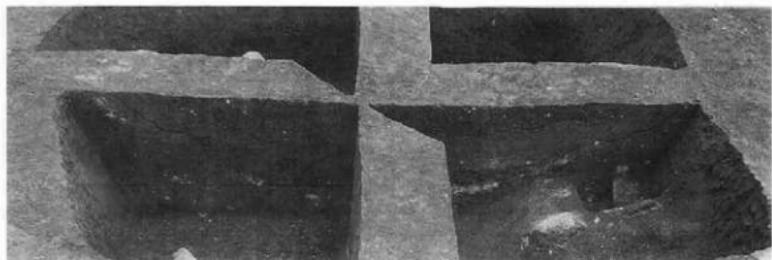


平面(1)

写真図版30 第19号住居跡(1)



平面(2)



断面



袖部 断面



烟道部 断面

写真図版31 第19号住居跡(2)



平 面



断 面

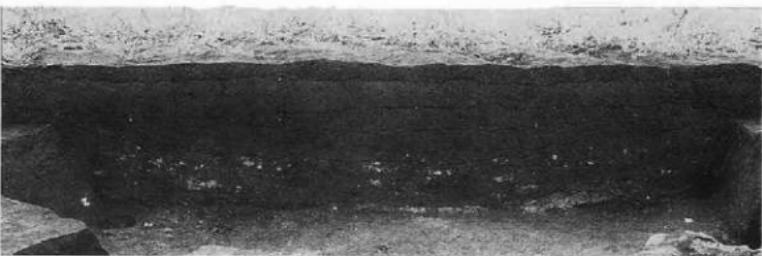


新 面

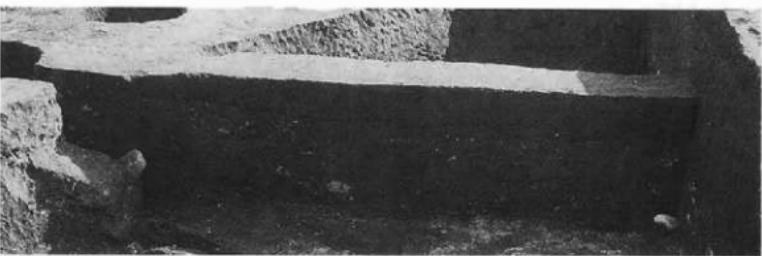
写真図版32 第20号住居跡



炭化材・遺物出土状況



断面



断面

写真図版33 第21号住居跡（1）



平面



カマド検出



袖部 断面



煙出し部 碑検出



P 2 断面

写真図版34 第21号住居跡（2）



平面 (H11年度)



断面 (A-A')

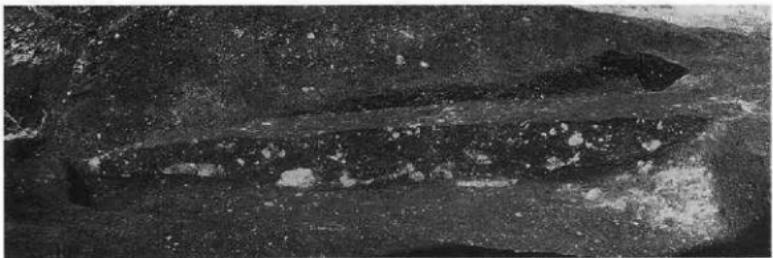


断面 (B-B')

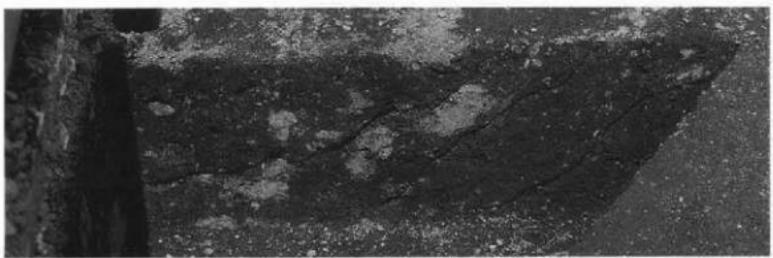
写真図版35 第22号住居跡 (1)



平面（平成12年度①）



断面（E-E'）



断面（D-D'）

写真図版36 第22号住居跡（2）



平面（平成12年度Ⅱ）



カマド砲石検出



煙道部 断面



袖部 断面

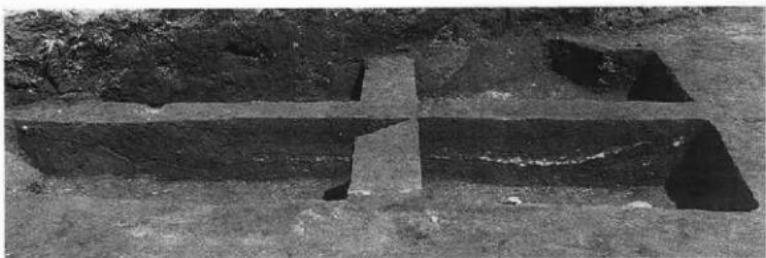


煙道部 断面

写真図版37 第22号住居跡（3）



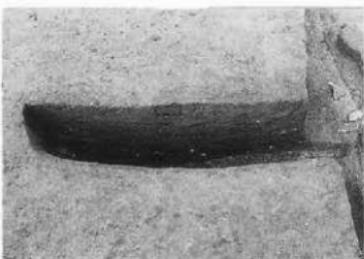
平面 (H11年度)



断面 (B-B')



遺物出土状況

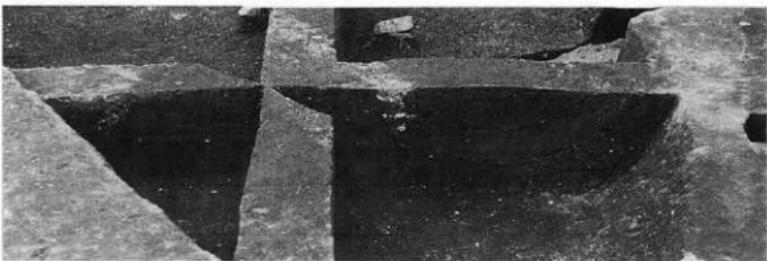


煙道部 断面

写真図版38 第23号住居跡 (1)



平面（H12年度）



断面（C-C'）



断面（D-D'）

写真図版39 第23号住居跡（2）



平面(1)



断面



断面

写真図版40 第24号住居跡(1)



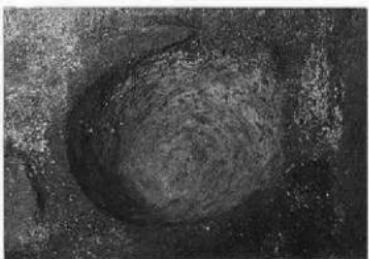
平面 (2)



遺物出土状況



燃焼部 断面



貯藏穴 平面

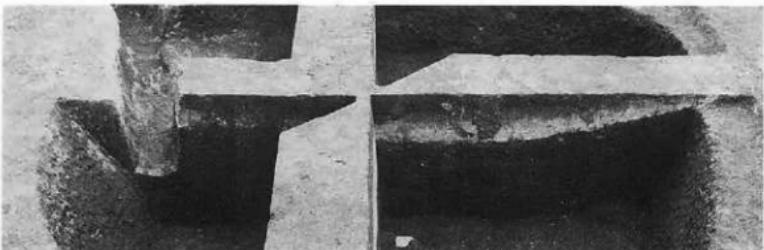


燃焼部 断面

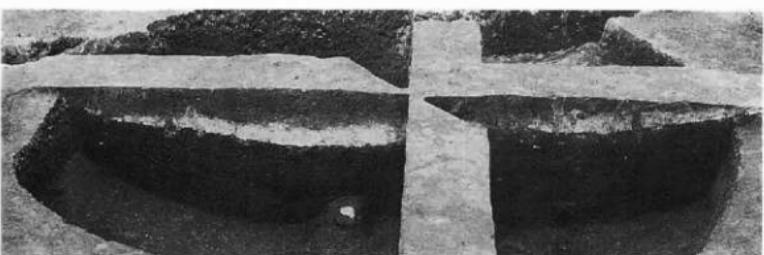
写真図版41 第24号住居跡 (2)



平面

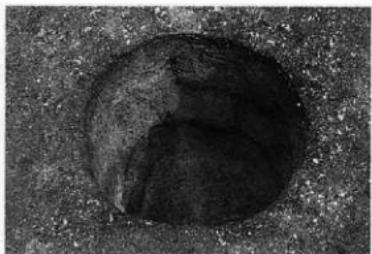


断面

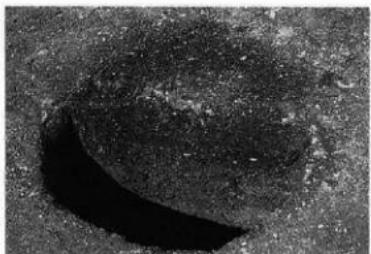


断面

写真图版42 第1号住居状遺構



第1号土坑 平面



第1号土坑 断面



第2号土坑 平面



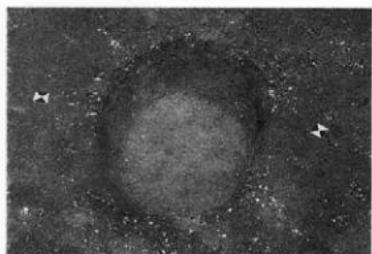
第2号土坑 断面



第3号土坑 平面



第3号土坑 断面



第4号土坑 平面



第4号土坑 断面

写真图版43 第1~4号土坑



第5号土坑 平面



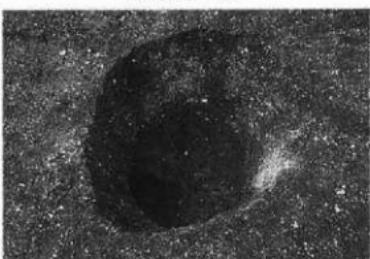
第5号土坑 断面



第6号土坑 平面



第6号土坑 断面



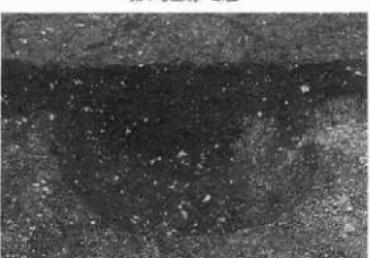
第7号土坑 平面



第7号土坑 断面

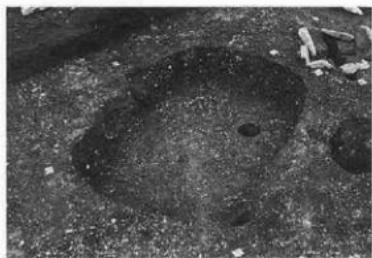


第8号土坑 平面

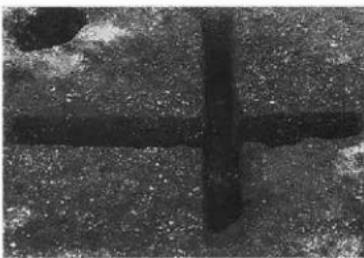


第8号土坑 断面

写真図版44 第5～8号土坑



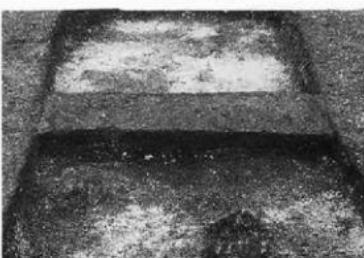
第9号土坑 平面



第9号土坑 断面



第10号土坑 平面



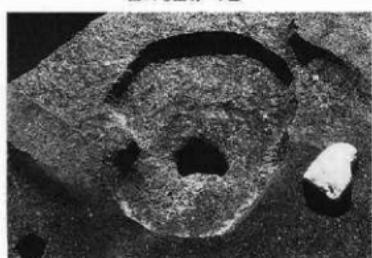
第10号土坑 断面



第11号土坑 平面



第11号土坑 断面

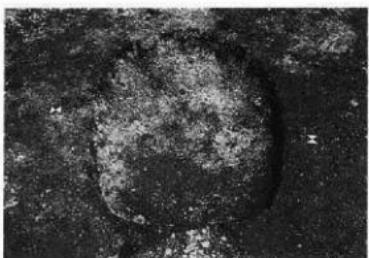


第12号土坑 平面



第12号土坑 断面

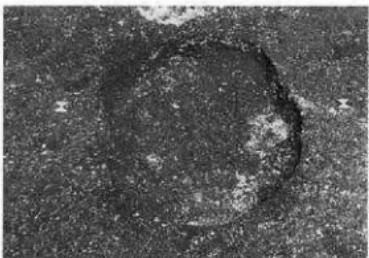
写真图版45 第9~12号土坑



第13号土坑 平面



第13号土坑 断面



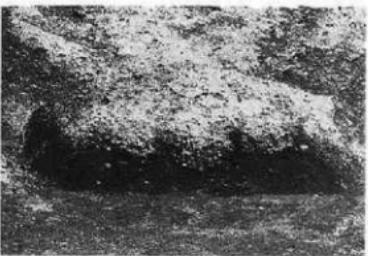
第14号土坑 平面



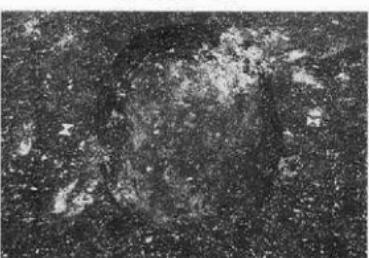
第14号土坑 断面



第15号土坑 平面



第15号土坑 断面

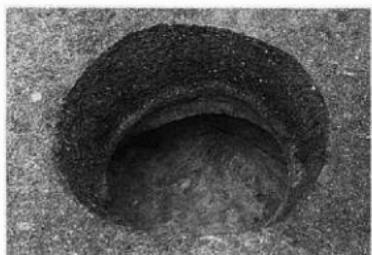


第16号土坑 平面

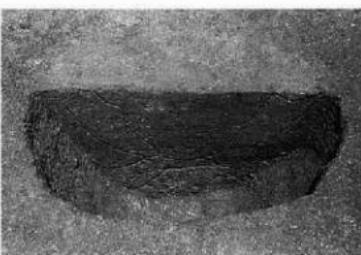


第16号土坑 断面

写真图版46 第13~16号土坑



第17号土坑 平面



第17号土坑 断面



第18号土坑 平面



第18号土坑 断面



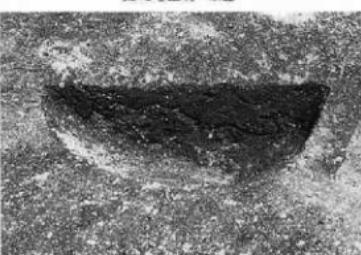
第19号土坑 平面



第19号土坑 断面

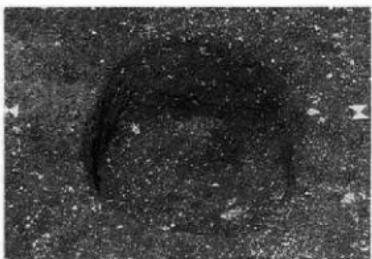


第20号土坑 平面

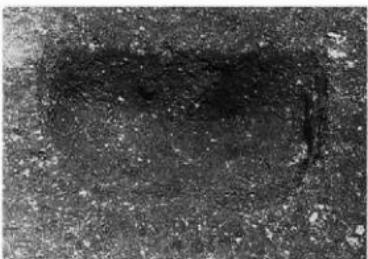


第20号土坑 断面

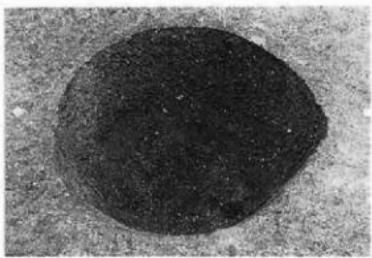
写真图版47 第17~20号土坑



第21号土坑 平面



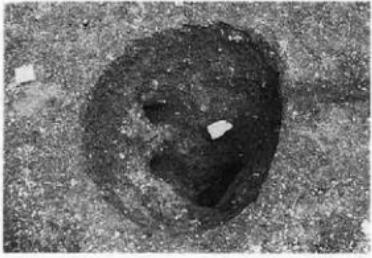
第21号土坑 断面



第22号土坑 平面



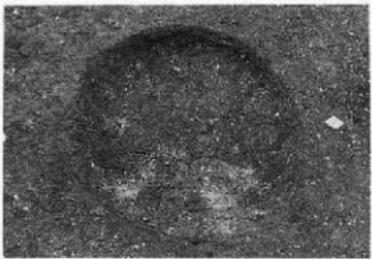
第22号土坑 断面



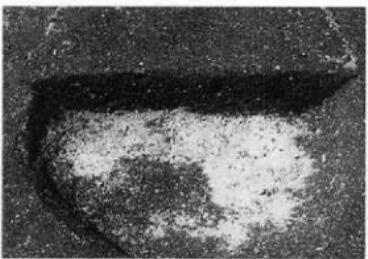
第23号土坑 平面



第23号土坑 断面

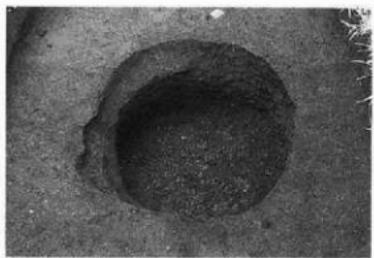


第24号土坑 平面

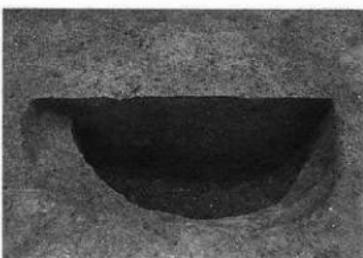


第24号土坑 断面

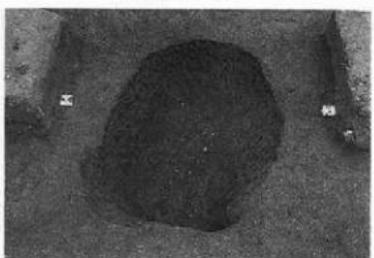
写真図版48 第21~24号土坑



第25号土坑 平面



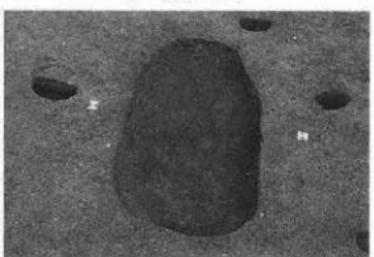
第25号土坑 断面



第26号土坑 平面



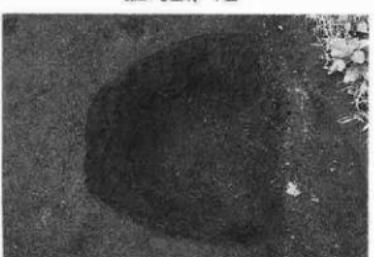
第26号土坑 断面



第27号土坑 平面



第27号土坑 断面

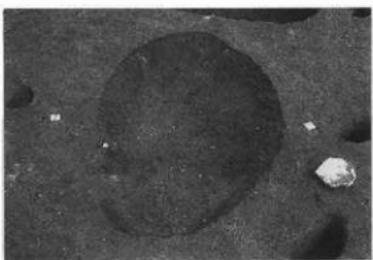


第28号土坑 平面

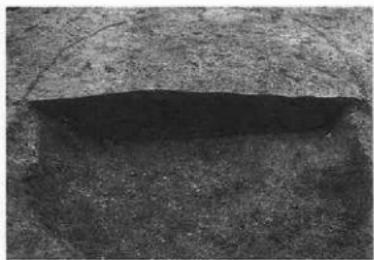


第28号土坑 断面

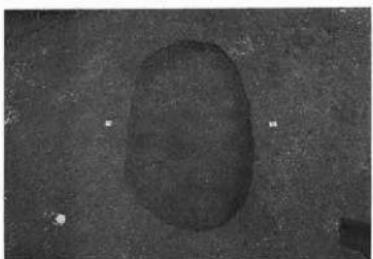
写真图版49 第25~28号土坑



第29号土坑 平面



第29号土坑 断面



第30号土坑 平面



第30号土坑 断面



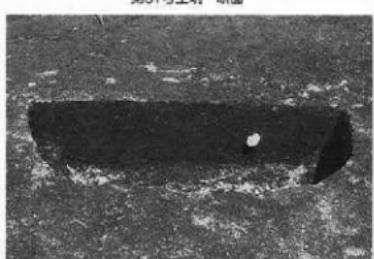
第31号土坑 平面



第31号土坑 断面

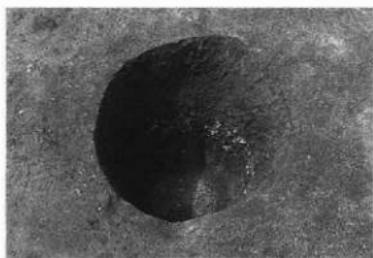


第32号土坑 平面



第32号土坑 断面

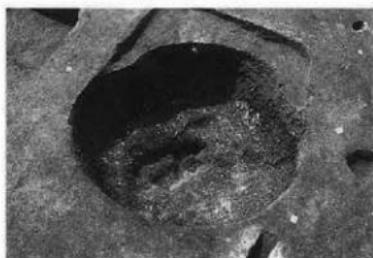
写真图版50 第29~32号土坑



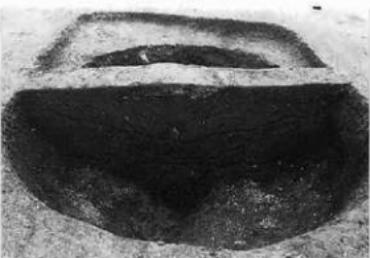
第33号土坑 平面



第33号土坑 断面



第34号土坑 平面



第34号土坑 断面



第35号土坑 平面



第35号土坑 断面

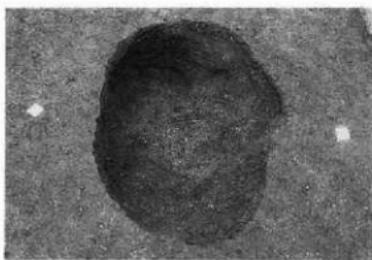


第36号土坑 平面



第36号土坑 断面

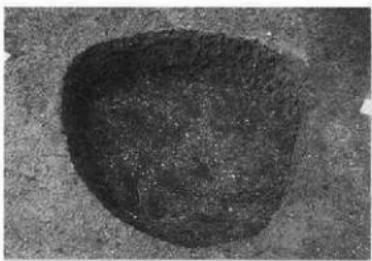
写真图版51 第33~36号土坑



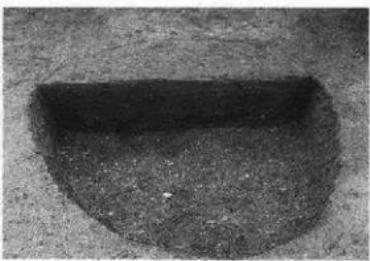
第37号土坑 平面



第37号土坑 断面



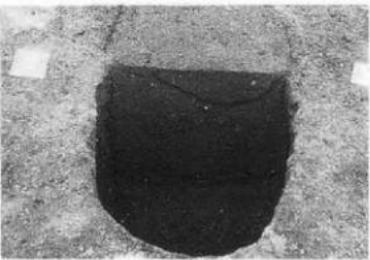
第38号土坑 平面



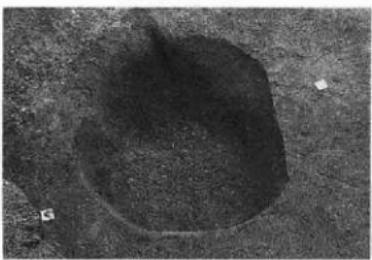
第38号土坑 断面



第39号土坑 平面



第39号土坑 断面



第40号土坑 平面



第40号土坑 断面

写真图版52 第37~40号土坑 (1)



第40号土坑内填土 平面



第40号土坑内填土 断面



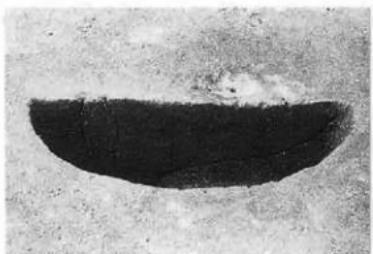
第41号土坑 平面



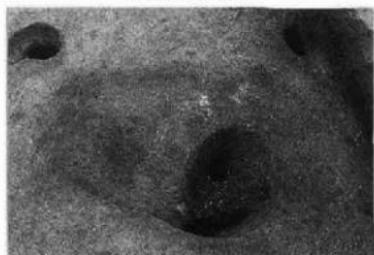
第41号土坑 断面



第42号土坑 平面



第42号土坑 断面

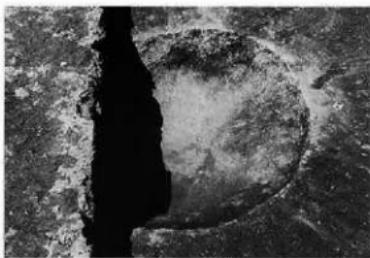


第43号土坑 平面



第43号土坑 断面

写真图版63 第40（2）~43号土坑



第44号土坑 平面



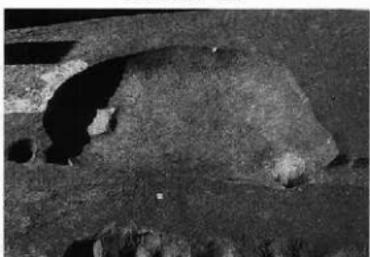
第44号土坑 断面



第45号土坑 平面



第45号土坑 断面



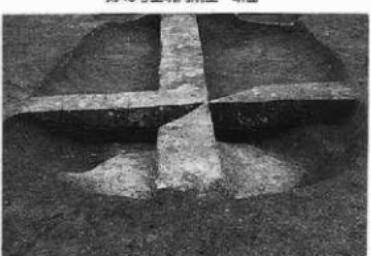
第45号土坑内焙土 平面



第45号土坑内焙土 断面

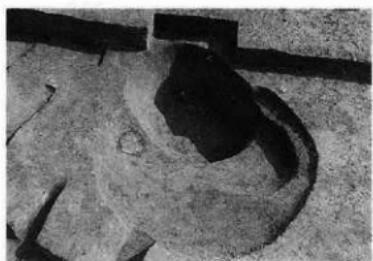


第46号土坑 平面



第46号土坑 断面

写真图版64 第44~46号土坑



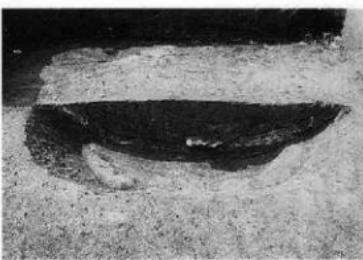
第47·48号土坑 平面



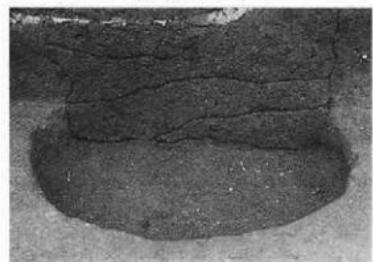
第48号土坑 断面



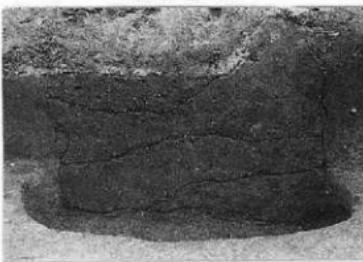
第49号土坑 平面



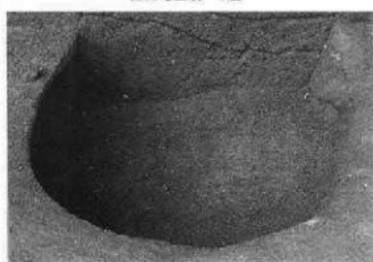
第49号土坑 断面



第50号土坑 平面



第50号土坑 断面



第51号土坑 平面



第51号土坑 断面

写真图版55 第47~51号土坑



第1号陥し穴状遺構 平面



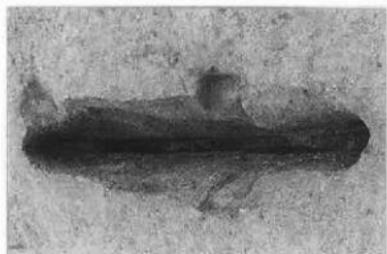
第1号陥し穴状遺構 断面



第2号陥し穴状遺構 平面



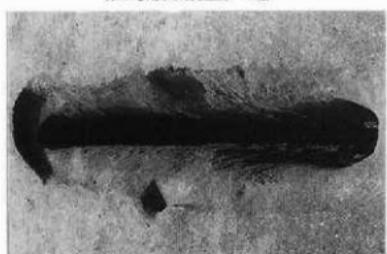
第2号陥し穴状遺構 断面



第3号陥し穴状遺構 平面



第3号陥し穴状遺構 断面



第4号陥し穴状遺構 平面

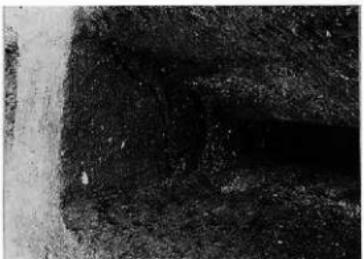


第4号陥し穴状遺構 断面

写真図版56 第1～4号陥し穴状遺構



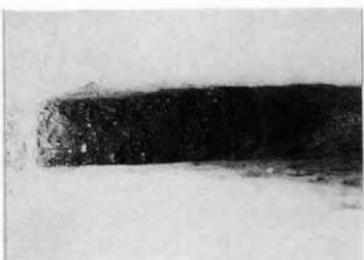
第5号陥し穴状遺構 平面



第5号陥し穴状遺構 断面



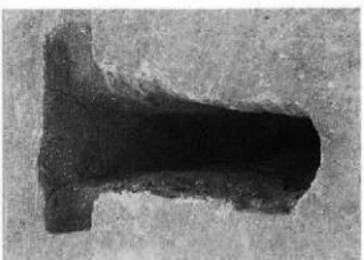
第6号陥し穴状遺構 平面



第6号陥し穴状遺構 断面



第7号陥し穴状遺構 平面



第7号陥し穴状遺構 断面

写真図版57 第5～7号陥し穴状遺構



第1号石圆炉 平面



第1号石圆炉 断面



第2号石圆炉 平面



第2号石圆炉 断面



第1号烧土 平面



第1号烧土 断面

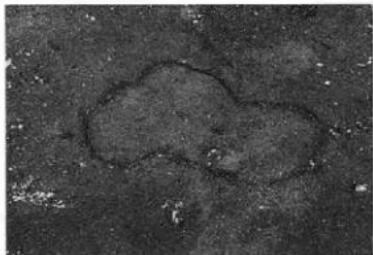


第2号烧土 平面

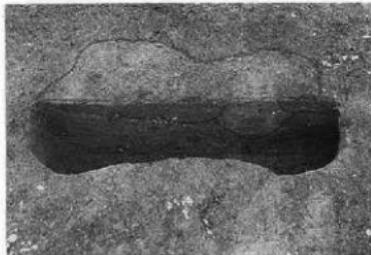


第2号烧土 断面

写真图版58 第1・2号石圆炉, 第1・2号烧土



第3号焼土 平面



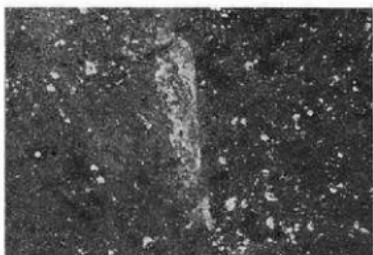
第3号焼土 断面



第4号焼土 平面



第4号焼土 断面



第5号焼土 平面



第5号焼土 断面

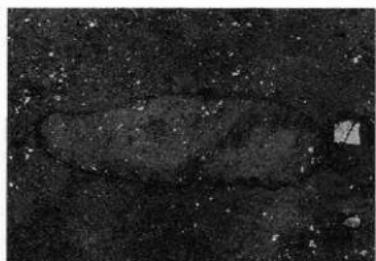


第6号焼土 平面

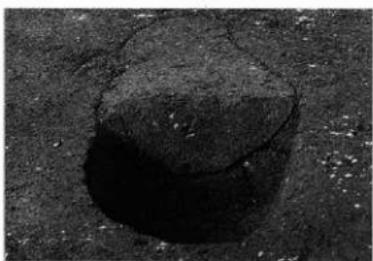


第6号焼土 断面

写真図版59 第3～6号焼土



第7号焼土 平面



第7号焼土 断面



第8号焼土 平面



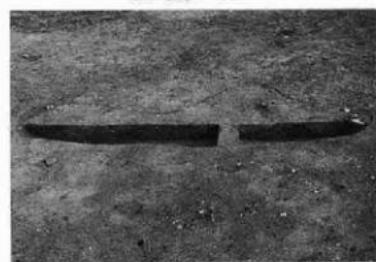
第8号焼土 断面



第9号焼土 平面



第9号焼土 断面



第9号焼土 平面

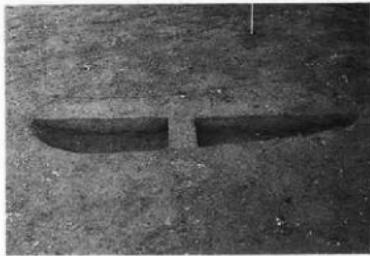


第9号焼土 断面

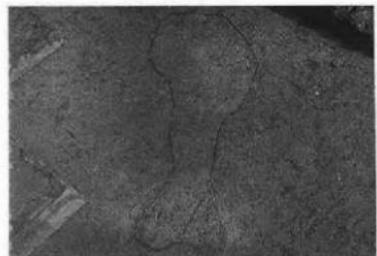
写真図版60 第7～9号焼土



第10号焼土 平面



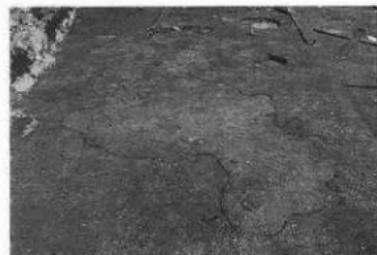
第10号焼土 断面



第11号焼土 平面



第11号焼土 断面



第12号焼土 平面



第12号焼土 断面



第13号焼土 平面



第13号焼土 断面

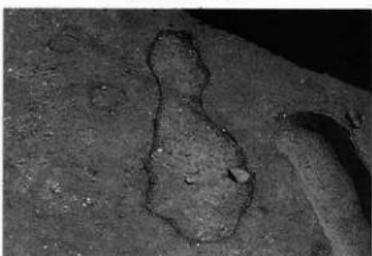
写真図版61 第10~13号焼土



第14号焼土 平面



第14号焼土 断面



第15号焼土 平面



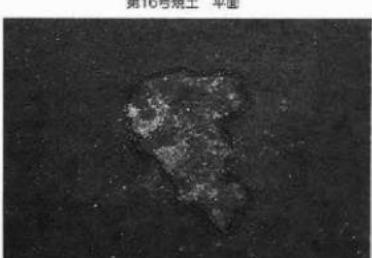
第15号焼土 断面



第16号焼土 平面



第16号焼土 断面

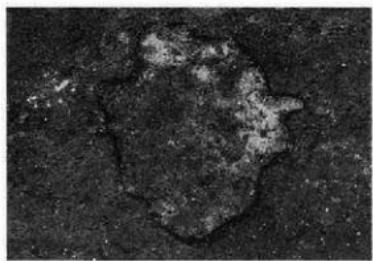


第17号焼土 平面

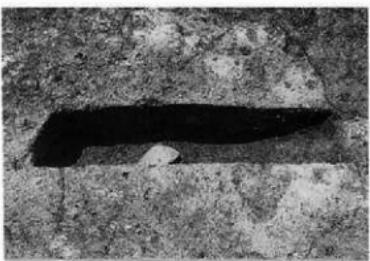


第17号焼土 断面

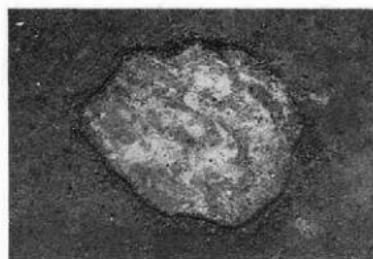
写真図版62 第14~17号焼土



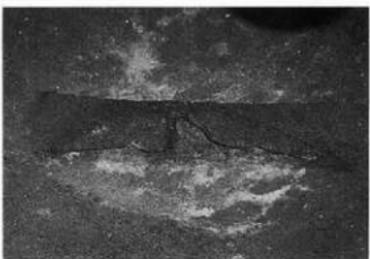
第18号烧土 平面



第18号烧土 断面



第19号烧土 平面



第19号烧土 断面



第20号烧土 平面



第20号烧土 断面

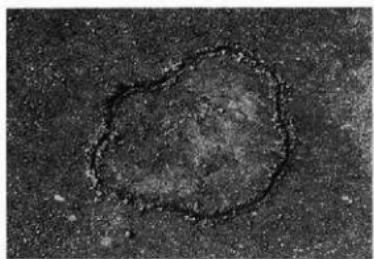


第21号烧土 平面

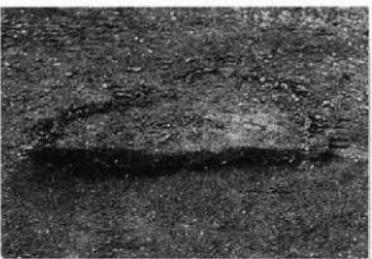


第21号烧土 断面

写真图版63 第18~21号烧土



第22号焼土 平面



第22号焼土 断面



第23号焼土 平面



第23号焼土 断面



第1・2号溝状遺構 平面



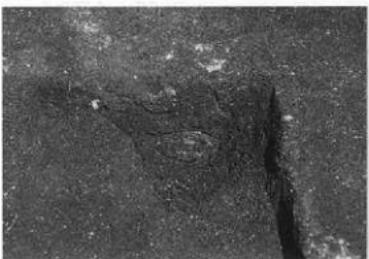
第1号溝状遺構 断面



第2号溝状遺構 断面



第3号溝状遺構 平面



第3号溝状遺構 断面



第4号溝状遺構 断面



第4～6号溝状遺構 平面

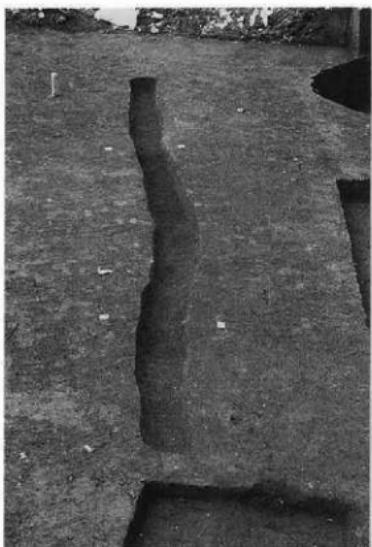


第5号溝状遺構 断面



第6号溝状遺構 断面

写真図版65 第3～6号溝状遺構



第7号溝状遺構（南端部）平面



前面



前面



第7号溝状遺構（中央部）平面



前面



前面

写真図版66 第7号溝状遺構（1）



第8号溝状遺構 平面



第8号溝状遺構 断面



第8号溝状遺構 断面



第7・9号溝状遺構 平面



第9号溝状遺構 断面



第9号溝状遺構 断面



第10号溝状遺構 平面



第10号溝状遺構 断面



第10号溝状遺構 断面



第11号溝状遺構 平面



第11号溝状遺構 断面

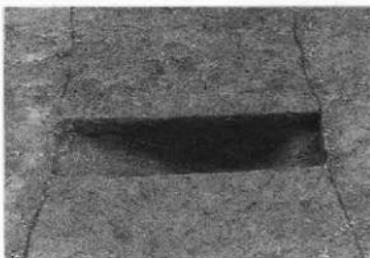
写真図版68 第10・11号溝状遺構



第12号溝状遺構 平面



第12号溝状遺構 断面



第12号溝状遺構 断面



第13·14号溝状遺構 平面



第13号溝状遺構 断面



第14号溝状遺構 断面

写真図版69 第12~14号溝状遺構



第15号溝状遺構 平面



第16号溝状遺構 平面



第15号溝状遺構 断面



第16号溝状遺構 断面

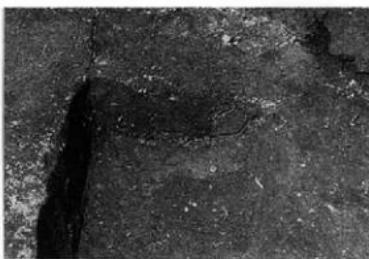


第17号溝状遺構 平面

写真図版70 第15~17号溝状遺構（1）



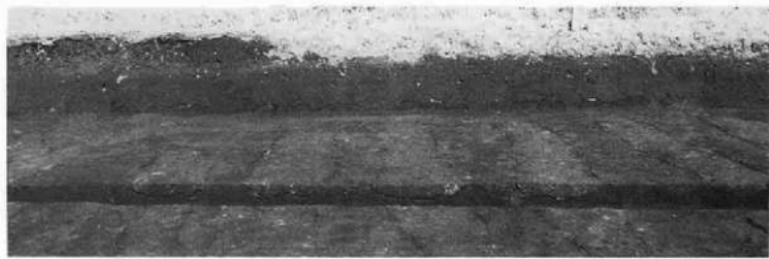
第17号溝状造橋 断面



第17号溝状造橋 断面



溝状造橋 平面



溝状造橋 断面

写真図版71 第17号溝状造橋（2）・溝状造橋（1）



扁状遺構 断面



扁状遺構 断面



井戸跡 平面



井戸跡 断面

写真図版72 扁状遺構（2）・井戸跡



7-①②区精査状況



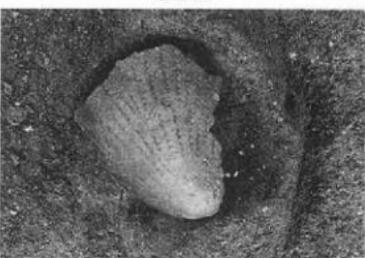
土層断面



作業風景



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版73 早期遺物包含層



写真図版74 遺構内出土遺物（1）



28

29

30



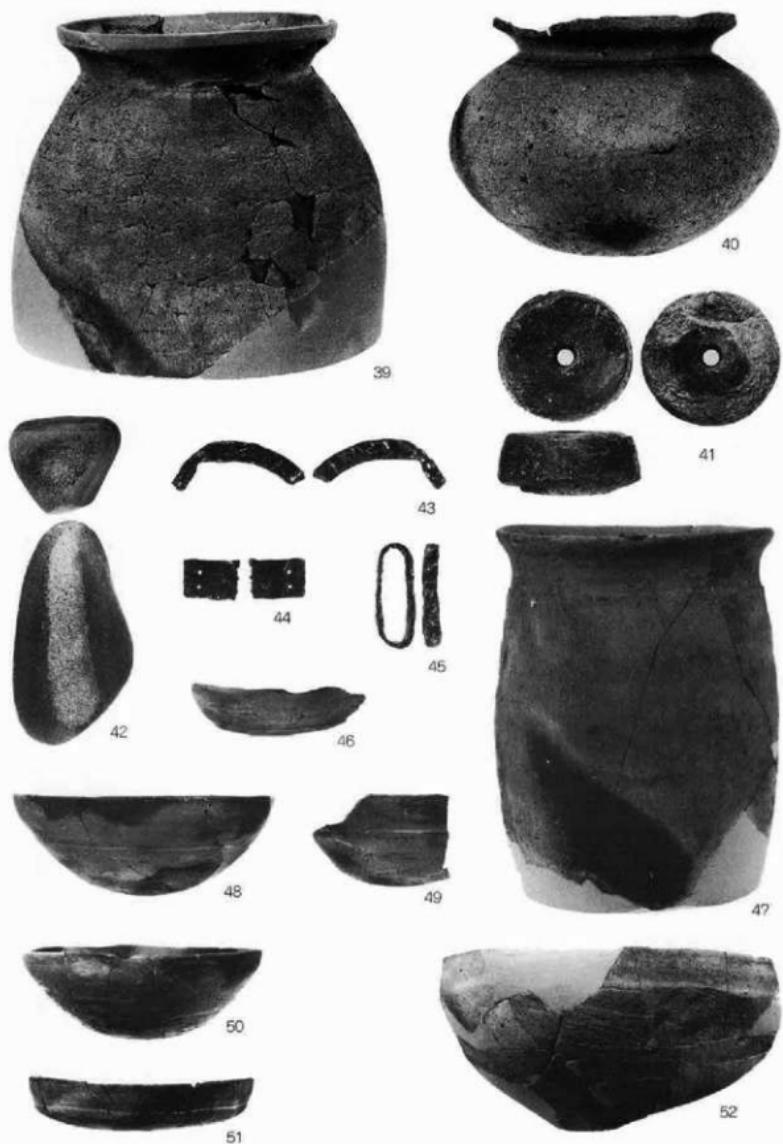
31

32

写真図版75 造模内出土遺物（2）



写真図版76 遺構内出土遺物（3）



写真図版77 造構内出土遺物（4）



写真図版78 造構内出土遺物（5）



62



64



63



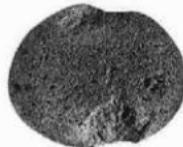
65



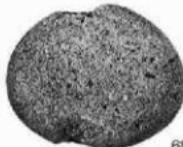
66



67



68



69

写真図版79 遺構内出土遺物（6）



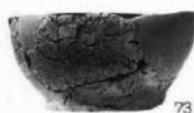
70



71



72



73



74



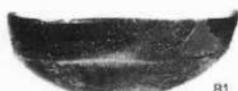
75



76



80



81



82



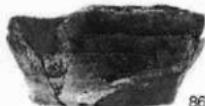
83



84



85



86

写真図版80 遺構内出土遺物（7）



87



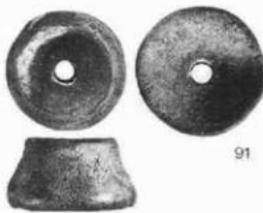
88



89



90

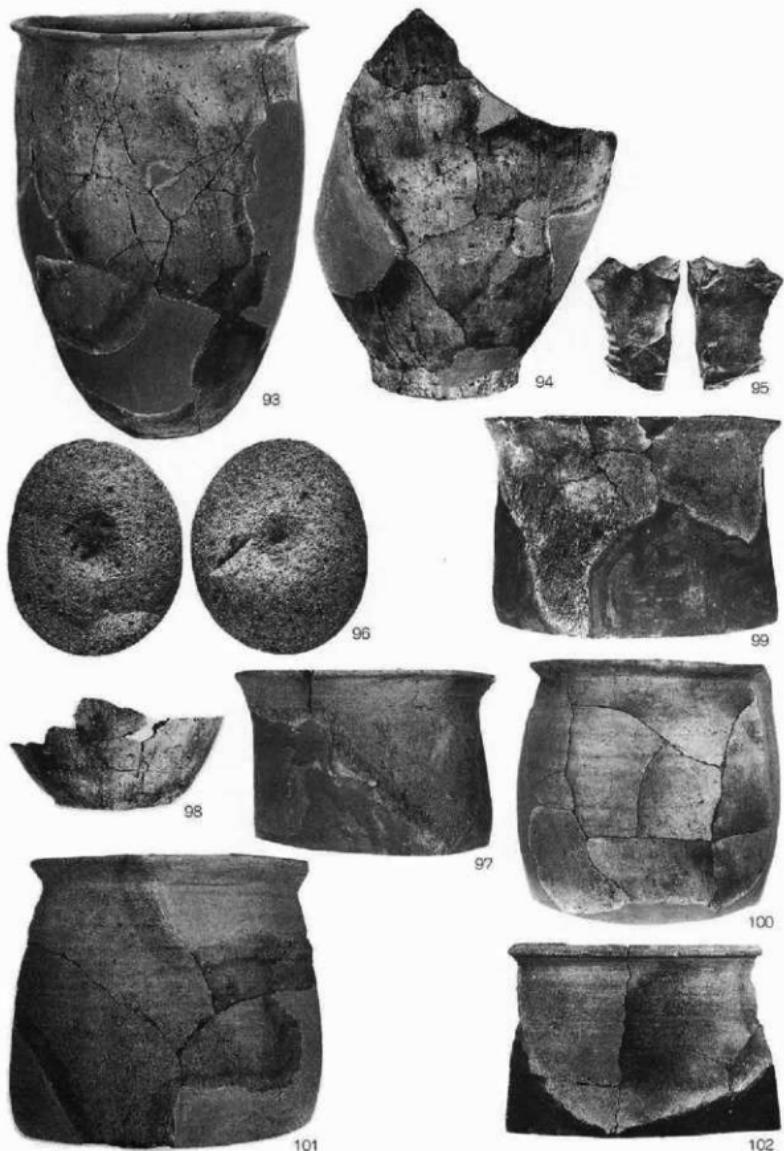


91



92

写真図版81 造構内出土遺物 (8)



写真図版82 遺構内出土遺物（9）



103



104

105



106



107



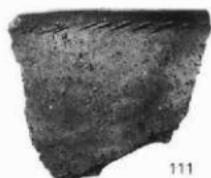
108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118

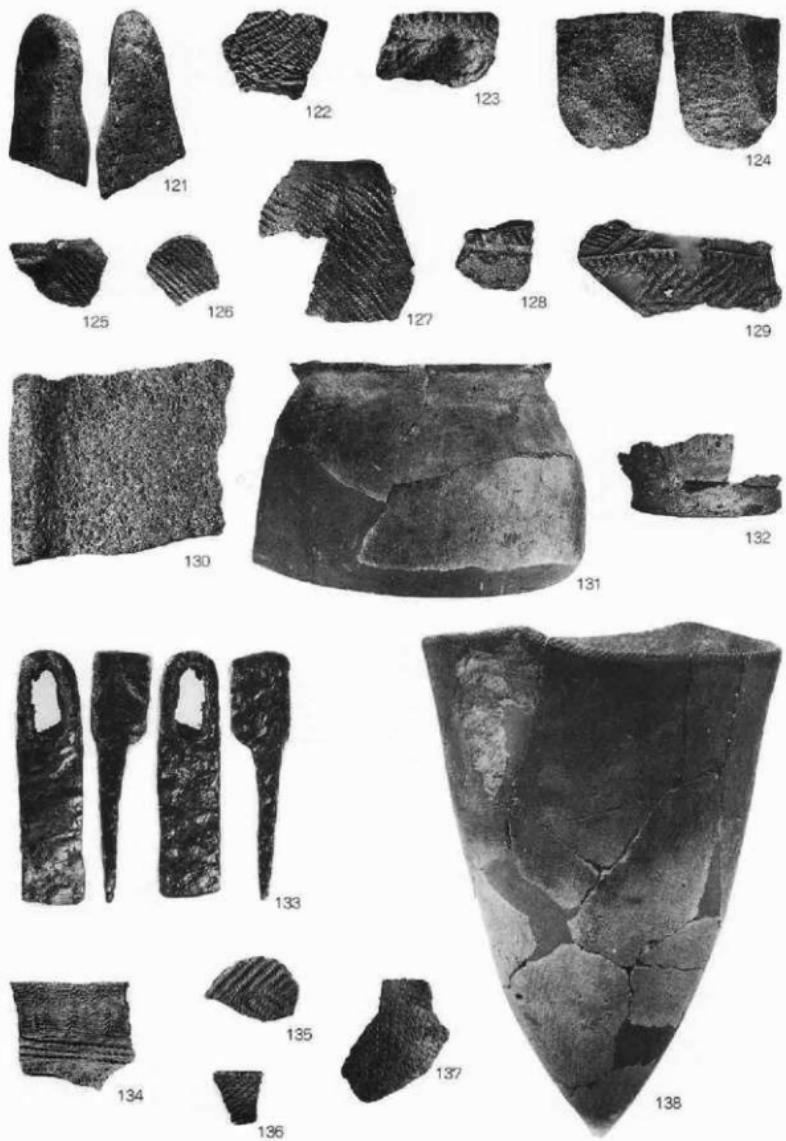


119

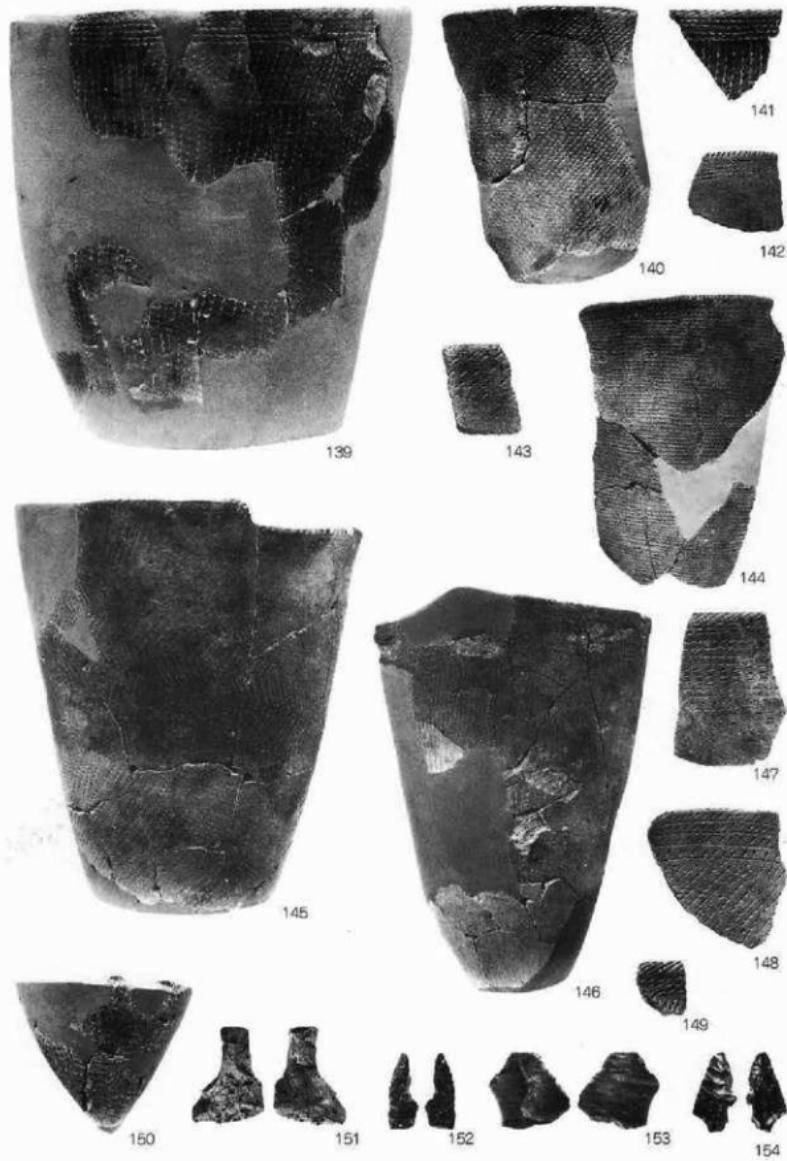


120

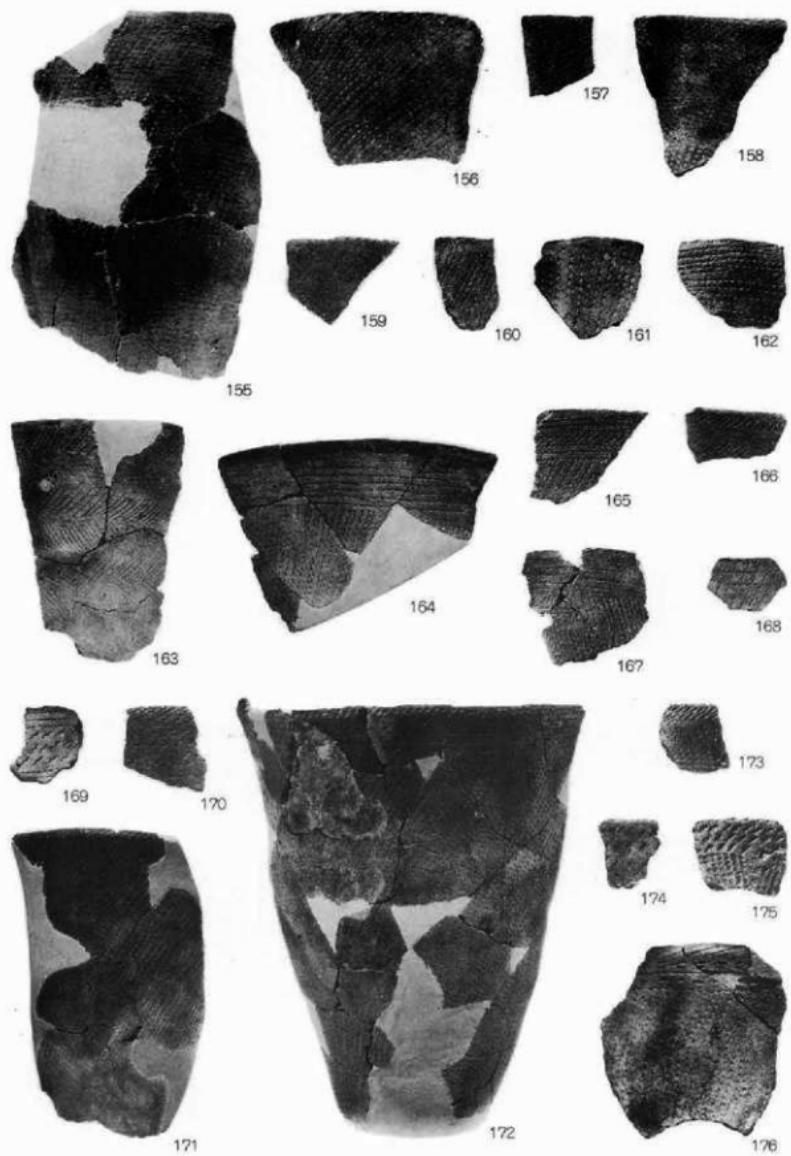
写真図版83・遺構内出土遺物 (10)



写真図版84 造構内出土遺物 (11)



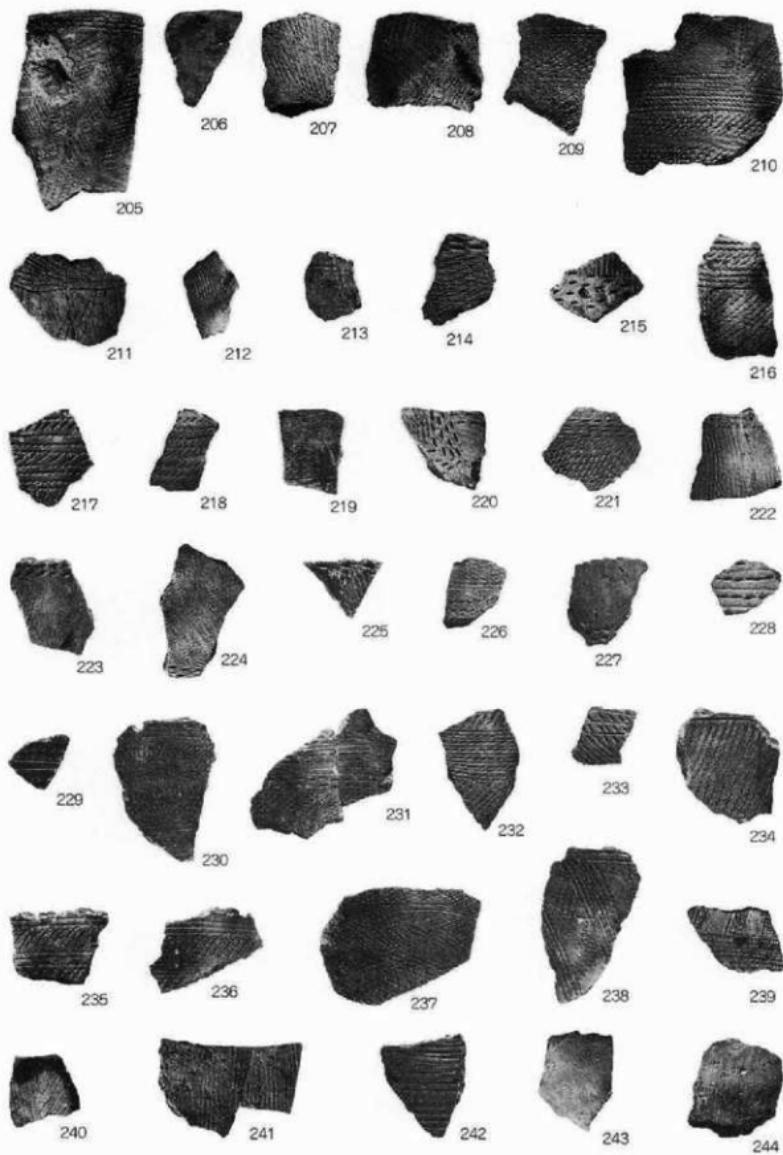
写真図版85 遺構内出土遺物 (12)



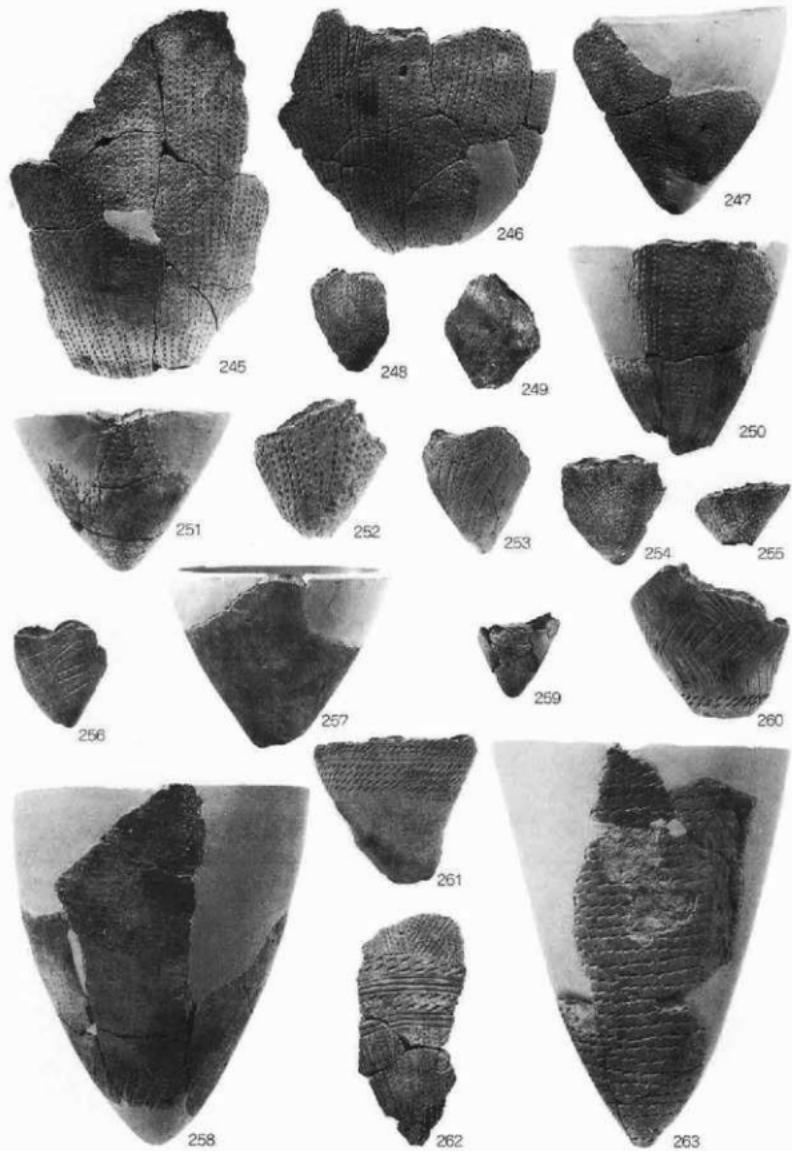
写真図版86 造構外出土土器（1）～VI層～



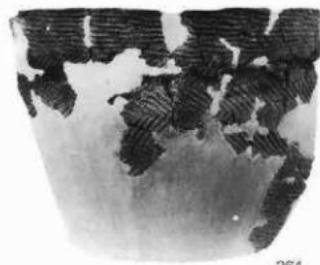
写真図版87 造構外出土土器（2）～V層～



写真図版88 遺構外出土土器（3）～VI層～



写真図版89 遺構外出土土器 (4) ~VI層~



264



265



266



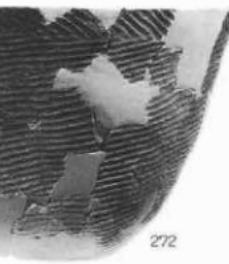
267



268



269



270



271



272

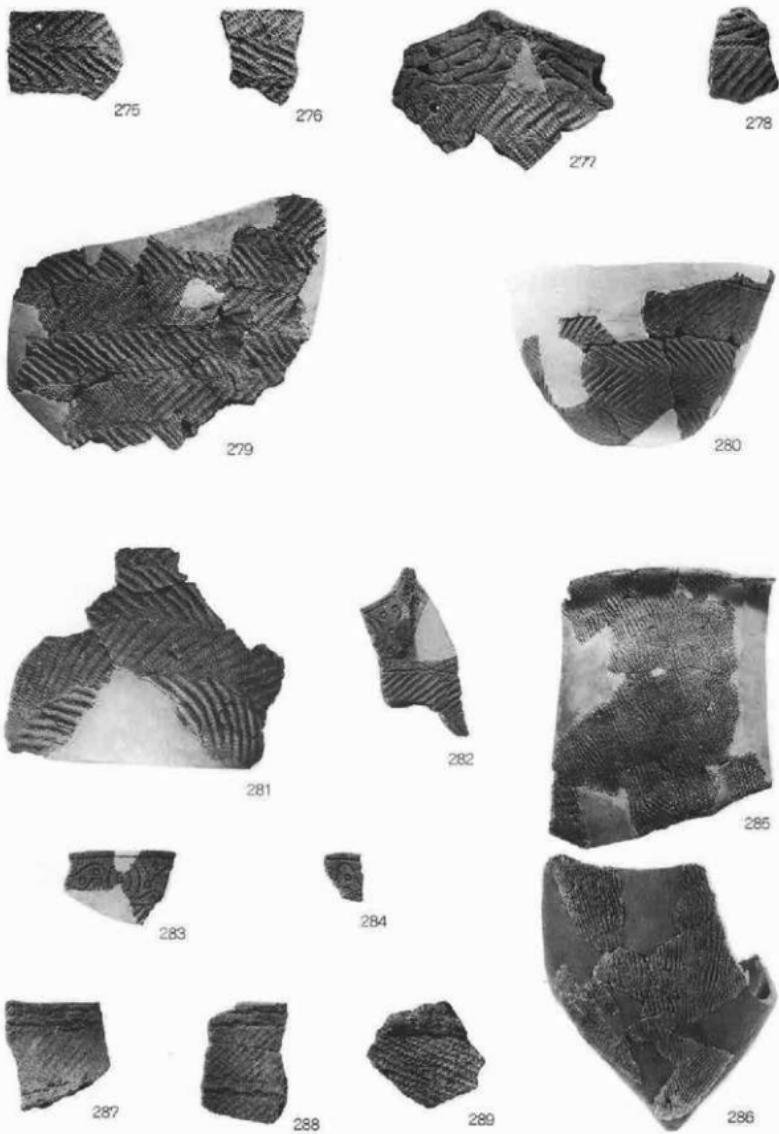


273

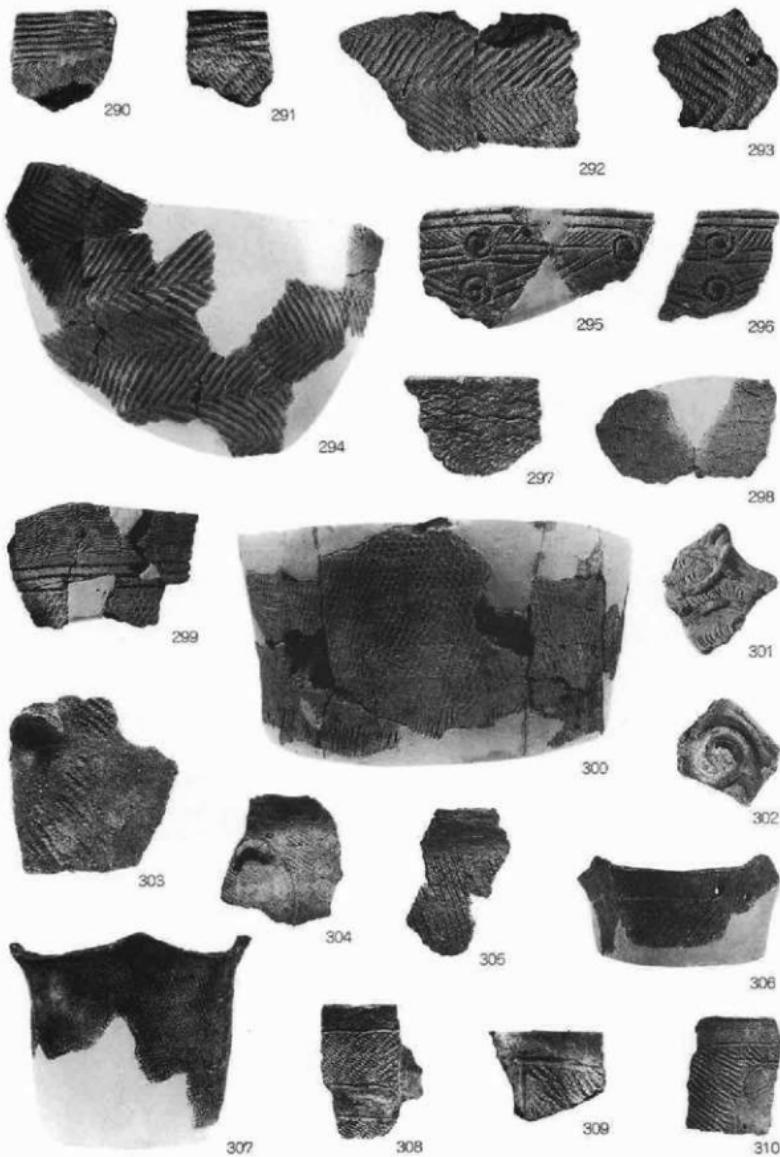


274

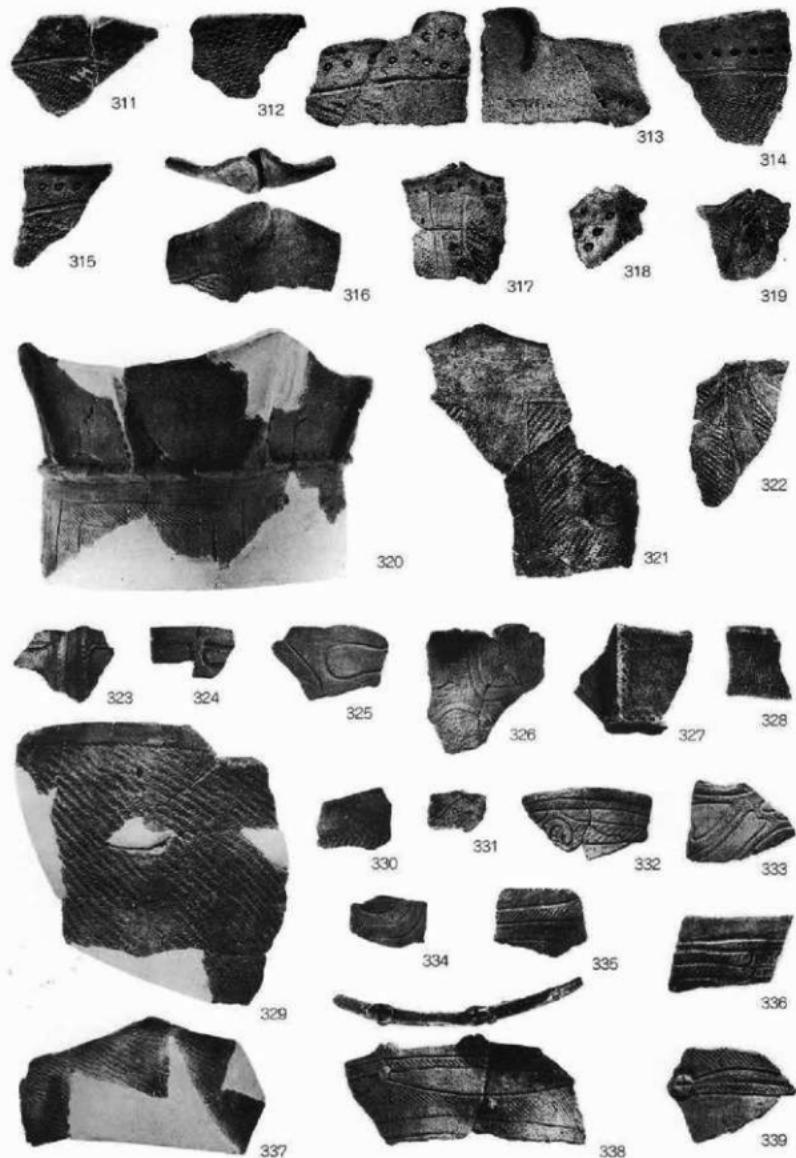
写真図版90 遺構外出土土器(5)~IVa層~



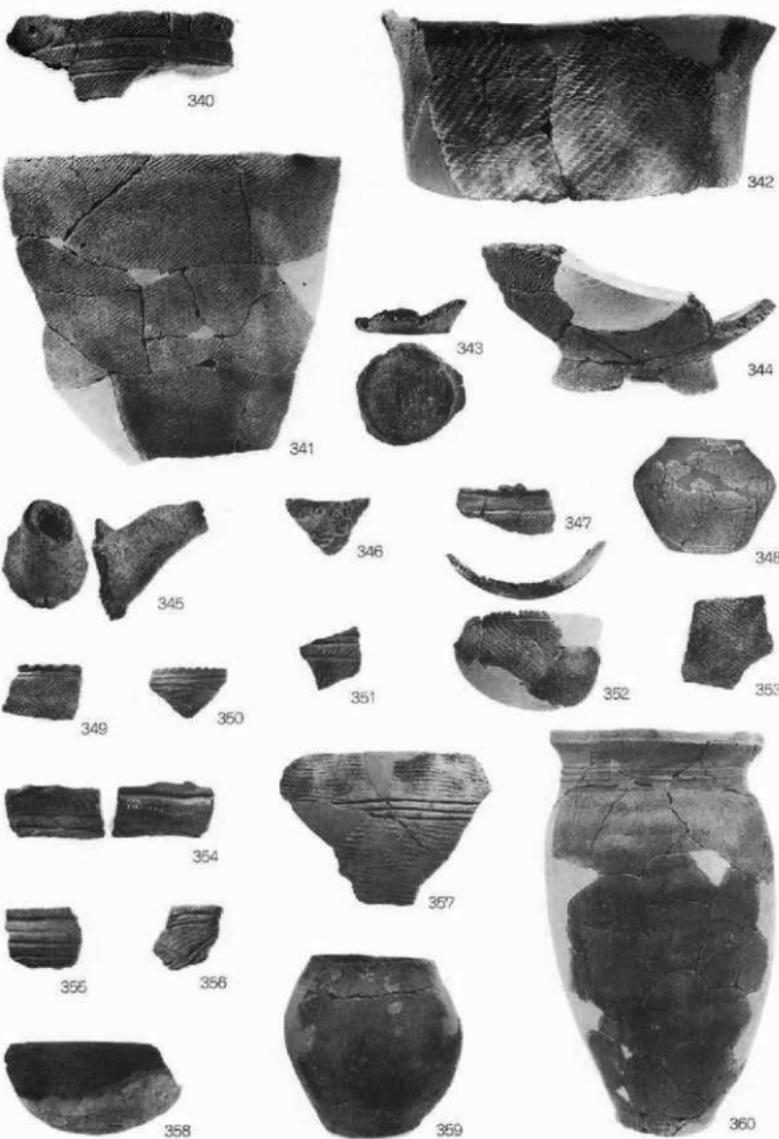
写真図版91 遺構外出土土器（6）～IV a層～



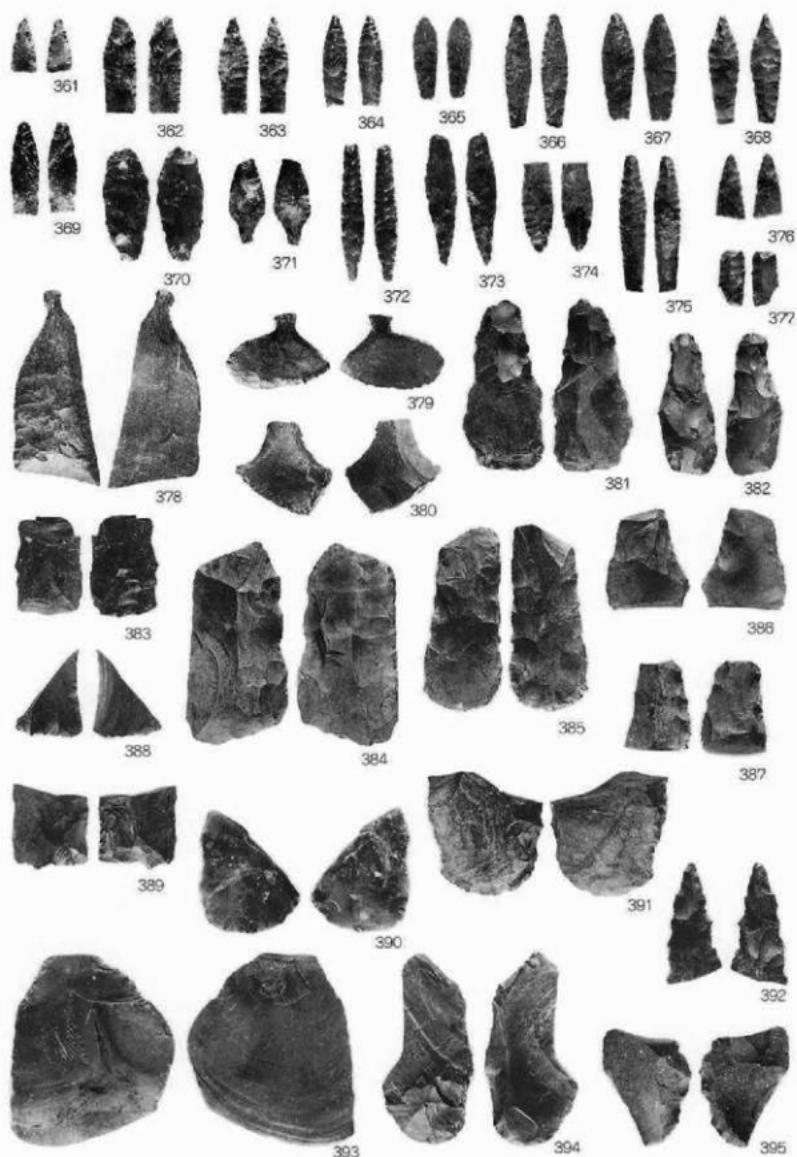
写真図版92 遺構外出土土器 (7)



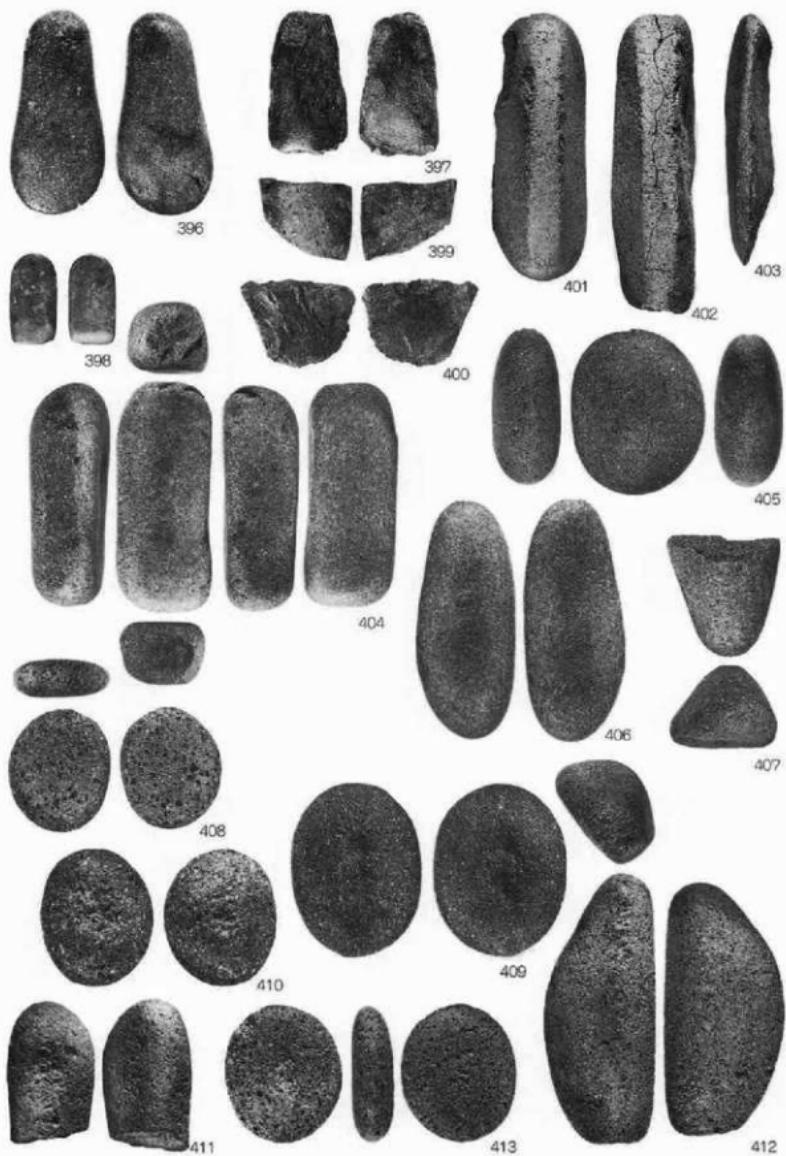
写真図版83 遺構外出土土器（8）



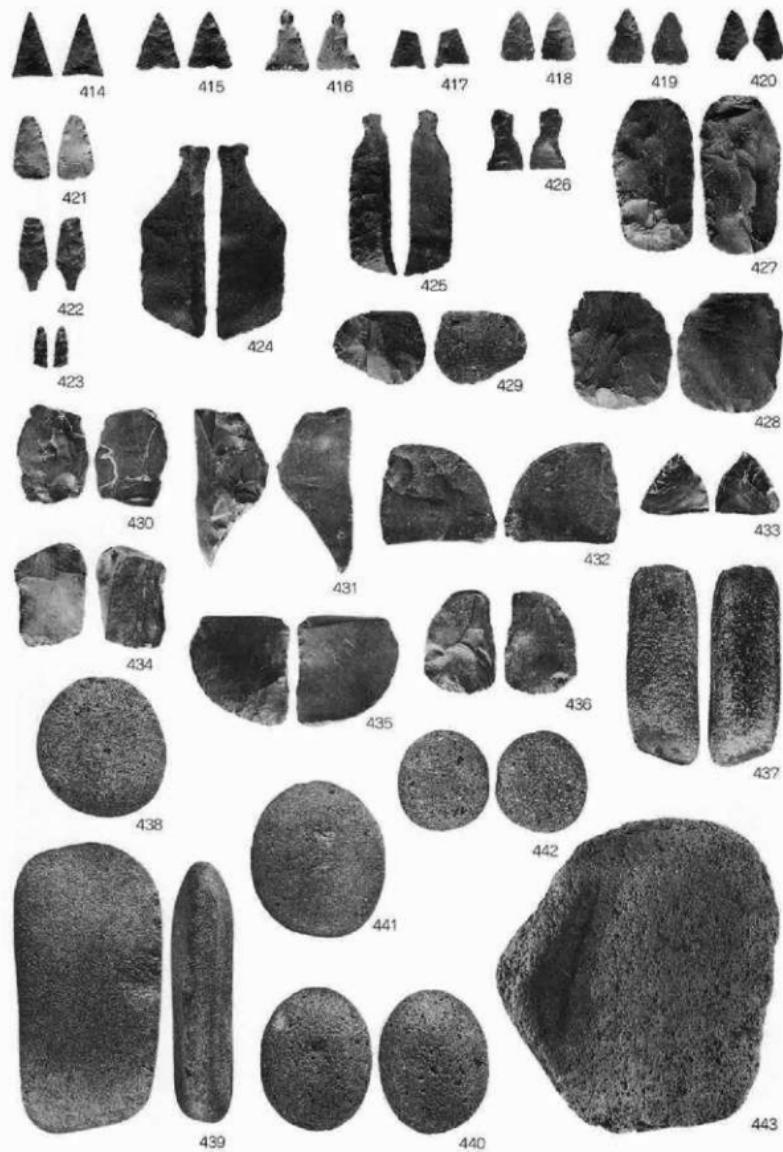
写真図版94 造構出土土器（9）



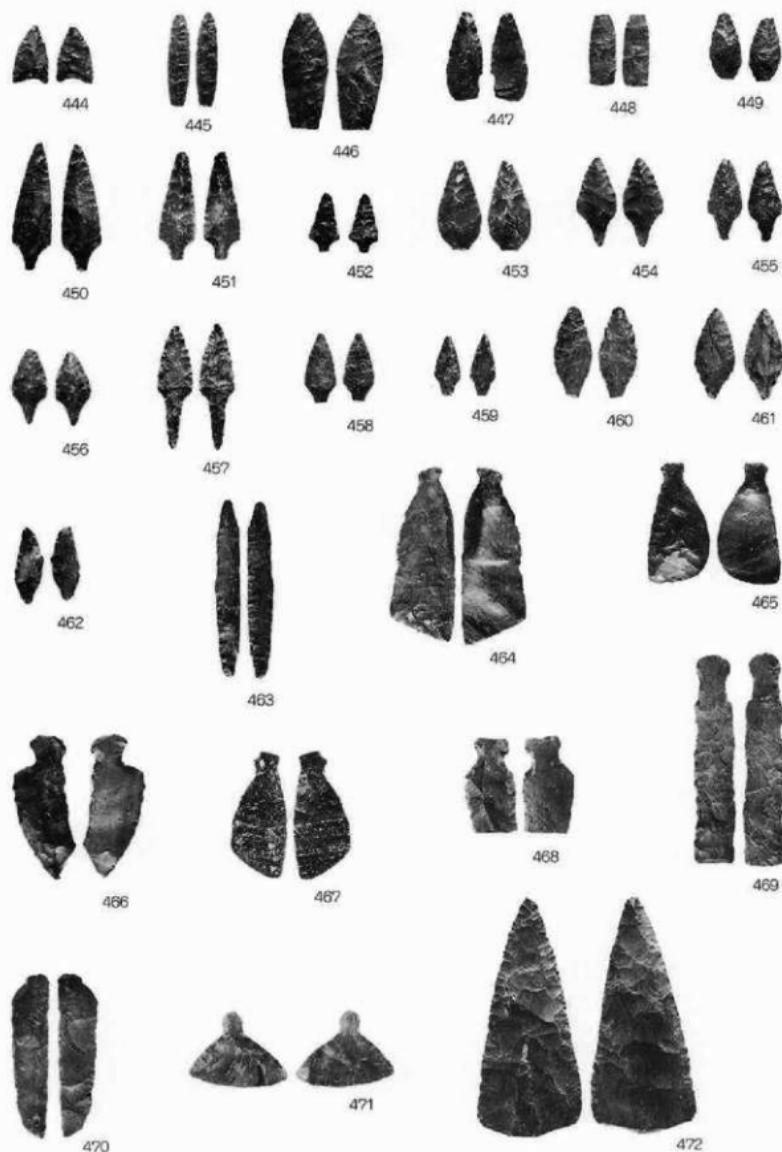
写真図版95 造構外出土石器（1）～VI層～



写真図版96 遺構外出土石器（2）～VI層～



写真図版97 遺構外出土石器（3）～IVa層～



写真図版98 遺構外出土石器（4）



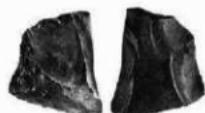
473



475



474



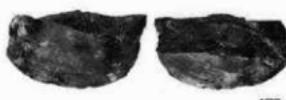
476



477



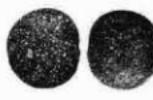
478



479



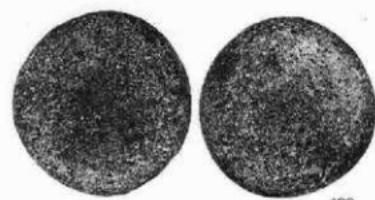
480



481



482



483



484

写真図版99 遺構外出土石器（5）



485



486



487



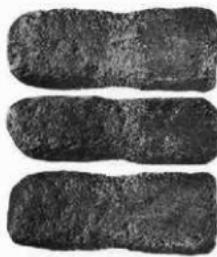
488



489



490



491



492



493

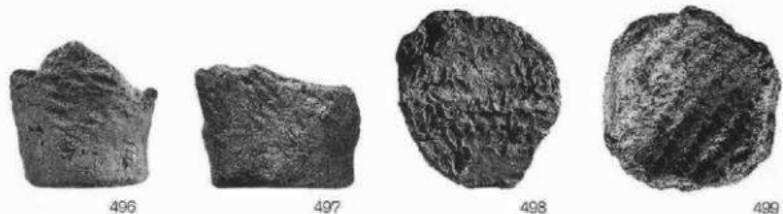


494

写真図版100 遺構外出土石器（6）・石製品



495



496

497

498

499



500

501

502



503

504

505

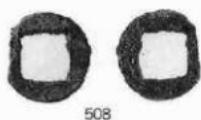
写真図版101 遺構外出土土製品



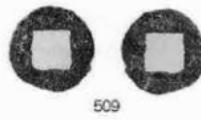
506



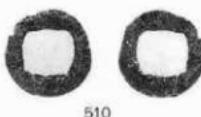
507



508



509



510



511



512



513



514



515



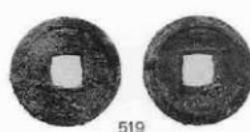
516



517



518



519

写真図版102 遷橋外出土貨幣

報告書抄録

ふりがな	まいさわいせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	米沢遺跡発掘調査報告書							
副書名	東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第376集							
編著者名	工藤徹・齋藤麻紀子							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185 TEL 019-038-9001							
発行年月日								
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″	m ²		
米沢遺跡	岩手県二戸市 米沢字長瀬 24-2ほか	03213	IE99-0390	40度17分04秒	141度17分38秒	~	16,649	東北新幹線盛岡・八戸間建設事業に関連する緊急発掘調査
米沢遺跡	集落跡	縄文時代 奈良時代 平安時代	竪穴住居跡 住居状遺構 土坑 陥し穴遺構 柱穴状ビット 石窯炉 焼土遺構 溝状遺構 壇状遺構 井戸跡	24棟 1棟 51基 7基 140基 2基 23基 17基 1ヶ所 1基	縄文土器 土師器 土製品 石器・石製品 鉄製品 ガラス製品			特記事項

平成13年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職員】

所長 伊藤民也

副所長 高橋正儀

【管理課】

課長	佐藤	吾光美
課長補佐	山岸	正善直
主査	立花	多加志

嘱託	高橋木	照雄
	佐藤	光重
	湯澤	美代子
	邦子	

【調査第一課】

課長	佐藤	勝文介
課長補佐	佐藤	透迪
文化財専門員	木暮	文登
文化財調査員	横義	充郎
	高橋	一一郎
	小山内	進也
	中田	計人彦
	森石田	彦稔
	飯赤	文子
	吉龟	広拓
	小佐	一郎
	金	敬昭
	小岩	範治
	鳥	征美
	金羽	卓敷
	千長	賢介
	星	晋美
	佐藤	造り

【調査第二課】

課長	高橋	與右衛門
課長補佐	中川	重紀

文化財専門員	子部	佐知子
文化財調査員	坂部	澄一
	田麻木	重徳
	藤原	由紀
	澤	雅靖
	沢	武昭
	村澤	浩正
	木部	勝勝
		(阿)

期限付調査員

川田	微和
田	穂子
	里
	美津
	吉北
	吉原
	齊
	駒木
	野
	智寛

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第376集

米沢遺跡発掘調査報告書
東北新幹線盛岡・八戸間鉄道建設事業関連発掘調査

印刷 平成14年3月20日

発行 平成14年3月29日

発行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185

電話 (019) 638-9001・9002

FAX・(019) 638-8563

印刷 (有) 橋本印刷

〒020-0015 岩手県盛岡市本町通1丁目15-29

電話 (019) 652-1354
